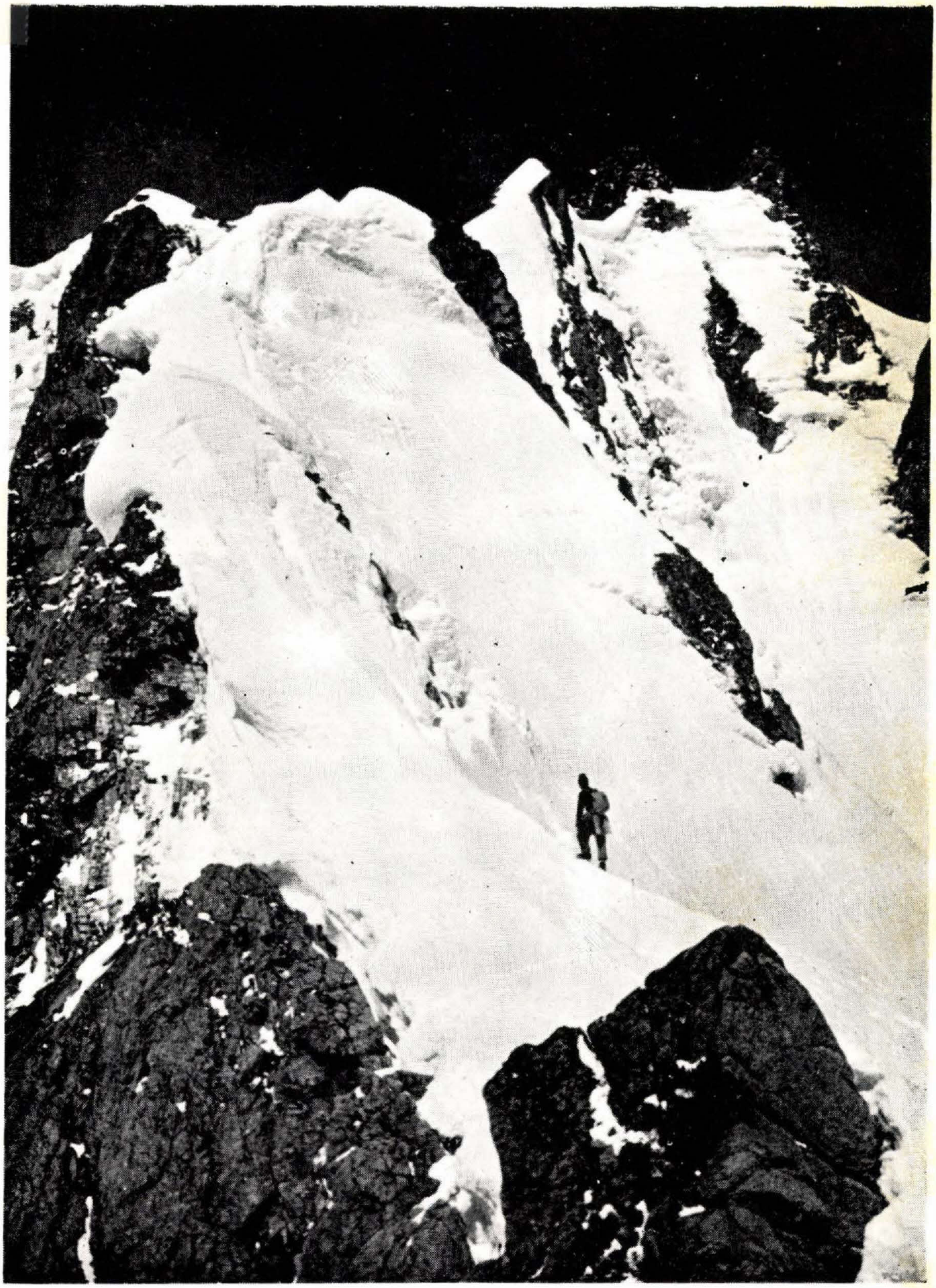
針葉樹

12

一橋大學一橋山岳部

針　葉　樹

1955. 4—1960. 3



剣岳八ッ峰７峰の登り（人物はＹ中）

1957年５月２日　　中　村　　保



赤谷尾根 1600m ＣＩより剣岳本峰

1959年3月　　渡　辺　嘉　佑



赤元ＣⅢ（大窓）建設に向う　　1959年３月18日　　小　林　進　二

針葉樹　第十二号　目次

巻頭言……（一）
部長交代の弁……部長　関　恒義……（二）
積雪期の合宿
☆鹿島槍ケ岳天狗尾根と北壁ピーク・リッジ……（四）
☆明神岳東稜……（一二）
☆北岳バットレス……（一六）
☆白馬岳猿倉台地を中心としたバリエーション・ルート……（二二）
☆槍ケ岳から極地法による奥穂高岳登頂……（三二）
☆剣岳早月尾根……（四三）
☆南アルプス北部縦走　三伏峠――北岳……（五三）
☆剣岳赤谷尾根から極地法による剣岳本峰・毛勝山登頂……（六三）
☆燕岳から蝶岳縦走と大天井岳から槍ケ岳登頂……（七八）
☆早月尾根より剣岳頂上周辺のバリエーション・ルート……（八九）
コルデイレラ・ワイワッシュについて
――ペルー・アンデスの一山群――……中村保……（一一二）

追悼
奥野君の追憶……中川孫一（一三六）
矢作君を想う……村尾金二（一三七）
山の矢作太郎……渡辺九郎（一三九）

記録
☆昭和三十年度……（一三四）
☆昭和三十一年度……（一五九）
☆昭和三十二年度……（一七三）
☆昭和三十三年度……（一九三）
☆昭和三十四年度……（二一七）
山小屋……（二四七）
部誌（昭和三十年四月―昭和三十五年三月）……（二六七）
一橋山岳部の歌……（二九三）

表紙
大賀二郎

巻頭言

昭和三十一年のはじめに戦後はじめての針葉樹第十一号が発行されてから四年後に、復刊第二発行できて喜びにたえない。

第十一号が、一橋山岳部がやつとその再建の基礎をつくつて一歩前進へと踏み出した時代の記第十二号は、深く、広くそして高い内的に充実した記録であらねばならないだろう。

果してそうした記録であるか否かは、先輩諸兄や現役自身の改めた評価にまつところであるが指して私たちが汗と涙を流し、一つに融け合つて努力してきたこと——このことこそ最も大切なことだと思う——は云うまでもない。

私たち山を愛する者がいちばん心しなければならないことは、山で遭難してはならないということである。が今日山の遭難といえば、日常茶飯事といえるくらいにひんぱんに発生し、遭難という言葉の響きに麻痺してしまつているのではないかと思われるくらいである。幸いにも私たちの山岳部は過去十二年、一つの山の遭難本号を遭難追悼号としないですんだのはなによりである。私たちは山男である前にまず学生であるということを忘れてはならない。それだけに尚更遭難を出してはならない。学生生活に直結した山登り、地道に、純粋にそして謙虚な態度で山にのぞみ人格を涵養すること、これが最初にして最後の、学生である私たちの努力目標でなければならない。

おわりに、一橋山岳部創立の中心的役割を果され以来ずつと長年にわたつて私たちがお世話になつた奥野綱重、矢作太郎先輩が昨年続いてお亡くなりになつた。本号では追悼文を掲載し、慎しんで今は亡き先輩の御冥福をお祈りする次第である。

部長交代の辯

関　恒義

可さんと山岳部との因縁は御承知のようにまことに深いものがある。かつて可さんにかもられた人、あるいはかけつばなしにした人……、針葉樹会員の多くは、大なり小なり、一橋時代の思い出の種を可さんをとおしてみいだしているにちがいない。一橋祭ともなれば、学校や部室などは素通りして、可さんの家でのむことを唯一の楽しみにしているような針葉樹会員がいたつてすこしも不自然ではない。まさに先生にとつてはくされ縁である。

また、僭越ないいかたかもしれないが、可さんの哲学のあるものはおそらく山の純粋さと結びついていたにちがいない。可さんは現在でもすこしもかわつていないと思われる。だから可さんは山岳部長としてはまことにうつてつけの名部長だつた。涸沢に合宿をともにされたこともあつて、部員の安否をきずかう可さんの真剣な表情にせつして、みずからの無責任のほどをはじたこともあつた。また岳人らしからざる部のありかたについて、しばしば辛辣な批評をうけたまわつたことがある。一昨年末、可さんは部長を辞任されて、その大役が私にまわつてくる破目とあいなつた。一橋の内外にいろいろと多忙な仕事をうけもたれている先生のお立場からすれば、とりわけ神経を使う山岳部の面倒はみきれないというのが辞任の理由であつたろうと思われるが、しかし針葉樹会の

末席をけがす小先輩として私にはこれはとんでもないことだつた。いろいろと理由をならべたのだが、私のいいぶんなどいれられるどころか、針あがつたのがこの新部長である。だれがみても、かざりものとしては貧弱だし、責任感も保証に思われるのだが。太田名部長の辞任には、その浅からぬ因縁のゆえに、現在でも納得しかねるしだいである。

最後にひとこと。さきん、部員の数が急激にへつてきている。これにはいろいろわけがあることだろうが、部の ありかたと関連して真剣に考えなおす必要があるように思われる。善処を要望したい。

鹿島槍ケ岳天狗尾根と北壁ピーク・リッジ

——昭和三十年十二月——

一、まえがき

われわれがこの冬山にかけた期待は、それ程大きいものではなかつたが、とにかく今までの行き方に対して何か新しい線を出して行かなければならないということは、昨年の経験からずつと考え続けて来たことだつた。結論から言えば、大規模なサポートを要する長大なコースを選ぶというよりは、限られたメンバーとその持てる技術をふるに生かして冬の壁に挑むことだ。少くとも現状では十二月の合宿はそういう方向に行かざるを得ないいろんな特殊事情があるような気もした。

壁を登ることにきめても、当時のわれわれとしては一足とびに大きな目標に向かうわけにも行かず、ささやかな勝利でもいいからとにかくここでわがものにして、それを足場にだん大きいものを考えて行こう、こうしてわれわれの眼はカクネに向けられた。だが秋の偵察を終えるまではまだはつきりした目標のルートも決めかねている状態だつたし、ピークリッヂそのものは、このシーズンに未だトレースされていないという事実はあつたにしても、必ずしも充分な選択のもとに選ばれたものとは決して言えない。強いて言うならば、われわれはあそこに大きくそそり立つ鹿島槍北壁に、或いは荒沢奥壁にじかに相対してみようという気持が、かえつて切実なものだつた。

しかしここにもまだ一つの迷いがあつた。即ちこのときも、出来ることなら天狗尾根から全員登頂することを計画の中に入れようというようなことになつて現われた。目標を一つの壁にしぼるには自信がなさすぎたのかとも言えるが、それよりも寧ろメンバー個々人の気持の問題に左右される面が大きかつた結果と言えるだろう。このことは内容的にも既に失敗であつたし、形の上でも

果されずに終つた。

も、どこかに心の不満が残るものである。全体のチームワークとしてはそれだけ弱められると考えなければなるまい。

この冬山に限らず、ただ安易な登頂或いは尾根歩きから、一歩高度なものに進もうとするとき、例えばより困難な一つの目標に向つて全員が徹し切つて進まなければならぬという段になると、とかくわれわれの精神面の弱点を暴露して来た。チームワークというものは、各人がその困難と栄誉を平等に担うことによつてしか得られないものでなければなるまい。サポートはサポートに徹し、リーダーはリーダーシップの鬼たるべきなのだが、個々人がそれに徹しきれないいろんな問題があるということは、一つのチームとしてのわれわれの行動にとつて致命的な欠陥であると言わねばならない。この弱点がその後どのように克服されて来ているか、その跡を興味深く見守りたい。

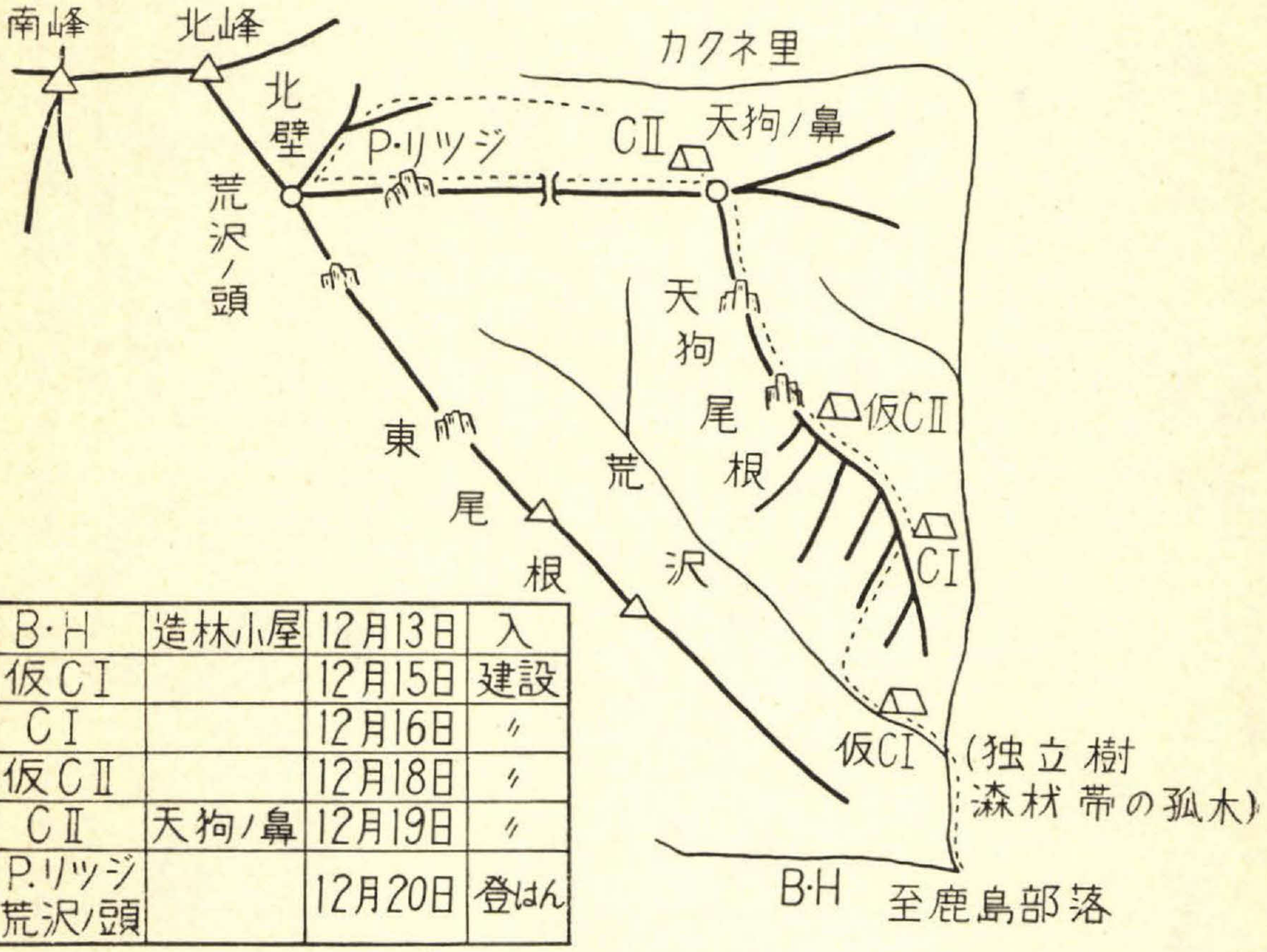
この冬天狗尾根に入つたのはわれわれがトップを承わつた形となり、テントを進める間一日の休みもなくラッセルまたラッセル。腰まではおろか、或るところでは全身を没し去る程の深雪も突破せねばならなかつた。そのために仮CⅡといつた予定外のキャンプまで出来てしまつたが、登攀の前後はわずかに天候が持ち直して、われわれも幸運なチャンスをうまく利用出来たわけだ。その後CⅡ撤収の日から再び天気は崩れ出し、この一帯も相当な悪コンディションに見舞われ、われわれが下山の途中に出合つたいくつかのパーティーのうちからも現に幾人かの犠牲者の出たことを知つた。形の上での成功と失敗、その直接原因はまさに紙一重のところにあつたかも知れない。ただわれわれが得たいものは、その紙一重を自分たち自身の力と精神的な支えとによつて踏み越えられたのだという実感である。冬山のむづかしさも、またやり甲斐もそこにあるのではなかろうか。

（吉田　義則）

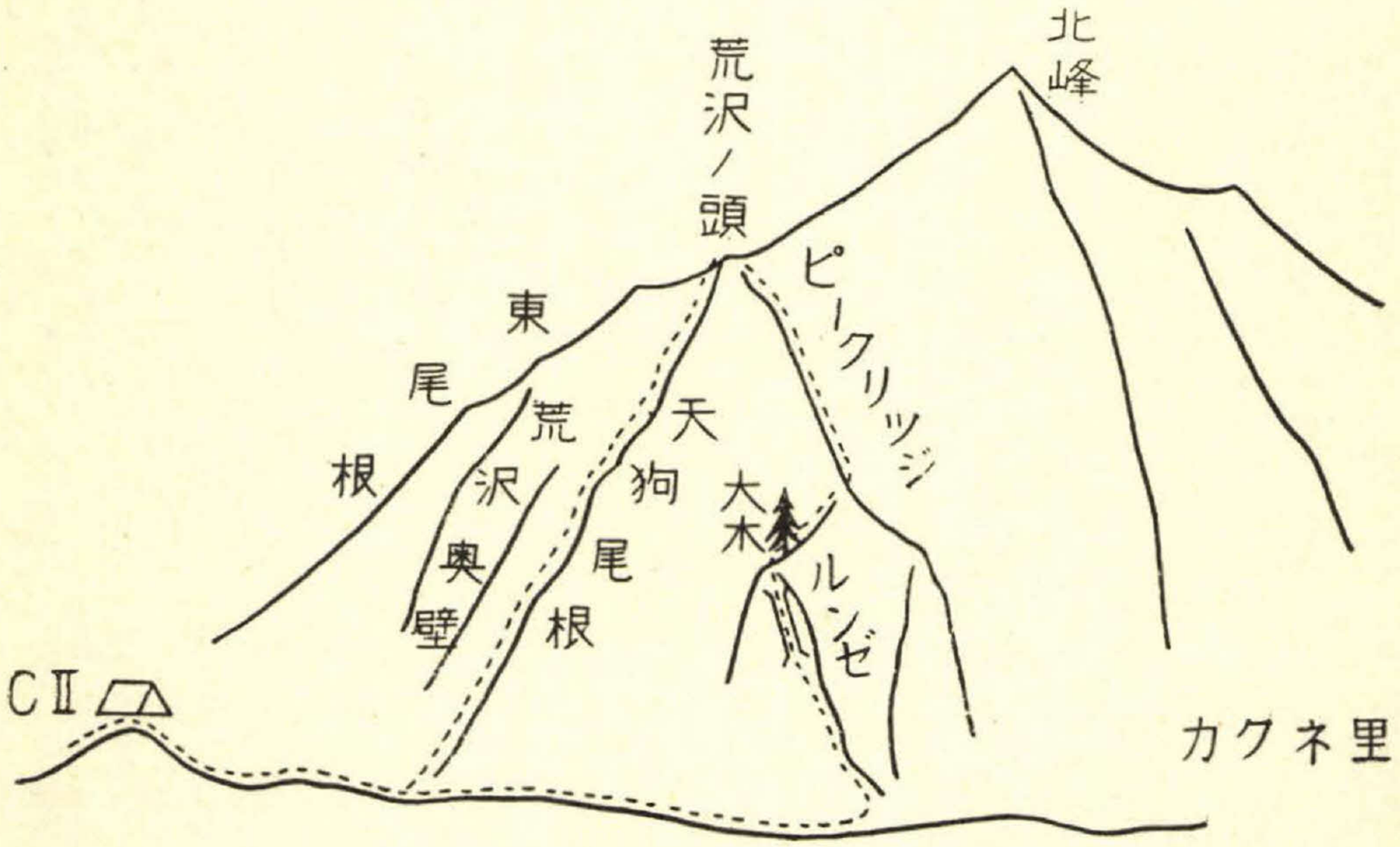
二、参加者

チーフ・リーダー	吉田義則	甘利仁朗	
器具係	篠原敏弘	食糧係	岡垣治雄
	中村保	会計係	上原利夫
	山本健一郎		

鹿島槍天狗尾根・P・リツジルート図



B・H	造林小屋	12月13日	入
仮CⅠ		12月15日	建設
CⅠ		12月16日	〃
仮CⅡ		12月18日	〃
CⅡ	天狗ノ鼻	12月19日	〃
P.リツジ 荒沢ノ頭		12月20日	登はん



十二月十二日　晴
甘利、岡垣の二名が先発。
十二月十三日　晴
本隊出発。先発隊は大川沢出会の飯場をB・Hと決定し、天狗尾根取付点（荒沢出合より約十分上流の右側）を偵察した。
十二月十四日　晴　造林小屋B・H――天狗尾根独立樹附近――造林小屋
本隊、先発隊合流し、午後各自約五貫の荷を背負つて独立樹（森林帯の孤木）附近にデポ。この附近まで雪なし。
十二月十五日　晴後雪
甘利、岡垣、B・H――独立樹ジヤンクシヨン――CI建設予定地――独立樹、　CI建設予定地の偵察を行つた。
吉田以下四名、B・H――独立樹――B・H――独立樹、　荒沢より独立樹までは落葉で滑り易く、全員アイゼンをつけて一往復半のボツカ。全荷物を独立樹に運んだ。
十二月十六日　雪　独立樹　CI――独立樹――CI
昨日の偵察では、CIまで二時間半で行ける筈であつたが、昨夜来の雪と猛烈な藪とで思わぬ時間がかかつた。下りは二十分。今日のボツカでCIに荷を全部上げることができた。T中は痔のため下山。
十二月十七日　吹雪　CI――デポ地点――CI
十時に吹雪をついて岡垣を除く五名で約5貫の荷を背負い、猛烈なラツセルにシゴかれて第一ルンゼ下まで進んだが、前進困難となりデポして引返す。十六時に帰幕。
十二月十八日　吹雪　CIデポ地点――仮CII――CI
全員約七貫の荷物で出発したが、デポ地点より猛烈な吹雪に見舞れ、顔中が凍り、眼が開けられない。それでも漸くブツシユ地

帯を進み最初の岩峯まで行つたが、いかんともしがたく、再び荷をデポ、昨日のデポ地点に仮CIIを建設し、甘利、山本、岡垣が入つた。

十二月十九日　快晴　CI―CII―CI、仮CII―CII

CII　起きて行く手を見ると何のことはない。昨日、一昨日と苦労して登つたところが、すぐ手前にみえる。空身で出発、三十五分で仮CIIに着いた。ここまで今まではゆうに三時間はかかつているのだ。一昨日なんか途中で昼食をとつた。仮CIIより全員そろつての建設に出かける。第一のクーロアールは雪がしまつており輪カンで登つたが、出口が悪くスラブがでているので第一のフイクスをする。第二のクーロアールも悪く、再びフイクス、天狗の鼻に着いた。十五時CII建設。風強く新調のナイロン天は底から持ち上げられて荒沢に叩きつけられんばかりだつた。CI隊は引返す。夜半に至り満天の星。

十二月二十日　快晴後雪

CII　CI―ピーク・リツジ―荒沢の頭―CII

三時に起床、P・リツジ登攀を目指す甘利、山本は六時に出発。岡垣はCI隊を待つ。

〈ピーク・リツジ登攀〉　甘利、山本

テント（六・三〇）―取付点（八・〇〇―八・三〇）―登攀終了点（一五・〇〇）―荒沢の頭（一五・四〇）―テント（一八・三〇）

六時、カクネ里は未だ闇の中に沈んでいた。時折一陣の風が東尾根をこえてやつて来てテントをはためかせていく他は何の物音もしない。六時半、岡垣にわかれを告げテントをあとに天狗の鼻の先のコルへ降る。真赤な朝焼と共に夜明けだ。浅間と富士が地平線にたなびく雲の間に見えている。コルから右えトラバースする。ひざまでもぐるが連日の好天に良く安定した雪で雪崩の心配はない。明るくなると共に先刻のたかぶつた気持もどこかえ行つてしまつた。PIのBリツジの右側のテラスにはいあがりアンザイレンする。先ず甘利がトツプで八十度近い雪壁の這松を掘り出しつつ登り始める。交互にトツプを切り三ピツチで左上へ走るルンゼへ出た。このルンゼは写真等でもピークの岩場の下を左上へ走つているのが認められる。ルンゼの中は深いラツセルだつた連

日のアルバイトのため消耗した体に仲々ここのラッセルはきつかつた。的ゆるい斜面がしばらく続き大きい栂の木がある。このピッチはコンテイニュアスで行けた。下あたりにサポート隊の姿が見える。空は一面の巻層雲がひろがり雲の動きは早い。ピッチは急な雪の斜面がつゞきピークの岩場の下で終る。岩場の基部にセルフビレイのハーケンを打つ。大きい岩の積重なつた岩場が三ピッチあつた。最初のピッチは可成り急だが三ピッチ目は水平のリッヂになつていた。馬乗りと云う程ではない。立つて歩ける。ここから見る蝶岩左稜は平凡な雪のリッヂだ。ラッセルだけで技術的な問題はないだろう。後は雪の斜面をポクポクと登ればアラ沢の頭だつた。雪が降り始めていた。丁度向う側より登つて来た吉田さんとパッタリ顔が合う。頂上へのファイトをもやし岡垣と二人荒沢の頭をあとにする。しかしいくらも行かぬうち岡垣が輪かんがないからと音をあげる。無理もない。輪かんなしではももまでもぐる。その上風雪のため視界は次第に狭くなり帰路も心配だ。小舎岩の通過も暗くなるだろう。残念だが皆の後を追い下降に移る。小舎岩の上で皆に追ひつき甘利と二人がしんがりを承わる。アプザイレンのためセットされたザイルが抜けなくなり登りなおした時は全く閉口した。雪が次第に激しく顔を打ち始めた頃上原がテントについたらしく天狗の鼻に灯がついた。やつとの思いでテントにもぐりこむ。この風雲の晩のビバアークをまぬがれた喜びがこみあげて来た。登つたと云う喜びよりも強く。

（山本記）

CI　CI——CII——荒沢の頭——CII——CI

十時半にCIIに着き、岡垣を加えて天狗尾根をトレースする。鼻からみえる天狗尾根はナイフ・リッジに見えるが、大したことなく、ただラッセルに消耗、意外に時間がかかつた。十五時、P・リッジ・パーテイと同時に荒沢の頭に着く。荒沢の頭から先は北峰まで深いラッセルが続く雪面となつており、登頂は時間の問題と思われたが、天候が崩れ出したのと時間が不足なので引返した。全員連日のアルバイトで疲労が激しかつた。

十二月二十一日　風雪

CI・CII共に停滞。まつたく文句なしの待望の沈澱であつた。

十二月二十二日　雪　CII　十時に撤収。第一、二ルンゼとナイフ・リッジは表層雪崩が頻発。十五時CI着。泊。
　CI　三時にテントを出て北峰登頂を目指したが、降雪のため引帰し停滞。
十二月二十三日　晴　CII——CI　CI停滞
　十時にCI撤収。B・H十七時着。
十二月二十四日　晴　B・H—狩野氏宅
　下山には勿体ない程の晴。鹿島部落までを一日行程と決め、遊びながら下山。狩野氏宅で手打ソバと濁酒に舌鼓を打ち、われわれの大先輩の実筆に感激。
十二月二十五日　晴　鹿島——源汲——大町

四、食糧と器具に関する反省

〈食糧〉　食糧係が出発直前になつて不参加となつたので、岡垣が代行することになつた。計画より一週間早く終つたので不足を生じなかつたし、参加者が半数近くに減つたこともあつて、却つて過分であつた。
　乾燥したひき肉は変な臭がしたし、魚の干物はラジウス向きでなかつた。種々の料理に使われ、喜ばれたのは乾燥玉子であつた。
〈器具〉　ナイロン・テントの初使用、予想たがわず耐風性と居住性が良かつた。もつと数をふやし研究すべきものとしてはマツトレスと石油コンロの使用である。

（岡垣　治雄）

明神岳東稜

——昭和三十一年三月——

一、まえがき

昭和二十九年度の春山も終りに近づいた或る日、北尾根の五六のコルに佐薙、甘利、中村（T）、山本の四人が集結した日があつた。甘利は雪盲にやられ、山本は傷ついた足をかかえていたが、合宿も終りだと云う思いが心を軽くしていた。話はたまたま来年の春山の事に及び再び合宿を穂高に持つならば西穂から奥穂、横尾々根或いは明神東稜がその候補となり得るであろうと云う様な結論に達した。撤収の重荷にあえぎつつ 横尾―徳沢―明神とスキーをすべらせるにつれて展開する明神のながめは素晴らしかつた。

四月、青葉の林にかこまれた国立の部室で真剣な論議がかわされた。横尾々根はその長さと下部の単調さ、そして我々が平静見なれている事のため魅力にとぼしく、北尾根程度の技術的水準を必要とする西穂と明神東稜が対象として残された。西穂については中村が秋に瓢箪池まで行つたくらいにすぎない。部室にあつた「農大報告の我々の知識は比較的充分であつたが、明神については中村が秋に瓢箪池まで行つたくらいにすぎない。部室にあつた「農大報告二号」と松高の「わらぢ」を読むに及んで我々の知らぬ穂高の一角、明神の山稜に次第にひかれた。

五月上高地入りをした我々は一日を明神東稜の登攀に充てその概略を知つた。キャンプ地も目鼻がつき、五月下旬の谷川合宿の頃には次の春山は明神東稜より前穂頂上に最終キャンプを出し北穂登頂を目指す事と決定した。

当初建てられた計画は明神養魚場をベースとし長七沢を登り瓢箪池のコルとらくだのコブのコルに中継キャンプを設置し最終キャンプを前穂頂上に出し二名が北穂登頂に向うと云うものであつた。このための必要な人員は十五名、約二十五日間と推定され

た。

処が合宿出発直前になつて二年生二名が急に種々の事情で不参加となり、手薄になつたメンバーで予定の計画を強行するに至り、一年部員を無理なポジションに配置したため事故を引起し失敗に終つた。

失敗の原因を追求するに第一に中軸となるべきメンバーを欠いたにも拘らず計画を縮少する事なく押し通した事である。この事が一年部員も前進キャンプ建設に起用する事を止むなくし、直接の事故の原因となつた。謙虚な気持で山に対し計画をメンバーに合せ縮少すべきであつた。

更に、間接的原因として全員のスキー技術の未熟があげられる。思いの外の多雪に前川渡から歩行を余儀なくされた上、沢渡より奥はスキーをつけて歩かねばならぬ状況となり、入山に於て一年生は体力を消耗し事故の遠因となつた。入山一日目坂巻到着、二日目の養魚場到着はいずれも夜に入つてからであつたが、これはスキー用具の整備不充分及び技術の不足によるものであつた。限られた四年の間にスキーも山もと云う訳には行かず、我々が目的を山に置く以上スキー合宿の形式の合理化は重要な課題となるであろう。更にスキーの技術の欠欠は荷上げの帰路二名の捻挫者を出し実質十一名の合宿となると云う結果をばもたらした。これは残余の者の一層のオーバーワークとなつた。

最後に三日間に渉る降雨がある。これは予想外の出来事であつた。我々は過去の合宿でも三月の降雨を経験したが、今回の様に高所まで長い間降雨に見舞われた経験がなく、氷の状態について適切な判断を欠いた点があつた様に思う。今回の我々のパーティが滝谷でスリップのため事故を起している事を考えれば、この年の氷の状態は若干アブノーマルな点があつたのではなかろうか。このアブノーマルな雪と氷に対する判断と注意に欠ける所があつたのも事故を構成する要因となつている。

幸にして今回の事故は結果的にはさしたる事なく終つた。しかし一つ間違えば重大な結果に終つたかも知れなかつた。我々は運にたより山登りをする訳には行かない。この事故は我々の部の欠点をうきぼりにして呉れた。大切な、高価な教訓としてこの合宿の経験を生かし再び事故を繰り返さぬ様にしたい。この貴重な経験を生かし再び春山をリードするチャンスがあたえられなかつた

だけに一層この思いは強い。

二、参加者

チーフ・リーダー　山本健一郎　甘利仁朗
　　柴崎新　篠原敏弘
　　加地幸雄　医療係　西海隼雄
　　沢本一夫　器具係　山田邦行
　　市川陽一　城戸剛　食糧係　岡垣治雄
　　景山豪治　中村保

三、行動記録

三月十四日　夜、山本、岡垣、加地、西海、沢木、山田、城戸、市川、景山、新宿出発。
三月十五日　晴　前川渡（一〇・〇〇）―坂巻（一八・〇〇―二〇・二〇）
深山荘に若干の荷を残しバスが前川渡までしか入らぬ様子なので番所行に乗る。前川渡で降りて多量の雪におどろく。沢渡までの道は細々とした三十センチ位のふみあとしかない。山吹トンネル附近は河原が道とほぼ同一の高さになつている。坂巻まで二十余りのデブリがあり、百軒長屋附近はスキーで河原を行く。悪いへつり多くバテル者多く最も遅れた者は二〇・二〇に坂巻到着。皆日に焼けて赤い顔をしている。
三月十六日、曇後雨、坂巻（八・三〇）―上高地（一六・〇〇―一七・〇〇）―養魚場（二〇、〇〇）
重い荷にピツチあがらず釜トン入口で昼食となる。入口と等高まで雪があり、やつと中へすべりこむ。立大のパーテーの下山に会う。出口は一面の闇。出口用の横穴の先へ三米余りの雪のトンネルがつづき河原近くに出た。ダムからスキーで河原を取入口まで行く。ホテル近くの道は例年なら一面の笹原の筈が全く雪に覆われている。河童橋近くで市川のシール破損しブレーキとなる。

（山本健一郎）

明神館近くで真暗となり雨が降り出した。河原へ出たが積雪のため土堤と河原が等高となり十米位しか視界がなく養魚場が発見出来ず一時間近く迷つた。養魚場の屋根は雪面と同じ高さとなり五米位に近接するまで発見出来なかつた。後発の甘利、T中、篠原はホテルで我々に追いついた。生のスキー、シールの不備が難行の原因である。就寝は十二時すぎとなる。

三月十七日　晴　九時半起床。雨の音と思つたのは雨だれの音であつた。全くの快晴。十時頃より雪崩の音が鳴り止まなかつた。午後山本は長七沢偵察。加地、山田徳沢へ荷上げ。市川休養。残り五名はホテルへボツカ。甘利、中村、篠原到着す。

三月十八日　晴　全員七時二十分着魚場出発。四峰東壁下の台地まで荷上げとラツセルに出る。帰路市川捻挫。

三月十九日　雨　四時　荷上げに出発するも間もなく降雨激しくなり退却する。

三月二十日　雨　附近の雪は眼に見えて減つていく。養魚場の小川も水量が増え水辺には青草も見える。柴崎到着。釜トンは出口が埋没し中の湯から山腹をへづつて通過したとの話に皆おどろく。

三月二十一日　快晴　養魚場（四・一五）――瓢箪池（九・〇〇）――四峯下デポ往復――養魚場（一四・三〇）

全員にて荷上げ。スキーデポにした長七沢上部の大木の処までデブリが押し出していた。ヒヨータン池に大テントを張り甘利、中村、加地、岡垣、山田がB・Cに残る。西海帰路転倒し右足のひざと左足のひざ及び足首を捻挫する。辛ろうじて降りるもはれあがり夕刻歩行不能となる。

三月二十二日　晴　養魚場三時出発。七時瓢箪池に到着した処B・Cではラデイウスの不調に今出発せんとする処だ。山本、篠原、沢木はB・Cの五人とCI建設に向う。柴崎、景山、城戸は四峯下のデポへ逆ボツカ。CIをラクダのコブのコルに建設。中村、岡垣残る。

三月二十三日　晴後曇。CIの二人は主峯のザイル工作。B・C全員はCIへボツカ。甘利、柴崎、加地、沢木CI入り。CIに六人そろい、前穂頂上のCII建設の体勢ととのう。

三月二十四日　雨　停滞。

三月二十五日　雨　停滞

三月二十六日　雨　停滞

三月二十七日　晴

B・Cからは篠原と城戸がボッカを兼ねて前穂高アタックに出発。山本と景山はデポ地点にボッカ、山田はテントの整備で残つた。

東稜はラッセルが消えてクラストしており消耗、CIまで四時間。

CIパーテイはボッカ。SとKは彼らが明神主峰下で荷上中のところを追いつきCIパーテイも行動を共にする。

主峰から先は夏道が出ているところもあり、稜線上は比較的容易であつたが、岳沢ぞいの斜面をたどると、前日までの雨でパンにクラストした上に、三～五センチ積つた新雪がなじまずに乗つており、更にそれがウインド・クラストしているというすこぶる悪い状態だつた。

A沢のコル上部に突き上げようと岳沢側を登行中、右山トラバースで沢木スリップ。一瞬のうちに奥明神沢へ姿を消した。ストップしようとちよつとピッケルのピックを雪面に突差したようだつた。が次の瞬間には、まるで大きな滑台を滑るように音もせず我々の視界から消えてしまつていた。

ザイル、薬品をもち、甘利、T中、柴崎が沢木のあとを追う。篠原と城戸は連絡のためB・Cにバック、あとは稜線で結果を待つことにした。

奥明神沢のコル附近から沢木の姿が見えた。岳沢との出合近くで、スリップは約七百米。おお、彼は甘利、T中、柴崎と立つて話をしているようだ。

ヤーホーをかけて、B・Cへの連絡も中止して様子を見る。登つて来た甘利の話によると、顔一面すりむいたのと足の打撲程度で、ピンピンしているとのこと。

甘利、岡垣、加地は三本槍上部にCⅡを建設、篠原、城戸は連絡に下る。T中、柴崎は沢木をつれて岳沢を下り、ホテルに向つた。

三月二十八日　晴　撤収

B・Cでは協議の末撤収と決定。篠原、城戸、山田は東稜を登り、山をかけ、撤収を伝え、CIでCIIパーテイを待つ。

暗くなつてからCIIパーテイはCIに下りつき、そのまま宮川沢を下りB・Cに入る。篠原と加地は連絡のためB・H養魚場に下る。そこで東大の遭難を知る。

三月二十九日　雨

B・HからB・Cに山本以下三人が登り、B・Cの撤収を風雨をついて行う。T中、柴崎はホテル～B・H間をボツカ。沢木は顔がかなり腫れたが元気だとのこと。西海、市川の捻挫も経過よくホテルに下る。

三月三十日曇時々雨

T中、柴崎は沢木と共にみなより一足先に坂巻に下り休む。他はB・Hからホテルまで。

三月三十一日　曇　帰京。奈川渡からバス。途中清水トンネルの出口、入口共にデブリで通行不能であつたが、かえつて河原は道路と等高となつており、難なくトンネルの脇を通れた。なお釜トンは入口が全く埋没し、途中明り窓まで山腹をトラバースした。

（山本健一郎）

北岳バットレス

――昭和三十一年十二月――

一、まえがき

小谷部先輩達の努力によつて冬の北岳バットレスが登られてから二十年近い月日が経過した。しかしその間戦争による空白と初登がなされたと云う事実のためか、冬の北岳バットレスに登攀を試みた人はなかつた。そしてわれわれも北岳バットレスの岩にふ

れた事はなかつた。小谷部先輩の輝ける足跡をたどり、われわれは穂高や鹿島槍に幾つかの合宿を行なつた。そしてA・Cを設営した日の喜びは今も忘れられない。しかし、打ちつづくレスに登攀を試みる機会を作る事に成功した。希望に満ちて悪天候とフアイトの不足は敗退を余儀なくした。

この敗退はわれわれの部の冬山の合宿のイニシアチブを取るのは三年生か四年生かと云う問題を残した。夏の偵察時には未だ登攀ルートとメンバーの組合せが確定していなかつた。そのため夏に登攀した者で冬山に不参加、或いは一時参加する者も出た上、冬期に取付き点にいたるルートの選択にも判断が誤まつており、せつかく訪ずれた一日のチヤンスを失う原因となつた。結局これは登攀の主体となるべきは三年生か四年生かと云う点も明らかにして置かなかつたリーダの手落ちから、皆安易な気持で他人まかせの偵察と研究と準備のまま合宿に臨んだ結果である。

冬山に参加する四年生は就職の決定した安心感や卒論の準備或いは就職を前に帰郷して、正月を迎えるため等種々の理由から余り多数の参加は望めず、精神的にも就職の決定は既に学生々活を終えたかの様な安易な気分におちいらせやすく、二十日余りのきびしい冬山の生活に耐えた上での登攀の意欲をなかなか持ちつづけにくくさせる。一方三年生は未だ責任ある立場にある自覚がなく受動的な気持で立案された合宿に参加するだけに止まつてしまう傾向がある。この様な状態こそが我々が北岳の合宿に失敗した第一の原因であろう。幸に北岳の合宿は無事故であつた。しかしこの様な状態は非常に危険である事は論を俟たないであろう。我々は再びこの様な合宿をしてはならないと云う事を教えられただけがこの合宿の収穫であつた。

二、参加者

チーフ・リーダー　山本健一郎　中村幸正

器具係　岡垣治雄　上原利夫

食糧係　塩川清彦　鈴木博武

宇田川徳治　城戸剛　中村保

茂木俊明

沢木一夫

景山豪治

（山本健一郎）

十二月八日　山田亮三先輩以下部員数名の見送りを受け、夜行にて新宿を離れる。

十二月九日　雪

甲府駅前のバス待合所で始発のバスを待つ。芦安の青木さん宅にて餅、米等をパッキングし、依頼したオート三輪につみ込んだ。雪が降り始めたためオート三輪は途中までしか行かない。トンネル入口まで往復したあとめしにする。三十貫位の荷をトンネル入口の茶屋に置き荒川小屋めざす。鮎差へ十六時、荒川小屋に十八時到着。冬の日は短い。

十二月十日　晴

実に寒い朝をむかえた。山本、岡垣、塩川の三名は約六貫の荷にてラッセルとボッカのため池山の小屋へ向い、神峠迄昨日の荷を取りに行く。池山の小舎附近は三尺近い雪のため倒木がかくれて見えず歩きにくい。日蔭は実に寒い。

十二月十一日　快晴

食当になつた城戸はシュラーフの中へ入れた目覚し時計の鳴るのにも気がつかずねすごしてしまい、出発八時半となる。りに消耗し十二時三十分小屋着。山本、中村（T）の両名は池山に残り明日上へラッセルに行き、荒川小屋の荷は岡垣以下七名にてすることとし七名は下る。今日も寒い。小屋の中で午後七時零下八度になる。

十二月十二日、晴

九時輪かんをつけて出発。可成りのラッセルがあり交代で登る。こが一番大変だ。森林限界へ十二時三十分に出る、富士山、八ケ岳が北アと異なり近く見えるのが大変珍らしい。農鳥、間ノ岳は仲々立派だ。バットレスは七魂沢の頭の向う側だ。未だ見えない。

十二月十三日、晴後雪

今日は小谷部さんの命日だ。皆張り切つて出発する。森林限界までたどりついた頃には一面の高曇りとなる。上の方が案外雪が

すくない。一三時、亡魂沢の頭に十四時十分、八本歯のコルの手前にカマボコを一張り設営し、山本、中村（T）、岡垣、城戸、景山が残る。

十二月十四日、雪

連日の行動に上の天幕の全員休養。午後茂木、沢木、宇田川連絡と荷上げに来る。中村（Y）、上原の両名未だ入山せずとのこと。岡垣の帰郷の日迫りたるため明日晴れれば山本、岡垣にて第一尾根をやる事として用意してねる。星空をあおぎフアイト盛ん。午後七時、零下十七度なり。

十二月十五日　風雪。

三時に起床したが暖く雪がちらつき始めていた。あきらめてねる。終日風強く雪がまう。十六時三十分、Y中が独り連絡にきた。岡垣の帰郷の日迫り天気悪く池山の小屋まで今日降りることとしY中と二人十七時三十分に降る。

十二月十六日　雪

朝八本歯の向うまで偵察に向う。途中より烈風に悩まされる。十六時、残りの全員到着しウイムパーを張る。本日で全員、A・Cにそろつた訳だ。カマボコに山本、中村（T）、中村（Y）、塩川、城戸、宇田川、ウイムパーに上原、鈴木、茂木、沢木、景山。

十二月十七日　晴後風雪

朝一時風止み日が射すも連日の行動の疲れもあり、昨日見た大樺沢の雪の状態も悪く雪崩の危険もあり、行動不能と見て沈澱する。午後より天気悪化し風雪となる。

十二月十八日　曇時々雪

山本、中村（T）、中村（Y）、上原、城戸、沢木、宇田川、景山、ザイル工作に向い茂木、塩川、鈴木森林限界迄逆ボツカ。ザイル工作のパーティは二隊に分れ中村（T）、上原は第四尾根取付き点へ向い残りはAガリー左の細いガリーに向うも夏に第一尾根への最短ルートであつたこのガリーは思つたより困難となり時刻も遅くなり引返す。

十二月十九日、晴後風雪

茂木、塩川、鈴木、景山、宇田川北岳へ向う。中村（T）、上原は第四のザイル工作に、山本、沢木、城戸は第一偵察に向う。中村（Y）は身体不調で八本歯にて引返した。第一尾根取付へ向つた三名はアンザイレンの上六ピッチをついやし昨日のガリーを登り緩傾斜帯に出た。併しアタックの時のルートとしては余り時間がかかり困難であるのでAガリーを遠廻りでも使う方が良いとの結論に達し第一尾根下をトラバースしてAガリーに踏跡をつけつつ下る。第四のトラバースもDガリーに小谷部さんの時の様に氷が発達していず困難を感じたが、一応通過の目安をつけザイルを固定して来た。

　北岳に向つた塩川は風に吹きとばされて二米程空中をとんだが事なきを得るという目に会つた。北岳は風の強い所だ。山本、城戸は第一尾根へ、中村（Y）、沢木は第三尾根へと予定を建て、用意を整えてねる。

十二月二十日　曇後晴

　三時全員起床。外は星空だがあたたかい。とにかく食事をすませ準備万端ととのへて外へ出た時には一面のガスに十米先も見えず、雪がちらついていた。五時、本日のアタックを中止することとし皆がつかりしてシュラーフ・ザックへもぐりこんでしまつた。どうも外が明るいので目が覚めたのは九時、ベンチレーターから外をのぞいておどろいた。真青な空、曇一つない快晴だ。したまつたと思つたが仕方がない。時間も遅すぎるので茂木、塩川、鈴木を北岳へ向け残り全員でテントの整備と干し物に当る。ここ数日の間に附近の積雪は一段と増しウイムパーテントはやつと天井が頭を出しているにすぎない。除雪、防風壁の作製等に一日をあて早々とねる事とする。本日の快晴に不安定だつた大樺沢の雪も落着くし、岩場の雪もとけるし明日こそはと希望にふくらんだ胸をいだいて夫々夢路をたどつた。

十二月二十一日　風雪

　夜半すぎテントをたたく雪の音に目がさめた。いつの間にか又天気はあと戻りだ。皆がつかりしてねてしまう。

まない。

十二月二十二日　風雪

　ウイムパーは大分ひどい状態だし何よりも石油の不足がいたい。池山の小屋にあげた石油が一鑵（一斗）穴があいたためか空に

なつていたので大分予定が狂つてしまつた。食糧も充分ではない。ウイムパーを撤収しカマボコ型テントに山本、中村（T）、中村（Y）、上原、城戸、沢木が留まり残りは池山へ降りることとした。

十二月二十三日　風雪

朝から猛烈な風が吹いている。天幕は完全に雪の下だ。全員で八本歯をこえて大樺沢への下降点まで行く。ラツセルだけでもと思つていたが無理だつた。一歩踏み出せば首までもぐり、身動きも出来ない。雪崩の不安が大きく十米も降りることもできず引返す。仕様がないので頂上でもと思つたが農鳥への分岐点から先は一層激しい風に一歩も歩けない。早々とテントへ戻り協議する。

今日の大樺沢の上部の状態では行動出来る程度に雪が安定するのには数日を要しわれわれの燃料、食糧をもつてしては不充分であると云う結論しか出なかつた。午後深々と埋まつたテントを堀り出して重い足をひきずりつつ池山の小屋へ下つた。国学院と同宿。

十二月二十四日　曇

下は所々晴れ間も見える天気だ。併し上の方だけは雲に覆われ山鳴りがしている。毎日下はこの様だつたらしい。余り雪もふえていない。荒川小屋で昼食にする。夜又神峠から芦安までの道は遠かつた。とつぷり暮れてからやつと芦安鉱泉にたどりついた。

（山本健一郎）

白馬岳猿倉台地を中心としたバリエーション・ルート

――昭和三十二年三月――

一、猿倉合宿を選んだ理由

吾々の討議は先づ春山合宿のあるべき姿に関するものから始まつた。即ち、冬山合宿、春山合宿のいずれに重点をおくべきか、又その形態はいかにあるべきか等についてである。結局、新制となつて数ケ年を経て、冬山、春山の体験を幾度か重ねてきた吾々

の部には、四年生の参加出来る冬山合宿こそ、各年度の最大イベントにすべきだという意見が多数を占めるに至つた。二十九年度の春山＝岳沢、冬山＝後立の計画から三十年度の春山＝北尾根、冬山＝天狗尾根、三十一年度には春山＝明神東稜、冬山＝北岳バットレスの方向に変化している。

即ち、それはCLを初めとする三年リーダーの春山よりも冬山に主力をもつてゆこうとする考えの現れである。しかも、再建期二十九年度、三十年度程の人材集中は常にあるものでなく、この上昇ラインを持続すべき任務を背負つた吾々にとつては、一人でも多くの人材を養成することこそ春山合宿の第一目的であると思われたのである。たとえ、記録的には一歩後退であろうとも……。

吾々の中にも異論があり、天気等の自然的条件に恵まれる春山にこそ大きな計画をすべきだと主張した。確かに強制力の乏しい吾々の場合には、山での越年合宿の実現が如何に難しいかは周知の通りであるし、又学生であるが故に色々の支障が生じて、冬山では四年―二年の全員参加による最大の計画という理屈通りに事実は認められねばならない。しかしながら、背伸をしてまで過大な計画を強行すべきではない。四年制度という短い期間に人材を送り出し、絶えず何らかの成果を上げるべき時期にこそ、春山のように比較的安全な条件の下で先ず洗礼を受ける必要があるのではなかろうか。このような意見が多数を占めた結果、その対象として吾々の部では殆んど未知の地点で、しかも上記の目的に合致するものとして猿倉台地を中心としてバリエーション・ルート登攀を目的とした猿倉合宿が選ばれたのであつた。

今、一つの理由は三十一年度冬山合宿として北岳バットレスが選ばれ、その荷上げのために積雪期までの準備は殆んど望まれなかつたことである。

尚、三十一年の秋、偵察のために十月十四日から十九日にかけて岡垣以下七名が、十月二十三日から二十八日にかけて市畑以下三名が白馬より鹿島槍冷池まで縦走した。

二、参加者

チーフ・リーダー　岡垣治雄　　中村幸正

市畑進

（岡垣　治雄）

上原利夫　西海隼雄
塩川清彦　鈴木博武
器具係　城戸剛　記録係　沢木一夫
特別参加＝山本健一郎　中西厳
渡辺嘉佑　南亮進
中村保

三、行動記録

三月十三日　夜行準急にて新宿発。
三月十四日　晴　松本―信濃四ツ谷―猿倉　BC建設
四ツ谷より二股まで馬そりにて荷を運ぶ、二股発電所に荷を預け、各自の負荷を平均八貫匁とし猿倉に向う。旧猿倉小屋上に二張のテントを設営する。
三月十五日　晴　B・C―二股往復
昨日発電所に残してきた荷物を上げるべく全員で二股まで往復する。
三月十六日　晴後曇　A・C建設
樺平にA・Cを建設すべく全員スキーをつけて出発。台地の上に出ると森林限界となり視界が開け杓子尾根全体が一望のもとに望まれる。長走沢が右に曲る辺りにスキーをデポ、台地最右端の尾根を急登して杓子尾根に出る。樺平の中央部にジャイアント・ウインパー一張を設営、岡垣以下四名入る。残りのボッカ隊は真白になつてB・Cに帰着。
この日、上原以下五名は二股及び細野に残してきた荷をとりに往復、又後発の中村（Y）以下四名は四ツ谷に荷約三十貫を残して入山、更に中村（T）は奥又より単独入山する。

三月十七日　雪
A・Cは停滞、B・Cでは中村（Y）以下六名後発の残してきた荷をとりに四ツ谷駅往復、他は附近の斜面でスキーに興ずる。
午後遅くなつて春日井入山、全員揃う。
三月十八日　曇後晴
A・C　全員でB・C往復
B・C　山本以下七名小日向コルを経てA・Cに荷揚げする。杓子沢下部には明大遭難捜索隊の方々の姿が散見された。他は休養。
三月十九日　高曇、風強し
B・Cでは山本、中村（T）、沢木で白馬主稜を登るべく午前零時起床して準備したが、月に暈がかかつており風強く、荒天の模様なので出発をとりやめる。夜が明けてから市畑以下五名A・Cに入る。
一方A・Cでは加地、西海で杓子岳方面の偵察に出掛ける。テントよりアイゼンとわかんを併用して出発、正面に見える広い斜面を急登すると、杓子沢側がやせて尾根状を成してくる。右側は長走沢に緩く落ちているので、沢筋に紛れこまないように尾根の左端を登つて行く。ジャンクション・ピークの手前に十米程岩の露出している処があり、理科大の縄梯子が掛けられていた。左右捲けるが梯子を拝借して登り切る。ジャンクション・ピークの白馬側に、我々が入山する前に遭難した米軍機の残骸が痛ましい姿を曝け出していた。杓子岳頂上直下のナイフ・リッジは殆んど雪をつけていない。縦走路まで行つてA・Cに引返す。
三月二十日　曇後風雪
山本、中村（Y）、沢木で白馬主稜に向う。二時四十分テント出発、台地の森林限界の所から長走沢を渡るが、ルートが判然とせず、大分タイムロスして馬尻に到着、ここでアイゼンをはく。雲足が早く天候は上々とは云えない。末端から取付き直上するが、高度を増すにつれて天候悪化してきたので第一ピークにて引返す。
この日は春日井がA・Cより下りてきた山田とA・C入りした他全員沈澱、特別参加の南、山本は就職の為午後下山する。
三月二十一日　曇後雪

白馬主稜に中村（Y）、中村（T）、沢木が向つたが、沢木は不調の為第一ピークにて引返す。その頃より雪となり、主稜パーティー以外B・C、A・Cとも停滞する。

△白馬主稜▽　中村（幸正）、中村（保）

B・C（二・〇〇）——馬尻（四・〇〇）——B・C（二・〇〇）——小屋（一六・三〇）——小屋（一七・〇〇）

前二回の出戻りにこりて今日こそはと意気ごんで出発した。調子のそろつたペースで六・〇〇時主稜末端ピーク下に着いた。天気の方は相変らず思わしくないが、行くところまで行つて下ることにして進む。段々になつている雪稜が続いて、時に胸がつかえるほどの急斜面に出合う。八時ごろから本格的な風雪になるが、前進、視界は全くきかず、ラッセルは腰をうめるほど深くなつた。ただ上に向つて果しないラッセルを繰りかえしているようなものであつた。ナイフリッジも、殆んど足もとに注意していないので時おり雪庇をふみはずしそうになつてどきりとする。一三・〇〇全く方向を失つて雪洞を掘るが、寒気にたえかねて再び前進開始する。一四・三〇頂上下バットに着く、ここからスタカットで登攀、降りつもつた雪が絶えずずり落ちてくるので、ピッケルを雪壁にさして確保しなければならない。

五ピッチで壁を終つて頂上に出る。黒部側の風雪はものすごく、ザイルをひきづつたまま頂上小屋へ逃げこむ。ここで寒い二晩を過して23日B・Cへ帰つた。

三月二十二日　風雪

風雪のため小屋にとじこめられる。

三月二十三日　薄曇　頂上小屋——B・C

三月二十二日　雪後曇

B・C、A・Cとも沈澱。昨日から引続く降雪の為に主稜パーティのことが気に掛る。この悪天候の折に大雪渓を降りることが

（T中記）

危険であるということはわかつてはいるが。

三月二十三日　薄曇

三日目にして雪の降らない朝を迎える。依然主稜パーティが帰らないので上原、鈴木、塩川で連絡の為A・Cに向う。ところが十時頃主稜パーティB・Cに帰着、登攀成功を知り一安心、その連絡を兼ねて沢木A・Cに入る。

A・Cでは市畑を除く全員でCI建設に向う。先日の偵察により、杓子沢コルも考えられたがボツカの往復等によりジャンクション・ピークと杓子岳コルに設営する。加地、山田、渡辺を残して他は下山、途中折柄遭難機救出の為入山していた米兵より多大の食糧等を貰い受け一同狂喜する。

朝B・Cより上つた塩川はそのままA・Cに残り、春日井は就職の為明日下山すべくB・Cに下りる。

三月二十四日　風雪

降雪激しくA・C、C・Iとも停滞。岡垣、宇田川、小峰は連絡の為B・C往復、同時に鈴木、上原A・Cに上り、B・Cには中村（Y）、中村（T）を残すのみとなつた。

三月二十五日　曇後風雪

市畑、沢木CI入り、上原以下六名荷上げ。CIは停滞。

朝からガスがかつて天候は不安定であつたが様子を見て出発する。ジャンクション・ピークにかかる頃より雪が降り出す。一昨日設営したカマボコテントはもう大分埋つておりCIの連中は除雪に苦労していた。

荷上げ後上原、西海、塩川、鈴木は所用の為下山、B・Cに下りる。又中村（T）はB・Cより下山、それを送つた後中村（Y）はA・Cに上り、これで事実上A・CがB・Cとなつた。

CIでは明日の行動を天狗池CII建設、明後日唐松アタックと予定を立てて就寝。

三月二十六日　終日風雪激し

午前五時起床、起きてみて驚いた。テントの天井がぐつと低くなつて床から五十センチ程になつている。すつかり雪に埋つて中は

真暗である。入口から雪をかきわけて泳ぐようにして表に出ると猛烈な風雪、テントの屋根には昨夜から一米二十乃至五十積つている。慌てて全員で除雪にとりかかつたが、積雪量多い為如何ともし難く、又力の均衡が崩れて支柱を折る危険性があるのでとりやめる。脇にCⅡ用のテントを張ろうとするも強風の為それもならず、已むを得ず、雪洞を堀り午前十時ひとまず落着き朝食とする。考えてみれば、この設営地が丁度吹きだまりの地点となつており他に較べて遙かに積雪量が多い。CⅠ建設の際時間の関係から此処を選んだことは今にして思えば全く痛恨の一語に尽きるものであつた。以後雪洞を拡張し、テントから食糧等を移しビバーク態勢を整える。午後五時夕食、夜に到るも風雪激しく、昨日から二米以上になる。終夜バーナーを燃し続けて暖をとり、交替に睡眠をとることにする。

この風雪によりCⅡの食糧計画等に相当混乱を来してきたので合宿の全計画遂行は殆んど不可能になつたと考えられた為、明日以降の計画を検討し、まんじりとも出来なかつた。

三月二十七日　晴風強し

悪夢のような一夜は明けた。幸いにして昨日とはうつて変つた好天気である。一応唐松アタックの計画は放棄、A・Cに連絡の為加地、山田、渡辺が下り、他はCIに留まる。十二時A・Cより岡垣以下六名救援に到着、数の威力は恐しいもので瞬く間に埋没したテントを堀り出す。竹のフレームが二本折れていた。一応CIを撤収することにして午後四時全員でA・Cに下りる。午後より風が強くなり、濡れた衣類はすぐ凍つてしまつた。六時A・C着、CⅡ用ナイロン天幕を張つて落着く。寝具等も全て石のようになつており、乾いたシュラーフに交替で入る。

三月二十八日　ガス時々晴

天候回復の兆を見せてきた。一日中濡れものの乾かしで一日を費やす。

明日よりの行動を、唐松を中止、白馬鑓南稜、同北稜の二本とし他は白馬岳往復と決める。

三月二十九日　快晴

〈白馬鑓南稜〉　中村(Y)、城戸

出発（六・〇〇）――取付（七・三〇）――岩峰下（一三・三〇）――岩峰上（一五・三〇）――鏃頂上（一六・〇〇）――A・C帰着（一七・五〇）

久し振りの快晴をつかんで勇躍出発。杓子沢トラバースは明大二重遭難直後の事とて大いに緊張したが無事通過。東面最南端のルンゼに入つてこれをつめる。ルンゼ上部は七十度の雪壁となり、しかも尾根への取付点に層の厚い雪庇が張り出しているため、この乗越しだけで一時間あまり苦闘を強いられた。尾根へ出てからは快適なピッチで忠実にコブを辿り、やがて難関と云われる岩峰の下へ出る。ここでアンザイレンし、岩峰の左肩から右下方に走るルンゼに取付く。一ピッチの短かい岩峰だが取付きがオーバー気味でかなり悪い。城戸、手袋を外してホールドを求めたため指先に軽い凍傷。岩峰を乗越してしまうと後は垣々たる尾根へ出て直ちに頂上へ達す。鏃の頭で感激の握手をかわし、急に強くなつた風によろめきながら帰途につく。白馬主峰にまわつて杓子尾根を下る予定であつたが、相当疲労していたためと、既に杓子沢のナダレの危険もうすらいだ頃だつたので、そのまま杓子沢を下つてテントに戻る。

（城戸記）

△白馬岳往復▽　岡垣、加地、宇田川、渡辺、小峰、中西

三月三十日　晴風強し

△**白馬鑓北稜**▽　市畑、沢木

出発（六・二〇）――取付（七・〇〇）――ジャンクション（一〇・一〇）――鑓頂上（一三・〇〇）――杓子岳（一三・五〇）――A・C帰着（一五・三〇）

白々と夜が明けた六時過ぎ、テントを出発、水平にトラバースして杓子沢に出る。十分程下降して右折、最初のルンゼから登高を開始する。傾斜は約三十度、上部でかなり急になり胸を突くようになるが、安定していて雪崩の危険はない。時折旧雪のクレバスを踏み抜き緊張する程度である。最後の詰の雪庇を破つて細いリッジに出る。そこから又、トラバース、もう一本奥のルンゼに入る。この方は傾斜緩く、なんなくメインリッジに出る。A・Cがくつきり見える展望の良い処である。軽い昼食を摂り、反対側のルンゼに入る。処々岩が露出しており、北面に当るため雪が氷化しているのでアイゼンをはく。このルンゼ状の所を二十分程登

れば支稜とのジャンクションに到り、快適な雪稜となる。あとは南稜との間の雪渓をからんだり、岩尾根を直上したりしていると鑓の頂上で呆気ない位の登攀終了であつた。杓子東面を登つた岡垣、宇田川に迎えられ、杓子岳経由で帰幕する。（沢木記）

△杓子東面最右端ルート▽　岡垣、宇田川

CI（六・四〇）――東稜末端（七・三五）――取付（八・二〇～八・三五）――杓子尾根ジャンクション（一一・五〇）

モルゲンロートを感嘆しつつ樺平のテントを後に杓子沢に向け下る。十分程下つてからはトラバース気味に東稜目指して進む。アイゼンだけでは雪に可なりもぐる。小一時間で東稜の末端に着くが、登攀の対象とならず、右側の急なルンゼ状の所を登る。喘ぎながら登る事約一時間にして東稜の下部のコルに出る。右側はハング気味で取付にくいのでコルを越え左側より取付く。岩場ではなく完全な雪壁である。下から見るとほぼ垂直に見える様な雪壁だ。稜線に立つてからアンザイレンする事にし、岡垣が先に登るが、後で考えて見るとアンザイレンすべきなのはここだけの様に思われる。宇田川は〝輪かん〟を付けていないので、岡垣が残したステップに足を置いても可なりもぐり、ともすると不安定なバランスになる。ふと下を見ると、二週間程前に幾人かの人を呑んだ杓子沢が、春光に照されて、美しい曲線を描きながらも、自分の足元からスパッと落ちている。稜線に立つている岡垣やきもきした「岩を登つているのと違うんだぞ！雪をだまかしながら身体をづりあげるんだ。」という声がきこえる。可なり消耗し、時間を食うが、無事雪壁を登ると、東稜が、適度の傾斜をもちながら杓子におし上げているのが見える。後は、春の陽を存分にあびながら、東稜というには余りに広い稜線を登るだけだ。

東稜は杓子の頂上直下で杓子尾根にぶつかる。稜といつても別に岩がある訳でもない。けつして狭いとはいえない楽しい稜線である。ただ、取付の雪壁での足元から見た杓子沢が印象深かつた。

（宇田川記）

合宿も終りに近付いたのでこの日加地、渡辺、小峰で二股まで荷を下しに往復する。

ところが、アタック・パーテイーも帰つてきた午後四時過ぎ、ローソクの火の不始末からA・Cの天幕一張を全焼してしまつた。いろいろ迂余曲折したが、どうにか所定の計画をあつた。ここ二、三日晴天が続いた為乾燥していた内張に火が移つたものである。

終了した矢先であつたので全く意気消沈してしまう。この為に岡垣以下五名はすぐ荷をまとめて六時過ぎ猿倉のB・Cに下りる。

三月三十一日　雪

A・Cの中村（Y）以下六名は十時撤収して下山する。昨日までの晴天はもたず今日は雪、思えば何と降雪の激しい合宿であつたろうか。猿倉で昨日下りたパーテイーに追い付き、あとは思い思いにスキーを操りながら細野に降りる。

四月一日　曇

二股の荷物を整理して下山。

（沢木一夫）

四、反省

(一)　テント埋没について

三月二十六日CIとして設けていた杓子尾根ジャンクション・ピーク附近のテントが積雪のために埋没した。人命に影響はなかつたけれども、唐松岳往復計画は中止の破目になり、貴重なテントは大修理を要することになつたのはリーダーとしてお詫びのしようもないことであつた。

この地点はやせ尾根で多少雪面を削らねば設営しがたい場所であつたこと、それに防風のためのブロックとテントの間の隙間が広すぎたこと、予想以上に重い多量の雪が国境稜線を越えて吹きつけたことが原因であろう。いずれにしても、技術の拙劣さのなせることであつた。テント地の選定のまずさ、設営技術のまずさの結果である。このことから得た経験はナイロンテントの耐風性は信頼し得るものであるということだつた。

(二)　テント炎焼について

合宿の最終部分は連続の好天に恵まれて、目指すバリエーション・ルートの登攀も殆んど終了した日、即ち三月三十日、B・Cのテント（ジヤイアント）を不注意から燃してしまつた。色々な意味で合宿の成果を味つていたので連日の好天ですつかりたるんでいたテントの内張に気づかずにローソクに点火したのが原因だつた。

丁度、吾々のたるんだ気分を象徴するかのような事故だつた。重ねがさねのテント禍、全焼したテント跡を片づける気分の重さ、筆舌では表現し得ないものだつた。ただ、先輩諸氏にすまないと思う気持で一杯だつた。

(三) 今後の方針について

この合宿では二つのテント事故があつたけれども、目的とした人材養成、雪山技術の錬成という点では可成りの成果を収めたと思う。テント事故についても、今後のためには役立つことだつたかも知れない。

何にもまして、反省さるべき点は合宿前半において指揮系統が明確でなかつたことである。換言すれば、途中で下山したメンバーが、特に四年部員の参加が多すぎた点である。冬山ではメンバーの結びつき、チームワークが計画の成否を決するものだから。

途中の下山は残るメンバーの気分にホームシックを起させかねない。特に、一年生の多い春山においては。卒業式を目前に控えた四年部員の春山参加は必然的に中途下山を前提としている。その上、リーダーである三年部員にとつても、四年部員に対しては甘えていたい気持と迷惑がる気持とが交錯して、吾々の最も恐るべき命令系統の混乱が起りやすいのではなかろうか。とすれば、四年部員の参加は合宿の最後まで留つて、オブザーバー的な存在でない限り遠慮すべきではなかろうか。

（岡垣治雄）

槍ケ岳から極地法による奥穂高岳登頂

——昭和三十二年十二月——

一、まえがき

吾々が槍穂稜線を選んだのは、「風に吹かれようぜ」と云う冗談まじりの意見によつてであつた。統一されたチームの力でまとまつた仕事をやろうという気運に加えて、三千米近い稜線での十数日の生活が魅力だつた。そして全員がフルに動ける場所として。

山は吾々に応えてくれたし、予定より多少人数は減つたとはいえ、一年間の総決算としての冬山に挑む適切なメンバーの質と量とが揃えられた。しかも、全員一諸に出発し、同じ汽車で帰ることが出来た。

おまけに、天気も好かつた。積雪も少なかつたし、槍の穂先に登つた日など、これが冬山かと思うぐらいだつたに強かつたけれども。

これだけの好条件に恵まれた合宿は過去にも少なかつただろう。お蔭で目的とする稜線でのポーラーメソツドによる奥穂往復も滝谷第三尾根に取付けるだけの余裕をもつて果せたのである。

この合宿をふり返つて、皆良くやつたけれども、それ以上に吾々はツイていたと思う。そして中にはそれに甘えて多少ルーズな者や行動があつたことは見逃せない。吾々は単にピークが目的で登るものではない筈なのに。特に冬山においては、肉体的には勿論、精神的にきたえられる絶好のチャンスであるのだから、吾々はしごかれてもしごかれても頭をもち上げる位の闘志を持つて山に臨むべきではなかろうか。自律と不屈の精神、それが吾々の求むるものだ。

（岡垣治雄）

二、参加者

チーフ・リーダー　岡垣治雄　中村保

沢木一夫　器具係　城戸剛

食糧係　大橋喜治　渡辺嘉佑

医療係　峰高教通　安田惟行

上原利夫

景山豪治

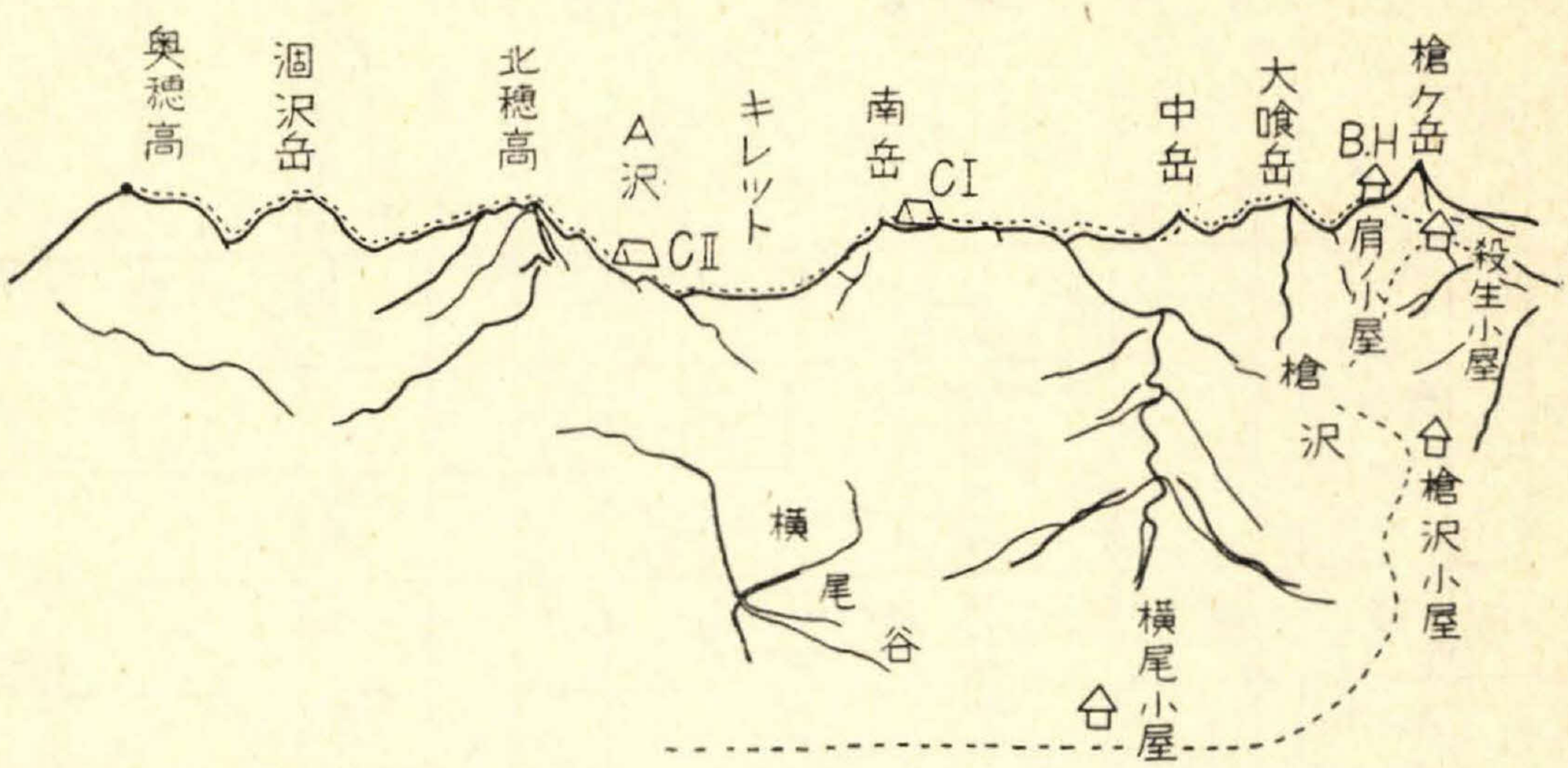
小峰隆

三、行動記録

十二月七日　快晴　松本――島々――沢渡――上高地

雪が意外に少なく坂巻へスキーをおいて入山する。これで胸をなで下した人もいる筈。ホテル泊り。十七時ホテル着

冬山合宿ルート展望図



B.H	槍肩ノ小屋	12月11日
CI	南岳穂高側	12月12日
CⅡ	滝谷A沢	12月15日
	奥穂高	12月17日

十二月八日　晴　ホテル――徳沢

九時四十分ホテル発、徳沢一時着、今日は全員十二貫五百の荷物。昨日は最低が七貫七百、最高が十一貫五百でホテルで計量して大騒ぎをした。二年生四人すこぶる元気で、「雨に歩けば」を口笛を吹きながら歩く。徳沢から横尾まで一人五貫ほどボッカをしておく。

十二月九日　雪　徳沢――槍沢小屋

雪の中を槍沢へ。一尺のラッセルがあつた。雪を枝に宿した森林の静かな風景と雰囲気は忘れられない。

十二月十日　晴後雪

槍沢――殺生――槍沢　岡垣、景山、大橋、峰高、小峰

槍沢――横尾――槍沢　他全員

殺生へは高捲きを強いられ、深いところで胸までのラッセルが あり消耗する。横尾への逆ボッカで全物資が槍沢に集つた。

十二月十一日　晴後風雪　槍沢――肩

殺生小屋から上は、モモまでのラッセルと烈風でしごかれる。小屋から三時間かかつて肩へは十九時着。肩の小屋に入る。殺生を制約される。

十二月十二日　晴後雪　肩――南岳――肩

南岳の南側百米下のところにCI建設。上原、沢木CI入り。

月日	天候	坂巻	上高地	徳沢	横尾	槍沢	殺生小屋	肩の小屋 B.H	南岳 CI	A沢のコル CII	北穂高	奥穂高(ヤ三尾根)	備考
12.7	快晴	⑪ →											全員上高地ホテル泊
8	曇後雪		⑪ ←										荷上
9	雪			⑪ →									
10	晴				⑥ ⑤								ボッカ
11	晴後風雪					⑪ →							全員BH入
12	晴後曇						② ② → ⑥ ① ←						CI建設 景山停滞(凍傷)
13	風雪								⑨ ②				停滞
14	雪								④ → ② ④ ③ ①				CII停滞
15	晴後曇								① → ③ → ③ ③ ① ←				CII建設
16	晴後曇								② → ② → ③ ② ② ←				CII fix工作 と偵察
17	晴後雪								② → ② ← ②	② ② ②			Attack 奥穂高登頂 ヤ三尾根登攀
18 21	風雪									⑥ ⑤			停滞
22	晴後曇								← ⑤	⑤ ①			CII撤收 CI景山を除いて 他は北穂高登頂
23	風雪								⑤ ← ⑥				BH停滞 CI撤收中岳 でビバーク
24	快晴								⑤ ← ⑥				全員BH集結 槍ヶ岳登頂
25	晴					← ⑪							撤收
26	風雪		← ⑩	①	⑪								撤收
27	晴	← ⑩											帰京

城戸、安田以外は全員CIボツカ。前記二名は殺生小屋へ逆ボツカ。肩のB・Hに全物資集結。

十二月十三日　風雪　B・H、CIともに停滞。

十二月十四日　雪

中村、城戸、渡辺、峰高CI入り。他は全員CIボツカ。CIでは停滞。

雪は降つていたが風はないのでCIまで動くことにする。中岳の下りはももあたりまでのラッセルであつた。大喰岳、中岳、南岳と一時間ピッチの三ピッチである。十二日のボツカの際、CIに入れるべき餅を置き忘れてかついで帰つた怪力の人がいて、CIでは朝食用の餅がなく文句を云われた。

十二月十五日　晴後曇

CI——キレツト——A沢のコル——CI　A沢のコルに風をさけてCIIを建設。上原、城戸、沢木CII入り、中村、渡辺、峰高がボツカ。南岳の下りは夏道を使わず、横尾本谷に入つているルンゼを下つてキレツトに五十米ほどトラバースして出る。

B・H——CI——B・H　小峰入り。他はボツカ。

十二月十六日　晴後曇

CII　B沢のコルまで偵察。キレツト基部からのすぐの登りに三十米のフイクスをする。

CI——CII——CI　中村、渡辺入り。峰高、小峰ボツカ。キレツトも通いなれたか、時間がかせげる。夏道の針金が出ていてそれを使う。

B・H——CI——B・H　岡垣、安田CI入り。

十二月十七日　晴後雪

B・Hから、景山、大橋CI入り

CIから岡垣、安田がCIIに出かける。連絡のため。

CIIからアタツクに出発。奥穂高に沢木、城戸、渡辺が、第三尾根にT中、上原が向う。

〈奥穂高〉　沢木、城戸、渡辺

CII（六・四五）——北穂小屋（八・四五）——奥穂高（一三・一五—一三・三〇）——北穂小屋（一七・〇〇）—— CII（八・四五）

朝焼け気味の赤い東の空が気にはなつたが、天気は悪くないのでアタックに出発する。寒さは痛烈に肌をさす。ナイフリッジを馬乗りになつて通る。北穂頂上下の斜面は、バリバリに凍結して、アイゼンがようやくきく位であり、その上、急なため止つて休むことが出来ない。ピックを雪面につきたてながら、調子をとつて登る。北穂小屋すぐ下の雪のやわらかいところまで登つてようやく休む。北穂の頂上から涸沢側の雪面を岩壁にそつてトラヴアースする。ラッセルはももまで。涸沢岳への稜線は飛騨側はかたい氷が多く、ピックを打込んでもはね返されてしまう。涸沢岳の登りは浮石が多く消耗である。穂高小屋で昼めしを食う。この頃からガスがひどくなり、風も出てくる。奥穂高の頂上ではガスが濃くてわずかに上高地あたりが見えただけだつた。お宮の前で写真をとり、すぐ引返す。ますます風と雪が激しくなり、何も見えなくなつてしまつた。北穂まで行くことにして慎重に涸沢岳を下り北穂小屋へたどりつく。くるときのラッセルはほとんど消え、北穂へのちよつとの登りにえらくしごかれた。小屋に入つてタバコを吸い、悪天が続きそうなので、CIIまで下りた方が良いと云う結論に達し、ライトをつけて下りはじめる。下のかたい雪と、新雪がなじまず、不安定で足下から雪がすべり、仲々骨が折れる。しかし新雪がまだそんなに多くないので、なだれる心配はなかつたと云つても良かろう。テントが見えた時は全くほつとした。アイゼンをぬぐのももどかしくテントにもぐりこみ、ベーコンを食い、サケ缶をあけて食つた。外はますます激しい風雪になつた様だ。A沢のコルを吹きぬける風がゴーゴーと音をたてている。

（渡辺記）

〈滝谷第三尾根〉　中村、上原

CII（六・三〇）——北穂頂上（八・〇〇）— C沢——第三尾根取付（九・三〇）— P2下（一一・三〇—一二・〇〇）——P2上（一三・〇〇）——C沢— CII（一四・〇〇）——北穂頂上（一九・〇〇）— CII（二〇・〇〇）

八・〇〇、奥穂へ向うアタック・パーテイーと別れてC沢左俣を下る。途中滝が二、三埋らず氷化していたが苦労せずに通過し

た。第三尾根の末端をまわり込んでC沢右俣に入る。

夏のノーマル・ルートを通り、下から二番目の赤いルンゼを取付に選ぶ。ここまではひざぐらいのラッセルであつた。

ルンゼに入つてすぐ右側の尾根に出る。最後の雪壁が登りずらかつたが、T中先に登つて上原にザイルを投げて、事実上ここでアンザイルンと云うことになつた。更に、この岩稜を三ピッチ、スタカットにコンテイニアスを交えてP2の下に出る。

P2下の三角形の壁は、傾斜四十五度ぐらいの細い雪のバンドを約八米ぐらい、ラストの確保にぶらさがるようにして、末端まで下る。ここより垂壁を三米、夏でも悪いところを、ハーケンで吊上げるようにして登る。続いてやや左上に凹角を十米、付着した氷にステップを切り、わずかのスタンスとしてバランスで登りP2の左下に出る。夏ならばここでサイルをほどくところである が、縦走路までは長い。しかしこのピッチでラストは下の垂壁の部分でバランスを失い、左へ振られてしまい宙吊りになつてしまつた。再三もどろうと試みるが果さず、ついにC沢左俣側の岩壁を四〇米一杯、ザイルを伸ばして小さなテラスに下る。トップも二回のアップザイレンで同所に降り立つ。いつしか天気は風雪に変つて、ビバークの用意のない我々を焦らだたせ始めた。テラスからバンドを伝つて再びメインリッジにもどる。このバンドの存在が、偶然にも、岩壁に取残される危険から救つてくれたのは不幸中の幸であつた。リッヂから登路を忠実に下る。快適にとばす。C沢左俣も夕やみと風雪につつまれて、ひたすら奈落の底から逃げ帰るような気持で、ラッセルを続ける。北穂の頂上に着いた頃は全く暗くなり横なぐりの風雪の中をライトの明りをたよりにCⅡに戻つた。

（T中記）

十二月十八日　風雪　CⅠ、CⅡともに停滞
十二月十九日　風雪　CⅠ、CⅡともに停滞
十二月二十日　風雪　CⅠ、CⅡともに停滞
十二月二十一日　風雪

CⅡでは今日を入れて四日間一日一回の用便が続いた。野菜が少なくなつて話題はもつぱら食うこと。ハムをゴッテリと手帳に書いている人もいる。下界におりたら食うつもりらしい。

CⅠの話題は用便のことばかり、テントが埋没して除雪は沈痛を極める。

十二月二十二日　晴後曇　CⅡ——肩の小屋

CⅡパーティは撤収して肩までくる。CⅠパーティは北穂へ景山を除いて全員登る。CⅡで成功を喜びながら握手を交す。四日間の雪で南岳は夏道通りにたどらなければならず、荷物があつてCⅠまでは往生する。夜は久しぶりに野菜をたんまり食つた。CⅠを通つて肩へ帰る。

十二月二十三日　風雪　B・Hの五人は停滞

CⅠ——中岳南側直下

天気が思わしくないので撤収をあきらめたが正午頃風が弱まつたので撤収にかかる。積雪が多く、テントを掘り出すのに時間がかかり、いつしか日没となり、消耗している者もいるので、天気もいいし雪崩の危険もないとみて中岳の下、稜線近くにテントを拡げてもぐり込む。汗とシュラーフが濡れていたため一晩まんじりともせず明す。

十二月二十四日　快晴　中岳下——B・H明くれば嘘のような青空。中岳の登り、胸までのラッセルに全員ばてにばて、汗とも涙ともわからぬ程顔を濡らせて槍をにらみながらケツパル。

全員が肩の小屋に集まる。全員が槍の穂先に立つ。合宿に入つて、はじめて一日中快晴。槍の穂先からの眺望は、余すところなく日本中の山が見えそうだ。夕方、見上げる大槍が真赤に染まつて感激の一時をすごす。

十二月二十五日　晴　肩の小屋——横尾小屋

B・Hを撤収して横尾に下る。槍沢は猛烈な吹き下しの風でピッチング・ローリング、度々雪の中に倒される。槍沢小屋からや

つと風から解放され、オーバー・シユー、オーバー・ズボン、ヤツケと次々にぬいで、キスリングにひつかけて下山。

十二月二十六日　風雪　横尾小屋――ホテル――坂巻

しめつた雪の降る中を行きに三ピツチかかつたところを一ピツチ楽々ととばし坂巻へと急ぐ。ホテルでひるめしを使わせてもう。坂巻へは全員ずぶぬれになつて着く。坂巻でのめしはすごくうまかつた。一人が三合を平げる有様。

十二月二十七日　晴　坂巻――沢渡――島々――松本――東京

松本は年の瀬でにぎわつていた。あちこちをぶらついて全員夜行で帰京。

（渡辺嘉佑）

四、食糧報告

厳しい冬山合宿では、できるだけ速やかに体力の消耗を回復し、常に最良の条件の下で行動することを要請される。また、冬山では最も複雑で苛責のない天候条件の中でのビバークを余儀なくされることは、われわれの体験するところである。このような場合、充分な力の保持ができるような食糧を準備しなければならない。以下において、今回の冬山合宿の食糧報告と反省を試みてみたい。

本合宿の食糧計画は一応次のような目標のもとになされた。

1　食糧の栄養度　2　食糧の軽量化　3　使用を避けるべきものの選別　4　食糧のバラエティ　5　パーテイ各員への均等配分

これらのうち、第一の栄養度は、従来から神経質すぎるほどに注目されてきた。計画に際し、確かにその重要性は無視できないが、単にカロリー云々するだけでは片手落で、消化吸収率を合わせ検討する必要がある。

食糧の軽量化については、冬では殊に荷物が重くなり、行動に大きな制約を与え、時間的にも、体力的にも甚々しく消耗を強る。そこで、その軽量化が日頃から叫ばれているが、荷物の大部分を占める食糧においてもその例外ではない。食糧の軽量化としては、余計な水分の除去、包装の軽量化が挙げられるが、われわれは、今回の合宿において、その全面的採用を試み予想以上の成

果を挙げることができた。ただ、乾燥野菜を使用する予定であつたのが、これまで使用させていただいていた日本冷蔵研究所の乾燥機が、研究所のご都合でその使用が不可能となり、生野菜の荷上げということになつた。カンズメ類を最小限にとどめたということ、野菜の除去すべき部分は予め除去したこと、水分類は極力避けたことがあげられるが、これらは消極的なものであつたことは卒直に認めざるを得ない。

食糧のバラエティは主要献立表に掲げるところであるが、パーテイ各員の嗜好、量の個人差、山での食糧の特殊性等からも、これも特に問題はなかつたが、その荷上げ重量、胃に負担をかける点から、従来から使用されてきた餅を使用した。これは各人の嗜好の点から考慮しなければならない。朝は時間的制約もあつて、一つの方法として、餅の量を少くし、肉、野菜の量を増すことができれば理想的であろう。昼食は乾パンを主食とし副食は肉、ミカン、バター、レーズンである。乾パンはレーズン入り、ピーナツ入り、塩味だけのついたものの三種で、それぞれに卵が配合されたものである。乾パンに対する評判は各人各様であるが、大抵使用量は定量に達しなかつた。量、種類、味等綜合的に考慮しなければならないが、普段、米、餅ほどに食べないせいもあり、最も頭を悩ますものである。副食は量的には問題があるが、一応試験的にやつてみた。従来と異なる点は、マーガリンをバターにし、牛肉（東京で煮て味をつけたもので、山では冷凍化した）を加えたことで、文句なしに評判がよかつた。レーズンは毎日、ミカンは隔日に、肉、バターは交代に配した。今後は、乾パンの量を若干減じ、これら副食を、経済的には問題があるけれど、量的に増やしたいものだ。

夕食は五種類用意した。入山中にはウドンを使用したが、水分を多く必要とする点、腹もちが悪い点等、やはり行動食としては評判はかんばしくはなかつた。

使用を避けるべきものの選択については、疲労という点から、胃袋には余り負担をかけないものを選ぶことは重要なことであろう。この場合、米食が問題となるが、ウドン類を加え、減量したにとどまる。又、栄養の点で優れた豆類も避けた。変質し易い食糧は避けることはもちろんであるが、肉類は欠くことができない。保存法として乾燥肉が好適であるが、費用による制約、消化不良という理由から、昼食用としての煮肉は雪中に保存し、運搬の際も外部にパッキングするよう心がけ、その他の肉は味噌の中に

冬山食糧品目リスト

物資名 ＼ 一人当り量	BH	CI	CII	総量
米	1.5合	1斗6升	1斗	7升	3斗2升
餅	3.0合	3斗5升	1斗8升	1斗	6斗3升
コンビーフ	1カン/5人	6	2	5	13カン
ベーコン		（差入）			
草ツモギンンンけ玉物煮干ケ干ウ茶	1カン/5人	4	4	2	10カン
コカンベイカヨ		5	3	2	10
ケレガネジ		2	1	1	4個
ヤーヤガズた	1/2個	900匁	500匁	500匁	1貫900匁
ーヤヤンカげ	1/2個	1貫500	500匁	500匁	2貫500匁
シホーいリシ		300匁	100匁	100匁	500匁
キジ玉	1個				6貫
ニミレし揚漬佃梅フ煮コ緑	25匁(1袋)				300袋
					10袋
					600匁
		1	1	1	3ビン
カレーの素	1箱/8人	2	1	2	5箱
ハヤシの素	1箱/8人	10	0	0	10箱
コンソメ	1個	0	15	25	40
バタ	1/24ld	20ld	2 ld	4 ld	26ld
マーガリン					
ソーセージ	1/2本	55	25	50	130本
味噌		400	300	300	1貫目
醤油					5升4合
砂糖		（1人300メ携帯）			3貫300
塩					
スキムミルク					20袋
カンパン	50匁(1袋)	150袋	100	50	300袋
ウドンプ		10束	0	0	10束
ドロップ					
肉	15匁(朝)				4貫
	15匁(昼)				4貫
	25匁(夕)				6貫500

主要献立表

	I		II	
	朝	夕	朝	夕
主食	餅	米飯 ウドン	餅	米飯 { I カレー / II ハヤシ / III コンビーフト飯 / IV シヤケ飯
副食	漬物煮ケ干 佃カリフ梅	スープ汁汁 味噌汁 すまし ぶた	漬物煮ケ干 佃カリフ梅	スープ汁汁 味噌汁 すまし ぶた

保存した。

剣岳早月尾根

――昭和三十三年三月――

一、まえがき

剣岳西面に於いて合宿を行うということは、以前に我が部にその記録が無い為に、かなり前から我々の魅力になつていた。昨年の猿倉合宿後にはその考えも具体化してき、当初は小窓尾根等が挙げられていたが、先ず問題になつたのは我々が積雪期のこの地方に関する知識が乏しいことであり、更に我々の技術と考え併せて、今年度は剣岳を知る意味に於いて、早月尾根から八ツ峰上半の登攀というのが妥当のように思われ、四月末にはこの計画に決定を見ていたのであつた。

五月に二パーテイの偵察隊を出し、この方面の地形の概略を把握すると同時に、四年部員によつて八ツ峰の登攀が行われ、積雪の状態を知ることが出来た。夏の剣合宿は雨に崇られ、秋は穂高の冬合宿の荷揚げ、偵察に忙殺され、この方面の計画がおろそかになりがちであつたが、十二月中旬三年部員二名によつてゾロメキ発電所に食糧、燃料の一部を荷揚げし、併せて現地交渉を行い、合宿準備態勢を整えていつた。

今年度の夏合宿から、春合宿には一年部員が多数参加するということは予想される所であつた。然しながら出発直前までに積雪期の合宿には未経験の彼等を上手く指導する為には、上級部員の多数の協力が必要であつた。然しながら出発直前までに種々の事情から主力の三年、二年に不参加者数名を生じ、結局三年五名、二年一名、一年七名というメンバー構成で合宿をもたなければならないことになつた。

計画ではCIを一七〇〇米、CIIを二六〇〇米、更にCIIIを剣岳頂上に上げ、そこから八ツ峰をアタックすることになつていた。然しこの構成メンバーから推して、CII――CIII間の荷揚げに一年部員を使用しなければならず、その実行に際しては多少と

（大橋喜治）

も躊躇せざるを得なかつた。その為に八ツ峰の計画は中途にて放棄し、全員登頂ということに改めて目標を変えねばならなくなつた。この結果は以下行動記録に示す通り、参加者十三名中（一名中途下山）八名登頂という形で現われることになつたが、この合宿を顧みると、前述の事柄から合宿の初期に於いて行動が安全を期するあまり消極的になり、CII建設までに意外の時日を要し、それが放棄の一因ともなつたことは否めない。従つて当初の計画を遂行出来なかつた原因の一つとして、改めて反省されなければならない。

以上の如く、この合宿は結果的には剣岳登頂ということだけで終つてしまつたが、我が部として剣岳西面に初めて足跡を印したことは事実であり、これを基礎として今後この方面に更に一段の研鑽が積まれなければならないと考える。（沢木一夫）

二、参加者

チーフ・リーダー	沢木一夫	山田邦行
	宇田川徳治	大橋喜治
器具係	中島寛	医療係 山本尚禎
	中川滋夫	永井新也
	仲田修	
食糧係	渡辺嘉佑	市川陽一
	小林進二	
	大賀二郎	

四、行動記録

三月十二日　上野発急行「北陸」にて全員出発。

三月十三日　晴　上市――伊折――北電避難小屋

冬お世話になつた中島荘に寄り、御礼を述べて朝食。チャーターした車の連絡が悪く、出発したのが十時、峠にかかる頃から積雪量多くなり、途中除雪などしながら進むが、蓬沢の先でどうにも仕様がなくなり車を降りる。伊折で荷を半分預け、スキーをつ

月日	天候	上市	伊新	ゾロメキ発電所（小屋）	バンバ島 B.H	一七〇〇m 早月尾根 C I	二五〇〇m C II 剱岳	池ノ谷コル	
3.13	晴	⑬	→						
14	曇時々雨		⑬	→					ボツカ
15	晴			⑧ ⑤					全員B.H入
16	快晴				④ ⑧ ①				C I 建設
17	曇				① ③ ② ⑥ ①				C II の偵察
18	雨後雪				⑦	⑥			停滞
19	曇後雪				⑦	⑥			B.Hボツカ C II 停滞
20	雪後晴				① ② ④ ⑤ ①				C I 停滞
21	曇	←			② ③ ③ ① ①	③ ③			C II 建設 大賀下山
22	曇風強し				④	② ③ ③			C II 偵察 B H. 停滞
23	快晴				④	③	④ ①		C II 登頂 (ヤ1パーテイ)
24	晴					④ ② ②	② ②		C II 登頂 (ヤ2パーテイ)
25	曇時々雪					④	⑧		停滞
26	雨時々曇				← ④		⑧		C II 停滞 C I 撤收
27	曇風強し				④ ←		⑧		C II 撤收 全員B H集結
28	雪				⑫				停滞
29	雪	←		⑫					下山

け、今日中にゾロメキまで入るべく出発するが、第一日目のことでもあり、スキーに馴れないせいもあつて行程渉らず、途中で暗くなつたので小さなわら小屋に十三人辛うじてもぐり込む。

三月十四日　曇時々雨　北電避難小屋―ゾロメキ発電所―バンバ島山荘

スキーをつけたままゾロメキまで行つて昼食、発電所の方に会つて冬の御礼を述べる。バンバ島の取入口の所で一悶着あつた為、小屋に入るのが少し遅くなつた。昨秋峻工したばかりの立派な小屋だがもう大分汚れていた。

三月十五日　晴

伊折往復―山田、宇田川、大橋、渡辺、大賀、小林、中川、ゾロメキ発電所往復―沢木、市川、山本、仲田、永井

伊折、及び秋に荷揚げしておいた荷をとりに夫々往復してB・Hに集結させる。

三月十六日　快晴　CI建設

B・HよりCIへ―山田、宇田川、中川、大賀

雲一点ない素晴しい天気になつた。尾根の末端より取付き、大体夏道通りに松尾平に至る。中央部を横切つて正面に見えている幅広い尾根の急登になる。かなりの傾斜であるが、先蹤者のラッセルを使わせて戴き、快適な登行である。上部で左折し、少しやせてくるが再び急な雪壁を登るとそこは一七〇〇米の設営地点だつた。三月とも思えぬ意外の暑さに上衣を脱ぎ、全員で瞬く間にカマボコテントを張り了える。正面に毛勝から赤兀、小窓方面まで望める快適な場所である。

三月十七日　たかぐもり

二五〇〇米偵察―山田、宇田川、大賀

BHよりCIへ―渡辺、中島

昨日に比して少し雲が出てきたがとにかく行動出来る。CIから少し急な所を一息で一九〇〇米地点。ここまで来ると早月尾根上部から小窓尾根全貌が一望のもとに集まる。尾根は稍え傾斜を落し、大体池ノ谷側をからみながら通過する。二三〇〇米のコル

附近は雪が階段状に積つて良い設営地となつている。雪壁を登ると尾根が細くなつて間もなく二五〇〇米である。正面の小窓尾根の黒い壁が圧倒的だ。二六〇〇ピークの斜面には相当亀裂があり、荷揚げに一寸気掛りになる。

一方B・Hから渡辺、中島がCIへ、他は荷揚げ。トレースがすつかり固まつて、時間が大分短縮され、わかんも要らない程になる。

三月十八日　雨後雪

四時頃から八時頃迄雨、それよりみぞれ、引続いて雪となる。休養日となり終日沈澱。CIでは早速侵水騒ぎを起す。気温高く湿雪で夕刻近く風を伴う。

三月十九日　曇後雪

CIは朝から雪の為沈澱、B・Hでは降つていなかつたので出発する。昨日の降雪でそれまでのトレールは完全に消されて、新たにラッセルしなければならないので非常に時間を喰う。松尾平を過ぎる頃から雪が降り出す。急な斜面にかかるとラッセルもぐつと増し昨日の三倍近い時間を要す。高度にして五〇〇米程登つた頃雪が激しくなつたので、これからのラッセルと帰途の時間を考えて此処から引返すことに決める。小さな雪洞を堀つて荷をデポして帰る。

三月二十日　小雪後晴

B・HよりCIへ――沢木　CIよりB・Hへ――大賀

相不変すぐれない天候でB・Hでは一応出発したものの松尾平で又雪が降り出したので、山本、永井、小林、仲田引返し、連絡の為沢木、大橋、市川でCIに向う。昨日のデポ地点で少し荷を詰め、ラッセルを交代しながらCIに着く。天候は十一時頃から快方に向い午後にはすつかり晴れ上つた。CIでは全員休んでおり、大賀は私用で明日下山すべく、大橋、市川とB・Hに降りる。

CIではテントを張り直して濡れ物を乾し、気温上り、外に出て春山の気分を十二分に満喫した。

三月二十一日　曇CII建設

CIよりCIIへ――山田、宇田川、渡辺

BHよりCIへ　大橋、山本
下山――大賀
層積雲多く、太陽に暈がかかつて変な天気だが、CII建設の予定で出発。ずつとラッセルがついており問題なく二三〇〇米。二三のテントを見て昼食。上の急斜面が結構もぐつて時間がかかつたが二ピッチで二五〇〇米地点、細い雪稜の池ノ谷側に設営する。
B・Hからは大橋、山本が上り、市川、小林、永井荷揚げ。食糧の消費意外に激しく、この状態が続くとCIIIを延ばすのが一寸危なくなる。
三月二十二日　曇、風強し
CIIより二六〇〇米往復――山田、宇田川、渡辺
CIよりCIIへ――沢木、中川
頂上に近いテント場は流石に風当りが強い。一晩中テントを揺すぶられた。フイックス及び上部偵察の予定でCIを出発するも、二六〇〇米ピークに登る頃より一段と風が強くなり、飛雪激しく歩行不能と思われたのでここから引返す。
昼頃CIパーティ到着、全員で考慮の結果今日のような強風が今後も続くことは予想される処であり、残りの食糧を計算すると行動日七日、沈澱日四日分しか無く、仮にCIIIを出した場合アタツクが成功したとしても撤収の際の食糧に支障を来す恐れがあり、悪天候時に行動せねばならない羽目に追い込まれる可能性が濃くなつたので、一年が多い今度の合宿では危険と判断し、八ツ峰アタツクは断念する。
計画を変更して、明日からの行動としてCIIにもう一張テントを張り、此処から交互に登頂することにする。
三月二十三日　快晴、風強し
剣岳登頂、池ノ谷コル往復――山田、宇田川、渡辺、中川
CIよりCIIへ――大橋、山本、中島

BHよりCIへ――市川、小林、永井、仲田
山田、宇田川、渡辺、中川CIIを出て頂上へむかう。シシガシラ、カニのハサミあたりは針金が出ていてそれを使う。サブで登るぶんにはフイックスの必要はない様だ。雲一点なく風もなくて頂上でひるめしを食いながらのんびり山々を眺めた。さらに足をのばして主稜線を池の谷のコルまで出かける。主稜線にはすでに入山していたパーテイがフイックス工作をしていたので、それを使わせて頂きザイルを出さないで時間をかせがせてもらつた。主稜線の起伏は圧倒的であり、立派である。早月尾根へ下りはじめる頃から風が吹き出し、雪煙を舞い上げて目をあいていられないことが二、三度あつた。CII地点には新しいテントが張られていた。
（渡辺記）

十二時頃より大橋等到着、今までのテントの脇に新しいウインパーを張る。朝方強かつた風もすつかり治まり絶好のアタツク日和となつた。残念ながら八ツ峰は出来なかつたが、我が部で初めて積雪期の剣岳に登頂出来たかと思うと感無量だつた。

三月二十四日　晴
剣岳登頂――沢木、大橋、中島、山本
CIよりCIIへ――市川、小林、永井、仲田
CIIよりCIへ――渡辺、中島、中川、山本

昨日程良い天気ではないが、風も無く先ずは落着いた行動日である。朝早く連絡の為に中川をCIへ下す。七時半第二パーテイ出発、無事登頂して十一時半帰幕する。殆んど同時にCIより市川等到着する。CIIの収容力に制限があるので登頂をすませた渡辺、中島、山本は午後からCIに下りる。

三月二十五日　曇時々雪、風強し　CI、CIIとも停滞

五時半起床、一晩中風強くテント揺すぶられる。天候芳しくなく天気予報も悪化を伝えているので沈澱と決める。雲は結構高いのだが風が猛烈に強く二六〇〇米ピークから上は雪煙烈しい。後立山方面にレンズ雲多数かかり先ずは悪化の兆。CIII放棄の為に多少食糧にゆとりが出来たのが心強い。

三月二十六日　雨時々曇

気温高くCⅡでも終日雨が降つたり止んだり。CⅡでは沈澱、CⅠは天幕を撤収してB・Cに下りる。

三月二十七日　曇、風強し　CⅡ撤収

雨は止んだが風は依然として猛烈に強い。七時半一応出発するが兎に角風が強く、時折吹きつける突風の為に不安定な登行になる。二六〇〇米の頂上に着く頃、強風の為に一名が吐気を催すようになり、他の者もこの風の下では行動は困難であると判断されたので、登頂を断念し、テントに戻る。

二十三日から崩れ出した天候は四日目の今日になつても依然として回復せず、今後此処に滞在することは食糧の関係から無理なので、第三パーティの登頂は諦めて直ちにCⅡを撤収、下山にかかる。

下は風も無く、おだやかな天気で、今朝の烈風がまるで嘘のように感じられた。五時B・H到着。何日ぶりかで全員の顔が揃う。

三月二十八日　雪

終日雪が降り続く。テント其の他濡れ物乾しに一日を費やす。

三月二十九日　雪

三月も未に近いこの下山の日まで一日中雪に降られた。二十八日にCⅡを撤収して下山したことが今となつては誤つていなかつたような気がしてくる。伊折で昼食、時々止むが折戸の峠の上りで又降り出し、真白になつて釈泉寺の停留所に駆け込む。上市の中島荘に行つて一泊、解散コンパ。

三月三十日　雪

今日も激しい降雪。富山から思い思いの列車にて帰京。後半に入つてずつと天候に祟られた合宿だつた。

（沢木一夫）

準備食糧一覧表

	品名	数量	備考
主食	米	40升	
	餅	30升	
	乾パン	242食	1食8枚，3種
副食	ジーウフ罐漬煮メブ粉けこん干ンギモンウ	3,000匁	2種類
	ードー	30本	
	肉セタ	12ポンド	
	ビケ神	2.500匁	
	カロ	10罐	
	コン	10罐	
	たな	500匁	
	あ	500匁	
	ブン	7袋	
	ロド	3袋	
	し	6合	
	カネガ	3袋	
	イジソ	3袋	
	ヤンレ	3袋	
	ーホ	500匁	
	ソバ乾コサ福佃ワトウ椎きこ切ミ玉ジニ	90個	
		5,000匁	
		5,000匁	
		6本	
		1,000匁	
調味料	味噌	1,500匁	30円分
	醤油	3.5升	
	塩		
	砂糖	2,400匁	
	カレー粉	5罐	
	スープの素	10箱	1箱5人分
	胡椒	2ビン	
	味の素	3ビン	
	煮干	300匁	
	メ	5袋	1袋 100円
	ア茶	3袋	1袋 80グラム
	紅茶	2袋	1袋 100匁
	緑茶	10袋	1袋 12人分
	スキム・ミルク	3袋	1袋 5人分
	レモンパウダー	3袋	1袋 5人分
	オレンジパウダー		

献立計画

	朝	昼	夜
行動日(1)	雑煮	乾パン・レーズン	米飯，カレー
(2)	雑煮	乾パン・肉・バター	米飯，煮もの
(3)	雑煮	乾パン，ミカン，バター	米飯スープ佃煮
停滞日	米飯・味噌汁	カンパン	米飯・味噌汁

注，行動日(2)の昼食肉は醤油で煮つめてポリエチレンの袋につめたもの

器具一覧表

	品名	摘要	BH	CI	CII	計
露営用具類	カマボコテント	6人用		1		1
	ウインパーテント	ナイロン製5人用			1	1
	ウインパーテント	ビニロン製5人用			1	1
	ツエルト				1	1
	グランドシート			1	1	2
	マット	放出，カポツク		4	8	12
	鋸		1			1
	鉈		1			1
	スコップ		1	1	1	3
登攀用具類	ザイル	麻40m		1	2	3
	Fix ザイル	麻延120m				120m
	〃 〃	ナイロン50m				50m
	捨縄					10
	カラビナ				15	15
	R. ハーケン				30	30
	I. ハーケン				4	4
	ハンマー				3	3
	スキー修理具		1式			
炊事用具類	石油コンロ		1	2	2	5
	コッフェル			1	1	2
	鍋		1	2	2	5
	杓子		1	1	1	3
	庖丁		1	1	1	3
	テルモス		1	1	1	3
燃料	石油	7*2l*				7*2l*
	メタ		5	5	10	20
その他	ラジオ				1	1
	針金，釘	若干				
	ワセリン					1缶
	ロウソク		20	20	20	60
	石油空缶		1	1		2
	象足			1	2	3
	ブラックテープ	若干				
	プリズム				1	1

△反　省……食糧について▽

主食の量が先ず第一に不足したことは致命的であつた。そのため計画を完全に遂行することが出来なくなつたことを深くおわびすると同時に誠に残念に思う。一人当り一日消費分を過少に見積つたこともあつたが副食の消費にかたよつた傾向がみられ、全然食わなかつたものがかなりあつたことも事実である。

乾ブドウ、肉のポリエチレンのパツクは仲々便利で好評であつた。しかし肉をあらかじめ煮るのは大へんな手数であるので一考を要する。

いずれにせよ、主食の絶対量の不足は、かえすがえすも残念であつた。

（渡辺嘉佑）

△反　省……器具について▽

当初の計画が予定通りに実行出来なかつた為に登攀用具類に就いては所持したのみに終り、取り立てて特筆する事は無いが、それ以外に就いて、二三気の付いた点を報告する。

①新調したビニロンウインパーテントは、入口、張綱、フツク等主要部分がナイロンで凍結することなく、設営、撤収をスムースに行うことが出来た。

②燃料に就いては石油五ガロン缶四缶を持参したがその中一缶を余すことになつた。これはB・Hでの炊事を全て薪で行つた為であり、テントを伸ばす際に燃料だけに就いては心強かつた。

③テント設営の際のペグ竹に就いては、出発前に紐を結び付けたものを使用したが、これは撤収の際に張綱を切断することなく器具の保全上又その迅速性から見て非常に有効な結果を得た。

（中島　寛）

南アルプス北部縦走　三伏峠―北岳

―昭和三十三年十二月―

一、まえがき

昨冬の穂高に於ける冬合宿は一応成功裡に終了したものの、そこには大きな問題を残していた。即ち、我が部の一年間の最終目標が春合宿にあるにも拘らず、冬合宿と春合宿との比重に変化を生じ、経済的問題などからもその双方について参加者が減少する恐れがあり、少くとも昨年冬合宿終了時には、冬合宿をサブクライム的なものにするという考えに落ち着いていた。

今年の合宿の候補地を決定する際に先ず考えられたことは、昨年の成功は四年部員の力がその要因の大きな割合を占めていたということであり、我々現役の力がそれに較べた場合劣つていることを認めない訳には行かなかつた。中堅部員たる三年部員の少ないこと、それに比して積雪期に経験の乏しい二年部員が部の主力になつていること、これらを考え併せると我が部が更に飛躍する為には、彼等に先ず一人でも多く積雪期の山を経験させ、強じんな体力をつけさせることが必要であつた。これらのことから今年度はその第一歩として、従来の極地法的登山を排し、全員を歩かせ得るものとして南アルプスの縦走ということに決定を見た。

実行に際しては容易なコースでもあり、全行程を踏破することが出来たが、参加者のうち二年部員が多く、更に一年二名を加えたことはプラスではあつても、当初予想したものより若干減少したことについては、この合宿の目的が多数の参加にあつた以上明らかな失敗であり、又異常高温などの影響から冬山の厳しさを味わう機会が少なかつたことについては、コース選定に誤まりがあつたといえよう。

従つてこの合宿を採り上げてみた場合にこれといつた技術的収穫がなかつたのは事実であるが、一年、二年に参加者を得たこと

は、今後我々の部が、一段の前進を計画する際にはその基礎になろうことを確信し、又、そのような計画が進んで生まれねばならないと考える。

（沢木一夫）

二、参加者

チーフ・リーダー　沢木一夫　　市川陽一
器具係　渡辺嘉佑　　食糧係　小峰隆
小林進二　　中川滋夫
大賀二郎　　倉知敬
大橋喜治
医療係　山本尚禎
中島寛
宮本英治

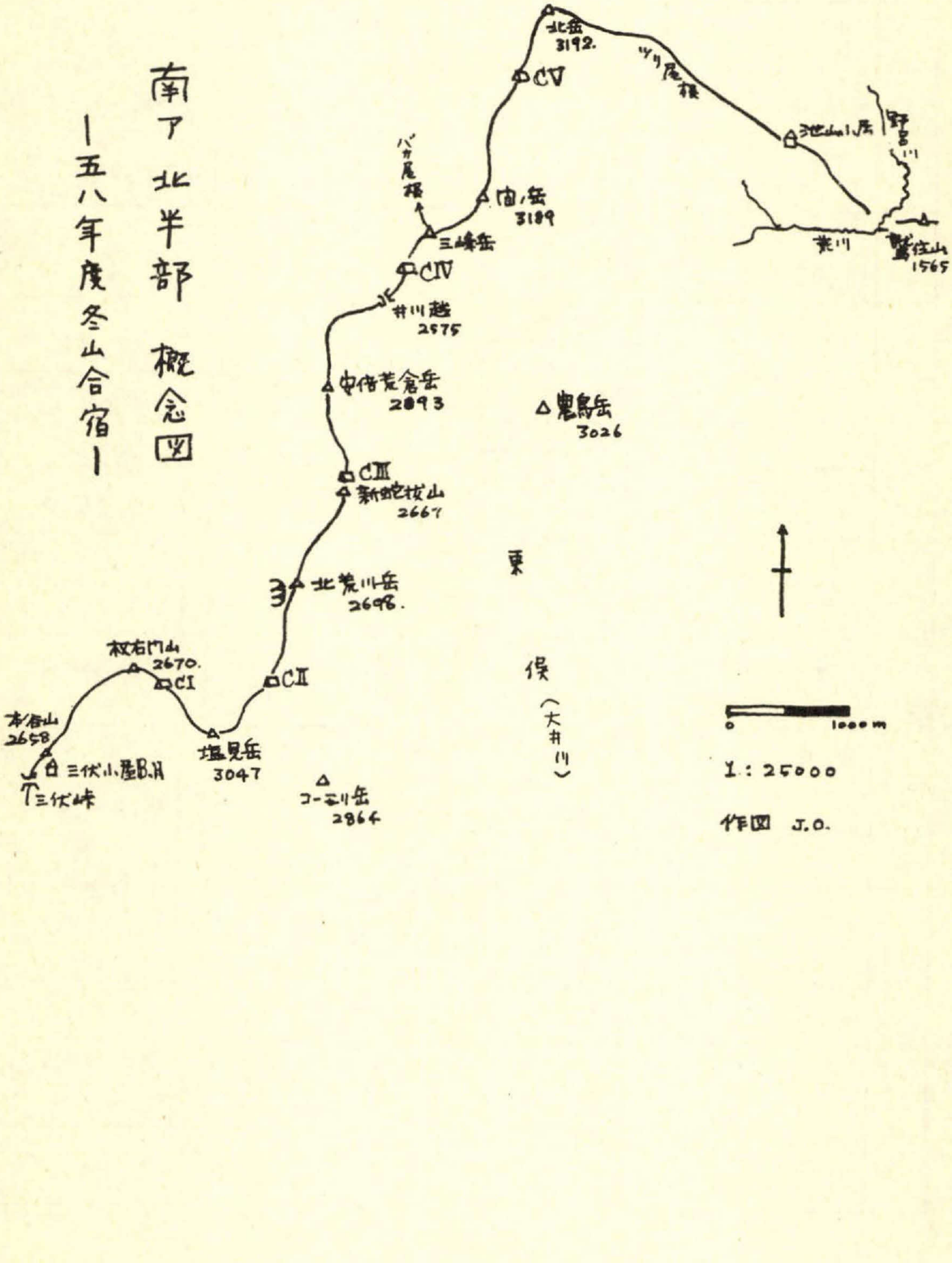
三、行動記録

十二月十日　「アルプス」で全員十二名新宿発
十二月十一日　晴　飯田――落合――鹿塩――南沢の飯場
飯田から落合までバス。そこから小型トラックで鹿塩のちよつと上まで行く。南沢の飯場にとめてもらう。
十二月十二日　曇後小雪　飯場――三伏小屋
三伏峠への登りは路が凍りついていて、すべりやすく、荷は重く危険なのでアイゼンをつけて登る。峠までではラツセルはほとんどなく、峠から小屋への下りはアイゼンからワツパにはきかえる。
十二月十三日　快晴
七時に小屋を出る。本谷山までは快適に行つたがしだいにラツセルが深くなり、権右衛門沢に着いたのが十五時を過ぎてしまつた。
ここにCIを建設する。大橋以下六名がCIに入る。他はボツカ。

Camp / 月日 / 天候	飯場	三伏小屋 BH	権右エ門沢 CI	塩見岳	北荒川岳 CII	新蛇抜岳 CIII	井ノ川越 CIV	三峰岳	北岳コル CV	北岳	池山小屋	芦安	備考
12.11	晴	→ ⑫											全員飯場入
12	曇後小雪	→	⑫										全員B.H入
13	快晴		⑦ →										CI建設
			⑤ ←										
14	晴後雪		⑤	→ ②	→								CII建設 B.H撤收
				② ③									
				←									
15	晴			③ ④	→ ②								CIIIの偵察
				③	←								
16	快晴				⑥	→ ②							CIII建設 CI撤收
					②	②							
						←							
17	快晴					④ →	②						CIVの偵察
						⑥ ←							
18	雪					⑥	→ ③						CIV建設 CII撤收
							② ←						
							① ←						
19	晴後風雪						⑤ →	②					CVの偵察
							④	① ←					
20	風雪						④ →	⑧					全員CIVに集結
21	風雪後晴							③ ③					間ノ岳へのラッセル 井ノ川越への逆ボッカ
								⑥ ←					
22	快晴							⑥ →					CV建設
								⑤ ←					
								① ←					
23	曇後風雪							⑥ →	⑥ →				CIV撤收
24	快晴								⑥ →	⑥			全員池山小屋に集結
25	快晴									⑥ →			下山

南アルプス北半部 概念図

―五八年度冬山合宿―



1：25000

作図 J.O.

十二月十四日　晴後曇

塩見を越えて北荒川岳の手前にCIIを建設。渡辺、中島が入る。CIの四人はサポート。塩見頂上で浅間山の爆発、噴煙を発見、カメラにおさめる。きのこ雲は原水爆でないにしてもあまり有難くない。塩見の下りは雪がなく、土の上をアイゼンでがちやがちやと歩く。十五時、テント場をきめる。この頃から天気の崩れる気配が見え出した。B・Hの六人は全員CIに入つた。

十二月十五日　晴

CIIでは目覚し時計を見まちがえて真夜中に起きだして、ラジユースをつけるなどとんだ茶番をやつてしまう。八時にCIIを出て、十三時まで膝から上のラツセル。新蛇抜の見える風のあたらないところをCIII地点としてCIIへかえる。大橋、中川、山本、CIIサポート沢木、小峰、小林、B・H逆ボツカ市川、倉知、宮本。

十二月十六日　快晴

新蛇抜手前にCIIIを建設。渡辺、大賀CIII入り。大橋、中川CIIIサポート。中島、山本CIへ逆ボツカ。CIの全員CIIに入る。CIII地点は風が全然あたらず、日中はポカポカと暖い。

十二月十七日　快晴

渡辺、大賀は日の出とともにCIIIを出発、稜線通しに行くがラツセルはところによりモモまである。井川越まで登るのにひどいラツセルに悩まされた。井川越から間の手前から降り始めたために井川越のかなり下におりてしまい、井川越まで登り返す。CIIIの少し手前岩の上で荘厳なる日の入りを眺めCIIIへ帰る。CIIIへは大橋、中川、中島が入つていた。他はCIIIボツカをやつてCIIへ帰る。CII—CIII間はラツセルがつちりしてあるので二時間足らずでくることが出来る。

十二月十八日　雪

雪は降つているが風はないのでCIVの建設に向う。大賀は調子悪くすぐCIIIへ帰る。昨日見て来た地点にCIVを建設。渡辺、山本、中川がCIV入り。大橋、中島サポート。雪はしめつていてびしよぬれになる。CIIの六人全員CIIIへ。

十二月十九日　晴後風雪

CⅣより渡辺、山本北岳へむかう。三千米の稜線はさすがに風が強く、休む場所を提供してくれない。間の岳からは走る様に北岳へむかう。北岳小屋への分岐点をCV地点としてめしを食う。天気悪化のきざしが見え始めたので北岳へ行くのはやめて引返す。CⅣ帰着と同時に吹雪き出した。CⅣへ沢木、大橋、大賀、小林、中島が入る。他はCⅣへボツカしてCⅢへ帰る。

十二月二十日　風雪

CⅣでは沈澱。暗くなつてから、ヤツホーがくるので外へ出たらCⅢの連中がやつて来た。CⅢでは風はなく出発してきたと云うことであつた。ここで全員がCⅣに集結することになつた。CⅣへ入つたのは市川、小峰、倉知、宮本。入山以来久しぶりで顔を合せる。小峰が風邪気味、大賀が調子思わしくない。その他は元気である。

十二月二十一日　風雪後晴、停滞

三時頃から雪がやんで晴れてくる。大橋、山本、中島が間ノ岳へラッセルに。沢木、倉知、宮本、市川が井川越へデポした荷物をとりに行く。雪がぐつと増えて、夕方の美しさは格別である。農島岳がテントから首を出せば真紅に染まるのが見える。食欲の飛び切りすごいのがいて、予定以上に食い、食糧係の小峰をなげかせている。

十二月二十二日　快晴

全員でCⅣを出発。北岳小屋への分岐点にCVを建設。市川、大橋、渡辺、小峰、倉知、宮本CVへ入る。入山以来初めて人間に会つた。六人のパーティだが塩見までとのこと。雪が降つてしまつたので我々のラッセルもだめになつてしまい井川越から大へんだろう。

十二月二十三日　曇後風雪

曇りから風雪になる。CVの六人が、池山吊尾根への分岐から北岳の頂上に立つたとたんにガスがまいて何も見えなくなつてしまつた。八本歯の通過の時は最も風雪がひどく、その上荷物が重くて往生する。池山吊尾根には人間がごそごそいた。おかげでラッセルはしなくてすんだと云うわけである。池山小屋にはようやく薄暗くなる頃着いた。夜は素晴しい月夜になつた。CⅣの六人

はCVへ入つた。

十二月二十四日　快晴

池山小屋の六人は終日寝てくらす。CVから暗くなつてから小屋に下りて来た。CVでは風が強く撤収に時間を食つたためである。チヨコレートがくばられ、小さい色つきのロウソクがくばられて、静かにクリスマスイヴの気分を味わう。クリスチヤンでもない十二人だが皆神妙な顔をしてチヨコレートを食つている。予定通り縦走を終つた成功を静かに考えているのだろう。外は今夜も素晴しい月夜である。池の広々とした雪面が青白く光るのが樹間を通して見える。

十二月二十五日　快晴

全員池山小屋から芦安へ下る。荒川小屋までの下りは転び方コンクール。はでにころがる者もあるが、一度もころがらなかつた男がたつた一人いた。観音トンネルの入口からトラックに乗せてもらつて、あつと云う間に芦安へ着いてしまう。久しぶりに湯に入つてコンパを行う。

十二月二十六日　雪

朝から雪だつた。全員バスで甲府へ。甲府では雨になつていた。全員帰京。

（渡辺嘉佑）

(一) 準備食糧一覧表

	品名	数量	備考
主食	米	3.5斗	
	餅	1370枚	10枚＝4合
	乾パン	255袋	
副食	ホーレン草	12束	
	肉（牛及豚）	11.7kg	牛肉は入山のみ
	ワカメ	12束	
	ソーセージ	9本	
	キヤベツ	2個	中但のもの
	玉葱	4.6貫	
	馬鈴薯	2.4貫	
	鮭缶	9缶	中位のもの
	佃煮		
	ミカン	200個	
	レーズン	4箱	180袋に分割
	バター	7.5ポンド	
調味料	醤油	5升	
	味噌	1.3貫	
	塩		40円分
	マーガリン	4.5ポンド	
	煮干	600g	
	コンソメの素	6箱	固型のもの
	カレーの素	12個	5人用
	チヤーハンの素	10袋	60人分
	ソース	3本	中
	胡椒	3本	中
其の他	紅茶	3袋	
	スキムミルク	6袋	
	黄名粉	6袋	
	アメ玉	4袋	

註　砂糖は各自1kg 強を持参せしめた。尚化学調味料の持参は個人の自由とした。

(二) 献立計画

	献立	材料（一単位を四人とした単位別使用量）
朝食	雑煮	肉（豚一〇〇g ホーレン草1/4束 醤油一合弱 餅一人七枚
昼食	乾パン・レーズン・ミカン・バター（一人1/24ポンド）	一人分づつポリ袋にてパックし、配分の便宜を図つた。
夕食 (イ)	カレーライス	肉二〇〇g 素一個、ジヤガイモ一～二、玉ネギ二～二・五、マーガリン1/8lb、塩、コショウ、佃煮若干
(ロ)	シヤケ飯	シヤケ缶一個、醤油〇・五合
(ハ)	チヤーハン	素頭数だけマーガリン1/8lb、玉ネギ一、肉二〇〇g、塩、コショウ若干
(ニ)	野菜いため	肉二〇〇g、玉ネギ三、キヤベツ1/4、弱マーガリン1/8lb、塩、コショウ、ソース若干
(a)	味噌汁	味噌、ワカメ1/2袋、煮干若干
(b)	コンソメスープ	素三、玉ネギ〇・五、ソーセージ1/2本、塩若干
特別食	紅茶 アスキムミルク メ玉 安倍川餅	

註　夕食の(a)(b)は毎日いづれかを(イ)～(ニ)につき合せた、その比率は八対六である。

(三) 燃　料

小屋使用の際（三伏小屋池山小屋）はストーブを使用し、その他は全部石油コンロを使用した。

(四) 反　省

参加人員の不確定は食糧計画に若干の狂いを生ぜしめ、主食及び野菜の絶対量が必要量をかなりオーバーし、参加者に不要の負担をかけた。この点に関する対策が今後必要かと思う。扨、一般的にいつて、量的には不足なく、質は向上し、変化に豊み、成功したことは分配能率を高めロスを減少せしめた。とくに、昼食を一人分づつパックしたことは分配の煩を避け、各自が自主的に且つ統一的に計画遂行に当ることを可能ならしめたこと及び化学調味料を個人持参としたことは悪評をかい失敗だつた。次に献立表をプリントし配布したことは口伝の煩を避け、各自が自主的に且つ統一的に計画遂行に当ることを可能ならしめたこと及び化学調味料を個人持参としたことは悪評をかい失敗だつた。こまかいことについて云えば、緑茶を忘れたこと、

（小峰　隆）

劍岳赤谷尾根から極地法による劍岳本峰、毛勝山登頂

——昭和三十四年三月——

一、まえがき

昨年の春山に我々は初めて劍岳西面に入つた。そして早月尾根から劍岳の登頂を行つたのである。早月尾根から眺める小窓尾根は合宿中、我々の目をとらえて離さなかつた。或々はあの尾根を来年登つてやろう、とそう思つた。そして五月に偵察も行なつて、どうにか成功させることが出来そうだという一応のめども立つたのである。しかし劍岳の積雪期における我々の経験の少なさ、合宿参加者の人員構成にいささか不安があること、つまり三年部員が二人と云う頭不足、積雪期における岩場の技術に対する不安、等のためにやむなく小窓尾根を断念せざるを得ない状態になつてしまつたのである。

劍岳西面の魅力が我々を離さない限り、我々の目は、早月尾根、小窓尾根と並ぶ赤谷尾根にむけられた。そして数回にわたる協議の結果、赤谷尾根からの劍岳と毛勝岳に踏み切つたのである。三月八日から二十三日までの期間我々はここでは新人部員から上級部員までそれぞれフルに動くことが出来たし、目的も果すことが出来た。CⅡで中心となつた二年部員はそれなりに自信もつけたろうし、テントと併用した雪洞は、やがては雪洞への自信の確立になることだろう。

我々は今年は小窓尾根をやることが出来なかつた。しかし来年三たび劍岳西面に入るとすれば 必ず成功させることが出来るに違いないと思うのである。我々は全力をつくした。そして劍岳、毛勝岳へそれぞれ立つことが出来た。それ自体意義のあることだが、小窓尾根への一段階、一つの踏み台であると云うことを考える時さらに意義深いものになつてくると思うのである。

（渡辺嘉佑）

二、参加者

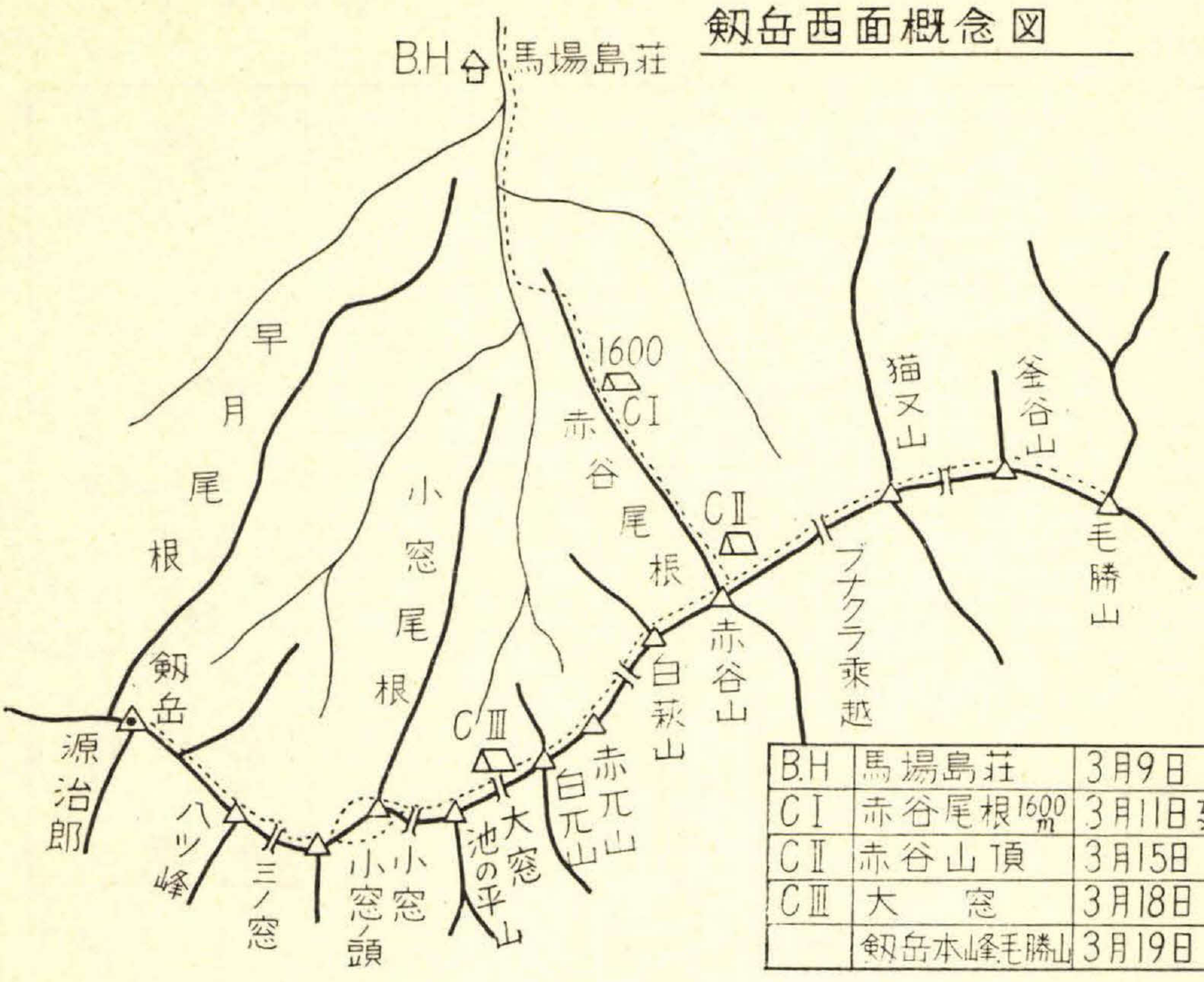
チーフ・リーダー　渡辺嘉佑　峰高教通
食糧係　中川滋夫　器具係　山本尚禎　大橋一慶
小林進二　永井新也　記録係　中島寛
医療係　有賀盈　三股宏　石弘光
倉知敬　大建二郎　小林正直
三井博

三、行動記録

三月八日
二十一時十五分、急行北陸で上野を全員出発。
三月九日　晴　滑川――上市――伊折――馬場島
トラックで伊折まで入る。伊折に荷を半分にして馬場島へ入る。雪は昨年の半分以下と云う少なさである。馬場島着は十四時十五分だった。スキーは携帯しておいた食糧の一部が荒されていたが計画に支障をきたすことはなさそうである。馬場島へ荷上げしてたが雪が少く使う必要はない。
三月十日　曇時々雪
渡辺、小林（進）は六時に馬場島B・Hを出てCI地点の偵察を行う。千五百米にCIを建設することにして一九〇〇まで出かけて見た。先日の雨で雪がしまり、実に歩き良く、三時間でCI地点に達する。他は全員伊折まで逆ボッカ。全物資がB・Hに集る。
三月十一日　雪　CI建設
全員でCIへ登る。峰高、中川、山本、小林（進）、三股、有賀CI入り。他はボッカ。雪はちらついていたがまずはボッカ日和

月日	天候	Camp	上市	伊折	馬場島 BH	赤谷尾根 C I 一五六三m	赤谷山 C II	猫又山	毛勝山	大窓 C III	剱岳本峰	備考
3.9	晴		⑮	→	→							全員B.H入
10	曇時々雪				⑬	②						ボッカと偵察
11	雪					⑥						C I 建設
						⑨						
12	雪					⑨	④					C I.II ラッセル
							②					
13	雪					⑨	⑥					停滞
14	雪					⑨	②	④				C I II ラッセル
15	晴					③	③					C II 建設
						⑤	③					
						①						
16	快晴					⑥	③	③				C II fix工作
							③					
17	雪						②	⑥				C II 停滞
							⑦					
18	快晴						⑦	④				C III 建設 C I 停滞
								④				
19	快晴						①	②		②		Attack 剱岳本峰毛勝山 猫又山登頂
							⑥	②		②		
20	吹雪						④					C I 猫又山登頂 C III 撤收
							②	⑤				
											④	
21	晴					⑨						撤収
						⑥						
22	曇時々雨				⑫							下山
					③							

剱岳西面概念図



B.H	馬場島荘	3月9日 入
CI	赤谷尾根1600m	3月11日建設
CII	赤谷山頂	3月15日 〃
CIII	大　窓	3月18日 〃
	剱岳本峰毛勝山	3月19日

である。

三月十二日　雪

B・H、CIともに停滞。雪が小降りになつンプともラッセルに出たがすぐ引き返す。

三月十三日　雪

B・H、CIともに停滞。一日中B・Hでは歌を歌う。では時計を読み違えて二時半に起床したが降ーメンを食べて寝た。

三月十四日　雪時々薄陽がもれる。

午後から薄陽がさす様になつたので、B・Hからはラッセルをしながら荷物をデポに出かける。取付の下の河原でCIから山本、小林がラッセルにおりて来たのに出合うほど登つたところにデポ。

CIからも前記二名を除く全員がラッセルに出る。四時間近く膝から足首辺まであるラッセルをしたが降雪がひどくなつたので引返す。帰りは三十五分で来てしまい、る。

三月十五日　晴

B・Hでは四時起床。窓ごしに久しぶりに星を見る。CIへB・Hから中島、小林（正）、倉知が入る。他は全員ボツカ。

永井は体調悪く停滞。

CI隊は赤谷山頂上へCIIを建設。峰高、中川、三股がCII入り。他はボツカ。赤谷山直下の急登は緊張させられた。既に明大がラッセルしていたが、バケツが崩れるので難渋。CIのテントのすぐそばに雪洞を堀つて中島、倉知が寝ることになつた渡辺、石は今にもぬけそうな雪洞の天井を気にしながら、ボソボソと語る。

三月十六日　快晴

B・Hの六人全員CI入り。テントからはみ出して雪洞に寝ることにCIからCIIへ中島、倉知、小林（進）が入る。

CIIから三人フイクス工作に出かける。赤兀のコルから赤兀の登りに四十米二本、大窓の下りに四十米三本のフイクスザイルをつける。フイクス工作経験皆無のこととて大いに苦労し、明大山岳部のフイクスが大いに参考になり、他の場所にフイクスしようがないので、ほとんどそれと並行してフイクスをつけた。

三月十七日　雪

CIからCIIへ全員出かける。山本、大、CII入り。CIIは停滞。CII横の雪洞に倉知、大が寝る。CIからCII建設とCIIからの毛勝アタツクを待つばかりとなる。

三月十八日　快晴

CIIでは、昨夜雪洞に寝た倉知と大の「晴れていますよ」という声に眼を覚まされ、四時に起床。七時半に出発して、大窓に待望のCIIIを建設、十二時半。これで明日晴れれば、アタツクを行える。ボツカ隊に成功を祈られ、また明日の彼らの毛勝登頂を期待するといつて別れた。とうとう四人だけになつた。やらずにおくもんかアタツクパーテイは、峰高と中川、サポートは小林(進)と倉知がやつてくれる。十五時から明日の準備にかかる。MとNは荷物の分担、ルート図の再検討、時間の予定を組むなどして明日を期した。往復十二時間の予定。そばでは、KとCが栄養たつぷりの飯を食わせてくれるそうで、ラジウスを勢よく燃している。

（渡辺記）

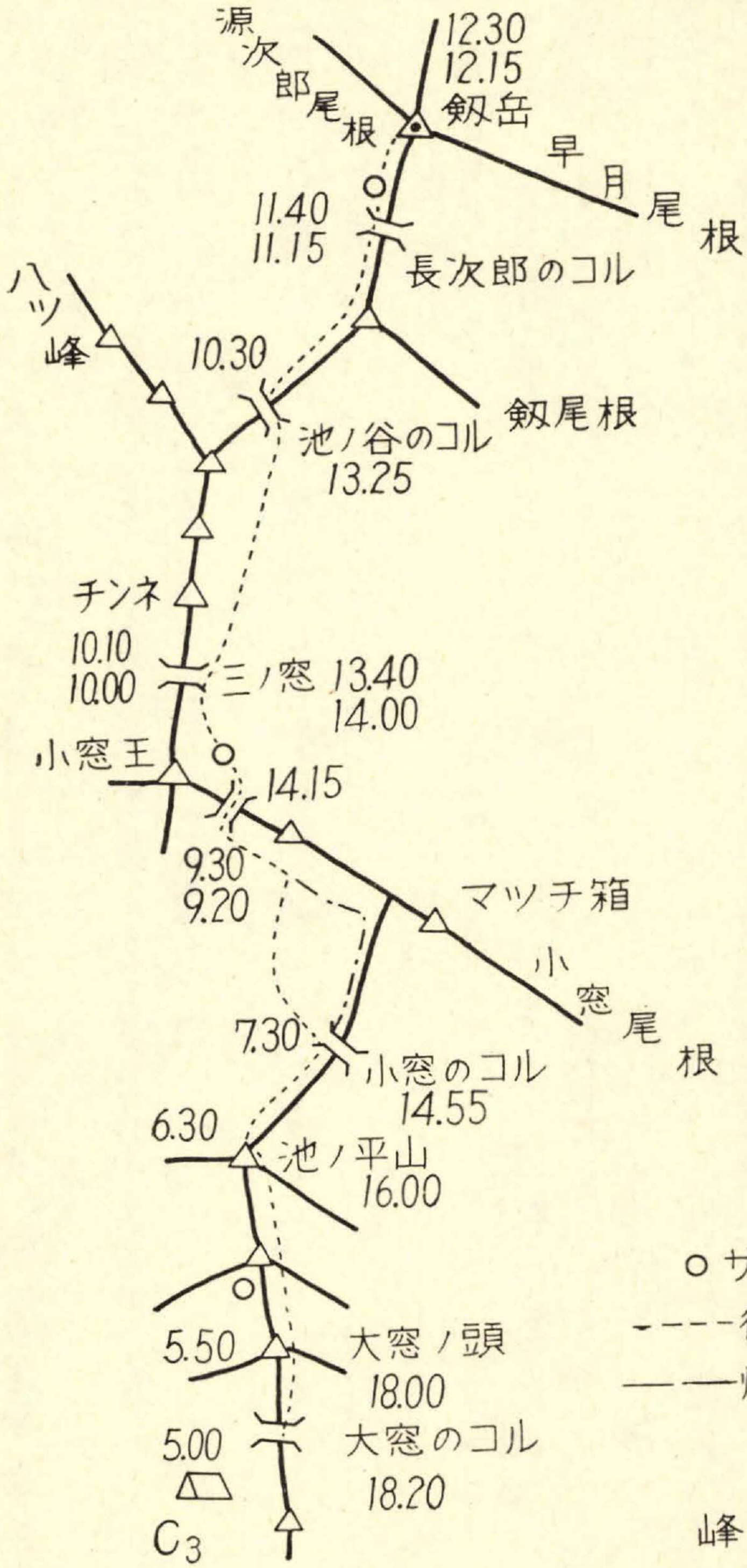
シーワン建設運輸株式会社と名づけられたCI隊はCIIまでボツカ。眼を閉じたままボツカできるんだそうな。

三月十九日　快晴後曇　　峰高、中川

△剣岳本峰アタック▽

Nが二十三時十五分に三時とまちがえてMに呼びかけみんなを起してしまつた。ぶつぶついいながら寝て四時に起床。風はきついけれど、星が空一杯に輝き、下界の町の電灯の光がピチピチ波打つている。キナコ餅、シルコを食べて、懐電を頼りにアタックパーティのみ五時に出発。懐電がよく消える。どうしてこうも役に立たない懐電が次々に売り出されるんだろう。大窓の頭にくるともう懐電はいらない。池の平山までの岩峰には、明大のフイクスがしてあり、気がひけたけれど借用して登る。池の平山に立つと、朝日が後立山のまさしくキレツトのあのさけめからカツと姿を現わした。剣の岩峰。思わず息をのむような景観だ。それでも、時間をかせぐことで頭が一杯で、カメラを持ち出す気も起らない。ぼくたちのルートは、すでに明大のシユプールや、標識があり気分的に楽な筈だが、剣に圧倒されたというか二人共無言で緊張している。小窓のコルの下りは、かなり長くてきつく、明大のフイクスがずつと下まで張つてあり、ラツセルが階段状になつている。自分たちの実力と判断というものの発揮と評価が得られないので残念である。彼らは、ぼくたちより経験もあるだろうから、フイクスや、ルートの選び方が幾分参考になるだろうと自分を慰めた。フイクスを横目でにらみながら、灌木の枝を時々つかみながら下つた。アイゼンが効くという程でもない。コルは、ばつさりと切りこまれ長いので帰りのアルバイトが思いやられる。行く手には、小窓王、チンネ、池の谷の雪渓、長次郎のコル、そして頂上ががつちりと見える。小窓尾根には、マツチ箱からでている尾根の左隣りの尾根から取付くことにしたのだが、登るにつれて壁みたいになり、傾斜約五十度のパリパリに氷化した壁の登攀を余儀なくされてしまい、アイゼンとピツケルに頼つて強引に登つた。このルート判断を誤つたことで時間を余計に費し体力を消耗した。小窓王の三の窓下り口に着いたのが九時二十分。予定より一時間遅れた。小憩後、ザイルを使つて下りにかかる。ここにも、既に明大のしつかりしたフイクスがしてあつた。三ピツチで三の窓に着き、池の谷のコルをめがけて、氷化したところと、その上に粉雪の積つた不安定なところが交互にある雪渓を一気にあがる。途中、明大のアタック

アタック行動時間表　　1959.3.19



○ザイル使用

----往き

——帰り

峰高作図

パーテイに会い、雪の状態を聞く。雪は不安定らしい。彼らは余裕しやくしやく、三の窓のA・Cからお出かけだ。長次郎のコルまでくると、さすがに疲労を感じた。食事をとつてアンザイレン。池の谷のコルからずつと稜線の下は今にも落ちそうな雪の状態である。長次郎のコルの登りはパリパリに氷化、カツテングしながら二ピツチで登る。ツアツケの跡がきれいな模様をつくりあげている。頂上手前で、それまで先を歩いていたNが、上級生であるMに、「どうぞ。」といつて先頭をゆづつた。

十二時十五分、皆んなの期待に添うことができた。あとは、無事に帰つて、ボクたちの元気な姿を、笑顔を見せてやればよい。

十二時三十分に頂上を辞す。頂上附近では約十人の登山者に会い。早月尾根も賑からしい。

人に全然会わなかつたなら少しは感激しただろう。池の平山にサポートの二人が紅茶をもつて出迎えてくれた。十六時。紅茶を飲んで始めて登攀の喜びを感じたようだ。十八時二十分、CⅢ着。やれやれ。直ちに懐電でCⅠに登攀成功のサインを送り応答があつた。CⅡには大窓の頭から帰る途中、十八時にサインしたが応答はなかつた。

△毛勝山往復▽

中島、三股

（峰高記）

テントを揺がす風に胸おどらせて外を見ると満天の星。三時半第二アタツクの三股・中島はテントを飛び出した。しかし、降り口をよく調べずに、まず斜面を右へ下つて行けばよいのだろうと単純に考えていたのが失敗だつた。残つているラツセルはしばらく行くと混乱し、途中で消えている。しかも、そのあたりから左へまわりこんで降りることはとても出来そうにない。しばらく地図とにらめつこをした末、やむをえず一度テントに戻つて出直すことにする。はじめてのアタツクに気負いこんでいたわれわれにとつて、これはショツクだつた。が、先は長いのだ。自業自得と観念して四時半出発。今度は、尾根に沿つて斜面をまつすぐブナクラ乗越めざしてかけ降りる。アイゼンのツアツケが快適に効き、再び平常の気持をとり戻すことができた。

星空とはいえ、月の消えた空は意外に暗い。周囲の山の輪郭さえつかぬ中で、左に広がる富山平野の灯の海と、右にポツンと見える黒部の夜間照明の灯火（と思われる）が指導標として大きな役目を果してくれた。

ブナクラ乗越につく頃、やつと明るくなり、心配していた猫又の登りにかかる最初の三本ルンゼも、向つて一番左のルンゼがも

もとも容易であることがすぐわかつた。しかし、これもルンゼとは云え、半分以上は木登りなので、急傾斜はほとんど気にならない。従つて、よほどの悪条件でない限り、雪崩の危険はまずないと思えた。このルンゼを抜けて稜線上に出ると、身体一杯に陽の光を浴びた。すばらしいモルゲンロート。鹿島槍の上に太陽が顔を出したところだつた。

ここから本格的な猫又への登りが始まる。何とまあ長々と続いているのだろう。おまけに、最初の樹林に沿つた登路から緩やかな広い斜面に出ると、とたんに、一歩踏み出すたびウインドクラストした雪の表面がぬけてしまう。ボソツボソツと誠に気分が悪い。途中に一個所、傾斜七〇度位の雪壁が十米程あつて、ステップをきつて登らねばならなかつたが、あとはただ、半分クラストした雪面をぶち抜いての、あまりありがたくないラッセルが長く続くのみだつた。

赤谷—毛勝の雪稜は技術的に難かしいところはまつたくないと云つてよいだろう。しかし、風が強く、稜線にまともにぶつかるからであろうか、雪面の変化が非常に顕著である。雪庇も非常に大きなものが黒部側に張り出している。

七時四〇分、猫又山の頂上に着く。ふりかえると、凄絶な池の谷の全貌が真正面からとびこんできて思わず歓声をあげる。今日は風もあまりない。天気も絶好である。食糧もウマイものばかりしこたまいただいてきた。ただ僕たちの前にあるのは、長々と続く雪線だけである。ジツクリと落着いて行こうと覚悟を決める。

猫又を過ぎる頃から、雪が日に照らされてベタベタとしてくる。アイゼンにくつついてダンゴになるので消耗した。ことともない大きな雪庇が黒部側に出ているが、尾根が広いので安心だ。今頃は本峰のアタツクもそろそろ小窓の頭あたりに出ているだろうか、と至極平和な剣北方のこのあたりのムードを満喫しつつ、一歩一歩毛勝に向う。九時四十五分、ドームのような毛勝山の頂上に着く。別に盛り上るような感激もない。ただ、すぐ目の前に迫つていた剣が、はるか遠くに城のようにそびえる姿に、大きな距離を感じつつ、今さらながら偉圧的なその素晴らしさに魅せられたのだつた。

帰路は、往路のラッセルがあるので助かつた。それでも、高度の差がほとんどない稜線のことではあるし、一ダンゴを払わなければならない湿雪である。あまりにも担々と目的地に達した安堵もあつて、われわれの行動もこれまた担々としてなかなか渉らなかつた。釜谷山に着くと、猫又の頂上にサポート（山本、大）の連中がいるのがわかつた。急に元気が出て、ピ

ツチを上げる。猫又からは尻セードでとばして、ブナクラ乗越で合流した。四時三十分、足をひきずるようにしてトに帰着した。「花よりダンゴ」というが、食えないダンゴはいただけない、と皆で大笑いした。

ＣＩ隊はＣⅡまで連絡に上る。

（中島記）

三月二十日、吹雪

ＣⅢは、昨日の疲れもあり、ちよつとした吹雪だつたので停滞することにしていたが、ＣⅡ隊がやつてきて、天候が悪化するから撤収しろという。ラジオがないからわからない。せきたてられて十三時に撤収。その頃から猛吹雪になり、フイクスの取外し、白元でのキスリング降しは困難であつたが、みんなテキパキとやつてくれた。十六時五分、ＣⅡに着き吹雪の中でテントを張つた。夜。日暮とともに風は収まり、月光の中に青白く、静かに剣はどつかりと寝つている。

（峰高記）

ＣＩより渡辺、石、小林（正）、三井の四名が猫又岳アタック。四時テントを出る。赤谷山直下の急斜面でようやく明るくなつて、ヘツドライトを消す。振り返ると富山の灯が異常にはつきりと見える。眼つているＣⅡに声をかけ先を急ぐ。ブナクラ乗越あたりから雪が降り始め、猫又の頂上では全くの吹雪となつてしまつた。帰りのブナクラから赤谷山への登りは雪煙のため沈痛な思いをする。十二時にはＣＩに帰つた。あついラーメンに舌づつみを打つ。

三月二十一日　晴

ＣⅡからＣＩへ撤収してくる。十四時頃からＣＩも撤収を始める。ＣⅡからの連中は十四時半、Ｂ・Ｈへ向う。ＣＩは十五時に出発。雪がくさつていて消耗する。自萩川の河原に降りた頃は薄暗くなり、月が光つていた。月明りに剣西面が浮んでいた。

三月二十二日　曇時々雨

時々雨を降らせて風が相当に強い。早月尾根を登る峰高、倉知、大を残して全員伊折へ、伊折からトラックで上市へ。上市で久しぶりに風呂に入り、夕食前の一本に成功と無事を喜んだ。翌日各自それぞれ帰京した。

（渡辺嘉佑）

(一)準備食糧一覧表

	品名	数量(単位)	備考
主食	米	50升	
	餅	51升	
	乾パン	238食	
	クラツカー	85〃	
	ラーメン	98〃	
副食	豚肉	15kg	
	バタリーン	12ポンド	
	マーガリンジ	2ポンド	
	ソーセージ	15本	
	シヤケ缶	15缶	
	佃煮	2kg	
	焼フ	3袋	
	ワカメ	8束	
	小麦粉	800g	
	ホーレン草	20束	
	ミカン	300箇	
	キヤベツ	8〃	中型
	玉ネギ	12kg	
	ジヤガイモ	8〃	
	ニンジン	12本	
調味料	醤油	7升	
	味噌	2.5kg	
	砂糖	22.5kg	1人1.5kg
	カレーの素	15箇	
	チヤーハンの素	50人分	
	ソース	1升	
	故椒	3瓶	小瓶
	塩	600g	
	固形スープ	60箇	キヤラメル大
	煮干	600g	
その他	紅茶	5袋	中型紙パック
	緑茶	3本	
	スキムミルク	8袋	中型
	レーズン	3升	
	ピーナツツ	3〃	
	アメ	700箇位	ドロツプ等
	きな粉	3袋	

(二)献立計画表

	品目	材料（5人を1単位とする）
朝食	雑煮（行動日） 餅	肉 100g ホーレン草1/3束
	ラーメン（停滞日） ラーメン	醤油 1合
昼食	乾パン1人1食。バター，レイズン，ピーナツツ，ミカン1箇をパツクしたもの1人1袋。	
晩食	(a)カレーライスにコンソメスープ	カレー：肉 200g、ジヤガイモ1～2個，カレーの素1箇，玉ネギ2～2.5箇，マーガリン 1/8ポンド コンソメスープ：コンソメスープの素2ケ，ソーセージ 1/2本
	(b)シヤケ飯に味噌汁	シヤケ缶1缶，シヨウ油0.5合，シイタケ若干、味噌140g、ワカメ1/2袋，他佃煮
	(c)チヤーハンに野菜イタメとコンソメスープ	チヤーハンの素1人1袋 野菜イタメ：肉200g，玉ネギ3箇，マーガリン1/8ポンド，ソース，ヤキベツ1/4箇 コンソメスープは(a)と同じ
	(d)シチユーと佃煮	肉200g，小麦粉150g，ジヤガイモ2箇 玉ネギ2～2.5箇，ニンジン1/2本，キヤベツ1/4箇，佃煮
備考	(1) 晩食の米は1人1.5合を原則とした。 (2) 餅はハガキ半分弱のものを1人7枚を1食とした。 (3) 3～4人又は6人以上の場合は上の単位材料を適宜に按分比例した。	

(三)梱包計画表

予定行動延人数	72人	56人	30人	12人	計 170人	
予定停滞延人数	30人	30人	40人	20人	120人	
場所 ＼ 品目	B・H	C1	C2	C3	計	備考
豚肉	5kg	4kg	3kg	2kg	14kg	
カレーの素	5	4	4	2	15	単位個数
マーガリン	4	3	2	1	10	〃
シヤケ缶	5	4	4	2	15	〃
小麦粉	5/13	4/13	3/13	1/13	1	総量200匁
チヤーハンの素	5	4	4	2	15	単位箇数
ソーセージ	5	4	4	2	15	〃
コンソメの素	20	17	15	8	60	〃
キナコ	2	1	1	1	5	〃
ワカメ	3	2	2	1	8	〃
つくだに	3	3	2	2	10	総量2kg
スキムミルク	3	2	2	1	8	箇数
しよう油	2	2	2	1	7	単位升
ソース	2	1	1	1	5	〃 本
塩	1/2	1	1	1/2	3	総量600g
コショウ	1	1	1	1	4	単位ビン
味噌	3	2	2	1	8	総量2.5kg
ダシ	1	1	1	1	4	
紅茶	2	1	1	1	5	袋数
緑茶	1	1	1	1	4	〃

(注) 主食(米，餅，乾パン)は各キヤンプごとに配分せず，いわゆる雑物だけを上記の量にしたがつてパツキングした。

△反　省▽

十五人分二十日間の食糧計画であつたが、合宿が予想外に早く終つたので、量的に足りないものがなかつたのは幸いだつた。朝食の餅は従来通りであるが、停滞日をラーメンにした所、好評であつた。

献立は晩食に重点を置き、身体の暖たまる、栄養価の高い物を摂る必要から、肉類を多用し合せて野菜類の摂取に注意を払つた。以上食糧の量、種類、献立については問題なく、極めてスムーズに行われたと思う。

次に梱包のことであるが、各キャンプ毎の延人員の滞在日数がどの位になるか、予想が立て難く、従つてそのパツキングの量の配分には最も苦心した所であつた。結果としていえることは、高所キャンプに比べ低所キャンプの消耗が激しかつたことから、低所キャンプの食糧は十二分に考慮する必要があるが、そこに融通性を持たせる事が重要である。又、梱包であるが、今回は合宿日数が短かつたので、ダンボールの箱で保存出来たが、合宿が長期に及んだ際、その保存方法には研究する必要がある。

（中川滋夫）

五、器具報告

△反　省▽

一、ナイロン天の張り綱がみあたらず、麻の細引（3㎜）4本でしたが、不安だつた。

二、マンダリンは各ストーブに2ケずつ付けたが、管理悪るく、紛失したものが多かつた。この点特に今後の注意を要す。

三、タワシは各テント一ケずつだつたが、各テント3ケずつは欲しい。

四、その他はだいたい良好だつたが、予算の関係で、雪洞入口用の吹流しが作れなかつたのは残念だつた。これはツエルトで代用した。

（山本尚禎）

使用器具一覧表

	品名	数量	備考
設営用具	テント	3	カマボコ天（CI使用）ビニロン天（CII使用）ナイロン天(CIII使用)
	ペグ	50本	竹製
	シャベル	3	
	ツエルト	2	
	雪洞用ベニヤ・マット	2	
	タワシ	3	各テント各1個
	最高最低寒暖計	1	
	ローソク	60本	
	針金	適量	
	カポック	12	各人1枚
登攀用具	ザイル		
	main rope	5本	マニラ麻12mm, 40mm
	Fix用rope	4本	マニラ麻8mm, 40mm
		1本	〃 12mm, 25m
		1本	〃 12mm, 12mm
	三ツ道具		
	カラビナ	10ケ	O型及び変型D型
	ハーケン	32	タテヨコ各16
	ハンマー	2	
	アイスハーケン	3	
	シイ竹	若干	
	標識用赤布	40cm×100cm	
炊事用具	メタ	30	
	ポリエチレン・タンク	5	2 *l* 入
	鍋	6	大（ベース用）1中1小4
	ストーブ	5	ラジウス2プリムス1スベア1ホエブス1
	テルモス	6	
	包丁	3	
	茶コシ	3	
	おタマジャクシ	3	
	シャモジ	3	
	ナタ	2	
その他	ワセリン	1カン	
	細引	若干	

燕岳から蝶ケ岳への縦走と大天井岳からの槍ケ岳登頂

――昭和三十四年十二月――

一、まえがき

昨年の冬山合宿から冬山は縦走の形態をとり、全員が同じコースを動いて機動力を養うと云う方向にむいて来た。昨年はその端緒として南アルプスに入つた。今年はさらに進んで風に対する経験を積み重ねようと北アルプスの稜線を選んでみた。夏合宿の延長として三人が、十月には荷上げをかねて十数人が一応ここを歩いておくつもりだつたが、中房温泉までとして燕山荘へは荷上げをしなかつた。

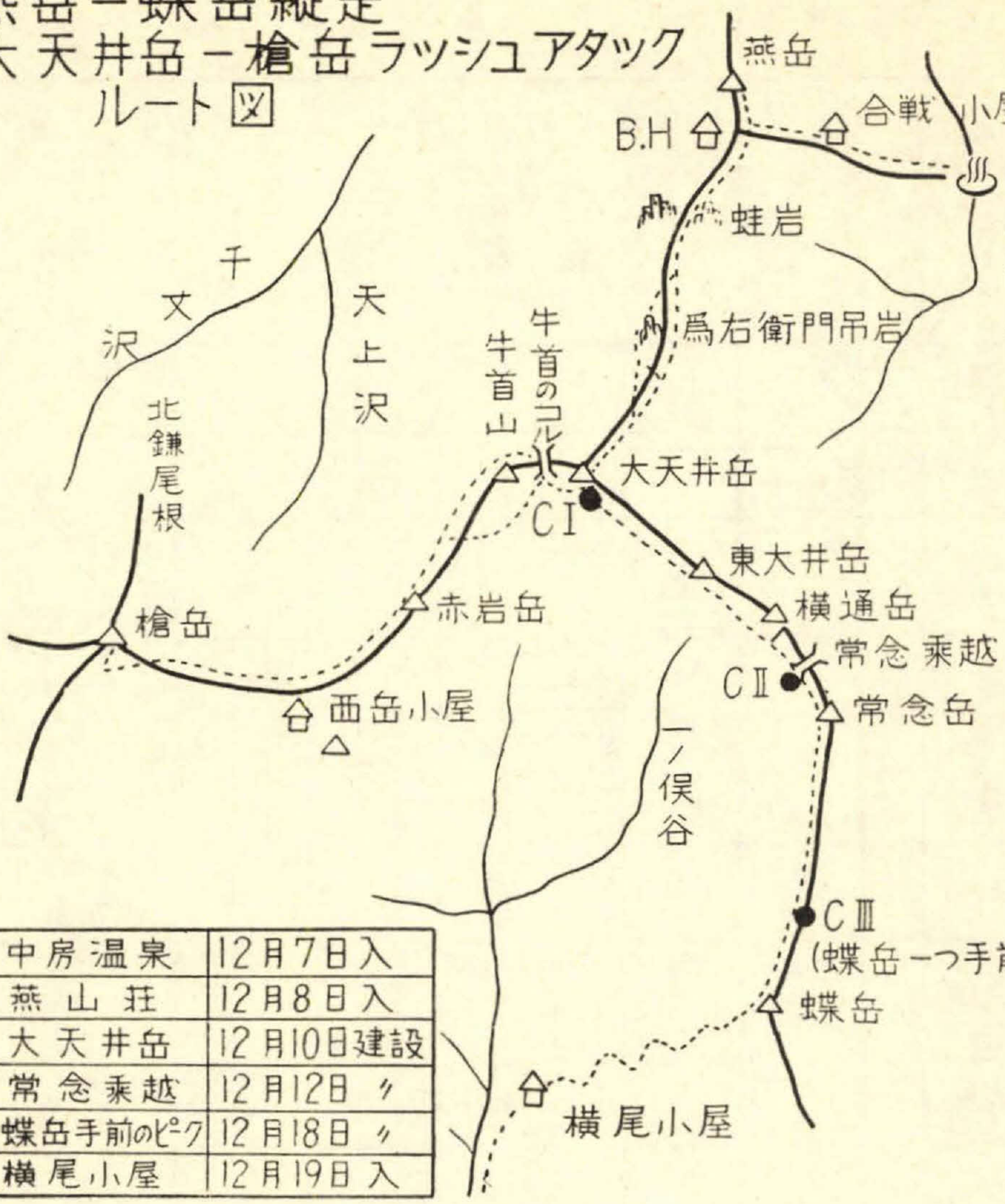
結果は、前半の好天、後半の部員のがんばりで、CIIの大天井岳から槍のアタックに二人出て成功と云うおまけがついて予定より三日程早く下山することが出来た。風は予想通り強く、常念岳の登りで数名が耳、顔面に凍傷を起してしまつたが、風に対する経験の少なさのための事故だつたと云える。しかし幸いに軽度なものであつたと云うことと、合宿の終りであつたと云うことと、全般的に云つてうまく行つた合宿であつたと思う。

二、参加者

チーフ・リーダー	渡辺嘉佑	峰高教通	
食糧係	山本尚禎	中川滋夫	
医療係	石弘光	小林進二	
		小峰隆	
		中島寛	
		大賀二郎	

（渡辺嘉佑）

燕岳ー蝶岳縦走
大天井岳ー槍岳ラッシュアタック
ルート図



	中房温泉	12月7日入
B.H	燕山荘	12月8日入
C·I	大天井岳	12月10日建設
C Ⅱ	常念乗越	12月12日 〃
C Ⅲ	蝶岳手前のピーク	12月18日 〃
	横尾小屋	12月19日入

器具係　三股宏　小林正直
有賀盈　倉知敬

三、行動記録

十二月六日　「アルプス」で十三名全員新宿を出発

十二月七日　雪　松本――中房温泉（七・四〇）

全員で合戦小屋までの荷上げを行う。折からの雪であつたが、ラッセルは合戦小屋附近でヒザまでであつた。

十二月八日　晴

中川、中島、小林（正）有賀　倉知の五人が燕山荘へ上る。他は合戦小屋まで荷上げ。合戦から稜線まではかなりのラッセルで悩まされた。

十二月九日　晴

中川、倉知の二人はB・HからCI予定地大天井岳まで偵察を行う。

中島、有賀、小林（正）は合戦小屋まで逆ボツカ。他全員でB・H入り、さらに合戦小

月日	天候	中房温泉	合戦小屋	燕山荘 B.H	大天井岳 CI	常念乗越 CII	常念岳 CIII	蝶岳	坂上高地 横尾山荘	備考
12/7	雪	⑬								全員入山直ちに荷上
8	晴	⑤ ⑧								ボッカ
9	晴	⑧		② ③						B.Hまでボッカ B.Hから偵察 B.Hに集結
10	晴				⑤ ⑧					CI建設
11	曇			燕岳 ③ ③ ⑤ ③	②					CIボッカ CIから偵察 燕登頂
12	曇				⑤ ③ ⑤					CII建設 槍方面偵察
13	快晴				④ ③ ② ④槍					槍ケ岳アタック CIIから偵察
14	風雪				⑥ ⑦					停滞
15	風雪				⑥ ⑦					停滞
16	晴風強し				⑥ ⑤ ②					CIは停滞
17	晴風強し				⑥ ⑦					CIIに集結 CIIは停滞
18	晴風強し					⑬				CIII建設 全員入る
19	曇後雪						⑬			全員横尾に下る
20	雪							② ③ ⑧		
21	晴								⑧	下山

屋までの逆ボッカを行い、全物資をBHに集結させてしまう。天気はまだ大丈夫である。

十二月十日　晴　B・H（八・一〇）――大天井岳頂上CI（一二・四五）――BH（一六・〇五）

大天井岳にCIを建設。中川、中島、石、三股、有賀CIに入る。他は全員ボッカ。ほとんど夏道通りに歩いたが、衛門吊岩のあたり不安定な雪で苦労したほかは、問題はなかつた。

十二月十一日　高曇り

CIから中島、石、常念までの偵察を行う。渡辺、小林（進）、大賀三人CI入り。中川、三股、有賀はBHへ逆ボッカ。曇つてはいたが風が弱く暖かい。B・H隊は七時半に出て、十時半にはCIに着いてしまつた。峰高、山本、倉知はBHへ帰つてから燕岳へ登る。

十二月十二日　高曇り　CII建設。CI（八・三〇）――常念乗越CII（一〇・三〇）同上発一一・五〇――CI（一四・〇〇）

小林（進）、石、大賀CIへ入る。残りはCII建設サポート。B・Hの五人CIへ。さらに、喜作新道をつたつて稜線に出るところまで偵察、槍へのアタックを可能と考え、パーテイを出すことに決定。もし明日アタックが出来なければ、槍への計画はとりやめにすることにして寝につく。

十二月十三日　快晴

CIから予定通り槍アタックに中川、中島が小峰、山本にサポートされて出発。CIIの三人は蝶まで偵察。

蝶の一つ手前のピークをテント地とすることにする。

CIから渡辺、小林（正）、有賀、三股がCIIに入り、峰高、倉知はCIIまでボッカ、帰幕後少憩してアタックパーテイを迎えに出かけること二回。

一日中快晴、夜は素晴しい月夜となつた。

△槍ケ岳往復▽　中島、中川

CI（六・〇五）——大天ヒユッテ（六・二〇）——稜線（七・〇〇）——西岳（九・〇〇〜九・二〇）——最低コル（一〇・〇五）——槍の肩（一三・五〇〜一四・〇〇）——頂上（一四・三〇）——最低コル（一六・〇〇〜一六・二〇）——西岳サポート隊と出合う小屋（一七・二五〜一七・四〇）——稜線（一八・五〇〜一九・三〇）——稜線（二〇・〇〇）——CI（二〇・五〇）——CI（二一・三〇）

「おい、晴れてるぞ！」隣りのテントにアタツク中止を伝えるべく顔を出した中川が歓声をあげる。前日の予報でも天候悪化の兆しがはつきりしていたので、三時に起きて猛烈な風とどんよりたれこめた雲を見た時、われわれはアタツクを断念したのだつた。しかし、山ではどんな偶然がわれわれの運命を左右するかわからない。もしそのまま、シユラフにもぐりこんでしまつたら、われわれはこの千載一遇のチヤンスをとらえることはできなかつたろう。いささか出鼻をくじかれたわれわれは、腹立ちまぎれに紅茶をわかして溜飲を下していたのである。いわば怪我の功名といつたところ。合宿の進行状況から見ても今日が与えられる最後の機会である。ともあれ出発を決定して、全員すばやく準備にとりかかつた（四・三〇）。

六時五分、アタツク二名、サポート二名は強い風の中を完全武装でテントからとび出した。次第に青空の部分が多くなり、どうやら今日一日はもつだろうと考えた。日本海に低気圧が発生したために起つた異常現象であろうと判断したからである。夏道を通つて稜線までサポート隊がラツセルしてくれた。前日の偵察で雪崩は当面心配ないとわかつていたが、一晩でラツセルは跡方もなく消えてしまつており、腰までもぐるラツセルを交替でひきうけてくれた。稜線に出る頃、東の空はバラ色に輝やき、上空は一点の雲もないすばらしい天気になつた。季節風の吹き出しも次第に弱まつてきた。われわれは、稜線に出たところでサポート隊と別れ、前へ出た。東鎌の鋭い稜線が偉圧するように槍までせり上つている。われわれも予想はしていたが、西岳手前の三角点に至る三つのピークを結ぶ雪稜は悪かつた。夏道は左側の雪の斜面をトラヴアースしているが、雪が軟弱なために、雪崩の危険が甚だしい。そうかと云つて、右側がえぐられたような断崖になつているので、やせた浮石だらけのリツジをたどることはできない。われわれは、なるべくリツジ沿いに雪面の最上部を強引にラツセルして通つ

たが、最後のところで小さな表層雪崩が起きて、肝を冷やされた。帰りは往きよりも余計な時間がかかることを計算に入れての行動なのだが、最初からラッセルともろい岩の連続で激しいアルバイトを強制され、一向にピッチが上らない。西岳に着くまで三時間かかつてしまつた。下りは元気なうちになるべくかせいでおこうと、小屋へは降りずにまつすぐ下のコルまでかけ降りた。岳樺につかまりながら猿さながらの下降であつたが、帰りを考えると心中は複雑な気持だつた。しかし、瞬間の最善の努力が蓄積されて一つの結果となる。そう考えるのが山での行動の鉄則である。女々しい先まわりの思考は排除して、いよいよ東鎌の登りにかかる。が、予想に反して雪はグズグズですぐダンゴになつてしまう。雪と岩のミックスした快適なアイゼン登攀を期待してきたわれわれに待つていたのは、ここでもまたラッセルであつた。ほとんどは忠実にリッジをたどるが、天丈沢をまく部分は膝のあたりまでもぐつてしまう。ダンゴをピッケルで払い落しては交替でラッセルを続ける。中川のスーパーシモンのアイゼンも、もはや雪ダンゴ以外の何ものでもない。

風のほとんど吹かない青空を見上げては無気味に思いながらも、身体は快調、どんなに遅くなつても今日中にテントに帰ろうと、暗黙のうちにビバークの意志はまつたく捨ててしまつた。まだ冬山の序曲というべきかもしれないが、それならそれで、楽しきプロムナードの醍醐味を満喫してやろうと傲慢に腹をすえた。チーズ、バター、チヨコレート、コンビーフ、落花生と食べられるうちに何でも腹に入れておこうと休みの度にカロリーを補給した。

稜線からのトラヴァースを終えて肩についたのが一三時五〇分、一面の雪原である。この広い空間にわれわれだけが息をはずませているのだと考えるとけだるい倦怠の中から新鮮な感動がよみがえつてくる。槍の頂上から見た大天井ははるかに遠く、テントと居すわつていた。それは帰るべき憩いの場というよりは、これからでかける登攀の目標といつた感じだつた。二人で思い出したように煙草を喫うと早々に頂上を降りる。

さあ急がなければならない。やはり疲労はかくせない。アイゼンに団子となる湿雪に時々足がもつれるが、それでもかけ足で往路のラッセルをたどつた。最低コルまで一時間半で行けたので、やつと目安が立つた。問題の西岳小屋までの登りは見上げるよう

な急傾斜のルンゼである。もう上も下も見ないことにする。ただ目の前の雪だけを見つめて雪をこいだ。狭い急なルンゼなので雪崩がもつとも恐かつたが、ちようど日没になつて雪がしまつてきたのを幸、強引につつきつた。登りきつて小屋の前へ出ると、美しい満月がまさに常念の上に現われたところだつた。われわれは、出発以来はじめてホツと胸をなでおろし、月の光を浴びてしばしボウ然とした。

お月見も乙なものだなどと強がりを云い合つて出発したが、やはりそれ程軽いものではない。雪もしまつてきたので時間をかせごうと夏道のトラヴアース・ルートをとつたが、フイルムクラストの雪面でかえつて始末が悪い、しかも風のウラ側に当る雪面でつてきてくれた紅茶をテルモスごとがぶ飲みした時、長い緊張から解放されたわれわれは喜こびが五体のすみずみまでしみ通つていくのを感じた。テントに着く頃、それを待つていたかのようにわれわれはうすれゆく槍をふり返つた。

十二月十四日　風雪　各テント共に停滞

十二月十五日　風雪　各テント共に停滞

十二月十六日　晴風強し

晴れてはいたが痛烈な風。CⅡから常念、CⅠへとそれぞれラツセルに出たが、一時間も歩かないうちに、風と雪煙に閉口して引返す。風のあたらないところは天国だが、雪煙の中に入つたらどうしようもない。

CⅠでは停滞

十二月十七日　雪風強し

CⅡでは停滞、CⅠから六人強風の中をCⅡ入り。全員CⅡに集る。食糧も少なくなつて来たので全員で進むことにする。

十二月十八日　晴地吹雪　CⅡ（八・四五）――常念（一〇・四五）――CⅢ（一三・四五）

（中島記）

常念への登りは二時間たつぷりとかかつた。風が強く数人が耳、頬などに凍傷をおう。常念からの下りは風も弱まつていくらか楽になつた。CⅢ地点は三六〇度眺めがいい。穂高連峰は圧巻である。夜は松本の灯がまたたいてきれいだ。

十二月十九日　高曇り後雪　CⅢ（九・二〇）――蝶（一〇・四五）――横尾（一三・四五）

アイゼンはつけず、ワカンだけで出発。蝶まではやはり風が強かつたが、森林帯に入つてからは風があたらなくなつた。その頃から雪が降りだす。

十二月二十日　雪　横尾（九・〇〇）――ホテル（一三・〇〇）――坂巻（一五・四五）

石、山本二人は凍傷がひどいので手当てのため皆より二時間早く出発。小林（進）、大賀、倉知は西穂に登るため上高地へ残る。他は坂巻へとまり、合宿のアカを流す。

十二月二十一日　晴　坂巻（一〇・二〇）――沢渡（一一・四〇）

沢渡からバス、松本でぶらついて夜行で東京へ帰る。

四、食糧報告

〈反　省〉

十月十一日荷上げに出発のときは、十五人参加、十八日間、その中行動九日停滞九日、で計画を立てた。荷上げ量は、米四斗二升、乾パン百三十五食、クラツカー六十食、ラスク七十五食。醤油六升、石油三斗であつた。

食糧計画の焦点を、低費用と、献立のバラエテイーに置いた。餅代と、十一月下旬頃から急騰した豚肉の値段とは、大きなガンとなつた。餅に代るものとして、停滞用にラーメン、ウドンを採用し、豚肉に代るものとして、牛肉馬肉、ツナソーセージと牛肉を併用することにした。夜の副食には、同じ材料からハムが考えられたが、味と値段から、豚、ツナのミックスソーセージ、徳用できき、しかも質の異なるものを数多くして、単調さを破るようにした。昼食については、冬山の条件を考えて、おやつのように食べられて、しかもカロリーの高いものということで副食を選択した。しかし低費用の原則は、いかんともできず、別表のようなパ

（渡辺嘉佑）

ツクとなつた。カリン糖とチョコレートを採用したのはかなり好評であつた。ウドンは時間を要するのはいけないので、ソーメンをこれに代えるといいと思う。しかし、行動用食糧とソースを忘れたのは手落であつたが、献立はだいたい好評のようであつた。停滞用食糧とをはつきり区別してしまうのは、行動日に融通がきかなくなるので、停滞用食糧（例えばアベカワ）で行動用にも使用できるものを準備すべきであつたと思う。又食糧計画全体についても献立の使い方についても、全員に徹底的に理解させるような会合が必要だつた。

費用は三千円であつた（但し石油代土産代を含む）

（山本尚禎）

準備食料一覧表

	品目名	数量	備考
主食	米	4斗2升	1人1食1.5合予備69合
	餅	923枚	1枚は餅米5勺弱
	パン	135食	1食ミルクパン2度焼のもの8枚
	カーンクン	60食	
	ツカメ	75食	
	ラスド	52食	
	クー	20束	1人1食2/3束
副食	肉ジ素粉素素ンドソメニズ煮ラゴ缶	8kg	ツナとブタのミックス6cm(直径)×20cm
	ーのーロー佃	12本	
	セーナ	6コ	
	レフレーク	3缶	小缶
	ハンねベンキのイー	30人前	
	メソヤンセレシ神ガナ塩	26コ	
	ガーンーツヤヤヨ	84コ	
	ーキ	2ポンド	
	雨ぎツゴリ草ギヨ素漬モ粉	33袋	1袋100gr
	油ム茶茶ツーウトメン一糖	9袋	1袋100gr
	ーナ	9袋	
	タントー	3袋	
	リコレー	5本	
	ヨカヨ	15袋	1袋50gr
	シ	15袋	1袋50gr
	春玉キリパホネラハ福ジキシス緑紅ピバカチアミコ砂	12袋	1袋100gr
		9缶	
		1袋	
		1袋	
		162コ	
		14コ	
		9コ	
		9袋	ポリエチレン1袋10gr
		9束	
		1/2束	
		3袋	
		3コ	
		1缶	
		6コ	
		6袋	
		100gr	
		6升	
		3袋	(1袋120gr)
		200gr	
		2¼ポンド	
		4升5合	昼食用
		4ポンド	
		1缶	
		135コ	1斗缶 30×15×5mm
		450コ	
		162コ	
		3コ	
		10400gr	各人負担 1人800gr

献立計画

1単位4人又は5人、それ以下のときは人数に比例する，以下数字にことわりのない限り1単位の量を表わす。

〔朝食〕

☆行動日（9日分）

雑煮
- 餅1人　7枚
- ショー油1合
- 肉　100gr
- ホーレン草1/3束

☆停滞日（9日分）

A（4日分）
- ラーメン1人1コ
- ラーメンの素1人1/2袋
- 玉ねぎ　1コ
- ソーセージ　1/5本

B（3日分）
- ウドン1人2/3束
- ショー油　1合
- 玉ねぎ　1コ
- ソーセージ1/5本

C（2日分）アベカワ
- 餅　1人1.4枚　砂糖適量
- キナ粉　1袋

〔昼食〕

☆行動日（9日分）
- カンパン1人1袋
- ※昼食パック1人1袋
- ミカン　1人1コ
- 紅　茶

☆停滞日（9日分）
- ラスク(5日分)は又クラッカー(4日分)1人1袋
- 野菜イタメ
- ソーセージ　1/5本
- 玉ねぎ　2コ
- キヤベツ　1/2コ
- ラード　1/3袋
- 紅　茶

※昼食パック
- ピーナツ　3.3勺
- チヨコレート1コ
- バター　1/20ポンド
- カリン糖　5又は6コ
- アメ　2又は3コ

〔夜食〕米は1人1.5合

S1カレーライス（2日分）
- カレーの素　1コ　肉　200gr
- 玉ねぎ　2コ　ラッキヨ　1/2袋
- ニンジン　1/2本

S2チヤーハン＋コンソメスープ（2日分）
- チヤーハンの素5皿分　コンソメの素4コ
- 玉ねぎ　2コ　ソーセージ　1/5本
- キヤベツ　1/4コ　アミの佃煮　1袋
- 肉　200gr
- マーガリン　1/4ポンド

S3野菜イタメ＋コンソメスープ（2日分）
- 玉ねぎ　3コ　コンソメの素　4コ
- キヤベツ　1/5コ　ソーセージ　1/5本
- 肉　200gr　ヒダラ　1袋
- ラード　1/3袋

S4マグロの炊きこみ＋ミソ汁（3日分）
- マグロ・フレーク　1缶
- シヨー油　適量
- ミソ汁
- ワカメ　1袋　ミソ　1袋

S5サラダ＋コンソメ・スープ（3日分）
- キヤベツ　1/4コ　コンソメの素　4コ
- リンゴ　1コ　玉ねぎ　4コ
- ソーセージ1/5本　ヒダラ　1袋
- パセリ　1袋
- マカロニ　2/3袋
- マヨネーズ1/2本

S6シチユー（2日分）
- 玉ねぎ　2コ　コーナゴ1袋
- ソーセージ1/5本
- 人参　1/2本
- キヤベツ　1/2コ
- スキムミルク適量
- マカロニ　3/2袋

S7早炊きカレー（2日分）

- 肉　200gr
- 玉ねぎ　1コ
- 人　参　1/2本
- カレー粉　大サジ3
- 塩　少々
- シヨー油　適量

コーナゴ　1袋

○中房にて，ハヤシ・ライス（全員そろつている時）

○横尾にて，スキ焼

五、器具報告

器具一覧表

	品名	数量	備考
露営用具類	天幕	3	ウインパー型　6人用2　5人用1
	ツエルトクプ	1	
	カポツク	13	
	スコツプ	2	大1，小1
	鉈	1	
	竹ペグ	80	
炊事用具類	ラジウス	5	
	鍋	6	
	飯盒	1	
	シヤモジ	6	
	茶コシ	3	
	杓子	6	
	包丁	3	
	テルモス	5	大3，小2
燃料及び附属品	石油	20升	
	メタ	20	他に個人で2個ずつ携帯
	石油用ポリエチ・タンク	4	
	石油ポンプ	2	
登攀用器類	ザイル	2	30m
	Fix細引	1	30m
	カラビナ	8	
	ハーケン	6	
	ハンマー	2	
その他の生活用具	寒暖計	1	最高，最低
	ラジオ	2	各テントに一つづつ
	針金		若干
	ワセリン	2缶	
	ブラツク・テープ	1	
	タワシ	4	
	ロープソク	30	一本20

△反　省▽

1　ラジウスは五台持つて行つたが、テントが三つに分れたため、一台しか使えない所が出来たが、やはり二台づつ欲しかつた。

2　鍋が小型であつたため、食事を何度にも分けて作らねばならなかつたのは不便であつた。もう少し、大型のを持つて行くべきであつたと思う。

3　テルモスの扱いが悪く、CIまでに三つも、損傷し、消耗した。テルモスのようなこわれ易いものは、各個人で持つて来た方が、いいのではないか。

4　登攀用具（フイクス用）は持つて行くことは、持つていつたが、縦走であつたため、ほとんど使用しなかつた。

5　標識用のしの竹を持つて行かなかつたため、木を切つて、しの竹代りに立てたが、あまりうまく行かなかつた。

（三　股　宏）

早月尾根より劔岳及び頂上周辺のバリエーション・ルート

――昭和三十五年三月――

一、まえがき

劍に於ける三年目の春を迎えた我々の当初の計画は、早月尾根と小窓尾根を前者はポーラーにより、後者はラツシユタクテイクにより各々並行して行い、一旦小窓尾根パーテイを早月尾根からの頂上テントに収容した後、八ツ峰、源治郎のアタツクを目指すというものであつた。このため三十三年の小窓尾根偵察に引続いて、三十四年五月、早月尾根を五名により八ツ峰（上半）及び主稜線の偵察、七月夏合宿に於ける頂上周辺の岩壁登攀、十一月五名によつて小窓尾根、早月尾根の偵察を各々行つた。

しかし、部の実力と機能を再検討した結果、パーテイを二分することによつて生じる安全性、確実性の低下が憂慮せられ、又有

力部員の不参加と相俟つて、全員早月尾根を極地法でという線が出て来たのであつた。

即ち期間は二十五日間とし早月尾根に途中二つのテントを設け、頂上にアタツクキャンプを出し、八ツ峰、源治郎等のアタツクを目指し下級部員は、高所テントに於ける生活を通じ、雪上技術の修得を目標としたのである。

此計画に於いては、本合宿は予期以上の成果を修めることが出来たと思う。一昨年、昨年と剣で春合宿を行つて来た結果、参加部員の大半が積雪期の剣に少くとも一度、二度なじんでいたことにより、行動に自信と余裕をもたらし、各キャンプの建設、工作等は、比較的好天に恵まれ、極めてスムーズに推し進めることが出来た。そして、一昨年来の目標であつた念願の八ツ峰を、入山12日目にアタツク。同日六峰Cフェース、翌日本峰南壁A_1、翌々日八ツ峰上半・源治郎の登攀に各々成功した。此等の登攀の完了により、合宿の目標は一応終了したのであるが、これを第一段階終了となし、ともすれば弛みがちな精神を引緊め、第二段階として、予ねてから頭に画いていたテンネ左稜線と、一、二年生の強化を狙いとした南壁A_2・別山尾根のアタツクを行い各々成功した。又此間、C_2（二六〇〇m）C_3（頂上）のメンバーチエンジを適宜行い、参加部員一人残らず最低二日は頂上C_3のアタツクキャンプに於いても、目に見えない成果であると云えよう。

積雪期の合宿に於いては、ややもすると一部部員のために他の部員は犠牲を強られがちになる（逆に云換えると一部部員に過重なアルバイトを強いる）ことは、止むを得ないことであるかも知れないが、この点に於いて、本合宿は各部員、各々の実力に応じて、その力を十分に伸すことが出来たと思う。

本合宿より、剣に於ける積雪期の合宿は一応完了した。これまでに行われた諸先輩の研究と努力に深く敬意を表すると共に、我々の合宿をより一層充実させるため、本合宿に於いて見られた二、三の欠陥を厳しく反省し、一歩一歩前進していかなければならない。

（中川滋夫）

二、参加者

チーフ・リーダー　中川滋夫　サブ・リーダー　中島寛　石弘光

小林進二　小林正直
記録係　有賀盈　三股宏
器具係　三井博　宮本英治
臼井弘　多田伸治

三、行動記録

三月六日
急行「北陸」にて、本隊十一名上野を発つ。

三月七日
予定していたトラックの手配が遅れたため、全員伊折に着いたのは十六時であつた。このため酒井氏宅に泊る。積雪は昨年よりは多いが、一昨年よりは少く、伊折で三〇糎程度か。スキーは置いていくことにする。

三月八日　晴
八時半に出発し、馬場島に十一時に着いたので、二名を残し伊折まで逆ボツカする。平均三五キロの荷着した時は、皆さすがにフラフラになり、食事もしばし喉に通らぬ程だつた。しかし今日の一往復半の荷場島に集結出来た。十一月の荷上げと合せ総重量約一千キロとなる。

三月九日　小雨後曇　CI建設。
音もなく降つていた雨も次第に止み、時々薄日がさす天気となる。予想された早月の急登のラッセルは全然なく、よく踏み固められたトレースをたどるのは、反つて拍手抜けして気味が悪い。CIは一昨年の場所（一七〇〇米）より一段上の台地に張り、小林（進）以下五名入る。二時間半を費し、二人用の雪洞を掘る。今日早月の登りで、石油の一斗缶がパンクし、相当量消耗したので、後発隊に石油を上げるよう連絡する。

三月十日　快晴

月日	天候	伊折	BH	CI	CII	CIII	アタック
3/7	◑	⑪					
8	◑	⑩ ⑨	②				
9	◎		⑥	⑤			
10	○		⑤	① ④			
11	●		②	③	3/反 CII		
12	○	①	②	④	② ③		
13	⊛		①	⑥	⑤		
14	○			⑩ ① ③	② ③ ②		フイクスエ作
15	◑			③ ②	⑧ ⑨		
16	⊛	②		②	⑥	④	
17	○		②	②	③ ②	① ④	アタック体制完了
18	○		②	② ① ②			1山峰下半 2山峰C左方
19	○			① ① ②	④ ①		南壁AI
20	◎			②	① ⑩ ①		1山峰 下半 源治郎尾根
21	⊛				④	⑩	
22	○				② ①	③	千冰左稜線 別山尾根
23	◑				②	① ②	南壁AII 別山尾根
24	⊛				④	⑩	
25	◑		⑩		④		
26	●		⑩		④		
27	⊛	⑦	③		④		
28	◑	⑦					

雲一つない天気。ＣＩからの逆ボッカの五名と松尾平にて出合う。皆体が馴れてきたのかすこぶる元気がいい。ＢＨから一人ＣＩに入り二名雪洞で寝る。大体、ＢＨからＣＩまで登り四時間、下り一時間。

三月十一日　雨　みぞれ　仮ＣⅡ建設

朝起きてみると雨がパラパラ降つている。天気予報では午後から晴れるとのことで、出発の準備をし、九時ＣＩを後にＣⅡ建設に向う。一〇時四〇分、二三〇〇米のピークについたが、それより上は風が強くテント設営が危ぶまれるので、ここに仮ＣⅡを建設する。

ナイロン天を張り、中に入つて落着く頃風雪もようやくおさまる。ＢＨからはテントが伸びているかどうか心配しつつＣＩに上つて来る。テントが伸び、今日ＣＩに入る予定の三名は私物を逆ボッカせずにすみほつとする。

今日で、ＢＨからＣＩまで荷は大部分上つた。

三月十二日　快晴

仮ＣⅡを予定した二五〇〇米地点に移動させ、そこにビニロン天（五人用）をもう一つ張る。ここまで来るとさすがに雪山の気分満点で眼前に迫る池の谷の偉観は、いつまで見ていても飽きない。午後から中島等三名は二六〇〇米への登りに六〇米フイクスをする。

三月十三日　雪

ＢＨ、ＣＩ、ＣⅡ共に停滞。入山以来初めての停滞は、幾分上ずつた我々の気持を沈め、明日へのファイトを与えてくれた。

三月十四日　快晴

ＣⅡより、中島、小林（進）、倉知の三名はアイゼンにて、フイックス工作のため八時三〇分出発。一昨日為したフイクスに続いて、鳥帽子岩下のピークに八〇米　シシ頭池ノ谷側トラヴアースに三〇米。カニノハサミから主稜線に突き上げる個所に八〇米。各々ハーケン、這松、或はピツケルをピンにして、他パーテイーのフイクスと並行してフイクス工作を行つた。そのまま頂上まで主稜線をたどり、今合宿初めて剣頂上に立つた。

三月十五日　晴　CⅢ建設

四時起床し出発準備を進めるが、風が強くビニロン天を撤収しCⅢに持つていかなければならないので弱くなるまで待つ。一〇時出発。頂上まで二時間半でいく。頂上直下長次郎寄りには既に東工大、関学等が張つており、長次郎のコルに寄つた地点にCⅢを建設する。まだ八ツ峰、源治郎共にトレースはなく、明日好天の場合、いささか早急ではあるが、八ツ峰のアタックを行うことに決める。長次郎のコルへの下りに八〇米フイクスする。

三月十六日　雪

CⅠ、CⅡ、CⅢ共に停滞。石、宮本BHに入り、これで十四名全員入山完了した。

CⅢではひどい雪で、三時間おきに除雪をする。風が渦を巻いて吹き荒れるので、ブロツクは何の役にも立たない。

三月十七日　快晴

昨日の積雪量は五〇糎程か。降雪後なのでアタックは考えられず、各パーテイ、ラツセルにシゴカレながら荷上を行う。今日の行動によりCⅢの体制は、食糧、器具、人員共に万全となり、明日の好天は予測されるので、アタックはいよいよ必至となる。CⅢに荷上に来た連中も、仲々下る気になれないらしく、「ガンバツテナ。」の声を残して一五時やつと下つていつた。

三月十八日。晴のち小雪。

〈八ツ峰下半〉　小林(進)、中島

CⅢ（五・〇五）——長次郎コル（五・一五）——ルンゼ取付（六・〇〇）——二三峰間コル（七・三〇～八・〇〇）——三・四峰間コル（九・三〇）——四峰（一〇・一〇）——五峰（一一・三〇）——五・六峰間コル（一四・四〇～一五・一五）——CⅢ（一七・一〇）

フイツクスを頼りに、簡単に長次郎コルに達する。しかし、長次郎谷に入るや、猛烈なラツセルに苦しめられ、前途の多難を感ずる。どうしようかと迷いながらおいてきたワカンが残念だつた。おまけに、晴れたあけ方の青空から雪が舞いはじめ、それが次第にひどくなる。そこで、ルンゼの取付で稜線へ出るルートを再検討しながら、天候とラツセルを考慮して、左側の斜面にとりつ

き、二、三峰間のコルへ出ることにした。予想通り、ラッセルはたいしたことがなかつたが、クラストした急斜面に新雪がおおつているのでアイゼンがうまくきかず、カツテイングを強いられた所もあつた。

予定の時間で稜線に出られたが、この頃から降雪がますます激しくなり、視界はほとんどきかなくなつてしまつた。さらに稜線に出たとたんに胸までもぐるラッセルである。ただほとんど無風状態でさほど変化する兆しも見えないので、ここから引き返す手はあるまいと考え、一峰往復はあきらめてともかく五・六峰間のコルまで行くことに決める。

三の窓側に出ている雪庇に注意しながら三峰の登りにかかる。陽がさしているような、さしていないような不安定なボーウと霞んだ奇妙な雰囲気である。三峰には何なく出たが、下りは急傾斜のナイフリッジ。スタカットで一ピッチだが、軟雪のためかなり緊張させられた。小さなピークを長次郎側にトラヴアースして、四峰。夏のルートは三の窓側にアプザイレンで下降した。ピンを探すのに苦労し、ピークより五メートル程下のハイマツをほりおこして利用した。気温が高いので身体中グシヨグシヨである。簡単な昼食の後、五峰にかかる。雪庇はほとんど目立たなかつたが、四、五峰は長次郎側に出ていた。五峰の登りは三の窓側にからみながら大体リッジ通し。何も見えず、風もない静けさの中を、相変らずシンシンと雪が降り続ける。まるで夢を見ているようで気ばかりあせつてくる。が、ラッセルはますます激しく、足場がくずれると、その度に、ピッケルでスタンスを確保してもらつた。とにかく苦しいラッセルだつた。突然人の声を耳にしてコールを交わす。それが六峰Cフェイスのパーテイーであることを確認して、はじめて五峰に出た実感をえた。

しかし、八ツ峰下半における鍵は何といつても五峰の下降をどう処理するかということだろう。われわれはこの下降に三時間もかかつてしまつた。

夏は五峰の頭からコル側へまわりこんでアプザイレンを行なうのだが、不安定な雪と急なスノーフエイスのためどうしても五・六のコル側へ出られない。やむをえず、長次郎谷側へ落ちているルンゼを下降することにした。結局アプザイレンを三回行なつて、コルから五〇メートル程下の大きな岩のところへ出たが、途中で振子ぎみに何回かコル側へ近ずこうとしたので非常に消耗した。十四時四十分五・六のコルへ出て六峰Cフェイス隊と合流した。予定では上半まで続けるつもりだつたが、身体中グシヨ濡れ

になつてしまい、天候も気がかりなのでともかく帰幕することにした。雪崩を気にしながら池の谷乗越を経て一七時一〇分CⅢに戻つた。

＜六峰Cフェース＞

中川、倉知

五時八ツ峰隊を送り出す。昨日そのサポートに行くついでに登ることに決めていたので、すぐ準備して七時出発する。長次郎のコルより八ツ峰隊のトレースのあとを伝つて下る。小雪が小止みなく降り続き、視界は五〇米位。態の岩の下あたりより、そのトレースを左にはなれ長次郎谷を横切る。谷の真中は堅雪だつたがそこをすぎて登りになると、だんだんに深くなり、腰から胸までの苦しいラッセル。傾斜も次第に急になつて、はかどらないことおびただしい。岩壁まであと五〇米ばかりという所で、這松の根を掘り出してジッヘルピンとし、登攀開始。九時。そこからは七〇度位の雪壁で表面の一〇センチ位が軟雪でその下は硬い。まづ倉知がトップで、岩壁の真中よりそこまで続いている浅いルンゼの左の雪壁を登る。このルンゼは薄く雪におおわれていて上の岩壁を二分している。二〇米登つた所でルンゼの中の露岩にハーケンを打つ。そこより右にうつつてさらに二〇米登り、左手五米程の所にハイマツの根をみつけて、そこまでトラバースし、ジッヘルピンとする。そこからは、左方の岩壁が夏の剣稜会ルートだろうからそこを登ろう、と思つていたのだが、ずいぶん悪そうで、真夏でも簡単には登れそうもないように見えた。さては夏のルートはルンゼの右側の岩壁であろう、ということになり（後からよく考えたら夏のルートは左の壁の左の端の方であつた。）、次のピッチは又ルンゼを右にこえて雪壁を右上へと登つた。ルンゼを渡る時に露岩にハーケンを打つ。右の岩壁まで来てみればこちらの方がもつと悪く、少し登つてみたがとても手に負えず、仕方なくそこにハーケンを打つて又雪壁にもどる。そこからは、体重をかけてもどうやらくづれずにいてくれる程度の堅さの雪が這松の上にのつかつている極めて不安定な急斜面で、一々這松の小枝を掘り出しつつ、スタンスをくづさないように細心の注意を払い、ヒヤヒヤしながら登つた。四〇米いつぱい登つても益々急になるばかりの雪壁がつづくばかりで仕方なく、苦心して右へトラバースし岩に出て、ジッヘルピンを打とうとしたが、探せど探せどリスは見付からず、ようやくのことで岩と氷化した雪の間にアイスハーケンをからくも打つ。この間二時間余。足の裏の三分の一位のスタ

ンスに立つてのジッヘルなので体の入れかえが出来ずここからトップ交代。このあたりよりルンゼも岩もなくなり、上はただ真白な八〇度もあろうかと思われるような急な雪壁で、やや傾斜がゆるく見える右上の方へ登る。雪の状態がこここらよくなつてピッケルががつちり根本まで喰い込み一安心する。三〇米登つて稜線に出る。丁度夏のルートのトラバースが終つたあたりであつた。Dフエース側に三米ほどの雪庇が出ていた。さらに右上へ一〇米登つて斜面上にピツケルをさし込んでジツヘル。そこからはトップ交代して一〇米登ると頭で登攀終了。一三時四五分。尚二ピツチ目を登つている時、五峰頭に八ツ峰隊が現われ互にコールを交し、五、六のコルで彼等と合流した。

雪は少しも止まなかつた。下から吹き上げるようにして降り、視界をさえぎられて不愉快であつたが、時々ボンヤリ太陽のりんかくが見える程度で助かつた。

三月十九日　快晴　　（倉　知　記）

〈**本峰南壁A$_1$**〉　中島、大賀

取付（一二・五〇）——終了点（一七・一五～四五）——頂上（一八・〇〇）

いろいろな都合からアタックには遅すぎる時間になつてしまつたが、天気は好し、夏二時間で抜けた経験から甘くみて、午後の平蔵をトラヴアースから来る。中央ややA_2寄りの岩かげに駆け込んで岩壁からはブロックがひつきりなしに落ちて行つた。五月を思わす陽光に融雪がはげしく、雪渓上は小規模な表層が続発し、岩壁からはブロックがひているので夏のようにかからみながら登ることができず、岩稜を文字通り直上せざるを得ない。雪はくさつてアイゼンが利かず、岩の出た所はかぶり気味でしかも濡れている。その岩をOがトツプで三米ほどよじ登りハーケンを一本打つた所でスリツプ、取り付きの雪の上にドサリ。胸までもぐつてしまう。カツとなつて今度は右へまわるが又してもつまる。みかねたNがトツプを交代、右の岩と雪の接線を十米ほど登り、ハーケン二本を打つて稜上にやつと出る。更に左へまわり込むが二十米ほどでザイルが動かなくなり、不安定なテラスでビレイする。既に二時間経過し、予想外の悪さに焦りが生ずる。再びOがトツプで頼りないハーケンをた

たき込み左の雪のルンゼに入る。十米で壁にぶつかり、右上の雪のコルへ強引にずり上る。ハング気味の岩に突つぱりを利かせ、一米も雪を落しながらの苦斗であつた。コルから上はフエース状となり、いかにも悪かつたが、まだ二十米ほどしかかせいで居ず七、八米でラクになりそうなので続けることにした。コルに一本打ち、二米ほど上の残置ハーケンにもビナを通す。垂直に近くホールドが流れていて苦しい。必死の思いで五米ほど来たが力尽きてツイ落。古い方のハーケンが抜け、八米位ダイレクトに落ち、コルに打つたハーケンで止る。胸が猛烈にしめ上げられ、足が雪にとどいた。コルまで登り直してNに代つてもらう。十五時三十分になつていた。Nはこの悪場をハーケン三本を打ちアブミで一回吊り上げて乗越す。急な稜上を三十米で雪の緩斜面に達しOを待つ（一六・三〇）。これからは容易なナイフリッジと、ようやく締つて来た雪のルンゼとをとりまぜ、四十米三ピッチでザイルを解いた（一七・一五）。雪と岩の斜面を百米余で頂上に戻つた。

（大賀記）

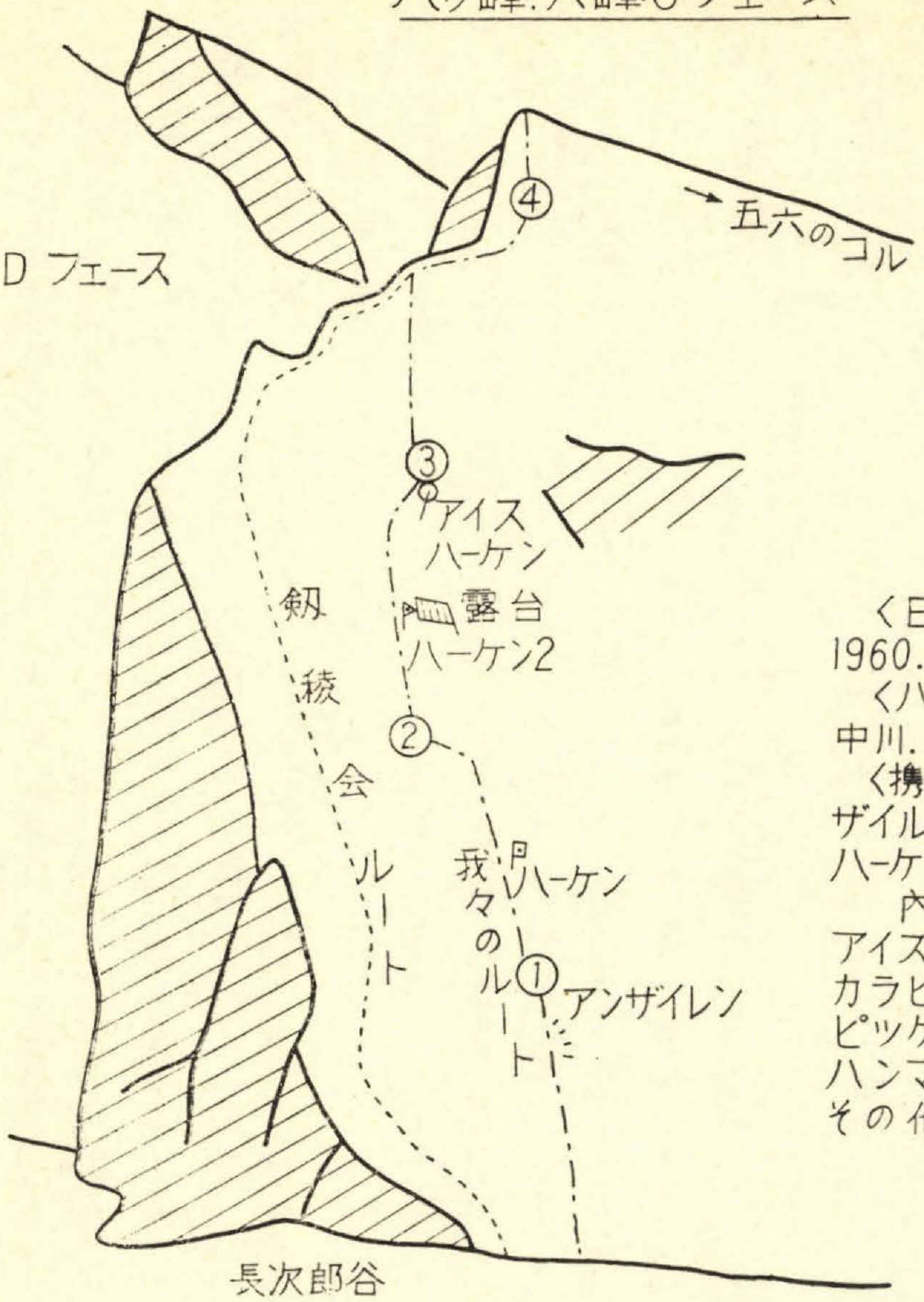
三月二〇日　高曇り

△八ツ峰上半▽　小林（進）、中島

CⅢ（五・一〇）——池の谷コル（五・三〇）——五・六のコル（五・五五～六・一〇）——六峰（六・四五～七・二〇）——七峰（八・〇五）——八峰（八・三五）——八ツ峰の頭（八・四〇）——一・三の窓（九・二〇～一〇・四五）——CⅢ（一一・二五）

一昨日にひきかえ、絶好の天気である。熊の岩からのトラヴアースにおけるラッセルを考えて、池の谷乗越を通つて五・六のコルへ出た。デブリの上をアイゼンをきかせてかけ下り、時間をかせぐことができた。六峰の登りは長い雪壁だが、雪がしまつていて非常に楽だつた。悪いことを予想していたので難なく通過。七峰、八峰は急な雪稜の連続だが、「階段登り」になつてしまつた以上、何ら云うべきものはない。雪庇はほとんど出ていなかつた。二人とも拍子抜けの態で八ツ峰の頭に八時四十分着。所要時間は夏よりもかからなかつた。サポート隊がチンネの偵察に出かけているはずなので、奇妙な気持で三の窓に出かけ、次の目標に意慾を燃やしつつ帰幕し

八ツ峰.六峰Cフェース



〈日時〉
1960.3.18
〈パーティ〉
中川.倉知
〈携行品〉

ザイル(麻) 40m	
ハーケン(ロック)	10
内使用	3
アイスハーケン	1
カラビナ	8
ピッケル	2
ハンマー	2
その他	

た。雪の状態によつてこうも違うものかと、下半の状況を想起しつつ、その彼我の差に登山の神秘ともいうべきものを再認識した。

（中島記）

△**源治郎尾根**▽大賀、小林正、三井

出発（五・一五）——ルンゼ入口（五・五〇）——アンザイレン（六・四五）——主稜（九・〇〇）——一峰（九・三五）——二のコル（一〇・三〇）——二峰（一一・〇〇）——アプザイレン（完了一二・〇〇）——昼食後一三・〇五発）——頂上（一三・四五）

月明の長次郎谷を下つて行くと、一峰フエースの左側に登れそうな雪のルンゼがあつた。丁度八ツ峰一二間ルンゼの対岸であり、夏ルートより一本上にあたる。ここから入れれば大分近道になる、と思つてよく見ると、既に二人取り付いている。残念先

きを越されたかと云いながら、我々もここを登路にとることにする。本谷から分れ、急なルンゼをもまでのラッセルで百米ほど直上し、巾五米ほどにせばまつた滝状の地点でアンザイレンする。ここまでのラッセルは苦しかつたが、先行パーテイのトレースを彼らが見てる前で使うのは気分がよくなかつたので、自分らでつけ直した。Oがトップで登り出したが、五米ほどでかぶり気味の岩にぶつかり手こずる。リスを求めて右に思いきり手をのばすとアイスハーケンがあつた。拍子抜けしてカラビナをかけ自己吊上げのようにしてここを抜ける。急に目の前がひらけ、広々とした雪のルンゼとなる。ステップカットを続け、四十米三ピッチで尾根に出る。夏ルートと合したことが分る。二ピッチで主稜に出、ザイルを解く。美しい雪稜に鮮やかなトレースがついている。三十分ほどで一峰に達し最初の食事をとる。予想外に早かつたので余裕がでてくる。一、二のコルから再びアンザイレンし、軟雪の急斜面をラッセルしてゆく。二ピッチ余でフェースの上に出る。この辺からは靴一つしか乗らない雪のナイフリッジで、意地になつてつけて来た我々のトレースもついに先人のそれに一致せざるを得なかつた。苦笑いしながら数ピッチ、アップザイレンの地点に到る。鎖さがしを諦めた関学パーテイがアイスハーケンを打つたので、ラッセルのお礼を云い、一緒に下りる。三人目からぐらつき出したのでもう一本打ちそえた。我々はピッケルを埋めてピンにするつもりで、一本余分に持つて行つたがその必要もなかつた。コルで昼食をゆつくりとり、五十米ほど上まで下りて来てくれたサポート隊に迎えられ、意外に早く頂上に帰りついた。

（大賀記）

チンネ偵察　中川、倉知

三月二一日　雪

CII、CIII共に停滞。

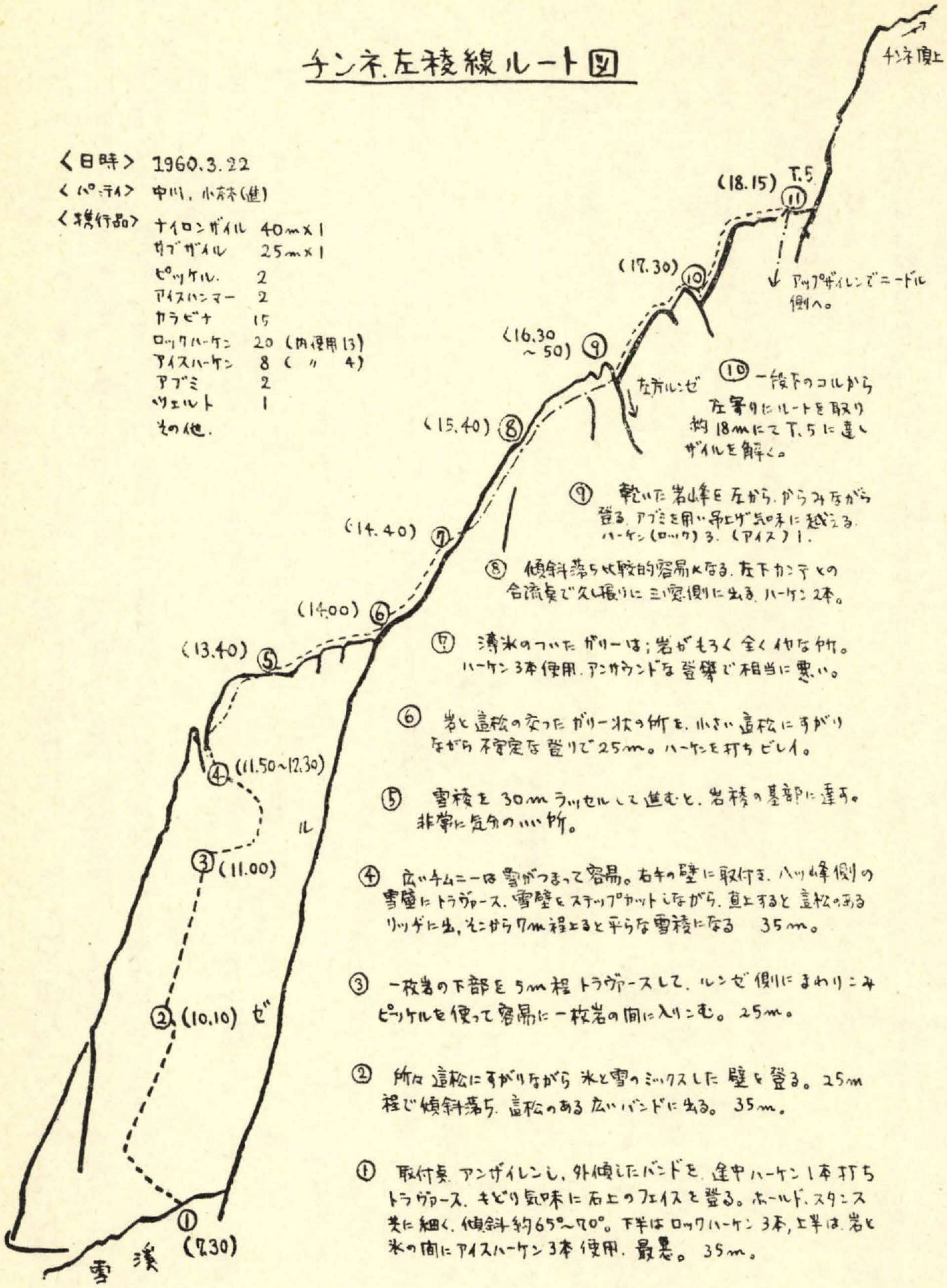
三月二二日　快晴

〈チンネ左稜線〉　中川、小林（進）

CIII（五・四〇）――取付（七・三〇）――中間大テラス（一三・一八・一五）――CIII（二一・一五）

チンネ左稜線ルート図

<日時> 1960.3.22
<パーティ> 中川, 小森(健)
<携行品> ナイロンザイル 40m×1
ガブザイル 25m×1
ピッケル 2
アイスハンマー 2
カラビナ 15
ロックハーケン 20 (内使用13)
アイスハーケン 8 (〃 4)
アブミ 2
ハンマー 1
その他.



↓ アップザイレンでニードル側へ。

⑩ 一段下のコルから左寄りにルートを取り約18mにてT.5に達しザイルを解く。

左方ルンゼ

⑨ 乾いた岩峰E左から、からみながら登る。アブミを用い帰エザ気味に越える。ハーケン(ロック)3、(アイス)1。

⑧ 傾斜落ち比較的容易になる。左下カンテとの合流点で久しぶりに三ノ窓側に出る。ハーケン2本。

⑦ 薄氷のついたガリー状;岩がもろく全く不安な所。ハーケン3本使用。アンカウンドな登攀で相当に悪い。

⑥ 岩と這松の交ったガリー状の所を、小さい這松にすがりながら不安定な登りで25m。ハーケンを打ちビレイ。

⑤ 雪稜を30mラッセルして進むと、岩稜の基部に達す。非常に気分のいい所。

④ 広いチムニーは雪がつまって容易。右手の壁に取付き、八ツ峰側の雪壁にトラヴァース、雪壁とステップカットしながら、直上すると這松のあるリッジに出、そこから7m程上ると平らな雪稜になる 35m。

③ 一枚岩の下部を5m程トラヴァースして、ルンゼ側にまわりこみピッケルを使って容易に一枚岩の間に入りこむ。25m。

② 所々這松にすがりながら氷と雪のミックスした壁を登る。25m程で傾斜落ち、這松のある広いバンドに出る。35m。

① 取付き、アンザイレンし、外傾したバンドを、途中ハーケン1本打ちトラヴァース、もどり気味に右上のフェイスを登る。ホールド、スタンス共に細く、傾斜約65°~70°。下半はロックハーケン3本、上半は岩と氷の間にアイスハーケン3本使用、最悪。35m。

三時に起床。天気は快晴だが、風がテントを揺さぶる。一応準備を始め食事を摂り、パッキングを終へても、風の表に飛び出すのは気が進まず、CⅢを後にしたのは五時四〇分であつた。風の吹きすさぶ主稜線をたどり、池の谷のコルを下り三ノ窓に出る。三ノ窓に張つている関学、横浜国大は共に停滞。今日我々二人が登らんとする左稜線を狙つているパーティであるだけに、我々も後髪が引かれる思いがした。

しかし雪渓を下るにつれ風当りは弱くなりあまり気にならなくなつて来る。雪渓をトラヴアースして関学のフイクスした地点に着く。夏の取付点はもう一段下だと思われるが、協議の結果、我々もこのバンドから取付くことにする（図①）。アンザイレンしNトップでバンドをトラヴアース。夏ルートはもつと八ツ峰寄りであるが、雪がつき外傾したバンドをそれ以上進むのは危険なので、三ノ窓寄りの壁を登ることにする。夏でもホールド、スタンスに乏しく、草付交りの縦に流れたようなこの壁は、ヴエルグラをつけ一層険悪な様相を呈している。アイスハンマーでヴエルグラを落しながら、リスを見付次第ハーケンを打ち、登つては下り、登つては下りしながら一米、一米を稼いで行く。バンドから一〇米上からはリスもないので、氷化した草付に長いアイスハーケンを打ち込み、それをホールド、スタンスに用いて登る。左手五米の所に、夏ジッヘルに用いた岳樺を見つけ、トラヴアースを試みたが、左足内側のツアツケ一本ではどうしても足が流れ危険なので、止むなく引返し、前と同様アイスハーケンを岩と氷上の間に連打しつつ三米直登し、そこから左に行き雪の被つた這松を掘り出しセカンドを迎えた。このピッチにトップは二時間を費し、二人が集結したのは十時を過ぎていた。トップKに代り、相変らず岩と氷の壁を、所々這松に頼りながら進むと、やがて傾斜も落ち這松のある広いバンドに出た。セカンドはそのままつるべで、一枚岩直下を右にトラヴアースしルンゼ側に出、ピツケルを用いて簡単に一枚岩の裏側に入り込んだ（図④）。

「ケツパレヨ！」とのサポート隊の声援に答えながら小休止。ヨーカンとコンビーフを頬張り紅茶を飲む。ザイルを締直し、雪のつまつた広いチムニーをつめて行くと、はめ込んだような鹿島槍の双耳峰が白く輝いていた。

右側の岩から左側、八ツ峰寄りの雪壁に移りピツケルを右手に、アイスハンマー左に交互に雪面を突きながら登ると、大テラスに出た。風もなく天気は全く穏かで、今日中に登れない場合のことを考えても幾分気が楽になる。此処は実に気持のいい所で、左

に八ツ峰、ニードル、右に毛勝方面の絶景をほしいままにするが、
いよいよ後半に取組んだが、夏は岩が脆いだけのこの広い稜線は、ヴエルグラが張りつめ、相変らずンも打てず、非常に不安定な登攀を強いられる。ルートを八ツ峰寄りの浅いガリーにとり、トツプのK打ちつつ、アイゼンにモノを云わせて強引に二八米程登り、Nと交代（図⑦―⑧）。そこからは傾斜も落ちピナクルに達しジツヘルする（図⑨）。
久し振りに小窓王下にいるサポートの中島からの声援を聞き、ホツトする（一六・三〇）。
昨夏、この同じメンバーで左稜線を登つた時は、左下カンテパーテイと合流し、左方ルンゼを下つてしまつたのである。眼前に突立つている乾いた岩峰を前にし、ヒツトビーを噛りラス5の登攀終了点までは、我々にとつて謂ば未知のルートであながらどうしたものかと相談する。段々と薄暗くなり始め、今まで感じられなかつた手足の疲れを覚える。トツプはザツクを下に残し、アイゼンをガリガリいわせながら岩峰に取付き、広いリスにアイスハーケンを根本までたたき込んで、アブミを掛け吊上げ気味に登つたが思つたよりも楽に乗越えることが出来た。Kにトツプを交代し、一段下つたコルから同じような岩峰を左側へからみながら登り、一八米程ザイルが伸びた所がT・5終了点であつた（図⑪）。ニードル側から上つて来たサポートの中島を加え各々固い握手を交わす。暗闇迫る頃、十一時間振りにザイルを解き、広いリスにアイスハーケンで、サブザイルと結び這松をピンに三〇米のアブザイレンで、ドル側の雪渓に立つ。八ツ峰頭までコンテイヌアスで登り、そこで待つていた石と共に、四人で主稜線をヘツドライトに導びかれながらCⅢに帰着した（二一・一五）。
アイゼンを脱ぎながら吸うタバコは途方もなくうまかつた。

（中川記）

△別山尾根▽　有賀、倉知

テント発（七・〇五）――剣御前小屋（一〇・〇五）――別山（一〇・四五）――一服剣（一二・四〇）――テント着（一四・四五）

快晴ではあつたが、絶え間ない風にいささか恐れをなしていた我々も、チンネ隊の出発を見て七時テントをとび出した。カニノヨコバイは、まいて左側のルンゼを下り平蔵のコルへ出た。稜線では八ツ峰方面からの風に絶えず左頬を叩かれたが、トレースのきれいに消された稜線は、バケツを見なれた自分には実に嬉しかつた。剱御前手前の登りは東大谷側をまいた為少し時間をくつたが、ここは剱沢側を行くべきだつた。後は別に問題なく、ラッセルも全行程を通じ殆んど苦労せず快適な稜線歩きとなつた。十時四十五分別山着。十一時帰路につく。相変らず晴れわたり風も弱まつたのでのんびりと往路を帰つた。

中島、石、三股、宮本、多田、臼井等は交代で三ノ窓に来る。

三月二三日　晴

三股、倉知、三井

〈本峰南壁A_2〉

CⅢ（一〇・四五）――南壁A_2取付点（一一・〇〇）――登攀終了（一三・四五）――CⅢ（一四・三〇）

昨夜テンネ登攀者の帰幕が遅かつたので、遅く起きた。アプローチの短かいのは良いもので、あつという間に取付点へかけ下りた。A_2は大分雪が付いているが、目指すA_2はすつかり雪が落ちて黒々と乾いている。倉知、三股、三井のオーダーで登る。ミツテルはスライデイングである。倉知は雪の付着した小チムニーを5米程登り、ハーケンを一本打つて直角に右側の岩を足を高く上げて登る。上で又ハーケンを打つたが、岩がもろくて駄目であつた。しかし要所によくきいた古ハーケンが打つてあるので何のことはない。なま暖い南風が吹きつけ、高曇りになつて、天気悪化の徴候を示す。小テラスまで一ピッチ。岩が乾いているので夏と変らないが、アンゼンをはいているだけ慎重になり、かえつて絶好のバランスで登ることが出来た。二ピッチ目は登り出しが少しハングしていたので右側にまわりこみ、上部をトラバースする。このトラバースは、アイゼンの爪がわずかにかかる程のものであるが、ホールドがしつかりしているので問題ない。これを越えるとやせた岩尾根になり、いたつて容易であつた。三ピッチで左側のルンゼに合し、コンテニュアスで登らんとしたが、急な雪の斜面だつたのでもう一ピッチザイルをのばした。三井がトップになる。更にコンテでしばらく行くとそこはもう剱の直下で登攀終了であつた。時に一時四五分。左へトラバースして別山尾根道に出

（有賀記）

ると平蔵のコルに別山隊の五人が姿を見せコールをかける。

別山尾根　中島、宮本、黒川、臼井、多田

本日にてアタツク期間終了とする。

三月二四日　雪

CⅡ、CⅢ共に停滞。

三月二五日　晴　CⅢ撤収

CⅢの二張りのウインパーを撤収し、中川他九名BHへ向け出発する。（九・四五）下に降るにつれ暑くなり汗ばんでくる。（一一・一五）にて全員の記念写真を取り、CⅡの中島他三名はフイクスの撤収に向う。二三〇〇を過ぎてからは、雪が腐りアイゼンはダンゴになつて思うように進めない。皆適当に転びながら剱を背に馬場島に向つた。一五時四五分小舎到着、久し振りで飲む水が歯にしみた。

三月二六日　雨　CⅡでは風雪

BH、停滞。CⅡの四名は、一旦テントを撤収し下りかけたが、強風のため動くことが出来ず、引返し、テントを張り直す。低気圧の日本海通過か。

三月二七日　雨

BHでは、CⅡの四名が降りて来ないのでヤキモキする。主食はあるが、調味料、野菜等がほとんどなくなつたので、仕方なく石他六名下山する。CⅡは停滞。

三月二八日　晴

十二時過ぎにCⅡの四名、元気に馬場島へ帰着。真黒に日焼した顔を見て、全くほつとする。「御苦労さん！」、「御苦労さん！」と握手を交し合う。B・Hの三人と共に下山。伊折からバスにて上市へ向う。

（中川滋夫）

（三井記）

主　　食

	種　　類	一　食　分	備　　考
朝	モチ チャーメン ウドン 米	6枚 1袋 1/2把 1.3合	行動日用（17日分） 沈澱日用（6日分） 〃（B・Hでのみチャーメンの代りに使用） B・Hでの最初の2日間
昼	カンパン （ミルクパン） ドライミルクパン ラスク クラツカー	1袋 〃 〃 適量	適宜配分，クラツカーのみ沈澱日用
晩	米	1.3合	

副　　食

	種　　類	使　用　食　品	備　　考
朝	雑煮 ラーメン ウドン	ホーレン草，肉，醤油	使用食品は3種類とも共通
昼	行動日用パック	ミカン，バター レイズン，シオマメ ミカン，チヨコレート ピーナツ，レイズン	行動日のみ適宜配分
	紅茶	紅　茶，サトウ	行動日用
	ミルク	スキムミルク，サトウ	沈澱日用
晩	ヤサイイタメ	マーガリン，肉，玉ねぎ キヤベツ，モヤシ，ソース	
	トロロ汁	醤油，トロロコブ コーヤ豆腐	
	カレー・スープ	カレー粉，スープの素，醤油，肉，ソーセージ，玉ねぎ	
	サラダ，又は佃煮	マヨネーズ，キヤベツ，レタス，赤カブ	サラダは初めの回のみ．
	クジラ，テキ	クジラ肉，醤油，ラード，玉ねぎ，シヨーガ	
	コンソメ・スープ	スープの素，ベーコン，玉ねぎ，シイタケ	
	豚汁	ミソ，肉，玉ねぎ，モヤシ	
	ミリン干		

炊き込み	マグロ又はカツオフレークの缶詰，醤油	
ポタージユ・スープ	ポタージユの素，マーガリン玉ねぎ，マカロニ，肉	
佃煮	コンブ	

準備食糧一覧

	品名	一食分	回数	総量	備考
主食	モチ米	1人6枚	17	1340枚	1枚7.5円
	チウメン	〃 1個	4	53個	C_1～C_3用
	ヤード	〃 1/2把	2	14把	BH用
		〃1.3合	27	5斗	晩25日＋朝2日
副食	タキギ	1回7個	25	27kg	200個位
	マネベイ	1個1個	8	15kg	10個位
	ヤガヤ			20kg	
	モシスブ				200円分
	レカヤタ	1個1個	10	10個	200円分
	ホーレン草				100円分
	牛肉	1回2把		75把	750円分
	鯨肉				3600円分
	トロブツ				700円分
	ロコンニ	1回3個	5	15個	
	コーフ	〃 1個	5	5個	
	トーズ	〃 2個	5	10個	
	ロヤセ	〃 1個	5	5個	
	ーヨイ	〃 1袋	5	5袋	
	ンカク	〃 5枚	5	25枚	
	ヨ	〃 3個	5	15個	
	ーレ	〃 1/2袋	5	3袋	
	トコソマシミカマツシ	〃 5袋	5	1貫目 若干	30袋
調味料	ユスン粉	1回2合	45	1斗	
	ーリレ			3合	
	ーガカー	〃0.5ポンド	10	5ポンド	
	のヨ	若干	5	3個	
	ーレ席	〃 1個		5個	
	シソマカ即ラシ味砂	1.5個	5	8個 若干 若干 20kg	各テント1袋 各テント1袋 各人1.5kg
その他	カン	1人1個	17	250個	1500円
	タ			4ポンド	
	ミバチレピ塩紅ミ				500円分 900円分
	ートンツ豆茶ク				
	ヨコレー			400g	
	イズ			200g	
	ーナツ			8個	
	ル			3個	

器具一覧表

	品名	備考	CI	CII	CIII	総計
露営用具類	ウインパー天幕	ビニロン製5人用	1			1
	ウインパー天幕	ナイロン製5人用		1		1
	ウインパー天幕	ビニロン製5人用			1	1
	カポックト	各人一枚				13
	エアマット	(私物)				1
	雪洞用ベニヤ板	三枚折り	2			2
	スコップ	大，中，小	1	1	1	3
	ペグ	竹製細引付各テント10～15				80
	テント・シューズ	(私物)		1		1
炊事用具類	石油コンロ	大型2 l 入り	1			1
	ラスプジウ				2	2
	ジベアスル		1			1
	飯ごうリム			1		1
	コッフエル			1		1
	シヤモジ	大1・BH用	1	3	1	5
	お玉杓子	中1 小5 6テント用	2 1	2 1	2 2	7 4
	茶こし		2 1	2 1	3 1	7 3
登攀用具	ザイル(40m)	麻2ナイロン1		1	2	3
	補助ザイル	麻8mm			1	1
	フイックスザイル(40m)	麻8mm		3	2	5
	フイックスザイル(40m)	麻8mm		3	1	4
	フイックスザイル(30m)	麻12mm		1		1
	捨縄用古ザイル	1.5×20				30m
	フイックス用古ピッケル			2	2	4
	ツエルト				1	1
	アンザイアックス用	小型			1	1
	ベケケマスター			5	45	50
	ナミンビーム				3	3
	竹ハハハハ				3	3
	ブの用ラスクスクスイツイツ				2	2
	赤布	金属製2，木製2		5	25	30
	標識用し	30cm幅18m	5 若干	20 若干	4 5	4 20
一般雑用品類	水筒		1	1	2	4
	モルテン		1	1	4	6
	石油クプタック	主として石油荷上げ用に使われた	20 l	20 l	14 l	54 l
	ポリエチレンタンク		1 2	2	2	5 2
	ポメロン	放出品	10	8	14	32
	ウソ針	一本20円	20	20	24	64
	ワブタラ目ドペシ細引	5m×4他に若干	1	1	2	4
	セリテープ	(50m)		1	1	2
	ラクワジ					1
	覚時		2	2	3	7
	ラインバッ	大1 小1	1 1	1	1 1	3 2
	ユピツツ	BHにおく				2 1
			若干	若干	若干	若干

△反省……食糧について▽

日数が計画より三日短縮されたので主食の方はかなり余つたが、副食は三日少なくなつてもなお足りなかつた。毎日少しずつ使いすぎたためであろう。もう少し余裕を持つて多く買いたかつたが予算がなかつた。

モチ1人1食6枚は丁度よい量であつた。米の一・三合はやや多すぎた。チヤーメンは一食一袋では足りないが、高いものだから仕方がない。ウドンは高地では水不足で使用に耐えず。BHではうまくできた。

昼食はラスク、クラツカーが好評だつた。おかずの方ではミカン、ピーナツツは欠かせない。各人の嗜好によつてバターとチヨコレートを選ばせたのはよかつたと思う。レイズンは高い割によろこばれない。

晩の献立は一汁一菜としたが、菜の方が少なくてまずかつた。よろこばれたのは豚汁、クジラテキ、悪かつたのはタキ込ミメシ。他はマアマアといつた所。5種を順番に食べることにしておいたが、各テントで勝手に今日は何々にしようと決めてしまつて、計画が狂うこと著しく、副食が足りなくなる一原因となつた。過不足なくするには一食ごとの完全なパツクと、厳重なパツキングが必要だろうが、手間と予算がとても足りない。特にパツキングケース（段ボールの箱）がつぶれバラバラになつて、荷分けが繁雑になり、テントごとに過不足が出来たのには弱つた。

（倉知敬）

△反省……器具について▽

(1)天幕の配置が、CI・CII間のボツカが終りしだいCIを撤収してCIIIへ二張り張ることになつていたので、最前線たるCIII へ物資が多く集まる形となつた。

(2) 老朽品が目立つた。ナイロン天幕は合宿後半に入つて強風と深雪のため数個所にわたつて大きく破れたが応急処置によつて事なきを得た。又、カポツクも使用に耐えぬ状態のものが多くCIで使つていた雪洞用ベニヤ板をCIIIの天幕内で使つたりした。

(3)最も懸念されたのが石油であつた。というのは昨年秋荷担げしておいた罐のうち三罐が破損していて相当量が流出していたからである。他の一罐はCIへの荷担げ中に穴をあけてしまつた。したがつてCIICIIIへの荷担げはすべてタンク及び他パーテイから譲り受けた2l入り罐で行い容器に醤油空びん、水筒まで総動員する苦しさで、石油コンロも石油を食うので一度使用したのみ

でBHに下ろしてしまった。後発隊が18*l*持ってきてくれたので漸われ易く今後も再考の余地があると思う。

(4)ベースハウスの馬場島では石油を一切使わずに薪ですませた。

(5)今回は器具の重量がかなり大げさなものとなつたが、計画からツトに変えるとか、いろ研究の必要がある。

見て当然である。今後は穴あきシヤベルとかカポツクをエアマ

（三　井　博）

コルディレラ・ワイワッシュについて

——プルーアンデスの一山群——

中村保（一九五八年卒）

〈はじめに〉

アンデス山脈はアジア大陸を除いて、地球上で求め得る最も壮麗優美な山々であり、幾多の六〇〇〇米以上の高峯が存在している。パナマ海峡から、ケープホルンに至るまで南米大陸の背稜は七〇〇〇キロの長さに横たわつている。標高こそ低いが、フイヨルドに落ちこんでいる大氷河、その上にそびえる幻想的な岩峯をもち、苛酷な気象条件のパタゴニヤ。熱帯の原始林の上に、氷の奇妙なマントをまとつたコロンビヤ・アンデス。中でも、ペルー、ボリビヤの山々は、最も美しく、多くのピークは急峻そのもので、最もアルピニストの関心が寄つている。ペルーアンデスの幾つかの山群は、赤道に近いにもかかわらず想像を絶するほどの氷におおわれて独得な様相を呈して屹立している。空の黒いほどのブルーと、波打つ黄金色のパンパスの上に白嶺が連つている。

Ninashhanca
Rondoy
5883
Qu. Pacllón
SoHerahanca
Jahuakocha
Qu. Huacrish
N.Jirishhanca
6126
EL Toro
6121
Yerupaja
6634
6040
Carhua
Kocha
Qu. Queropaica
B.C
Qu.Acoshvado
N.Rasac
Tsacra
Grande
5774
Tsacra
Chicu
5564
Siura
6356
Sarap G.
Purla
Carinicero
Sarap
Kocha
6143
Sarapo
5980
Carini-
-cera
Carinicero
Huayhuash
Cervo
Bayo
5487
Jurau
Kocha
5245
5101
5110
Cero San Antonio
Qu. Augimarca
Qu. Huanacupatai
Portachuero
de
Huayhuash
5550
N.Pyscantrupa
Viconga

Cordillera de Huayhuash

0 1 2 3 4 5
km

--------行動予定コース

南から、クスコ付近のコルデイレラ・ビルカノータとコルデイレラ・ビルカバンバの両山群、更に北に一〇〇〇キロ離れて太平洋岸に平行して二五〇キロに亘る有名なコルデイレラ・ブランカ及び本文で述べるコルデイレラ・ワイワッシュの四つに大別できる。この他、支脈及び小山群で未探検の地域も多く残されている。

〈概　観〉

コルデイレラ・ワイワッシュ（以下C・Hと略す）は、南北に延びる長さ三キロに亘る山群にすぎないけれども六〇〇〇米を越えるピークが六つある。ニナシャン（五六三七米）を最北端に主脈は南に連つてエルパッハ（六六三四米）でラサック（六〇四〇米）からツアクラ・グランデに直角に交つて西に延びる支脈と分かれ、更に主脈はシウラ（六三五六米）サラポ（六一四三米）カリニセロ（五九八〇米）からプスカントウルパで終る。詳細は概念図により明らかである。

最高峰エルパッハとは、インディアンの土語で、「氷の山」と云う意味を持つている。スペイン語ではカリニセロと云われ「肉屋」の意味である。一九五〇年アメリカ隊によつて、エルパッハ氷河を経て、主稜線に出て尾根通しに頂上に達した。その後、一九五四年オーストリア隊が同じルートのトレースを試みて失敗した。東面は試登すらされていず、頂上から東に延びる急峻なリッジは他日登攀の対象となるべき唯一のバリエーションであろう。参考のために、地理的座標を示すと、正確には南緯10°・16′・0″、西経75°・54′・09″の位置にあり赤道付近の熱帯にある。

このエルパッハと共に、C・Hの代表的な山がヒリシャンカ（六一二六米）である。「蜂鳥の嘴」と形容され、その秀麗さ峻嶮さから、或は登攀の可能性の少いことから南米のマッターホルンといわれていたが、一九五七年オーストリア隊の強力な攻撃に屈しした。

その他の六〇〇〇米峯、シウラ・ラサックサラポ、エル・トロも登攀史のところで示すように再度のオーストリア隊の遠征により登頂された。五〇〇〇米級の山もわずかの未登峯、ロンドイ（五八八七米）カリニセロを残して登られた。自然、興味は未登の

地域に向けられる。カリニセロは、六〇〇〇米にわずかに、その標高が不足していること及び山容に優れた特徴のないことで、今日まで不遇をかこつてきた。しかし決して容易で平凡な山であるとは云へない。アクロバットな登攀は期待出来ないが、無数のクレバスに細断された氷河、アイス・カスケードはその基部において簡単に人を寄せつけず、又上部は雪庇のはりだした鋭い氷稜が続いている。一九五七年試登が行われたが二晩のビバークの後、五七〇〇米に迫りながらも敗退している。

この山とは対底的なのがロンドイである。ヒリシヤンカから北に連る鋸状の氷稜はロンドイで高度を落しているとは云へ

のアプローチがすべて人夫に運搬をたよる煩雑さに比較してもアンデスを近ずきやすいものにしている。さて、チクイアンから途中のリヤマックの寒村を通過し、峠を越え、パルコンのゴルジュをすぎれば、エルパッハ東面のB・H地点である。周囲は銀嶺を映す湖と豊富な雑木に恵まれ、根拠地にふさわしいフェアリー・ランドである。

＜登　攀　史＞

コルデイレラ・ワイワツシユが始めて世に紹介されたのは一九〇九年のドイツの地理学者W・ジーベルスの報告によるが、彼の探検はC・Hの東部地域に限られていた。山脈、氷河、湖について記述されているが、山の標高を、五五〇〇米から五六〇〇米に見積つていた。

その後、アメリカの女流登山家アニー・S・ペックと云う人がチクイアンの付近に七六〇〇米程の山が存在すると云う話を書いているが、彼女自身はアコンカグアと同じぐらいに考えていたらしい。

一九二七年にはアメリカ地理学会がO・M・ミラー指揮のもとに遠征隊を送り、はじめてエルパッハの正確な測量をした。

一九三六年に至り、E・シユナイダー、H・キンツル等のオーストリア隊が登山及び学術調査の目的をもつてC・Hを訪ずれ、本格的な踏査を行つた。その結果、シウラ及びラサックの二つの六〇〇〇米峯及び幾つかの五〇〇〇米峯が登頂され、五万分の一の正確な地図が作成された。これは今日でも信頼性のある優れたものである。

一九四六年には有名なA・ハイムが飛行機で空からの偵察を行つた。

一九五〇年ハーバード及びスタンフオードの混成隊がペルー最高の未登峯を目ざしてエルパッハ氷河から主稜線へのルートをとつている。四つの前進キャンプを設けて二人のアタクツ隊により登頂チはチクイアンから入つてハウア湖畔にB・Cを建設、エルパッハの西面から攻撃した。アプローチが延びる尾根をこえて氷河の上部へでている。氷河の下部は通過出来ないので、ラサックから主稜線へのルートをとつている。四つの前進キャンプを設けて二人のアタクツ隊により登頂した。彼等二人は可成の凍傷をこうむつたことから、困難な登攀であつたことがうかがわれる。

一九五四年には再度H・キンツルのもとに、オーストリヤ山岳会が偵察及び科学的調査を主力とした隊を送つた。この年には一

九三六年と同じように地質、氷河、湖の科学的探査が十分行われた。登攀チームの活躍はサラツポの初登をはじめ、プスカンツルパ（五六五二米）、ニナシャンカ、ツアクラグラデ（五七七四米）、ヒリシャンカチコ（五四六七米）の初登及びラサックの第二登に成功したけれども散発的な登攀に終つた。

しかしこの年の偵察の成果は一九五七年の遠征隊に受けつがれた。ハインリツヒ・クーリヤーにひきいられ強力なオーストリア隊によつてヒリシャンカの西面は先年の偵察から不可能と判断した彼等は、東面の雪の少い岩壁に主力を集中した。急峻なアイス・フランケ及び岩稜に二つの高所キャンプを出し、最後キャンプからの登頂には二晩のビバークを費し、しかも下降はすべて懸垂によつて突破した。この岩壁は彼等によれば、技術的にはドロミチのシュバルツカンテにも匹敵するほどの困難さであつたと云つている。ヨーロッパで育つたアルピニズム・アクロバチコのアンデスでの開花と云へよう。ヒリシャンカと同時に、エルパツハチコ（六一二二米）も彼等の掌中のものとなつた。同じく東面にルートを選び、登降別々のトレースを行つて横断した。単なる登頂だけでない新しいアンデスの登頂形式であるとG・レビユフアーが指摘するように、今後の新しい発展が期待されるところである。これで六〇〇〇米峯はすべて登られてしまつたわけである。五〇〇〇米の山では豪壮なトラペシオが登られた。

＜山脈構造＞

コルデイレラ・ワイワツシユは疑いなく独立した山塊である。北部では氷河のない広大な地域によつて、はるかに長大なブランカ山群から分かれている。その上ブランカよりも東に位置しているC・Hは長さ三十キロに過ぎずペルーにおける他の大部分の山塊よりも規模は小さいけれども、最も壮麗な山塊である。山域の区分が明確であるのと同時に、C・Hの構造は単純で解放的な特徴をもつている。二〇〇〇米以上の高度差をもつて、巨大な氷河のある頂上が渓谷の上にそびえている。

主山脈は二つの部分に大別することが出来る。北の部分に高峰が多く、六〇〇〇米の山をすべて含んでいる。一方南部の山々

は、五六〇〇米から五七〇〇米の高度に達しているにすぎない。岩層にも又相違がある。北部は嶮しいパーク、鋭いリツジ、荒々しい雪疵、ヒマラヤひだの氷雪壁、寸断された氷河、そして広い溪谷によつて特徴づけられており、垂直の線が支配的である。南部ではこれと異つて水平な線が風景を特色づけている。氷河は平らな地面に横たわつており、多くは格好の悪い山である。しかし、北部の山々とは比較出来ないような小塔のような独立したピークで優つている一方、明るい褐色が南部の断崖や尖峯にみられる色彩である。このようにC・Hは構造上二つの部分から出来ているのかと云う地質的な問題にぶつかる。ブランカ山群の高峯のようなれる。

このことに関連して、どんな種類の岩質から形成さそていいるのかと云う地質的な問題にぶつかる。ブランカ山群の高峯のような美しい堅い花崗岩から成つているか、或は白堊紀の沈積岩から成つているかである。現実には石灰岩や珪岩がC・Hの両地域に広く発見され、時々石炭を生ずる珪質粘土岩や泥灰土が発見されることもある。詳しい地質構造は省略することにして、花崗岩、石灰岩、珪岩のうちどちらが支配的であろうと、頂稜が特徴づけられている鋸状の形を発達させているのである。初登攀の時代が遠い過去のものとなつた後においてもなお、若い情熱的な登山家を魅する有名な山として残るだろう。

∧氷　河∨

すべての高山地帯と同じように、C・Hの風景も氷河作用によつて特色づけられている。この地方の雪線は、東北部では四九〇〇米、東南部では五〇〇〇米ぐらいの標高である。この相違の理由は、北東風が卓越していること即ち東部就中北東部が風上にあたるためである。天候の状態が悪いときには雨や雪が西から吹かれることもあるけれども、降雨は普通には東から始まる。北半球の場合と逆なわけである。そのため雪庇は常に稜線から西側に張り出して見られ、巨大な三十米にも及ぶものがある。

雪線の標高とは反対に、氷河作用は条部よりは西部に広い地域に亘つて発達している。この事実は東風によつて山稜をこえて西側に飛ばされて雪が吹き溜ることもある程店原因しているが、西側の大きな氷河作用の要因、むしろ地形構造によるものである。西側では可成り標高の高いところで平旦な地域が発見され、その上雪の畜積に好ましい場所は西に行くにしたがつて多くなる。最

もいい例では、ラサツクで西面の壁は厚い氷の層におおわれている。

C・Hの氷河の規模は、ヨーロッパの東部アルプスのそれと同じくらいの大きさである。エルバツハとヒリシャンカの基部にある最大の氷河は、万年雪の地帯に入る岩壁をも含めて、十二キロ平方米の面積をもつている。氷が側面から絶えず加えられ、六キロ程の長さに達している。他の氷河は四キロに満たない。

ワイワツシュの氷河は外形に関しては、ペルーの他の山群の氷河よりはアルプスの氷河に類似している。頂上直下の岩壁の基部では比較的平旦な凹地がみられ、そこから下へ長く狭い舌端が発達している。アルプンの大きな舌端とは異つてこの地方の氷河には非常に多くの裂目がある。低いところでも横断することは不可能で、万年雪の地帯へ登つて行くことも出来ない。これは嶮しさのためで、氷の層が簿いわけである。アルプスにおけるような氷河の厚さが五〇〇米にも及ぶ氷の堆積は見られず、ところどころ氷河の中に露岩がみられ浅いことを示している。そしてクレバスによつてできた迷路によつて表面が凹凹になつているところではその端が崩壊している。無数の氷雪崩が岩壁の基部に落ちて雪崩氷河を形成している。北東にあるシウラ氷河はその種のうち最大のものであり、氷は砕石によつておおわれている。モレーンによつて出来たカバーは、標高が四二四五米という低さにさつて、氷河が溶け去るのを防いでいる。他のところでは、雪崩氷河は間もなくこの地方の熱帯の日射の犠牲になつてしまう。

これらの氷河を登路として考える場合はどうであろうか。稜線に達するまでの最初の部分は定石どうり氷河がルートとして撰ばれるれけれども、前述のようにはげしい陽先、夜間の寒気によつて、融溶、凍結が繰近され、氷河全体がクレバスの多い凹凸な迷路となつている場合が多く、中心部を登攀ルートとすることはほとんど困難で、端が登られることもある。一九四〇年のエルパツハ氷河の登攀はこの一例である。

近年C・Hにおいても氷河は著しく後退しており、モレーンによつて出来た高い壁は、以前の氷河の範囲を明瞭に示している。氷河の大きさは約一キロほど短くなつた。アルプスと同じように、氷河は十九世紀の中頃から後退を始めていると仮定されるけれど、一九〇九年にはじめてW・シーベルスによつてエルバツハの東面から

ら写真がとられた。一九三六年と比較して根本的変化はこの期間には起つていない。一九二〇年頃アルプスや、コルデイレラ・ブランカにおいて起つたと認められる氷河の前進が、C・Hにも影響があつたのではないかと思われる。

一九三六年と一九五四年の間に起きた変化は可成り明瞭に指摘できる。この期間には、大きい氷河は多少後退したにすぎないけれど、小さいものは後退した。ツアクラ・チコ北西下の氷河は好例である。一九三六年には、その氷河は四七五三米のモレーンの底まで延びていたが、今では尖端は溶け去つて、わずかに高い岩壁をおおつている。エルパツハ東北の氷河も低いところでは崩壊をはじめている。多くの氷河が後退した反面一九三六年から一九五四年にかけて前進した氷河は一つとして存在しない。

∧湖∨

アルプスの風景が氷河の後退によつて美しくなつたとは云えない。百年前には氷河は緑の牧場と接していたり、森林の間にまで入りこんでいたが、後退してしまつた後には、広い砕石の地帯が残つただけである。同じことがアンデスにも云へるが、多くの渓谷、就中、C・Hのようなところでは、氷河が後退を始める以前に、高くそびえたつ岩壁の麓に溶けた水の集る場所として美しい湖がつくられた。北部アンデスの景観を色どつている湖で、湖畔はよき憩の場所であり、遠征隊に優れた根拠地を提供している。湖の長さは一キロに達し三十ヘクタールに及ぶ面積をもつている。大きな氷塊が崩れ落ちて、小さな氷山のように湖面に浮いている。山側の岸には氷河が湖水の中にまで延びている。一九三六年には小さかつた氷河湖でも三〇〇米ぐらいに大きくなつているものもある。エルパツハ峰北東の四三七〇米の高さにある湖も大きく成長してきた。このように、氷河の舌端が断崖をなして谷の中まで延びているところでは、湖の形態は発達し続けている。湖の深さは一九五四年に測定され、次のような結果を得た。フラウ湖、六九・六米、サンブナ湖、五二・九米、エルシユ湖、四一・一米等である。

この地方の住民にとつては、湖水は風景の美観をそえるものとしてよりも、重大な危険をもたらすものとして考えられている。かつて突然の氾濫により洪水が起つて、渓谷の荒廃の原因となつたこともある。この危険に最も曝されている西側の谷には、幸いに大きな村落はないけれども、わずかな住民に負わされた被害は甚大なものであつた。一九三二年に起つたサンブナ湖の氾濫は、

パクロン狭谷を潰滅させ、遠く海岸の平野に致るまで灌漑作物に相当の損害を与えた。

〈気候及び登攀の特殊性〉

北部コルデイレラの気候の特殊性は、標高よりも、熱帯に位置していることが原因している。ペルーの高所では、一年を通じて雨期と乾燥期に分かれている。乾燥期は冬にあたる季節である。雨期は十月から翌年の四月まで続き、特に一月から三月にかけては最盛期である。山岳地帯は雲が晴れることがなく、雷鳴がとどろき、しばしば多量の降雨があるが、雪は長くは続かない。この期間に蓄積された雪が、乾期ともなれば、太陽の直射を受けてアンデス特有の氷河をつくるのである。五月になれば好天の時期となり、稜谷の上には青空が広がり、登山隊の訪れる季節である。

乾燥期でも天候は変化する。山間では、嵐をともなうような悪天候に見まわれることもある。夜間に降雪があつても、午後までには乾燥したアンデスの空気の中に蒸発して、ほとんど地面から消えてしまう。

南半球にあるアンデスでは、南面が日射を受ける機会が少いわけで、南面は降つた雪は溶けず、底なしの粉雪に遭遇する。したがつて、登路としては敬遠されている。一つ山稜の上でも、左側に出ればアイスバーンという現象も珍しくない。

ペルー・アンデスの日中の短いのも特徴である。夜明けは遅く、夕闇の訪れは早い。行動時間は朝の六時から午後の六時までで、その十二時間が限度である。日没と同時に、厳しい寒気がしのびよる。朝の行動は、陽光が周囲をあたため凍りつくような寒さが去つてからでないと開始出来ない。ビバークも高度の影響とあいまつて耐えがたいであろう。ビバークずれのしたヨーロッパのクライマーが極力避けていることからしてうかがえる。しかし、日本の山との比較が許されるならば、寒さと、夜の長さの点では、日本の厳冬期の条件に近いと云えるだろう。

温度の日較差は五〇店にもなり、日中は、熱帯の日射が強烈で、漆黒の闇と共に零下二五度にも気温は下る。このように、日中は溶け、日向では二五店にも達する。しかし日陰はやはり寒い。夜間は夜には凍る現象を絶えず繰り返して、アンデス特有の美し

い氷雪の裾を形成している。一般にアイス・フルートと云われているものである。こうした大気現象の結果、最も急峻な面も、一年中、氷の甲殻におおわれている。標高五〇〇〇米以上では陽光を最もよく受ける北面だけが岩場を露出している。

ヒマラヤの場合と同様、登攀方法としては極地法をとる必要がある。ヒマラヤよりも標高差は小さく、荒天もひどくないので、多くの整備された前進キャンプは必要としない。B・Cあるいは CIぐらいからラッシュする方法も機動性は優れているかもしれぬが、頂上攻撃失敗の後の再度の試みはむづかしい。これに対して、前進キャンプの確保は一度の失敗の痛手を少くし、安全性と成功の確率の高いことはアンデスにおいても十分通用する。しかし一方においては、地形が極めて急峻であり、技術的に困難で、テントを張る場所が非常に限られる。このため現地のポーターを利用することはできず、隊員自らが登高に必要な食糧、器具の荷上げを行わねばならない。インデアンのポーター達は、体質的にはすばらしく高所に適しているのであるが、実際には、全く無気力で、保荷をしたがらない。

アルプスの登攀の場合と同じく、クライマー達は、非常にアクロバテイクな登攀をしなければならないような場合もある。登攀記録のなかに、ルートの部分的な困難さのグレードの表示として、五級或は六級と云う表現が見うけられる。

氷におおわれたこれらの山々では、岩登りをすることは例外的である。ヒリシャンカのように、極めて困難な岩場を突破しなければならない場合もあることも事実であるが、六〇〇〇米の高度で酸素不足のこともあり、ヨーロッパの大岩壁の登攀のような形式をここで求めることは無理である。従つて、もつぱら岩から形成されているいくつかの北壁は、長く未登のまま残るであろう。

プスカントウルパの北面の如く、ヨーロッパのドロミテのバットレスをはるかにしのぐスケールを持つているが、最初のピトンが打込まれるのは、先の話であろう。

一般に熱帯アンデスの高峰は、ほとんどと云つてよいくらいの氷の登攀である。急峻なピークの傾斜は七〇度にも達しているから、極度にデリケートな氷の登攀をしなければならない。斜面の急傾斜による登高による困難さは、陽光が非常に照りつける北面では、氷がやわらかくなり、ステツカットも容易で、アイゼンもよく効くので減少している。

しかし、逆の点からみると、アイス・ハーケンを十分にくいこませることができず、確保が不安定になる。他の側面では、恒久

的寒気のため、雪はやわらかく、表面は全くの粉雪である。こうした雪が完全にくつついていて当然雪崩れるような斜面でもずり落ちない。これもクライマーにとつては手強い障害物で壕を堀るようなラッセルをしなければならず、その下に青氷が待伏せいる場合もしばしばある。このように殆んど氷雪に終始する。

参考文献

1 The mountain World 1954, 1958—1959
2 Cordillera Huayhuash. by Hans Kinzl
3 The ascent of Yerupaja by John Sack
4 Amercan Alpine Journal. 1952
5 Cordillera. Blanca by E. Schneider H. Kinzl
6 Revista peruana de andinismo 1956—1957

＜遠征計画＞

われわれがアンデス遠征の夢を持つに至つたのは、前章までのささやかな研究の結果がすべてを説明してくれると思う。牧歌的な広大なパンパス、濃紺の湖に映える氷の峻峯など、すべてアルプス的な調和をもつたクライマーのメツカである。その上、南米大陸と云う、未来の国への憧憬も魅力的な要素である。しかし、このためには解決しなければならない問題も少くない。技術的な点では、アンデスの山は氷の登攀に終始すると云われる。ヨーロッパのクライマー達をたじろがせるほどの氷の悪場を、日本の冬山で習得した技術で克服することが出来るか。迷路の多い氷河をいかに突破するか。しかしこれらは現実に直面してみなければ解答は得られない。一方、ワイワッシュ山群自体、開拓期を終えて、すでに六〇〇〇米級の未登峯はないが、残された登路が五〇〇米級の山であろうと、より困難なバリエーションであろうと、真のアルピニズムの発展は今後に期待される。

将来のアンデス全盛時代にそなえて、実績と伝統をつくり、やがて、京都大学のカラコラムのように、アンデス山脈をわれわれ

のハイマート・ゲビートにすることが夢である。

具体的内容に立ち入れば、アンデス登山の特異性から、遠征隊の規模及び登山方法は、自から限定される。しているように、ヒマラヤで必要な組織的チームではなく、気軽な小遠征隊で十分である。登山だけを目的とした場合には、なおさら機動性に富んだ小人数のチームが有利である。

計画の内容となるべき、人数、日程、の概略を以下に示す。

㈠、人員

隊長……一名

隊員……四名

構成隊員の人数を明記したのは理由があるわけでなく、費用試算を一応五人と仮定して計算したためである。

㈡、登山日程

一九――年

五月一日　横浜出港

六月中旬　リマ（カヤオ）到着。五日間接渉事務、入山準備のためリマに滞在。

六月中旬　リマ出発。ウアウラを経て、オヤンに到着（トラック にて一日行程）。オヤンにてキヤラバン編成、物資調査のため に二日間滞在。

六月中旬　オヤンを出発。ビコンガ湖及び三つの峠を越えて、エルパッハの東面カルウア湖付近の四〇〇〇米のところにB・C建設。

六月下旬　十五日間の予定で高度馴化を兼ねてカリニセロ（五九八七米、未登峯）の登攀。サラポ氷河を経て三つの前進キャンプを進める。

七月上旬　B・Cにて三四日休養。

七月中旬　二十日間の予定でエルパツハ（六六三四米）を東面から攻撃。
八月上旬　B・C撤収、リマへ帰着。
九月中旬　帰国。

追悼

一　中川孫九郎

二　村尾金次郎

山の矢作太郎君を想う

渡辺九郎

奥野君の追憶

奥野綱重氏の追憶

——山岳部創立の頃の彼——

中川孫一
（一九二五年卒）

四月の第三日曜の昼近い静寂を破つて、電話のベルがけたたましく鳴りわたつた。受話機を耳にしていた三男が
「お父さん、名古屋からだよ。」
と告げた。私は、名古屋支店で日曜から何事がおこつたのかと思つた。でてみると、それは名古屋針葉会の幹事が、奥野君の急死を告げる電話だつた。
「高血圧で昨夜亡くなられました……」
突然の悲報に、私はしばし呆然とした。次の瞬間広い顔と白い歯並の山友達のイメージが脳裡に浮んだ。後で、五十嵐君にきいた話によると、彼は、去年の秋高血圧のため倒れて入院したが、その後快方に向つたので、自宅で療養を続け、最近は家の中を歩くぐらいはできるようになつていた。最近、名古屋に出張したとき、会つてくればよかつたと、つけ加えた。
あの心臓男が、心臓麻痺でなくなつたと思うと、全く不思議なような気がした。

×　×　×

大正十一年の夏休みも近い或日のこと、金田近二君が、次のような相談をしかけてきた。
「専門部の奥野という男が、予科と一緒に山岳会（同好者の集り）を作ろうじやないかといつてきている。白馬班、針ノ木立山班、燕槍班を旗上げのプランにするそうだ。どうだ、参加しようじやないか」
この年の春、妙義榛名の修学旅行があつて、そのコース下検分の委員に選ばれた私は、妙義で雇つた根本というガイドが、北アルプスでガイドをしていたことを自慢（？）して、私を馬の背というナイフリツジの岩峯（普通コース外）に案内して、
「あなたなら、北アルプスは大丈夫だ」
と折紙（？）をつけてくれたことから、今年の夏は北アルプスに登りたいと考えていた矢先へ、山岳会組織の話であるから、渡りに舟とばかり賛成して、結成に取りかかつた。学生集会所兼食堂の壁（天井と長押の間）には、模造紙を何枚もつぎ合せて、墨痕も鮮かに、登山を礼賛する長文の檄文が貼られた。文案は奥野、主催者は一橋山岳会有志。
私は燕、槍班に加わつた。班員は予科三年、金田近二、中川

孫一、予科一年、吉沢一郎、五十嵐数馬、三富福之助、黒瀬保。リュックサックは、既製品などは勿論ありはしないので、三田の赤羽橋の水野という天幕屋に注文して、防水ズックの四ツポケット（側二つ、前二つ）の最新型（？）で、一杯になると、蟇が腹をふくらましたように、横巾が広くなるという、今流行のキスリング型とは、凡そ正反対のスタイルだが、これが奥野式のニューフェースだったのである。雨蓋の中央に、赤ラシャで作った予科の徽章を縫いつけた。足拵えといえば、登山靴など無論ないので、草鞋脚胖、ピッケルに代る金剛杖といういでたち。汽車は、今の飯田町貨物駅が中央線の始発駅だった。燕から槍へは、去年開いたばかりという喜作新道（西岳―東鎌尾根）を通り、上高地から焼岳へという予定コースを平凡とばかり、前穂高に切替え、それが、その年の一番槍（雪渓が処女雪だった！）という殊勲（？）をあげるなど、これがキッカケとなって、その後、多数の名登山家（？）を生み、商大山岳部が誕生することとなった。

実行家の奥野君は夏山の登山だけで満足していない。冬になると、赤倉にスキーの合宿を始めた。そして、学生だけでなく、如水会の先輩も勧誘した。それを足掛りとして如水山岳会を作った。その八カ岳登山に、私は彼と同行した。（これが彼との山行の最初であり最後である。という方であり、私はずっと東京在勤だった）。

昭和二年の十月だったと思う。私はもう社会人の二年生であった。その頃の小海線は、佐久鉄道という私鉄で、小海が終点だった。初日のコースは、松原湖を経て本沢温泉泊りである。歩きだして間もなく、大珍事が発生した。一行中の一名（多分、山根春衛氏のように思う）が喀血したのである。病を押して参加したのか、自分も知らないうちに罹患していて、山登りというショックで発病したのかはきくことができなかったが、その急救処置のために一行は二つに分れ、先輩班は先発し、私達若い者はあとになった。何よりも幸なことは、小海の町に近かったことと、友人と二人連できていたことであった。看病と帰京への付添を友人に託して、後発班が歩きだしたときは、暮れやすい秋の陽ざしが、大部西に傾きかけた頃であった。

陽のあるうちにと、急ぎに急いだが、ついに、本沢温泉近くの森林帯にさしかかった頃、陽はトップリと落ちてしまい、灯火の用意のあるのは、一行中皆無という最悪の事態となってしまった。ええままよ足探り行進とはきめてみたものの、道不案内の無灯火行進での木の下暗は、真の暗黒で　ポケットから取出したハンケチが、全然見えない。これでは、いつ崖下に顛落

するかも知れない。一行は相談の上（声だけがきこえる……）樹下にビバークと決心（？）して、リュックサックを手探りで開け、防寒具の取出しにかかった。すると、灯火が見えるといいだす者がある。ホットして、前方を見ると、木の間にチラチラと灯火が見える。先着の奥野が、注意深く宿から迎を出したのであった。そこから、本沢温泉までは、僅か半里の行程であった。

宿について間もなく雨が降りだした。森林帯のビバークのことを考えてゾッとした。しかし、一夜明けると、快晴となり、ゆうべの雨は初雪となって、八カ岳連峯は、美しい処女雪につつまれた。

×　×　×

奥野君の急逝をきいて、惜しい男を死なせたと思う。そして、彼の死は、八カ岳の美しい初雪と共にいつまでも私の記憶から去らないのである。

（一九五九、八、一）

矢作君を想う

村尾金二（一九二七年卒）

昭和三十四年八月七日、矢作太郎君がなくなった。

あの特徴ある丸い顔。

笑いながら話をする時細くなる目。尖らす様につき出した口元から次々に飛び出す警句。

ゆったりした身体を少しそらす様に、鷹揚に動かす歩きぶり。

あのにこやかさの中に、思いがけない鋭い判断で処置する機転。

ジッと目をつぶると、その人柄や色々な事が次々に思い出されてくる。

その思出は先づ山につながる。

矢作君とは大正十一年東京商大に入って、山岳部での知合いである。古い針葉樹でも調べなければ分らないが、多分予科二年の夏始めて燕から槍へ行った時が一しょだったと思う。何しろ私は始めて山らしい山に登った時だったが、矢作君はもう可

成り山での経験があったらしい。中房に泊って合戦沢から上って行った時、僕にはまだよく慣れてない五万分の一の地図を開いて、今この辺だからこの急な登りを登ればもう直ぐだといった様な地図の見方を教わった事を覚えている。槍から雨の中を上高地に下りて徳本峠を越して帰った筈だがその間の事は余り記憶がない。それから大正十四年の夏、三伏峠から赤石岳へ向う途中、吉沢一郎君と三人で例の小西侯の遭難をやって、三日許り豪雨の中を乏しい食糧でビバークして助かっている。実は私もその時同行を誘われたのだが、その年の三月、岩菅山にスキーで行って帰りに足首を捻挫して治療中だったので、一しょに行けず話丈け聞いたのである。あの頃は余り台風の事は云わなかったが、丁度、今の第何号かに当る大きな雨台風に山の中であったのだろうと思う。助かってから、あの太った矢作君の脚が干物の様に細くなって写ってる写真があった。

十二月と三月は大てい野沢でやったスキーの合宿では盛んに活躍していた。然し商大のバスケットボールの全盛時代を築き上げた人丈けに籠球部の方が忙しくて、夏山での記憶は割に少い。

それが戦後の昭和二十三年、三鷹の駅でパッタリ会った。二三日前に三鷹へ越して来たばかりだと云う。私はすぐ近くの武蔵境に住んでいるので、時々駅で会ったり、家に訪ねあったりした。

一度、山へ行き度いな、何処にしようかと相談を重ねていたが、十文字峠にしようと話がまとまった。昭和二十六年六月十日の朝（幸い私の金峰山の地図の裏にその時の記録が書いてあった）夜行で来て小淵沢で乗換えて小海線を走ってる時、清里のあたりだったか、ゴトゴト走る汽車の窓から手を延ばせば届く様な所に、真白な可愛いい提灯行列、鈴蘭の花が高原の爽やかな朝の空気にゆらいでいた。それ丈けでも久し振りに見る大自然の美しさを喜んだ。

八時四十五分、信濃川上でバスに乗り換えて千曲川沿いに梓山に向う。梓山は大分開けていて昔のおもかげがないままに、そのまま川を遡る。千曲の源流を渡る処で遅い朝食をすますと峠の上りにかかる。少し息を切らして登ると二時間もしない中に峠に出る。十三時半、ユックリ昼寝をしたり、写真をとったり久し振りに見る秩父の山々を楽しむ。四里観音、三里観音と長い道を下りて行くと白泰山のそばでパラパラと雨が落ちる。その雨雲をすかして覗岩から八ケ岳が白く光って見える。六月の夕闇もほの暗い二十時過ぎ栃本大村旅館についた。

その夜風呂から上って食事の時お酒をつけて貰う。何を話したか好い気持で飲み終ると、矢作君が人さし指を一本立てて見せる。僕は黙ってうなづく。何も禅問答ではない。もう一本宛追加の意味だ。それが終ると今度は僕が指を一本立てる。近来にない好い気持になって眠りについた。

此の旅は、誰にも会わない、たった二人の楽しい山だった。

矢作君は陸軍少尉だった。私は昭和十八年一月シンガポールに行っていた。十九年の夏頃矢作君がシンガポールによったと云う事を現地の同級の人から聞いて、五六人集まって一夕、宴を設けた。数日滞在して鉄道でビルマへ向けて出発。タンジョンパガーの駅に見送りに行ったら酷熱の下、貨車で行くのだと云う。激戦地のビルマ戦線へ向うのでは、もう見納めかと思うと淋しい気がしたが、それでも元気でたって行った。然し終戦後やがて帰って来てビルマ戦線の話をよくしてくれた。なかなか要領の好い軍人だったと思う。

元気一ぱいで病気を知らなかった彼が、三十三年の暮、肋膜に水が溜って東大附属病院に入院。三十四年二月頃退院。病気は一進一退の模様であったが、実はこれが癌であったのだ。訪ねて行くと肋膜の癒着の痛みを訴えていたが痛みのない時はよく面白い話をした。もう大分痛みもなくなったから、少し歩く練習をして一しょに軽い山へ行ってから仕事をしようと思うと云つていた。然しその機会はとうとう来なかった。思えば残念な事である。

（一九六〇、四）

山の矢作太郎

——小西侯の遭難——

渡辺九郎

（一九二七年卒）

大正十四年七月五日

矢作を加えて三人は、高遠から市野瀬へ来た。静かな村は蚕で忙しく、橋本屋の二階に上ると雨が降っている。桐の葉が音を立て、前の家の土蔵の窓に古い鎧が出してある。

六日

三峰の流れを渡って小瀬戸の湯場に着くと又降り出した。渡渉は足が切れるようで、大曲を過ぎ小里沢の出合を曲ると、河原が広くなって荒川渡に着いた。小舎も人も河原も水も雨に煙りながら暮れた。

七日

終日雨で荒川渡、岩魚を捕ることを覚える。

八日

南北荒川の合流点から渡渉数回、広河原に着いた。南沢を登り出すと、黒木の下に点々と残雪が閃き出した。霧の晴れ間に南沢奥の南沢、奥の北沢の雪渓が二本立っている。奥の南沢、矢作はアイゼンをつける。吉沢はトリコニーにはきかえる。滑らぬように気をつけるのも一年振りだ。一時間も過ぎると、アイゼンなしの僕が滑ったので矢作はアイゼンを片方わけてくれた。霧で上も下も見えない。五百米は登ったと思われるが何の変りもない。元気な矢作が突き立つ雪渓にピッケルを振って先頭に立った。頑張って遂に尾根に出た。甲州側から吹きつける風に押えつけられた這松の中に斑らな大きな雷鳥が遊んでいた。がらがらな岩の登りを前荒川岳に達し、一度下って塩見の登りにかかる。波のように寄せる霧に耐えて頂上に出ると、三角点の傍に錆びた缶が震えていて、武田久吉、木暮理太郎連名の名刺が入っていた。前荒川に戻って塩見沢を中俣へ下る。這松を泳ぐ頃には雨は一段と激しくなって立ち止ると、耐らなく寒いので走るように降ると、つるつるな急な草地でみんな一斉に転んだ。黒い森を割って白い河原の中俣のドウが見える頃には小降りになって、目をあげるとふっくらした山肌に残雪点々たる小河内岳が小雨の夕空に浮んでいた。

九日

中俣の沢を遡って三伏峠へ出ると、塩見は岩の肩を怒らせて今日は青空に聳えている。小河内岳に出ると頭を厚い霧にかくした悪沢が幾条もの沢を雪に埋め、中俣の谷を距て、蝙蝠は梢低く黒い。板谷岳を過ぎて、密林に入る頃には又雨になって、小西俣の頭の手前では横なぐりの雷雨になった。三人は尾根を行く強力達と別れて北に巻いたが、巻き終って西河内岳との鞍部に強力達は現われなかった。三人と渡って巻いたのかと声の処へ戻ったがいない。物凄い豪雨だ。目の前の雪の詰った沢を降って小西俣本流の出合いを遡る事を考えて三人は、急な雪の沢を水の迸り出る処迄一気に滑り降りた。矢作を先頭に右に左に水を渡って夢中で降ると、右から大きな沢が入って来たので直ちにこれを遡った。百米も登らぬ内に三人は思わず立止った。暗くなった沢の奥に五丈に余る滝が連日の雨に有り余る水を物凄い響を立てて落ちている。滝の両側は急な岩の壁で三人は出会い迄引返した。合流点は一寸した河原で疎らな若木の茂みもあった。もう七時を廻っているに、前の若木を柱に、二枚の木ゴザを屋根にして小舎を造る間に僕が木を伐る、吉沢が焚火をはじめる。思い出したようにサ

ーッと雨が来るが、焚火は盛んな焔をあげはじめた。焚火は吉沢に限る。天気になったら大聖寺平へ出るか、三伏から大河原へ抜けるかと相談したが、食糧のない三人が一日で行けない登りを無理するよりも、強力達の探しに来るのを待つ事にきめる。もう十時だ。持っている衣類を全部身につける。こわれたと思った矢作の懐中電灯のついたのは喜しかった。

十日

寒さに目が覚める、午前三時、横なぐりの雨だ。吉沢と二人焚火にかかり、矢作は木を伐りに出る。十一時雨も風も猛烈、三人抱き合う。外で働いた矢作が一番濡れている。夕方迄うつらうつらする。増水した沢の水音で耳が変になる。木ゴザの屋根にたまった水が襟に落ちて来る。寄りかかる岩から水がズボンに流れ込んで来る。暴風雨の裡に夜が来た。十時、最後のソーセージ半本を三人で食べる。

十一日

夜明けと共に雨も風も弱まった。交替で木を伐りに出る。足がふらつき鉈の手許も怪しいので半分位切って身体を寄り掛けて倒す。雨が強くなって逃げ帰って来た矢作の左手首から血が噴き出していた。雨に打たれる度にパッと拡がって手の甲全体が赤く染った。

焚火もとうとう消えてしまった。

この日三人は奇蹟的に救われた。

小西俣に出て尾根を高山へ降る頃に、何日振りかの陽が照り出した。白樺の幹は夏の陽に輝き、大河原の村に入った谷に勢よく落ちている。沢という沢は肥って小渋

製材小舎で腹を拵へ、服も着物も乾して、大河原の村に入ったのは夕方だった。矢作は何事もなかったように元気である。

（一九六〇、四）



記録

一九五五・四——一九六〇・一

昭和三十年度（四月～三月）

雲取山

岡垣治雄、宮川守久、茂木俊明

四月十八日　雨

夜国立を出て氷川荘に泊る。

四月十九日　曇

唐松林道を経て雲取山頂へ。雲取小屋に泊る。

四月二十日　晴

昨夜来の霧氷を眺めつつ、七ツ石山を廻って下山。花見のような気分だった。

（岡垣）

新入部員歓迎山行

（奥多摩）

参加者　吉田義則、甘利仁朗、南竹治郎、佐薙恭、松尾寛二、吉田、池田、池亀、渡辺、山中

瀬田宏、山本健一郎、南亮進、柴崎新、中村保、各務謙蔵、海隼雄、城戸剛、山田邦行

四月二十三日　立川――日原ヒュッテ（八・二〇）――ソバ

午後二時立川駅集合、十六時二十分日原ヒュッテ着。十九時から二時間河原で火を囲んでコンパ。

四月二十四日　高曇　日原ヒュッテ――（一七・三〇）（上原）

ツブ山（一二・〇〇――一二・四五）――古里駅（一二・一五――一五・〇〇）――川乗山（一四・

五月の上高地（明神東稜、西穂稜線――春山偵察）

吉田義則、山本健一郎、南亮進、上原利夫、宮川守久、西海隼雄、城戸剛、山田邦行

四月二十八日　島々からバスは沢渡まで。そこで折よく便乗したトラックは御叮寧に白骨まで我々を運んでくれた後、中の湯へ向う。午後早くホテルに着き、中の瀬にテントを張る。

四月二十九日　曇　上高地――明神東稜――前穂――上高地

三時に起きて五時半には揃って出発。快晴だったが夜が明け

るに従って高曇りとなって来る。養魚場から下宮川谷に入り九時前瓢箪池に出る。勿論まだ深雪に覆れている。曇天ながら雲は高く遠く富士まで望見できる。ここで大休止ののち、吉田、山本、南、上原、宮川の五人は春山の偵察を兼ねて東稜を登り、他はここから再び明神池へ下る。東稜の五人は、少々腐れ雪ながら、余り変てつのない雪稜をつめて十二時半主峰の手前のコルに至る。主峰のとっつきはちょっとした岩場になっていて、ここで一ピッチだけアンザイレン。尚傾斜のきつい雪の斜面の登高を続けて二時半明神主峰上に立った。偵察旁々とは言いながら意外に時間を費した。主峰の登りにかかる頃からガスに巻かれていて時々雪がちらついて何一つ見えない。三十分足らずで奥明神沢のコルに着いたが、吉田と上原はそのまま前穂へ向い、他の三人はここから岳川へ下る。途中ガスの晴れ間から西穂、奥穂がちょっと顔を出したが、前穂頂上ではまた何もかもかくれてしまった。下りにかかったのは既に五時すぎ。一枚岩の右の沢をとって一時間余りで岳沢ドンヅマリ。いつの間にかガスがすっかり晴れて穂高の雪肌が半月に照し出されて美しい。どうせ夜道を辿るのだからというわけでここで大休止。ぶらぶらテントに帰りついたときはもう十時をまわっていた。

四月三十日　一片の雲も見えない快晴、テントの外へシュラフを持ち出して寝ころび、山を眺めたり本を眺めたり。少し風があるが本当に暖い。午後から吉田、西海、山田、木戸はちょっと焼へ出かけ、五時頃帰る。

五月一日　朝テントから顔を出したら辺りは一面白一色の雪景色と変っていた。午前中音もなく降り続けて約五寸ばかり積った。終日テントの中でごろごろして過す。

五月二日　上高地――西穂――天狗のコル――岳沢――上高地

新雪がまだ昨日のままだったが、四時にテントを出て西穂へ向う。西穂山荘の附近は約一尺程の新雪だったがここまで先行パーティーがあったので登りは比較的楽だった。七時半山荘を辿れた。そこからあとにしたが独標少しの手前まで踏みあとを辿った。主峰の登りにかかる頃からガス先は膝までのラッセルを続けながら十時二十分西穂頂上に立つ。少しずつ空もかげって来て稜線の風は割に冷い。吉田と上原はここからなお稜線を辿ることにしたが、頂上少し手前で小憩のとき、上原のサブからちょっと出したコッペパンの包みが、ビニールの風呂敷に入ったまま、ころりころりところがり出しあれよあれよというまに蒲田の谷へ落ちこんで行ってしまった椿事（？）のあとだけに食糧の方がちょっと心細くなってしまったので、ここから引き返す他の連中の分をできるだけ頂戴してどうにかこうにかジャンまでの予定で出発した。頂上で

初めてアイゼンに代えたが、新雪と旧雪のなじみが悪い上にどちらも腐れ雪なので足元のコンディションは最悪。細いところでは足を置くと一歩毎に右に左に新雪部分が雪崩れて行く。下りの急斜目は全く足の置き場がなく、西穂から三つ目のピークの下りに一回、間の岳の下りで二回、豚のケツにて一回、夫々アプザイレンで通過したが、天狗のコルに降り立ったときは既に四時半をまわっていたので、ジャンはあきらめて、天狗沢を下り八時すぎテントへ帰った。この日山本、南の二人は大滝小屋へ向ったが、新雪の悪路に閉口して午後早く引き返して来た。また佐薙と中村（T）は鹿島槍からの帰路、上高地へやって来た。

五月三日　午前中、宮川、城戸、山田の第一陣が引揚げたあと、吉田、西海、上原は午後ゆっくり腰をあげる。途中時々小雨にあてられながら坂巻へ急ぐ途中、今日入山して来た柴崎とホテルの木村氏に会った。今日は坂巻にバスが待っていた。

（吉　田）

鹿島槍ケ岳

佐薙恭、市畑進、茂木俊明、中村保、岡垣治雄

四月二十八日　松本――大町（バス）――源汲――鹿島部落――冷沢、大川沢出合、

佐薙、市畑、茂木が先発、冷沢、大川沢出合に幕営。

四月二十九日　曇　T中、岡垣が合流。細いところでは足を置くと一歩毎に右に左に新雪部分が雪崩れて行く。下りの急斜目は全く足の置き場がなく、西穂から三つ目のピークの下りに一回、間の岳の下りで二回、豚のケツにて一回、夫々アプザイレンで通過したが、天狗のコルに降り立ったときは既に四時半をまわっていたので、ジャンはあきらめて、天狗沢を下り八時すぎテントへ帰った。この日山本、南の二人は大滝小屋へ向ったが、新雪の悪路に閉口して午後早く引き返して来た。また佐薙と中村（T）は鹿島槍からの帰路、上高地へやって来た。

五月三日　午前中、宮川、城戸、山田の第一陣が引揚げたあと、吉田、西海、上原は午後ゆっくり腰をあげる。途中時々小雨にあてられながら坂巻へ急ぐ途中、今日入山して来た柴崎とホテルの木村氏に会った。今日は坂巻にバスが待っていた。

（吉　田）

木曽駒ケ岳

沢木一夫、他二名

五月一日　雨後晴　上松――敬神滝――五合目金懸小屋

五月二日　晴　五合目――頂上――千畳敷ホテル

七合目あたりから残雪が現われた。空木岳まで縦走の予定であったが、宝剣の下りが重荷の為越せず、千畳敷に下りる。

五月三日　雨　停滞

五月四日　雨後曇　千畳敷ホテル――中御所谷――赤穂

日数の都合から縦走を断念、雨中赤穂に下る。翌日帰京。

×××××××
谷川合宿
×××××××

参加者　リーダー吉田義則、甘利仁朗、佐薙恭、松尾寛二、宮川次夫、鈴木克夫、山本健一郎、柴崎新、岡悦郎、清水啓、篠原敏弘、岡垣治雄、市畑進、茂木俊明、西海隼雄、加地幸雄、上原利夫、小林、大庭、長田、長谷川、松本、松木、山田邦行、城戸剛、沢木一夫、宇田川徳治、市川陽一、山田成人、山中、（先輩）望月敏治、渋谷一郎

五月二十七日　二十三時五十分上野を発つ。

五月二十八日　曇

マチガ沢出合に設営、六時十五分。六時三十分、甘利、岡垣と山本、柴崎の二パーティは一の倉南稜に向い、七時三十分には松尾、茂木、市畑、上原は東尾根、他はマチガ沢に向う。

南稜（山本、柴崎パーティ）マチガ沢出合（六・三〇）――南稜テラス（八・三〇―九・三〇）――登攀終了（一三・一〇）――グリセード練習（九・四〇―一二・〇〇）――一の倉岳（一五・〇五）――芝倉沢出合（一六・一五―一七・〇〇）――マチガ沢出合（一八・二〇）

山本パーティはリッヂ通しに登り、甘利パーティは六ルンゼ側の側壁を登った。

この日芝倉沢で死んだ兎をみやげに持って帰って……。

東尾根　マチガ沢出合（七・三〇）――一の倉沢出合（八・一〇）――シンセンのコル（一〇・一〇）――東尾根―オキの耳（一二・〇〇）――肩の小屋（一二・一五）―西黒尾根――マチガ沢出合（一四・三〇）

一の倉沢一の沢の雪渓はズタズタの態。

マチガ沢　マチガ沢出合（七・三〇）――マチガ沢三の沢右俣（九・〇〇）――雪渓上部でグリセードの練習（九・一〇―一一・一五）――昼食（一二・〇〇）――マチガ沢本谷遡行――谷川岳頂上（一四・一五）――西黒尾根―マチガ沢出合（一七・〇〇）

五月二十九日　雨

マチガ沢出合（九・〇〇）――一の倉二の沢（九・四〇）――グリセード練習（九・四〇―一二・〇〇）――マチガ沢出合（一三・〇〇）――土合――湯檜曽

雨の中でグリセード練習をやり、この日マチガ沢をつめて登頂された望月、渋谷両先輩を加え湯檜曽林屋で三時間休憩、全員無事帰京。

×××××××
剣　沢　合　宿
×××××××

参加者　チーフリーダー吉田義則、佐薙恭、甘利仁朗、宮川次夫、高崎治郎、鈴木克夫、春日井実、石和田四郎、瀬田宏、中村幸正、山本健一郎、中村保、柴崎新、南亮進、篠原敏弘、岡悦郎、岡垣治雄、市畑進、上原利夫、茂木俊明、宮川守久、加地幸雄、小林博、朝木慶司、大庭将六、長谷川穣一、沢木一夫、景山豪治、山田邦行、宇田川徳治、市川陽一、松木実、山中淑　以上三十三名

七月十五日

高崎、岡垣、上原、宮川（守）、大庭、長谷川、岡、市川、宇田川の九名が、米の背負い出し部隊として十七時四十五分上野発で先行し、高崎で本隊に合流、急行「北陸」にて富山へ向う。

七月十六日　快晴　富山――美女平――天狗平

十時、上ノ子平でバスを降りて歩き出したが、寝不足と酷暑で、初めからあごを出すものが続出するので、途中から二パーティーに分けて、一隊だけ先行する。後続隊は荷重に馴れないものが多かったせいもあって、途中昼寝の時間まで作ったりしていたので、最後まで大へんなスローピッチ。午後七時すぎ、全員天狗平の幕営地へ到着して合宿の第一夜を迎えた。

七月十七日　快晴

天狗平テントから、中村（T）以下七名は縦走用食糧を一の越まで、他は別山乗越まで、夫々荷上のため一往復。吉田以下五名は直接剣沢に入り、幕営地の選定などに当る。この日二度目の雷鳥沢の登りは、ただでさえ楽ではないところだが、途中で日はとっぷりと暮れ、わずかにライトに照らし出された自分の足元だけを見つめて登る。一方剣沢に先行した連中は明るいうちにせっせと整地してテントを張り、夕飯の準備などして待ったが、午後八時近く、漸く乗越から下って来る長い長いライトの行列が見え出した。この日甘利、鈴木は弘法小屋附近のデポからの荷上げに下り、又高崎、山田（邦）、沢木の三人は遙々昨日歩き出した上の子平まで下って、後発隊の持って来た米を背負い上げる仕事に当った。後発隊のうち中村（Y）、柴崎は皆と一緒に剣沢まで入り、残りの三名は天狗平に泊る。

七月十八日　快晴

入山の疲れを回復するため午前中全員沈澱、午後から三パーティー六人が別山バットレスで岩登り、他は別山頂上まで足ならしとグリセードの練習。後発の山本、南、加地の三人、天狗

から剣沢テント入り。

七月十九日　快晴

この日より、行動スケジュールに入る。

八ツ峰上部――佐薙、南、茂木

八ツ峰下部――吉田、山本、上原、加地

長次郎側から二峰の右へ出るつもりで登ったが、上部の草つきへ出て、ちょっと左へ寄りすぎて二三峰のコルへ出てしまった。逆に歩いて二峰の頭を踏み、一峰は省略する。四峰の下りに五米、五峰でまた十二米程のアプザイレン。五六のコルから下る。長次郎の出合からテントまでの登りは、帰り途だと思えば益々長く感じられて、全く消耗させられる。

源治郎尾根から平蔵下降――鈴木、宮川（次）、篠原、沢木、大庭

源治郎二峰平蔵側壁――甘利、柴崎、中村（T）、市畑

八ツ峰六峰Cフェイス――中村（Y）、岡垣

このほか、高崎以下九名は三の窓テント用の荷物をもって、一般ルートを登り長次郎を下降、前記甘利以下の六名は夫々の登攀後直ちに三の窓に向いテントを設営、明日からのチンネにそなえる。

丁度この朝ぐらいから、何やら原因の知れない悪性（?）下痢患者が数人ずつ出て沈澱するようになったが、結局「自分の食器はよく洗ってから食べること……」というようなところで落ちついた。いろんな説がたくさん出たが、

七月二十日　晴　午後かみなり

八ツ峰上部――鈴木、沢木、市川

八ツ峰下部――高崎、篠原、朝木、長谷川

源治郎尾根――吉田、茂木、上原、山田（邦）、景山

三の窓ではこの日から行動開始、左方ルンゼ、日嶺ルート等登攀。

またまた新たに下痢患者が続々発生して、佐薙、宮川（次）、南等が次々と倒れてしまった。

七月二十一日　快晴

連日の好天気、従って連日の行動でみんなヘバリ気味なので、この日は剣沢テントでは十人余りが沈澱した。行動は八ツ峰上部へ宮川（次）、瀬田、山本、篠原、岡、朝木、宮川（守）の八名が出かけ、山本はそのまま三の窓テントへ入った。そのほか漸く回復の兆が見えて来た下痢患者第一号の小林、宇田川が、佐薙と一緒に一般ルートをとり頂上まで足馴らしに出かけたが、少し遅くとりつかれた佐薙はまだ全然おなかに力が入らず、一服剣から一人で戻って来た。

鈴木は十時剣沢テントを出、池の平を経て下山した。テントに残っていても、日中は暑くてとても外には出て居れない位だ。

この日の夕方、中村正司先輩が涸沢で重傷を負ったとのニュースが入った。二日前の出来ごとだったらしいが、詳細は新聞報道の程度を出ないので、とりあえず東京へ電話連絡をとって見ることにした。五時半、佐薙、山田(邦)、長谷川の三名が、室堂へ向った。室堂で連絡不能のときは弘法又はそれより下まで下るべく、必要な食糧等全部携行して出かけたと思ったら、六時頃、単身剣沢入りして来た石和田が、この朝富山から東京へ電話連絡をつけて来たとのことで、中村さんの負傷の程度も大凡知ることができた。この石和田が、つい先程出かけた佐薙以下の三名と、本当にわずかのところで行きちがいになってしまったのは、連中にとって不運なことで、とうとう二日がかりの御苦労とはなってしまったわけだ。

佐薙より三十分遅れて、上原が彼らを呼び戻すべく後を追ったが、連中の足どりも殊のほか早く、雷鳥荘まで追いかけたが遂に呼び戻すに至らず、八時半頃テントへ帰って来た。この間佐薙等は六時五十分室堂に着いたが、電話も電報も共になく、七時十分弘法へ向けて下り長谷川のみ連絡のため剣沢テントへ戻る。佐薙、山田の二人は弘法に至るも連絡のてだてなく、そのまま夜道を歩き続け、午前零時半美女平ケーブル駅に着き待合室に仮寝、翌朝小見まで下り漸く電話連絡をつけることができた。

春日井、石和田の二人が入山し、又三の窓テントから甘利、中村（Y）、中村（T）、岡垣、市畑等が剣沢へ戻って賑かになった。

七月二十二日　晴　夕方から雨

源治郎尾根――中村（Y）、南、岡垣、松木。南は剣頂上より単独にて三の窓テント入り。

八ツ峰下部――宮川（次）、大庭、市川、景山

八ツ峰上部――石和田、春日井、長谷川、宇田川、小林、山中

八ツ峰六峰Cフェイス――吉田、上原、八時にテントを出て、八ツ峰上部行きのパーティーと同行し、十時半長次郎五六のコル下に着く。十一時登攀開始。最下部緩傾斜（約四十五度）二ピッチ、次の二ピッチは完全に這い松こぎといったところである。その上方は約六十五度の多少面白いフェイスクライミングが続く。ルートは比較的やさしく、打ち残してあった古いハーケンをビレイイングピンとして利用したほかは、特に打

つところもない位だった。這い松テラスより上は、リッジから遠く右の方にルートをとったので、左上方のナイフリッジには出ず、三十米約八ピッチで登攀終了。午後一時、六峰上にて昼食をとる。雲間に初めて槍、穂も望まれたが、天気は下り坂に向っているらしく、雲行きがあやしい。二時、六峰発。八ツ峰上部のルートを辿り、三時半頃三の窓の頭。あたりはすっかりガスにつつまれ、時々ポツリポツリと顔にあたる。四時半近く三の窓テント着。テントの中は山本がただ一人、留守を守っていたが、間もなく南も到着して四人となる。早速天婦羅にじゃがいものカラ揚げという大へんな御馳走夜に入って本格的な降りとなって来た。

七月二十三日　雨

剣沢、三の窓にて夫々終日沈澱。三の窓では何よりもラジウスがあり、食糧もとっておきのものばかり豊富に来ているのでまことに快適な沈澱というよりほかはない。雨もさして強くはなく、雨もりも殆んどない。夜に入って一時ガスが晴れると、テントの中に居ながらにして、遙か富山湾に沿う町々の灯、そして、湾内をかすかによぎる船の灯さえ見える。

七月二十四日　曇時々小雨

三の窓では朝のうちまだ小雨が残り、ガスは依然として濃い。明日は縦走出発の予定なので、天候に見込みがなければすぐにも下ることにしようかと思ったが、九時頃から少し晴れ間が出て、後立の連山もやっと姿を現わして来た。そこですぐに朝食をとり、十一時近くなったが、中央チムニーから取付く。忽ちガスが巻いて来て、全く白一色の中の岩登り。自分のパートナーさえ白いものの彼方に見えがくれしているといった感じである。しかも雨あがりの岩はまだ濡れていて冷たい。午後一時チンネの頭に至る。帰路はチンネとジャンの間の雪渓をグリセードしてまことに簡単だ。午後二時、吉田、上原の二人は縦走出発を控えているので、後続の二人を待たずに三の窓発、三の窓雪渓を下る。雨で雪がしまっているので割によく滑る。上部は相も変らずガスで、ニードルが時々見えがくれする。三時半二股を過ぎ、登り路にかかったが、真砂沢までが意外に遠くへばる。剣沢テントに着いたのは午後七時半。

この日剣沢では少人数を残し、別山バットレスで岩登りをやったが、三年の岡が背中に落石を受けたということなので驚いたが、大したことなく、見たところは老人が、ちょっとした肩の凝りにでもとりつかれたかと思われる程度で、まあまあだった。

七月二十五日　雨のち曇

縦走出発の予定だったが、雨のため停滞とする。昨日三の窓から二股を経て真砂沢まで来て、遅くなったためビヴァークした山本、南の二人がお昼頃剣沢テントに到着。漸く三の窓の撤収もここに完了し、全員の集結をみて、剣沢での最後の一日をゆっくり過すこととなった。午後、一部のものはグリセードの練習、他は夫々器具、食糧の整理、縦走メンバーに応じてテントの入替えなどに費す。夕方また小雨がぱらつき依然としてガスが低迷。

入山以来、前半あれだけ天候に恵まれた割には、後半のぐづつきは、多少気分を殺がれたが、明日からの縦走では丁度その反対にうまくゆくだろうと期待しつつ寝につく。

（吉田）

夏山縦走〈その一　剣——槍〉

リーダー吉田義則、佐薙恭、高崎治郎、瀬田宏、岡垣治雄、市畑進、上原利夫、茂木俊明、宮川守久、朝木慶司、長谷川穣一、沢木一夫、山田邦行、市川陽一

七月二十六日　曇　ガス一時晴　剣沢（九・〇〇）——立山——五色ケ原（一八・〇〇）

十日間の剣沢周辺の定着合宿を終り、愈々縦走に出発する。朝のうち多少小雨が残り、天候は依然芳ばしくないが、早々に準備にとりかかる。鹿島鎗へ向う甘利以下十一名が先ず出発し、我々は約三十分遅れ、九時剣沢幕営地をあとにする。思わしくなかつた天気も次第によくなり始めた。一の越では既に荷上げしておいた縦走用食糧をザツクに詰め込む。鹿島へ向う連中は十三時三十分、今日の幕営地平へ向つて雄山谷を下つて行く。浄土にかかるとまたまたガスに包まれ、十七時三十分ザラ峠、五色ケ原も一面のガス。

七月二十七日　雨後ガス　五色ケ原（一〇・〇〇）——友田先輩遭難碑——スゴ乗越——スゴの池（一九・一〇）

四時半に起床するも雨。とにかく食事の用意のみにして空模様を見る。十時にガスの中を出発、予定のスゴまで着かなくても適当なところがあれば今日はそれまでと、うれしいリーダーの言葉にはげまされ（？）て出かけたが、結局は暗闇のドロ道をあえいで、スゴまで足をのばしてしまつた。途中五色ケ原の友田先輩の遭難碑前で亡き先輩の冥福を祈つた。そこはとてものどかな草原の中、美しい磨きのかかつた玉がひとつ、心なしか後輩達の久々の訪問を待つていたかのようであつた。スゴでは小屋下の池の周囲に幕営する。歩いている間数回降雨もあつて、地面はびちよびちよ、薪はみな濡れているしその居住性の

悪いこと！池の水の不潔さは、暗闇が幸いして誰もわからず、ボウフラと一緒に炊いたご飯をうまいうまいで食べたのだから、余計おなかのむかつくのも無理はない。就寝は十二時近かつた。

七月二十八日　快晴　スゴ（八・二〇）――薬師岳――衛平（一七・四〇）

四時半、起きて見るとすばらしい快晴。数えて見ればまる一週間ぶりの快晴だ。パーテイの気持は明るくほがらかに、嬉しさをかくしきれない。薬師のゆるやかな登りも、知らず知らずに高まつてゆく、鳶谷の頭下で昼食をとる。折から通りかかつた某女子大のパーテイ、この辺りでは珍しい女性だけのパーテイだつたが、こつちが道の両側に陣どつて大きな口をパクパクさせていたせいかも知れないが、何とまあそのソツケないことここでリーダー吊し上げの一幕とは相成つた。……十四時三十分薬師岳頂上、薬師峠はテントが只一つ、かすかに夕餉の煙が流れていた。太郎兵衛平の大草原、無尽蔵な乾いた薪、水もま近かに豊富でまことに快適なテント場だ。日没後あかあかと燃える焚火のまわりでハヤシライスの夕食。多少ガスが巻いて来たが半月が頭上に高く星がきらめく、印象的な夕べとなつた。もりもり食つてシユラーフにもぐる。鹿島へ向つた連中は明日が一応予定の最終コースとなる筈、もう大分里心ついてわくわくしていることか。残る二日に天候の幸いならんことを。

七月二十九日　快晴　太郎兵衛平（六・三〇）――上の岳――黒部五郎　三俣蓮華小屋横（一八・三〇）

五時に起床。あと二日ぐらいゆつくり沈澱していたいような太郎兵衛平をあとにして上の岳の登りにかかる。黒部五郎では残り少い食糧の中からみかんの缶詰をとり出し、雪に砂糖を混ぜた即製アイスクリームに入れてほうばる。あまりおなかにはよくないおやつらしいが。この辺りで剣沢以来の下痢患者が又もや発生、殊に南竹さんは朝から既に顔色なく、気の毒な行程だつた。頂上で一時間余り休憩した後、黒部五郎のカールを駈け下りる。五郎平で二度目の昼食をとり、三ツ俣への登りにかかる。一日の行程の後半に控える登りにしてはみないい加減こたえるところである。三ツ俣の頂上は左に巻いて小屋の横にテントを張る。半月をわずかにこえた月が洸々と四周の山々を照らし出して、鷲羽の砂礫の山肌は新雪と見まがうばかり、明日は沢木が都合あつて槍を越すほかは全員半日沈澱としたので夜おそくまで焚火を囲み話に花が咲く。

七月三十日　快晴　三俣蓮華（一六・〇〇）――双六池（一八・〇〇）

縦走中の念願であつた快晴の日の沈澱。遅くまでシュラフにもぐり込んだまま、久し振りの朝寝をたのしんだ。沢木は八時すぎ単身横尾まで下るべく出発する。そこから高校の連中と剣へ折返すとのこと、全く御苦労である。そのあと瀬田と山田の二人が鷲羽から雲の平へ遊びに出かけた。他の者はテントの中にねころんでいる心地よさにすつかり腰が重くなつてしまつてとうとう行かずじまいだつた。朝木は朝から褌の洗濯に余念がない。

四時頃、テントをたたんで双六へ向う。

七月三十一日　晴後ガス　双六池（六・四五）――西鎌尾根―槍の肩（一二・〇〇）

昨日の休養で神経がのびたのか朝は猛烈に眠い。初めの快晴は雲海が動き始めて来るにつれ、次第に蒲田側からガスが吹き上げて来る。西鎌の長い登りも案外順調にはかどつて正十二時槍の肩へ着く。南竹さん一人、この日もまだおなかがシャンとせず軽い荷で尚消耗していた。燕からの縦走者の未だ着かぬ槍はとても静かだ。ここでわれわれの縦走の予定コースも終り、一応解散。

佐薙、高崎、瀬田、長谷川、市川の五人はここから直ちに上高地へ直行、岡垣、宮川、朝木、茂木は一の俣から常念へ向うべく共に槍沢を下つて行つた。残る吉田、市畑、上原、山田の四人はこのまま前穂まで縦走を続けることにして、今日は殺生にテントを張る。

夏山縦走　〈その二　剣――白馬〉

（上　原）

リーダー甘利仁朗、宮川次夫、石和田四郎、春日井実、柴崎新、篠原敏弘、岡悦郎、景山豪治、宇田川徳治、松木実

七月二十六日　曇　剣沢（九・〇〇）――剣沢乗越――雄山―一ノ越――雄山沢出合（一八・〇〇）

雨でのびのびになつていた縦走も遂に出発することとなつた。快調にピッチを進めて雄山に向う。雄山は、さすがに日本三山といわれるだけあつて人出がすごい。一ノ越で、デポしておいた荷をまとめ、槍へ向うパーティと別れて雄山沢を下る。

七月二十七日　雲一時雨　雄山沢出合――平小屋――針ノ木峠

黒部特有の危つかしい釣橋を三度渡り、大きな転石を雨に濡れながら、最後に急登三時間でやつと峠についた。はとても静かだ。ここでわれわれの縦走の予定コースも終り、

七月二十八日　晴　針ノ木峠――赤沢岳――鳴沢岳――岩小屋沢岳――種池

後立縦走の第一日を飾るにふさわしい晴天に恵まれ、三六〇

度の展望をほしいままにしながら足を運ぶ。この辺りは後立の中でも人が少く単調ではあるが気分がよい。暗くなつてから種池へ到着。冷の予定だつたが、ここに設営。

七月二十九日　晴　種池――爺岳――冷池――鹿島槍――釣尾根

昨夜飲んだ種池の水はすごく汚い。皆ケロッとしているところをみると、人間案外環境に順応できるものだ。当初の予定では鹿島槍で縦走を終了し赤岩尾根を下るはづであつたが、元気なものが多く、半分は白馬まで延長することとした。

冷で下山する甘利、柴崎、岡、宇田川、松木と別れ、三時頃鹿島槍釣尾根につく。少々時間は早いが、残雪があるのを幸い、幕営と決める。夕方、剣の奥に沈む太陽に我を忘れ、一同ボサーとつつ立つていた。

七月三十日　晴　鹿島槍釣尾根――五竜岳――唐松岳

朝雲海の中からポツカリ浮び上つた五竜の偉容に元気づけられ、唐松に向う。唐松の附近は天幕場が少く、随分探したあげく、唐松岳直下の縦走路端に設営、東西に落る沢の上部に残るわづかばかりの雪渓の雪を使用した。

七月三十一日　曇後小雨　唐松岳――白馬岳――猿倉――松本

白馬に近づくにつれて人が多くなり、アルプス北銀座と化す。白馬頂上に登る。曇つていて景色を楽しめなかつたけれど、縦走を完成した喜びが身にしみて嬉しかつた。一時十五分。遠々と大雪渓を登つてくる人波は、まさに銀座四丁目のそれである。今日は日曜日だそうな。松本で三百円の豪遊?を楽しんだ。

（篠　原）

槍――北穂――前穂

吉田義則、市畑進、上原利夫、山田邦行

七月三十一日　晴

剣沢合宿から引き続いて槍までの縦走もつつがなく終り、この日正午槍の肩で解散となつた。

もう残り少くなつた食糧を分け合つて、槍沢を下つて行く連中を送つた後、とりあえず肩の小屋へとび込むと驚くなかれおいしそうな羊かんが並んでいるではないか、久し振りでまともなものを口にして、のんびりした気分になる。まだ早かつたので、しばらく時間を潰し、夕方ガスの晴れ間をねらつて大槍へ登る。

五時頃再びザックを背にして殺生まで下り、ここにテントを張ると、シヨバ代弐拾円、水場代参拾円、計五拾円也をとられた。とんでもないところだ。薪は何とか集まり、米はふんだん

にあつたが、副食に調味料と言つたら玉ねぎに塩を除けば皆無に等しい。なけなしの塩鮭二切ればかりを焼いて夕飯を食べる。食後のミルクを飲み終えるか終えないうちに、上の東鎌尾根からライトを点滅して求援信号！　あわててザイルを肩にかけつけてみたら一人バテ込んで肩の小屋まで行きそこなつていた。荷物を下ろして殺生小屋に入れる。その間二十分ばかり。

われわれが肩の小屋にいるうちごつそり到着した中学生の一団がさかんにデカンショ節を高唱しているのが聞える。キレット方面はガスが巻いているが、大槍は高く黒々と星空にそびえている。そこにきこえて来るデカンショ節の高声をわれわれはどうとつたものか、自然への冒瀆か？　偉大なものに接したときの敬虔さを吾々は山に対していつも感じていることを誇りとしたい。

八月一日　快晴、西風強し　殺生小屋前——大キレット——北穂南稜

八時頃起きる。夜明け前から風が強くテントがバタバタ云つている。十時、テントをたたんで再び肩まで登る。食糧は早くも欠乏を告げ、朝のおかずは玉ねぎとじやがいもの塩汁だけ。昼めしの副食は全然なく止むなく小さな缶詰一ケを六十円フンパツして買つて来た。肩の小屋では何とかして腹の虫をなだめないといけないので羊かん一本にキヤラメル、上原がぜいたくにも桃の缶詰を買つて来て開ける。少量ながらえらくうまい。大喰岳をすぎて十一時三十分中の岳、ここの水場では水にはありつけなかつたがひるめしとする。一時半に再び歩き出して二時二十分南岳、キレット底に三時に着く。何せエツセンの方がお粗末なので北穂の登りは思いのほかこたえた。六時北穂頂上に辿りつく。涸沢は途方もなく雪が少く、池の出ているのは勿論、北穂沢にも殆んどなく、三・四のコル下も細々と白いものが続いている程度。丁度北穂に居合わせたS大山岳部の知人から中村先輩一行の遭難のときの模様をきく。もう少し雪でも多く残つていたら大事に至らずに済んだのではないかという話だつた。

頂上直下の南稜テント場は燃料にも事欠かないし、雪もすぐ近くにあつておまけに眺めもすばらしい。この晩も玉ねぎだけのカレー入り塩汁。幸いにS大の方からスルメ、干だら、ミリン干しなどの差入れがあり、事情窮迫の折柄、まことに感謝感激だつた。

広いテントに四人だけなので悠々と横になれて極めて寝心地よろしい。太郎兵衛では半月に近かつた月がずつと大きくなつて、四囲の岩稜を黒々と浮き出させている。常念の彼方に稲妻

がとび交つている。

八月二日　快晴、午後夕立　北穂――奥穂――前穂

朝は例によつてゆつくり起きる。テント脇の道はすでに数パーティーが涸沢から登つて来て通りすぎて行つた。

市畑が一人で西穂をまわつて上高地へ下るべく八時半ごろ昨日の残り飯に、よそから貰つた干だらとミリン干しをちよつぴり飯盒に入れてテントを出る。夕方上高地で落ち合おうというわけだ。

九時すぎ、同じく残り飯に塩をふりかけて上原と二人で朝めしらしきものを食う。それからザイルを引張り出し、第二尾根を登りに出かける。時間もないので北山稜とのジヤンクションまで下り、写真をとりながらゆつくり岩の感触をたのしみつつ登る。すばらしい天気。テントへ帰つたら既に十二時になつてしまつて、前穂を経て上高地まで下るという予定はどうやら怪しくなつて来た。テントでは山田が一人で飯を作つて待つていた。ゆつくり昼食をしてテントをたたむ。

今日はせいぜい岳川まで、歩き出したのが午後二時半。滝谷には多少ガスが巻いて来た。涸沢岳までは荷の重さで中々の緩ピツチ。この辺でどうやら今日は前穂泊りが関の山らしくなつて来た。上高地で待つている市畑には相済まぬが仕方がない。

四時二十分穂高小屋着。ものすごく混んでいる。水は二合瓶に一円也を食う。背に腹は代えられぬというやつだ。水は二合瓶に一ぱい十円也。うどんのからしが利きすぎていて、どうしても飲まなくちやならぬように出来ている。

五時、穂高小屋を出る。涸沢は全く雪が少く、下る人はみなザイテンをボコボコ歩いて下つているところは、小屋で食べたうどんはどこへやら、もうおなかには全然力が入らない。遅いので頂上にも人は殆んどいない。前穂寄りのピークの下に食パンが半斤ほどころがつている。拾いたい心しきりだが相憎そのすぐそばに、頂上の夕景色をたのしんでいる人がいる。如何せん！

吊尾根にかかつて六時過ぎになると、西穂稜線はガスに包まれ、その背後から積乱雲が高々とそびえ、あつという間に夕立ちがやつて来た。しかし雨具も取り出さないうちにすぐ止んでほつとする。栄養失調の三人には前穂の登りが数百米もあるように感じられた。

七時、やつと前穂頂上に辿りついた。既に暮色迫つて遠く常念の上方遙かのところで雷鳴と稲妻しきり。高い山頂から見る稲妻は真横に一線に走る。珍らしい眺めだ。山田はかみなりこ

わさに頂上のケルン、高さが二米もあるやつを倒そうと言い出す。程なく雷鳴もおさまり、きれいな星空となつた。頂上の例の「穴ボコ」一杯にテントを張つて三人で縦に並んでねる。頂上のテント場というのは、その高さのせいか格別気分がいい。ただそこにひろげられた吾々の夕食は？……

上原はキヤラメルとたばこだけで我まんしようと言いながら来たので、こつちもそれで我まんするつもりでやつて来たのだが、いざこうなつて見ると。……ついに飯盒に六分目位、明日の昼めしにと残して来たのをここで食べてしまおうということになつた。先ず玉ねぎの塩づけで始めたが、どうにも咽喉に通らず、もうこれだけしかないフレークの缶詰一つをとうとうあけてしまつた。これで吾々は米と塩以外なんにもなくなつたわけだ。三人が三人共「明日は明日の風が吹く……」というこのことばが実にぴつたり。

何とか腹をなだめすかてて寝につく。月が満月近くなつてテントの中も非常に明るい。テントは丁度穴ボコの中にすつぽり入り、おまけに横の張り綱をピンと張ると屋根が殆んど平らになり両脇は積石に沿つて垂直の壁になつて中がいやに広い。気分のいい一夜。

八月三日　快晴、夕立ち

前穂頂上にて四時頃眼が醒めるれないわけだ。何とかして先ず飯らない。はだしのまま外へとび出すとまだ日の出まえ。奥又池のテントから今しがた朝餉の煙がよがしに光つているのは羨しい。と覗いて見たが全然ない。そのうち御来光。

テントへ引き返して今度は本当に雪をとりに出かける。サブを背負い、ピツケルをもつて沢まで下る。A沢とて所々に小さい白い点を残しているのみで、歩きにくいガラ場と化している。雪をサブに一杯詰め込み、かえり道這い松の枯れ枝を拾いながら苦労して頂上へ引き返す。テント脇では山田がおにぎりを見つけて狂喜していた。それにつられて足元がぐらつき、ふと下を見たら塩鮭が二切れ落ちているではないか！　天の恵みと思つて拾い上げる。そのうちに山田はフグの干物二枚、小女子の佃煮、味噌漬等中々の収獲をあげる。穴ボコの片隅みで飯を炊き、味噌汁ならぬ塩汁を作りず、腹のふくらみは何とか出来たので八時二十分岳川へ下山開始。

一枚岩の夏道は長くどこまで下つても岳川のモレーンは一向

に近づかない。岳沢水場まで三時間近くを費した。十一時、山田は早くバスに乗るべく先行したが、二人は又々そこで停滞、午後一時半頃漸く明神への別れ道になつている川辺に辿りついた。上では雷鳴がとどろき、ちよつと薄暗くなつて来たが、もう上高地へ着いたも同然、五千尺には生ビールも親子丼もあろうにと想像しつつ、ここでまた飯盒の飯に塩水をかけてひるめし。岳沢を下つて来る人が何人もそばを通りすぎて行くが、みんな僕らの「おかず」を点検して行くような気がする。最後の砂糖をはたいてレモンを飲む。

上高地へ着いたときにはさすがに人間、テント、御馳走と、驚くばかりの豊富な世界に投げ込まれた様な感じだつた。

（吉　田）

前穂高四峰正面新村ルート滝谷

中村保、柴崎進、山本健一郎

八月四日　晴

山本上高地入り。中ノ瀬にて合宿後カクネ里等を廻り二日に上高地に到着した中村、柴崎に会う。槍へ縦走したメムバーにも合つた。吉田、上原下山。

八月五日　晴　中ノ瀬（一一・三〇）――奥又出合（一六・〇〇）

中ノ瀬のテントをたたみ出発する。河童橋は大にぎわい。

八月六日　晴　奥又の出合（九・〇〇）――涸沢（一五・一五）

涸沢は雪がすくない。北穂沢にテントをはる。

八月七日　晴　涸沢（八・〇〇）――滝谷第四屋根スノーコル（一二・〇〇―一二・三〇）――登攀終了点（一六・四〇）――涸沢（一九・〇〇）

中村、柴崎は都を出でてより一ケ月近い。大分消耗して居るのでゆつくり登る。C沢は大変な所だ。スノーコルで食事、アンザイレンする。オーダーは中村―柴崎―山本。Cカンテ上の浅いガリーはいやな所だ。ピナクルのあたりを迂一寸気をつかう。ツルムの眺めはガスのため余り良くない。がつかりする。ここでオーダーは山本―柴崎―中村と変る。Dカンテを登れば縦走路はすぐだつた。一三ピツチに四時間、快適であつた。四峰正面もこの調子なら大丈夫だ。

八月八日　雨

一日中ごろごろ天幕の中ですごす。

八月九日　晴

山本はテントを九時三十分に出て偵察に向う。五、六のコルより五峰に到り五峰の奥又尾根を降りて正面壁をしらべる。甲南ルートに一パーテイ居るのでスケールが良くわかる。四、五

の雪渓は降れさうもない。大分切れている。四峰を登り三、四の雪渓から涸沢え降る。途中で三峰フェースより落ちたパーティに会う。ガレの上にねそべつて居る人影があつたので呑気な奴だと思いつつ近寄つて行けば何と二人は血にまみれて居た。点々と岩を血がそめている。涸沢に居る仲間に連絡もついたらしく別に何も手伝う事はないと云はれたので失礼してグリセードでおりる。滝谷え行つた二人は夕刻第二尾根を登りかえつて来た。夜遭難の事を考え仲々ねつかれなかつた。

八月十日　晴　涸沢（五・三〇）——五・六コル（六・四〇）——第一テラス（八・二五—九・〇〇）——登攀終了点（一七・〇〇）——（一二・一〇—一三・〇〇）

そろそろ炊煙の立昇り始めた涸沢を出発し五六のコルへ向う。奥又白側の四、五の雪渓は昨日の偵察では大分悪そうだしそのまま奥又白側え降りる。本谷から見る四峰はとても大きい。C沢も上の方しか雪がない。第一テラスで大休止する。テラスの最高点から頭上におおいかぶさる壁の基部まで少しブツシュのついたリツジを登る。十五米位登ると右上へ走る浅いガレのつまつたガリー状のバンドがある。このバンドを三十米位でバンドは切れ上は三十米位の壁がそびえその上に青白ハングがある。この壁は下の五米位が悪そうであとは何とかなる様に思えた。三人テラスに集結しセルフビレイのハーケンを打ち山本トツプで登り始める。始めの部分がかぶつていてハーケンを打つたら三センチ位しかはいらない。その上岩が動き出して来た。止むを得ずショルダーで登る。デリケートなバランスでホールドの遠い外傾スタンスばかりの岩場を三十米一杯で青白ハング下のテラスに出た。ここを昨年甘利さんはアプザイレンしたらしい。大分はなれて手のとどかない所に十五米置きにハーケンを見る。この三十米に山本だけで一時間をついやした。新村ルートの這松テラスまでは左え十五米位コンテイニユアスで行けた。ここでめしにする。柴崎一人良く食う。一時に登攀開始。山本がミドルに入りドツペルザイルの吊上げで四米位のハング状凹角をこえ小さい頭のつかえるテラスに出る。ザイルがスムーズに動かないので中村が一応ここまで登りアブミ一つをセツトし問題のハングを突破、点在するハーケンに導かれ右えトラバースし尖岩に達する。柴崎をハング下まであげ山本が尖岩に達したのが十四時。下は青白ハングにさえ切られ本谷しか見えない。二百米もあるだろうか。柴崎がハング突破にくるしみアブミを残し尖岩へ達したのは十六時。ここから上は多すぎ

る位のハーケンにみちびかれて登攀終了点へ達しザイルをとく。帰路は五、六のコルにとる。ピツケルは唯邪魔になつただけであつた。

八月十一日　晴

上高地えくだり木村さんの所に泊る。

八月十二日　晴

下山。下界はあつい。

（山本）

槍――剣――黒部縦走

沢木一夫、他七名

八月一日　快晴　上高地――横尾

八月二日　快晴　横尾――槍沢――大槍小屋跡

槍沢の登りで一名がばてゝしまつた為にやむを得ざる結果となつた。

八月三日　晴、夕立　大槍小屋跡――槍の肩――双六

西鎌の下りで夕立に遭い、雷に少々肝を冷やす。

八月四日　快晴　双六――三俣蓮華岳――五郎平

八月五日　雨　停滞

八月六日　晴　五郎平――黒部五郎岳――太郎兵衛平

天幕を張り終えたら又猛然たる夕立がやつてきた。八月に入ると毎日夕立にやられる。

八月七日　晴　太郎兵衛平――薬師岳――薬師はこつちから登つた方が遙かに楽であることが判つた。

八月八日　ガス、高曇　スゴ小屋――越中沢岳――五色ケ原

八月九日　晴　五色ケ原――剣沢三田平

身体をこわし、高熱を冒して歩いたが、何も食えないので全く消耗した。

八月十日　晴　三田平　真砂沢出合

他の連中が本峰に行つている間寝ていたので、午後から真砂に下る。剣沢の雪も合宿時に較べてかなり少なく、且汚れていた。

八月十一日　晴　真砂沢出合――仙人池

八月十二日　晴　仙人池――アゾ原――櫛

八月十三日　帰京

燕岳――槍岳縦走

篠原敏弘、他一名

九月二十三日　晴後雨　有明（六・〇〇）――中房温泉（一〇・〇〇）――合戦小屋上部（一四・三〇）

金を節約しようとテントを持つてきたのが仇となり、すつかりバテた上に雨に叩かれ、遂に燕山荘までたどりつけず設営。

九月二十四日　小雨後快晴　テント場（九・三〇）——燕岳（一一・一〇）——西岳小屋（一七・四〇）

小雨の中を稜線に出ると、なんと反対側はすばらしい晴天。昨日の疲れも何のその、西岳小屋までとばしにとばし、小屋前の小池の縁に設営。

九月二十五日　快晴　西岳小屋（七・一〇）——槍岳（一二・〇〇）——槍沢小屋（一六・〇〇）——徳沢園（一九・〇〇）

槍の頂上で穂高に行こうか、槍沢を下ろうかとさんざんもめたあげく、槍沢を下る。真暗になつてから徳沢園についたので、小屋に泊ることになつた。テントを持つてきても少しも金の節にならない。風呂に入つた。

九月二十六日　快晴　徳沢園（八・二〇）——上高地（九・三〇）——松本

せつかくの快晴に穂高行が惜まれた。紅葉が日増にすばらしくなりつつある。絶景とキノコの酢づけのうまかつたことで慰めた。

九月二十七日　雨　部室にて

何といい時に帰京したことよ。西岳小屋からみたあの大槍のシルエット、北鎌、小槍が登攀欲をそそつたこと、穂高を前にして下山を余儀なくされたこと、徳沢園でベラボーに取られた時の馬鹿らしさ、そして、今しがた背負子にでかい荷をつけ、その上にテントをつけて来たら、巡査の尋問にあつたことなどが、ひと眠りして覚めたら頭をかけめぐつた。雨がヤケに降つている。明日はレポータ。

奥秩父縦走

宇田川徳治、他一名

十月二十一日　晴　由府（九・五〇）——上黒平（一六・一〇）

バスに乗るのに一時間も待たされた。調子が出ないので、御室小屋まで行けなかつた。上黒平の藤原屋旅館に泊る、二五〇円也。紅葉は実に美しい。途中の金桜神社は一見の価値あり。

十月二十二日　快晴　上黒平（六・三五）——御室小屋（一一・四五）——金峰山頂上（二・四〇—三・四〇）——大弛小屋（六・四〇）

金峰の登りで悪寒を感じて消耗。飯をたべたら少しよくなつたが、小屋に着く頃は吐気をもよおした。

十月二十四日　曇つたり晴たり　大弛小屋（八・二〇）——師岳頂上（九・〇七～九・一五）——東梓（一〇・四五～一〇・五二）——富士見（一二・一二～一二・二五）——由武信岳（二・一〇）——由武信小屋

梓山までの予定だつたが、出発が遅くなつたのと、相棒があごを出したのとで小屋泊りにする。

十月二十四日　曇天に霧　甲武信小屋（六・一五）――雁坂峠（九・一五）――昼食――広瀬（一三・〇〇）――下釜口（一五・二〇～一五・四〇）――塩山（一六・二〇）――新宿（一七・三五）

丹沢水無川本谷遡行

城戸剛、他二名

十一月十三日　快晴　新宿――渋沢――水無川本谷――F_3――F_2――F_1――本谷

帰りはF_3をアプザイレン、F_2の横をヤブこぎ、F_1はノーマルルートを降る。ぼくが山に行く時は大抵快晴だが、この日もその例にもれなかつた。盛りの紅葉黄葉が美しかつた。F_1の登りは滝の水がかかつて少し消耗。やはり一番面白かつたのはF_3。しかし、ビブラムだつたので、本当のところ一寸こわかつた。

カクネ里（冬山偵察）

甘利仁郎、上原利夫、山田邦行

十月十六日　晴　松本――神城（九・〇〇）――遠見小屋（一五・〇〇）

十月一七日　晴　遠見小屋（八・三五）――小遠見（一〇・三〇）――大遠見（一三・一〇～一四・一〇）――中遠見（一一・〇〇）――遠見小屋（一一・二八～一二・一八）

この日の調子は良好、大遠見から一ピッチ弱に野営快適地あり。白岳沢は約三百米の雪渓。途中、滝三～四あり。沢の途中で日没し、二股上三十分のところの滝でまき道不明となり、もまでの徒渉をした。二俣では岩小屋が見つからず、河原で幕営。

十月十八日　小雨時々大粒の雨　停滞

午後、岩小屋を見つける。しかし、ビバーク用にしか役立たない。五人までは充分。この岩小屋にザイル、シート、ザツクが置いてあつたが、腐蝕していた。前夜のテント場は増水の場合不安のため、左岸の台地に移す。

十月十九日　霧雨　停滞

三時に起床、霧雨。七時にも霧雨。

十月二十日　小雨後大雨　停滞

トランプをして時をすごす。午後より大雨、二時間後には白岳沢は約五十センチの増水、白濁す。

十月二十一日　小雨後曇　夜雪　二俣（七・一〇）――口の沢

——中の沢（九・三〇）——雪渓

雪渓は氷になり大氷河状態をあらわし、北壁下部まではクレバス多く登りはいいとして下降は困難。当日、北壁登攀は時間的に無理なので、下部のみ登攀の予定であつたが中止。オペラグラスで偵察。

十月二十二日　快晴

○—一六・○五）——大遠見（一五・三侯（九・○○）——中遠見（一六・○○）——遠見小屋（一七・五五）——神城駅（一九・○○）

昨夜の雪のため、北壁は白壁と化し、遠見尾根は白一色となる。大川沢を下るのをやめて遠見尾根に向う。白岳沢を離れて大遠見沢（仮称）を遡行し、ガレ場、ブッシュの猛烈なのを分けて大遠見に至る。

十月二十三日　晴　帰京

夜叉神から北岳

引き続いて上高地へ（春山荷上げ）

（上　原）

吉田義則、宮川次夫、篠原敏弘、朝木慶司、景山豪治

十月二十二日　晴　甲府——芦安——夜叉神峠——荒川小屋

終列車で新宿を発つと甲府へ着くのが朝の三時半いつものことながらここまでは殆んど寝る間がない。早速バス待合所にシュラフを広げて七時頃までねることにする。目をさましたら朝木の奴がねていたベンチの下から弁当を拾つて歓声を上げている。拾いものにしては割に上等なやつだつた。一番バスに乗つて終点芦安まで。朝食をとりなおして九時すぎから漸く歩き出す。夜叉神トンネルは既に貫通して新しい立派な道路が旧道を寸断しながら上へのびている。十二時すぎトンネルの入口に着いた。完全舗装のまことに立派なトンネルで西側の出口はまだ道路工事が進行中である。ここから再び旧道をとつて約一時間で夜叉神峠につく。何よりもかつ然と現われた白峰三山の圧倒的な量感に打たれるが、足元には古したバンガローが点在する静かな秋の峠の雰囲気だ。やがてガスがトンネルを抜けて、勢せずすすきが穂波を打ち、使いになるかも知れないが、そうなつて広河原までも入れるようをこの峠の上にまで誘うだろう。鮎もこうした情感はまた我々下りで野呂川の流れに立つ。少し行くと我々の歩いている左岸に、かなりの崩落のあとに遭遇した差までは小一時間、一気の一の釣橋に向つている筈だが、針金やら丸太やらわけのわからぬように断崖に垂れ下つている。初め高く捲きすぎて失敗し大分時間を潰したが、やつとのことで道の続きを発見することができた。短い秋の日は暮れかかり、ライトをつけて第一の釣橋

を渡る。暗い河床をケルン伝いに進んでもう一つの釣橋を渡ると、無人の荒川小屋が我々を待つていた。焚木は実に豊富であるがたい。

十月二十三日　晴後ガス　荒川小屋――吊尾根――北岳――北岳小屋

七時、荒川小屋発。吊尾根末端の急登七〇〇米を一気にかせぐ。一気にと言つても途中紅葉に眼を奪われてのせいもあるが、ざつと三時間余り。途中池で大休止後、今度はだらだら登り。午後二時漸く森林帯から抜け出したがこの頃より大分ガスが上つて来た。しかし左手は農鳥の白つぽい頂頭が見えかくれし、右手は野呂川の底から千米に及び鳳凰の頂上近くまでくまなく彩つた紅葉の美しさは豪壮という言葉でさえ表わしにくい。

途中多くはガスに巻かれての歩行だつたが、三時十分ボーコンの頭に立つたときは丁度一面のガスが薄らいで、バツトレスがその全貌を現わし、下方遙かに大樺沢小屋の赤い屋根が小さく見えていた。歩き出すと又ガスとなり、五時近く八本歯を下り切るともうあたりは薄暗くなつて、黒々と中空に頭だけ見えている頂上の高いこと五時五十分漸く北岳の肩の稜線に辿りつき、荷を置いて頂上へ向う。ガスも次第に上つて来ると、月がすでに高く昇つていて、あたりは割合に明るい。仙丈の三つの頭が、雲海上にずつしりと坐つている。風は寒いが月明の頂上もまた一入の印象だ。ここから小一時間を費して北岳小屋に辿りついたのはもう八時すぎ。高差二千米のこの長大な尾根、どう考えても登りには不向きのデガ尾根だ。一同相当にへバつた。

十月二十四日　曇

昨日の強行軍がまだ響いて体がいうことをきかない。出発も遅くなつて九時すぎ。高曇りで稜線越しに風が吹きつけて来る。尾根に出ると一面のガスに包まれてしまつて、その上横なぐりの風が吹きまくつて鼻水が垂れ下つて来る。

中白根で小憩したが、みんな風下に顔を向けて汗とも涙ともつかぬものをヤツケの袖でぬぐつている。お昼近く、間の岳に着いて多少ガスも切れて風もおさまつて来たのでほつとする。

ここから三峰岳の肩をまわつて森林帯に入る少し手前のところで遅いひるめしをとつた。馬鹿尾根に続くこの稜線、一たび森林帯に入つたら、道は倒木だらけでじめじめした苔に足をとられるばかりで眺望も何もあつたものではない。四時半野呂川越、少し下つてやつと水にありついた。両俣小屋には三人ばかり先客あり、合宿する。ここまで背負つて来た即席しるこ、餅

らしいものは入つていなかつたようだが、とろりとした甘さはぐつと来る。

十月二十五日　曇　両俣小屋――北沢小屋

野呂川の流れに沿つて下る。担々とした道もない代り、いかにも深い山ふところという感が深い。北沢に入つてからは水量も少く、殆んど徒渉もせずに北沢小屋に着いた。例の如く炉端にみんな坐り込んで長衛老の珍らしい話を遅くまで聞かせてもらつた。

十月二十六日　雨後曇　北沢小屋――伊那――松本

九時頃漸く腰を上げて雨の中を歩き出した。戸台までずつと濡れ通しだつたが、雨に煙る赤河原沿いの紅葉は本当にすばらしかつた。四時頃伊那の町に着くと、こんな山の中で――とも思わずに、すし屋へとびこんだ。

六時、辰野にて帰京する朝木、景山に別れ、三人は松本行きの汽車に乗る。山本他は今晩新宿出発の筈。去年の荷上げ前の忙しさを思い返す。松尾と二人でガソリン、石油をごつそり背負い込んで、カチカチ山そこのけの背中をまる焼けにした記念すべき秋だつた。松本で食糧を少し補給し、ステーションホテルのベンチに長々と横になつた。

十月二十七日　上高地入り

五時まえ、東京から来た連中にたき起こされた。一行は佐薙、山本、岡、長谷川、城戸、市川の六人。持参の大きな荷物に、島々で米を仕入れてバスに乗り込む。上高地では午後一ぱいをかけて、リヤカーまで持ち出して養魚場へ一往復。山は奥穂にちよつとばかり白いものがついている程度。ホテルに泊り。

十月二十八日

雨降りで終日ホテルにごろごろして過ごす。

十月二十九日

朝九時、上原、岡垣、西海の三人が下からやつて来た。午後リヤカーで養魚場へ残り荷物全部を運ぶ。帰途明神池でゆつくり舟遊びとしやれたが、神々しい神域にはふさわしからぬ振舞い多々。今日は中の瀬にテントを持ち出してそこへ移る。

十月三十日

また雨が降る。上はずつとガスだが大分積つているにちがいない。それでも昼近くから青空がのぞくようになつて、城戸、市川の二人は徳本越えで帰ろうといつて出発した。

十月三十一日　晴

上原と二人で偵察旁々明神から上宮川沢、長七沢を登つて瓢箪池の下から引返した。他の連中は天狗のコルから穂高小屋へ

の予定で出かけたが、岳沢から引返して来た。二千三百米位から上は真白だ。佐薙、篠原、西海の三人はまだ未練を残して養魚場に泊つたが、次の日は徳本越えで帰つた。他はこの日終バスに乗つて七時松本に着いた。

（吉　田）

北八ツ岳

岡垣治雄、宮川守久

十月二十一日　晴

台風直後を狙つた計画が的中。秋晴れの秋山を誰一人会わず。親湯より大河原峠を経て双子池に着く。神秘的な雌雄の大池の中間に設営。

十月二十二日　晴

道が不明瞭であるので相当なアルバイトを余儀なくされ、麦草峠でビバークと相なつた。幼想的な山道だつた。

十月二十三日　晴後曇

朝早く白駒池に着く。一人の登山者にも会わないのが不思議なくらい。白樺尾根の素晴しさにはうつとりと時を忘れる程だつた。

（岡　垣）

×××××××
富士山合宿
×××××××

参加者　チーフ・リーダー　山本健一郎、甘利仁朗、篠原敏弘、岡垣治雄、茂木俊明、加地幸雄、朝木慶司、阿部謹也、城戸剛、山田邦行、市川陽一

十一月二十三日　晴　新宿（六・三〇）——富士吉田（一〇・〇〇）——昼食（一一・四五—一二・一五）——馬返し（一三・五〇—一四・一〇—五合目（一七・二〇）

皆ねむい眼をしよぼつかせて集合、吉田からあおぐ富士山はきらきらと光つていた。連日の快晴にすつかり氷が出来ているらしい。馬返しで立高の遭難者の死体をおろして来た甘利に会い彼はこちらへ合流する。

十一月二十四日　晴　テント出発（八・一五）——同帰着（一四・三〇）

良い天気だ。氷の上に張つた夏用天幕の者は寒かつたとこぼしている。柴崎にたのんで入手した圧力釜が大きすぎコンロにかからずもて余し気味でいささか出発が遅れた。

六合辺で午前中はアイゼン・ワークとダイナミックビレー滑落停止等の訓練を行ない、午後は七合目迄登り、早くも日のかげつた斜面に自分達の影を写しつつ降る。夜は佐藤小舎より

サイダーを仕入れアルコール抜きのコンパ。尚、本日、渋谷先輩、頂上往復後、我々の留守中のテントを訪問下山された事を残されたメモにて知る。

十一月二十五日　曇　テント（七・二〇）――頂上（一二・一〇―一三・〇〇）――天幕（一五・〇〇―一六・〇〇）――吉田（二〇・〇〇）

今日は頂上へと張切つて天幕を後にする。昨日のトレーニングに本合宿で始めてアイゼンをはく者も快調に登る。大沢を七合目迄登り夏道に出る。頂上は風が強く寒い。始めて富士山を登つた連中もあつた。思つたより視界はきかず残念。下りは慎重に一歩一歩降る。テントをたたんで吉田の町についた時は三千米の降りに皆のひざのお皿が笑つていた。

（山　本）

蔵王山スキー行

岡垣治雄、西海隼雄他二名

二月二十三日――二十五日

樹氷の美しさと、ジンギスカン料理のうまさといつたら、ぼくは生涯忘れないだろう。それに自分がとつても上手になつたような気を起させる雪質のよさも。

（岡　垣）

根子岳と菅平スキー行

岡垣治雄、守川守久

三月五日、六日

根子岳の降りは雪の悪さと技術の拙さとでほとほと手を焼いた。蔵王で得た自信もどこへやらで。おまけに捻挫をするやらでさんざんでありました。

（岡　垣）

唐松岳）

中村保、篠原敏弘

三月九日　曇　松本――黒菱小屋（一二・三〇）

三月十日　風雪　黒菱小屋（六・三〇）――第三ケルン――黒菱小屋（五・〇〇）――唐松岳――黒菱小屋（一一・〇〇）――細野（一三・〇〇）――松本

三月十一日　晴たり曇つたり　黒菱小屋――細野（一三・〇〇）――松本

不帰の偵察が主であつたが、三峰までは行つたものの、天候が崩れ、一目散に逃げ帰つた。

（篠　原）

昭和三十一年度（四月～三十二年三月）

新入部員歓迎山行（奥多摩カロー川遡行）

参加者　山本健一郎、甘利仁朗、春日井実、柴崎新、篠原敏弘、清水啓、岡悦郎、中村幸正、加地幸雄、上原利夫、宇田川徳治、景山豪治、城戸剛、市川陽一、松本、（瀬田先輩）新入部員　渡辺嘉佑、峰高教通、小峰隆、江面誠二、丸子博之、中西巌、安田惟行、岩見、菅井、中島、横山、中野、川崎、岩松、鈴木、枚田（聴講生）

四月二十一日　曇　立川（一四・〇〇）　日原ヒユツテ

新人十六名を交えての山行。夜河原でキヤンプ・フアイアを囲んでコンパ。トリス四本。

四月二十二日　曇　日原ヒユツテ――カロー川遡行――日原

大滝手前で昼食。焚火でズボン、シヤツから湯気を発散させる者三人。雲取に行く四人を残して帰京。

（篠　原）

鹿島槍荒沢奥壁北稜

甘利仁朗、中村幸正

四月二十八日　曇後雪　取入口小屋に泊る。

四月二十九日　雪　二股まで偵察。

四月三十日　晴　北稜登攀

小屋（二・四五）――北稜取付（六・五〇）――小屋岩（ビバーク）（一九・〇〇）

五月一日　曇　下山。

（Y　中）

丹沢キユーハ沢

市川陽一

五月四日　晴　ヤビツ峠――諸戸――札掛

ヤビツ峠から札掛までは時間にして約一時間半、従つて蓑毛からは二時間半の行程であるから午後から出かけて行つて充分札掛まで日が暮れないうちに着ける。

札掛には宿泊所として丹沢ホームと丹沢山ノ家があるが、ガンツ丹沢ホームを選ぶべきだ。宿泊代百五十円也。

五月五日　札掛（五・三〇）――キユーハ沢出合（七・〇〇）――丹沢山（一二・〇〇）――塔ケ岳（一三・三〇）――渋沢（一六・三〇）

丹沢ホームの前の小路を登れば、約一時間で本谷川の河原に出る。

ぼくは丹沢に行く場合、大体尾根歩き（性に合うから）が多いので、今まで沢歩きをやつたことはない。だからこのキユーハ沢がどうであるかは他に比較していうことはできないが、当日は天気はすばらしく、滝も八～十米くらいのが五つ六つあり、水量も数日前の雨で豊富、すばらしい沢だと認めた。しかし滝を巻く時にはショッパイ所が数ケ所あつた。

丹沢の名は、去年の国体以来天下に普く知られるところとなり、遠方から訪れる人はとみに増したという。ぼくの行つた日にも表尾根も二ノ塔、三ノ塔あたり全くの行列であつたという。また塔ケ岳から蛭ケ岳を経て西野々或は島屋に出る路は、戦前は訪れる人も少なく、路も狭く幽すいを思わせる別天地であつたという。それが今は幅一～一・五米の路に改修されている。

こうなれば丹沢の尾根歩きはおしまいだ。丹沢に行かんとする人は沢に入るべしと云いたい。表尾根にかかる沢は避けて、奥丹沢、西丹沢に入ることを勧める。蛭ケ岳を分水嶺とする玄倉川と神の川方面には面白い沢がたくさん我々を待つている。従つて、丹沢に入る場合、ユーシン沢を足場にして西丹沢にするか、札掛と長者舎を足場にして奥丹にするかいづれかにするのが特策である。

鷹ノ巣A沢

沢木一夫、他二名

五月十九日　快晴　水上――二股――A沢――オジカ沢の頭――トマの耳――西黒沢

五月のこの時季のA沢は未だ雪渓の連続であつた。B沢、C沢辺りの方が面白いかもしれない。

××××××
谷川岳合宿
××××××

参加者　チーフ・リーダー　山本健一郎、篠原敏弘、清水啓、岡悦郎、岡垣治雄、市畑進、上原利夫、沢木一夫、城戸剛、宇田川徳治、山田成人、丸子博之、大須賀広次、中島孝夫、鈴木健之、安田惟行、江面誠二、渡辺嘉佑、岩見美法、中野勝弘

五月二十四日　曇　最終で上野発

五月二十五日　曇時々雨

旧道を通りマチガ沢出合三十分程午前に設営、全員マチガ沢二の

沢でグリセード、ストップの練習。午後はダイナミツクビレーの練習をやる。

五月二十六日　曇時々雨夕方晴

三年部員三人は南稜へむかつたが雨のため引き返す。他は芝倉沢でグリセード、アプザイレンなどをやる。夜はたき火をかこんで交歓。面白いお話しなども飛びだす。

五月二十七日　曇のち雨

全員一ノ倉二ノ沢でグリセード。雨が激しく降り始めたのでテントに帰り昼頃土合へおりる。湯檜曽でおりて温泉につかつて帰る。

（渡　辺）

北　岳

中村保、篠原敏弘、清水啓、渡辺嘉佑、岩見、佐々木

六月十七日　雨　韮崎 — 藪ノ湯 — 赤薙沢第二飯場

ハシゴ伝いに滝の左岸を登つたところにある第二飯場から道を間違え、早川尾根の方に入つてしまつた。雨の中を再び戻りその飯場に泊る。

六月十八日　晴　飯場（一一・〇〇）— 広河原峠（一五・〇〇）— 広河原小屋（一八・〇〇）

六月十九日　快晴　広河原小屋（八・〇〇）— 白根御池小屋（一一・〇〇）

朝、八本歯沢出合から見たマツチ箱がすばらしかつた。午後、T中とバツトレス偵察に出かける。

六月二十日　曇　白根御池小屋 — 北岳 — 北岳小屋

朝起きたら変な雲が出ていたので、バツトレス行は延期し、草スベリを登る。北岳の頂上からT中と篠原は第四尾根を降り、マツチ箱まで往復。清水らは北岳小屋へ。渡辺は間ノ岳まで往復。

六月二十一日　曇後雨　停滞

T中と篠原はバツトレスに向つたが、ガスと風激しく、落石が盛んなので引返す。

六月二十二日　曇　北岳小屋（五・三〇）— 第四尾根取付（七・〇八）— 登攀終了点（一〇・四五）— 荒川小屋

T中、篠原は第四尾根に向う。八本歯沢をグリセードで下り、途中から藪を漕いでバツトレス下部の雪渓にでる。下沢の大滝は埋つており、その落口でアンザイレン。三ピツチ目でバンドを第四尾根にトラバース、十一ピツチでマツチ箱のコルに下り、十四ピツチで登攀終了。別に悪場もなく快適であつた。釣尾根で待つていた清水らと荒川小屋に下る。

六月二十三日　小雨　荒川小屋 — 甲府

一日予定が早くなつたので、篠原、渡辺、岩見と三ツ峠に向う。

六月二十四日　曇　大月――河口湖――御坂峠――三ツ峠――三ツ峠駅

三人で第三を登る。

（篠原記）

××××××
夏山合宿
××××××

本年度夏山は二つの目的をもつて計画された。第一は春山の事故にかんがみ部員全部の技術的な面での充実であり、第二には冬山の候補地北岳バットレスの偵察であつた。涸沢の合宿は中二日の雨にたたかれたが、先ず先ずの天候に一応の成果をあげる事が出来たが、人員構成のアンバランスから、三年、四年の部員の不足をかこつ結果ともなり、一年部員には動きたりない者も出た様であつた。更に参加人員は三十数名という、近来にない大合宿となつたため、器具、食糧の管理、或いは規律、統制の面での不統一が合宿を幾分ルーズなものとし、又運営が事務的になりすぎたためか、合宿に家族的な雰囲気がなくなつてしまつた事は特に一年部員に取り気の毒であつた。これはチーフリーダーの未熟が原因であつた。

後半の二隊に分れての縦走は、幸い天気にも恵まれ比較的小人数での楽しい合宿となつた。四年と一年を主力とするパーティは、中尾峠より笠へ向い、三年と二年を主力とするパーティは北岳へ向つた。

涸沢合宿

笠ケ岳のパーテイはこれといつた事もなく下山したが、北岳の方には下痢の患者三名を出したため幾分予定を変更せざるを得なくなつたことは残念であつた。

参加者　チーフ・リーダー　山本健一郎、甘利仁朗、中村幸正、中村保、篠原敏弘、柴崎新、南亮進、清水啓、岡垣治雄（器具係）、上原利夫、市畑進、加地幸雄、西海隼雄、朝木慶司（食糧係）、塩川清彦、鈴木博武、沢木一夫、山田邦行、城戸剛、宇田川徳治、渡辺嘉佑、峰高教通、中西厳、小峰隆、安田惟行、江面誠二、川崎喬、中野勝弘、菅井弘之、丸子博之、大須賀広次、高山浩、石井輝雄、鈴木健之、O・B＝山田亮三、石原脩、吉田義則、聴講生＝枚田美智子

七月十二日　夜、先発中村、篠原、城戸、渡辺、峰高、安田、丸子　新宿発。

七月十五日　夜　本隊新宿発。

七月十六日　曇　本隊奥又白出合に幕営。

七月十七日　曇時々雨　涸沢入り、横尾岩小舎にて先発の出迎えを受く。

七月十八日　晴　全員三・四の雪渓にグリセード練習に行く。

七月十九日　雨　連日の行動に丁度良い休養日。

七月二十日　晴

北穂東稜――山本、篠原、中村（Y）、朝木、鈴木博、中野、丸子、中西、安田、鈴木（健）、枚田

前穂北尾根――甘利、中村（T）、清水、西海、塩川、渡辺、小峰、江面、高山、川崎

滝谷第二尾根――上原、市畑、滝谷第四尾根――岡垣、沢木

三峰フエイスー―城戸、宇田川、山田

皆張り切つて出掛けたが滝谷第四尾根で他のパーテイの事故が発生したため滝谷の登攀は中止。枚田はグリセードにて転倒負傷。

七月二十一日　晴

グリセード練習――山本、中村、清水、山田、宇田川、鈴木（博）、峰高、中西、小峰、江面、川崎、石井、鈴木（博）、高山

ジヤンダルム――西海、朝木、塩川、管井、大須賀

三峰フエイス――篠原、安田、上原、渡辺、市畑、丸子

滝谷第一尾根――甘利、城戸

滝谷第四尾根――中村（Y）、岡垣、沢木

夕刻山田、石原両先輩、柴崎、加地入山。第四尾根パーテイの帰りが遅く一寸心配した。

七月二十二日　晴

ジヤンダルム飛驒尾根――甘利、市畑、城戸、峰高、小峰、鈴木（健）

前穂北尾根――中村（Y）、岡垣、朝木、鈴木博、沢木、中野、中西、丸子、大須賀、石井

北穂東稜――柴崎、清水、西海、塩川、宇田川、江面、川崎、高山

北尾根四峰明大ルート――中村（T）、篠原

滝谷第二尾根――山本、山田、管井

ドーム中央稜――山田、石原両先輩

好い天気に皆張り切つて出る。第二尾根のパーテイは先輩の中央稜登攀の様子をプリズムでつぶさに見学させていただいた。篠原は帰路三・四の雪渓で空中大ジヤンプとそれにつづく一連のトンボがえりの末、眼の縁にくまを作り白眼は兎の如く赤い目と変じた。

高見先輩、同夫人夕刻涸沢到着、涸沢ヒユッテに泊られた。
中村（T）は歯痛ひどく上高地まで通院治療に出る事になる。
七月二十三日　雨　休養、吉田、峰高、安田、大須賀、鈴木
七月二十四日　晴
前穂北尾根――柴崎、宇田川、中野、篠原、西海、加地、朝木、沢木
（健）
奥又白の池――山本、中村（Y）、渡辺、江面、川崎、中野、
管井、丸子、石井、高山
滝谷第二尾根――中村(T)、市畑、城戸
滝谷第三尾根――甘利、岡垣、吉田、峰高、安田、大須賀、鈴木
滝谷第四尾根――吉田先輩、篠原、西海、加地、朝木、沢木
皆の顔が立派になつて来た。第四尾根のパーテイはモーロクの
ため暗くなつてから帰りついた。山田、石原先輩下山
七月二十五日　晴
東壁Aフェース――甘利、小峰、鈴木、西海、城戸、峰高
槍ケ岳――朝木、塩川、宇田川、中西、大須賀、石井、鈴木
（健）、高山
ジャンダルム飛騨尾根――中村（Y）、鈴木（博）、渡辺、中
野、川崎、江面、丸子
滝谷クラック尾根――中村（T）、山本
滝谷第三尾根――柴崎、上原、加地
北尾根四峰明大ルート――岡垣、吉田
七月二十六日　晴
休養日とし明日の撤収の用意をする。甘利と中村（Y）は屏風
の一ルンゼへ行くと云つて六時頃天幕をとび出した。岡垣は中
央稜へ登り足りない奴をつれて行つた。皆のんびりとすごす。
一ルンゼのパーテイは夜九時半頃かえつて来た。
皆でフアイアーをかこみ屏風岩の頭から降りて来る二つのヘツ
ドランプをながめて歌を歌つた。枚田朋文堂の治療テントより
引あげる。
七月二十七日　晴
今日は撤収だ。テントをたたみ荷を背負う。横尾の谷はせみの
鳴声で一杯だつた。上高地で北岳の連中を見送る。夜中ノ瀬に
幕営したが歌声がうるさく仲々寝つかれない。
（山　本）

夏山縦走（笠ケ岳―烏帽子岳）

参加者　チーフ・リーダー　山本、中村（保）、柴崎、南、渡
辺、安田、峰高、中西、小峰、江面、丸子、菅井、石井、中

野、鈴木、大須賀、高山、枚田

七月二十八日　晴　上高地（八・〇〇）――中尾峠（一二・〇〇―一三・〇〇）――槍見平（一五・三〇）

中尾峠の登りはあつくて、人が沢山居て消耗した。大正池がきれいだ。一歩飛騨側へ降りると人一人居ない。静かな森の道だつた。今までのにぎわいが、うその様だ。河原に張つたテントから槍ケ岳が夕陽に輝いて良く見える。明日のアルバイトを思い早くねる。

七月二十九日　晴　槍見（七・〇〇）――泊り場（一八・〇〇）

小峰と鈴木は下痢がひどく下山した。今日は最大の難関、笠の登りだ。始め川沿いにゆるい登りが続く。錫杖岳の岩場が見えて来る。最後の岩場をすぎて一時夕立に会つた。時々今朝双六を出た人が降りて来るのに会う。急なガレの斜面を登ると稜線だ。頂上は未だ未だ先だ。頂上の二つ程手前のピークのあたりで道をそれ蒲田川の方へ這松を五米程こぐと良い泊り場があつた。雪田がある。頂上まで高差三百米はあろうか。頂上を越すのは止めにしてここに泊ることにした。田中先輩にいただいたバロメーターが大いに役に立つた。

八月三十日　晴　泊り場（九・三〇）――双六池（一八・三〇）

昨日のアルバイトに皆参つたらしい。ゆつくり起きる。大分皆の服装がルンペンに近くなつて来た。柴崎の「安全第一」のマーク入りシャツが皆の笑いをさそう。菅井のズボンの尻はすだれの如くなつた。

ガスの中抜戸の東側の岩場は朝の穂高のシルエツトと共に本日の圧巻であつた。

双六池に来たら人くさくなつた。

七月三十一日　晴　双六池（六・三〇）――泊り場（一八・三〇）

今日は早起きして出る。歩きなれた道に入つて来た。やはり鷲羽岳の登りはつらい。長い野口五郎の登りに中野が消耗した。荷をへらす。烏帽子まで行きたいが良い水場もないことだし明日は下山だ。三ツ岳の雪渓に沿つた斜面にテントを張る。野口五郎の肩でトン女のパーテイに会つた。彼女達も同じ方向へ縦走中。

八月一日　晴　泊り場（八・〇〇）――葛温泉（一六・〇〇）

山を降るの日、皆の心は浮き立つている。足取りも軽く烏帽子小屋に着き、有志は最後の頂上を踏むべく空身で登る。高瀬川の河原に降り立てば暑さが蟬の声と共に身にせまつて来る。トン女パーテイと追いつ追われつ。上級生はがぜんとばし出し

一年生消耗。葛で解散コンパ。二十日間の汗を洗い落す。

（山　本）

北岳バットレス（上級部員強化合宿と冬山偵察）

参加者　リーダー甘利、Y中、岡垣、上原、塩川、鈴木(博)、西海、沢木、城戸、山田、宇田川

七月二十八日　晴　韮崎―赤薙沢出合

昨日上高地で縦走パーティに別れ、松本で食糧を調達していた山チビを拾い、夜はステーションホテルに泊る。韮崎で三輪車をチャーターし、赤薙沢出合まで入る。

七月二十九日　晴　赤薙沢出合―尾無尾根取付

山チビが下痢を起したので峠を越せず。Y中現われる。山チビに続いてY中、西海、上原、沢木もやり始める。

七月三十日　晴　尾無尾根取付―広河原

沢木は下痢、腹痛、発熱、悪寒といためつけられて下山。

七月三十一日　晴　停滞

西海の病状がよくないため全員行動中止。

八月一日　晴　バットレス偵察。

八月二日　晴

第一尾根――甘利、城戸

第三尾根―Y中、鈴木

第四尾根―岡垣、宇田川

昨日、二股に設営。広河原と二股の間からバットレスに向つた。

登攀後八本歯沢を下る。

八月三日　晴

第一尾根　岡垣、宇田川

第二尾根右―甘利、Y中

第三尾根―城戸、塩川

第四尾根　上原、鈴木

登攀後小太郎尾根と第五尾根に分れて下る。西海、山チビ全快。二日前、小屋番から岩タケメシが下痢によく効くと聞き、早速試したら、二人共回復した。

八月四日　晴

中央稜―甘利、Y中

第四尾根―西海、山田

この日登攀した四人を除いて、八本歯のコルまで荷上げして撤収、池山小屋まで下る。

八月五日　晴　池山小屋―芦安温泉

温泉で一人二百七十円也でコンパ。城戸は新宿まで意識不明。バットバットレスでは充分にやつたつもりだ。大部分が下痢

で苦しんだが、楽しい楽しいメンバーで楽しいことばかりだつた。「天気の悪くなり相な話」が絶えなかつたけれど、好天に恵まれ、ほんとに楽しかつた。

（岡　垣）

北岳バットレス

沢木一夫、他一名

九月七日　晴　日野春——横手——赤薙沢——尾無尾根取付点　岩小屋

広河原までの予定が暑さと疲労の為、尾無尾根を登らずして沈澱と相成つた。

九月八日　晴後曇　岩小屋——広河原——御池小屋

涼しいうちに尾無尾根を登りきり、三時に新築の御池小屋着。大樺沢出合、バットレス沢辺りまで偵察を行う。この日は十二時間行動。

九月九日　晴　第四尾根登攀　出発（七・二五）——取付（一〇・一五）——登攀終了（一二・五五）——頂上（一三・三〇—一四・一〇）——御池小屋（一五・〇五）

アンザイレンした個所は三ピッチほどで、少々物足りない感はあつたがビブラムの特長を生かし快適に完登した。草辺りの下りから雨に降られる。

九月十日　雨　御池小屋——広河原小屋

雨で予定の第一尾根はお流れとなる。午後から広河原に下る。

九月十一日　雨　広河原小屋——鳳凰小屋——御座石場——穴山橋

雨中の下山となつた。雨で赤薙沢の増水を考え、鳳凰を廻る。御座石で衣服を乾かしたのも束の間、又降られて結局濡れたまま帰ることになつてしまつた。

北岳（冬山荷上げ）

岡垣治雄、中村保、篠原敏弘、上原利夫、山田邦行、城戸剛、大橋喜治、松木、峰高教通、丸子博之、中西厳、石井

十月十日　晴

芦安の青木方で依頼しておいた米を受取り、トラツクで夜叉神峠まで。トンネルから出て間もなく、はるかかなたのわずかにみえる北岳の頂が朝日に輝くのを見て、トラツクの荷台に寒さのため縮んでいた身体がファイトでもえ、来てよかつたと思つた。

鮎差で昼食をとつたが、ポカポカと日当りがいいのと適度の疲労とで、皆シャツ一枚のままいつとはなしにごろりと横になり、とうとうリーダーが声をかけるのを知つてか知らずか寝込

んでしまつた。二時間後やつと立上がつて荒川小屋へ。夜は特製のランシドンブリを御馳走になつた。

十月十一日　小雨

池山小屋まで米、玉葱、ジヤガイモ、石油、テント二張全部で六十貫をボツカした。

途中の昼食は寒さのため手と口ががたがたふるえ、満足に食べられない程だつた。

荒川小屋に帰つたら、就職の決つた篠原さんとT中さんが来ていた。

十月十二日　曇

T中さんと篠原さんはボツカ、他は二人に別れをつげて下山。夜叉神トンネル手前で二つに分れ、上原、城戸、山田、峰高は真直ぐ下山、他は横に曲つて鳳凰に向つた。

（峰　高）

後立山縦走（**白馬**――**鹿島槍、春山偵察**）

岡垣治雄、朝木慶司、茂木俊明、市川陽一、大橋喜治、松木、渡辺嘉佑、峰高教通、枚田美智子（聴）

この山行は三十二年三月に予定される合宿のための第一回の偵察行である。

十月十四日　曇　発電所――猿倉小屋

昼過ぎ猿倉小屋に着いたが、すばらしく立派な小屋が出来ている。ぼくたちはその隣りのゴミ箱みたいな小屋に泊らなければならなかつた。というのは新しい小屋はガン丈に閉され、立入り禁止だつたから。夜、植生の宿もスキ焼で賑わう。

十月十五日　快晴　猿倉小屋――白馬頂上小屋

大雪渓でガスにまかれルートがわからなくなり時間を喰つたけれど、そのガスもいつしか晴れ上り、夕闇せまる頃は白馬頂上も往復し、見渡す限り続く山なみに大きく深呼吸したことだつた。

十月十六日　晴後曇　頂上小屋――唐松小屋

積雪期の登攀路を検討しながら足を運ぶ。

今晩は、ぼくたちと同じくここを積雪期にやる東大パーティと同宿。晩メシ用の水を彼らは池まで降りかつぎあげてきたが、こつちは岡垣さんが小屋の裏から氷の張つた樽を発見、チガウネ。

十月十七日　曇　唐松小屋――白岳小屋

白岳小屋まで二時間。冷小屋まではぼくたち下級生、それにかよわい女性にはきついと頂上会談で決定されたので白岳小屋泊りと決つた。雨水がドラム罐に一杯あつた。

市川さんは八方尾根を、大橋さんは遠見尾根を降つた。ゼミ

のため。遠見尾根には熊が出るそうだ。
小屋に着いたその足で五竜に登つた。四十五分。キレツトを見て溜息がでた。天候は悪化しつつある。岡垣さんは五竜の一番高い所で神妙な顔を忙がしく廻転させながら観天望気をやつている。天気はどうにかもつということだ。
十日十八日　曇　白岳小屋―冷小屋
キレツトではぼくたちの二、三米前を雷鳥が三羽行く。雷鳥はあまりうまくないのだそうだ。
稜線近くの紅葉はもうきたない。あからむ前に寒さで縮んでしまつたようだ。剣が来年の夏山を期待させる。
夜、大なべに餅を入れたゴツタ煮をうんと作つた。最後の晩だから。ところが、とんまな奴がいるもので暗がりの中でぶちまけてしまつた。何もない夕げの食卓は、山の淋しさを一層身にしみさせるものだ。
食後、小屋番相手に朝木さんが将棋の何とかゲームをやつている。うまくやつてのけたら泊代をタダにしてくれるんだそうな。
十月十九日　曇　冷小屋―大町
泊代を朝木さんが集めている。
茂木、松木、渡辺は浅間温泉に行くといつてかけ降りて行つた。他は長い尾根を幾度もころび、ビティ骨を気にしながら、途中で山ブドウを見逃すことなく、下界の紅葉を満喫しながら下山した。

白馬岳―鹿島槍縦走（春山偵察）　（峰　高）

十月二十三日　準急アルプスで出発。
市畑進、加地幸雄、景山豪治、沢木一夫
十月二十四日　小雨　四ツ谷―二股―猿倉荘
前夜から降り続いている秋雨で歩くのが嫌になつていたところ、新築の猿倉荘にすつかり幻惑されてしまい、ここで今日の行動は終りとなつてしまつた。
十月二十五日　曇　猿倉荘―白馬頂上小屋
朝からガスがかかつていたのが途中から強風を伴い、稜線に出た時は黒部側から吹き上げる飛雪に左頬は凍結せんばかりであつた。
十月二十六日　晴　白馬頂上小屋（八・〇五）―不帰キレット（一二・三〇）―唐松小屋（一六・四〇）
一旦晴れれば絶えず右側に剣、立山を望みながらの快適な縦走路である。天狗池は完全に氷結していた。日の当る処は雪が殆んどなかつたが、不帰にかかると急に深くなる。P2は左側

の捲道を通らず針金のついた旧道を直上する。この新道は雪がつくとかなり危険になりそうである。

十月二十七日　晴　唐松小屋（八・一〇）――五竜岳（一一・三五）――キレット小屋（一五・三五）

五竜より加地単独下山し、残る三名はバテた身体に苔打つてキレツト小屋まで行く。雪少なく炊事は一寸心細かつた。

十月二十八日　晴　キレット小屋（八・五〇）―南槍（一〇・三五）―築場（一一・四〇）西俣出合（一五・二〇）―初日を除いてはすべて暖かな快適な縦走であつた。最終の時間が判らず夜道に馳け足となつたが、築場に着いた時には未だ四十分以上も残つていた。

（沢木）

塩見岳、悪沢岳

中村保、他一名

十一月二十二日　晴　伊那大島――鹿塩――南沢出合

十一月二十三日　晴　南沢出合―三伏小屋

十一月二十四日　晴　塩見岳往復

十一月二十五日　晴　三伏小屋――大井川西俣下降――伐採小屋

十一月二十六日　晴　悪沢岳往復

十一月二十七日　曇　伐採小屋――二軒小屋

十一月二十八日　雨　二軒小屋――転付峠――身延

×××××
富士山合宿
×××××

参加者　リーダー岡垣治雄、甘利仁朗、市畑進、城戸剛、山田邦行、宇田川徳治、市川陽一、大橋喜治、景山豪治、松木、渡辺嘉佑、峰高教通、小峰隆、安田惟行、丸子博之、中西巌、岩見、鈴木

十一月二十二日　晴

雪は五合目の小屋上まで。佐藤小屋上の森林中に設営。

十一月二十三日　晴

六角堂を少し上つた所でアイゼンをはいてトレーニング。午前中は基本練習を繰り返し、午後は大沢を七合目あたりまで登る。かなりクラストしていた。

十一月二十四日　晴

大沢は快適にクラスト。ザイルで珠数つなぎになつた沢山の花電車がぞくぞく登つて行く。頂上で約一時間過して降る。大沢のグリセードは長いのと、人混みの中を人をよけながら滑るのと、半ばクラストしたところを滑るのとで面白い。滑らなく

なると、膝のお皿がでかけおりる。
帰幕して直ちに撤前のバス停の待合室十一月二十五日　曇降雪の中を峠に登ルートを第一バンド十五時に下山。

前穂高岳（上高地―沢渡―中村保、篠原敏弘、峰高）

一月一日　曇　松本―沢渡―上高地―前穂―奥又白―徳沢）
バスは沢渡まで、T中調子悪く、沢渡西村屋に泊る。
一月二日　曇　沢渡―上高地
スキーもザイルも西村屋に預け、サブで上高地に入り、木村氏宅に泊る。甘利さんら、四峰正面失敗、徳本経由で帰京の報を聞く。
一月三日　雪　停滞（前夜二二・〇〇）―奥明神沢両俣
一月四日　晴　ホテル（前夜二二・〇〇）―前穂高（八・〇〇）―奥又白沢―奥又池―徳沢園（一四・〇〇）
隣室に合宿を終えたD会の面々が騒いで、深夜出発と決めた。河童橋までシンと凍る夏道に長く続いた十本爪のアイゼンの跡が印象的であつた。岳沢はずつとシュプールが続き楽だつたが、奥明神沢に入ると、とたんにラツセルがきつくなり、深いため、トツプもラストも同じアルバイトを余儀なくされた。真暗闇の中をラツセルすること二時間余。漸く明るくなると、すごい朝焼けで、西穂の尖頭群の上に湧いた雲が真赤に染まり、恰も、巨大なロウソクに次々と火がともされたかの如く異称な光景が展開された。ずつとワツパのままで前穂に行く。天候はまあまあだつたが、風強く、朝焼けも気になつたので、奥穂行きはあきらめ、A沢を下る。雪がしまつており、雪崩の心配もなく快適に下れた。
一月五日　晴　徳沢園―上高地
一月六日　曇　上高地―松本

奥又白池

中村保、他一名
三月一日　晴　島々―坂巻
三月二日　晴　坂巻―上高地

（篠原記）

三月三日　雪　上高地――徳沢
三月四日　雪　停滞
三月五日　晴　徳沢――奥又白池（雪洞）
三月六日――十日　雪　停滞
三月十一日　晴　洞雪――A沢――徳沢
五日間完全に風雪に閉じ込められた。なすところなく下山。
三月十二日　雪　徳沢――上高地――中ノ湯
三月十三日　晴　中ノ湯――松本

安達太良山

渡辺嘉佑

東北線も白河を過ぎると何となく東京をずいぶん離れたなという感じがしてくる。そして須賀川、郡山、本宮、二本松とくるにしたがつて左手の車窓にだんだん大きくかなり目立つピークが見えてくる。これが安達太良山である。標高は一七〇〇米。我々が行きなれている北アルプス、南アルプスの山々とくらべると、いささかスケールが小さいが、それは仕方がないだろう。しかし一口に云つて、仲々あきのこない山と云うことが出来そうだ。何度行つても時々ふと思い出して行つてみたいと思う山である。

登山口はいずれも温泉を基地としていて、岳温泉、沼尻温泉、野地温泉、岩代熱海温泉から日帰りが可能である。そして誠にありがたいことに頂上へ四、五〇分のところに、くろがね小屋と云う温泉つきの小屋がある。

四季を通じて趣のある山だが、我々にとつて楽しいのは春山合宿が終つた四日上旬から中旬が面白い。スキーをかつぎあげればまだまだ快適なスキーが楽しめる。気が悪かつたら温泉にドボンと飛びこんで歌でもウナつてればいい。温泉が、標高一四〇〇米の小屋にあると云うのは全くありがたいことで、合宿が終つてのんびりとスキーをやろうなどと云うときにはもつてこいの場所だろう。東北特有のなだらかな起伏ではなくてゴツゴツとした岩山であると云うことも親しみを持たせてくれる。

四月とは云え稜線は風が強い。エビのシッポ、スカブラも発達している。頂上からの眺めは三六〇度見事である。福島、郡山、それを結ぶ阿武隈川、那須山、猪苗代湖、磐梯山、裏磐梯の湖、飯豊山、吾妻山。とくに真白な飯豊山はきれいだ。一月、二月は晴天が少なくて困るが、三月ともなると楽しいツアーが楽しめる。

ここでは三月の安達太良山スキー行を話しておこう。

安達太郎山スキー

昭和三十二年度（四月～三十三年三月）

不帰一峰尾根

中村　保

四月十二日　雨　四谷――南股発電所

渡辺嘉佑、他一名

三月一日　曇　郡山――二本松――岳温泉、岳スキー場で終日すべる。進歩見えず、

三月二日　曇時々小雪　風強し　岳温泉　スキー場――烏川――勢至平――くろがね小屋

スキーコースを登る。最初の二三ピッチは傾斜も急だが、あとは烏川を渡つた所が急なだけでそんなにきつい登りではない。烏川を渡つての急傾斜ではスキーをかついで登る。登り切つた所が勢至平で、急に高い所にいると云う気分がしてくる。風が猛烈に強い。

雲の中に安達太良の頂上が時々ボンヤリと見える。岳温泉から約五時間でくろがね小屋に着いた。

三月三日　快晴　稜線風強し　くろがね小屋――鉄山　矢筈ケ森――安達郎頂上――くろがね小屋

シールが快適にきいて気分がいい。昨夜の雪が岩に張りついて素晴しくきれいだ。一時間で稜線に飛び出す。磐梯と飯豊がすぐ目の中に飛び込んで来た。積雪期の磐梯山は意外に立派に見えた。スキーをデポして鉄山へ。稜線はスキーをかついで吹飛ばされない様に歩く。安達太郎頂上直下に再びスキーをデポ頂上の岩場はちよつとしたスリルだつた。

帰りは頂上の直下から、すぐスキーをつけて、小屋の階段まですべり込む事が出来る。昼めしは小屋で食う事が出来た。午後、小屋の前の斜面を固めて、陽が沈んで急に寒くなるまで、すべつた。

三月四日　小雨

夜中に温度が上つたと思つたら、朝は雨が降つていた。往路をすべつてスキー場へ下る。しばらくスキー場ですべつて五時頃のバスで二本松へ出た。

四月十三日　曇後晴　小屋（二一・三〇）――一二峰間ルンゼ入口（二四・〇〇）――一峰尾根上（一・三〇―五・〇〇）――バットレス下（六・〇〇）――バットレス上（七・二

〇）――唐松岳頂上（一〇、〇〇）――八方尾根――小屋（一五・〇〇）

天気もいいし月夜でもあるので思いきつて夜間登攀を決行する。南股乗越に立てば、満月にぶく輝いた雄大な不帰東面が視野いつぱいに広がる。不帰沢の出合を過ぎて唐松沢は大きく右へまわつて、唐松岳へダイレクトに延びている。まつすぐに頂上へ行つてしまいたい誘惑にかられているうちに、一二峰間ルンゼ出合に着く。月も中央を過ぎて二峰岩壁の影足が大きく沢の雪面にのびて暗くなつて来た。予定通り二本目のルンゼを一峰尾根の上めがけて一直線に登る。前日の雨で氷化せんばかりにクラストしているのでくるぶしが痛い。傾斜は益々強くなりステツプカツトをよぎなくされる。二時三十分尾根上に出る。適当なビバークサイトを探してここで夜明を待つ。ツエルトをかぶりしばし仮眠。五時三十分登攀開始。不気味な朝焼けに追われるように先を急ぐ。二段三段と続く細い雪稜を過ぎてバツトレス基部に着く。三十―四十米ぐらいのこの壁は雪とやぶと岩のコンビネーションで快適な登攀とは云えない。先ず氷化した下部の雪壁にステツプを切つて登り、続いてカン木にぶらさがるようにして最後の雪庇の下に出る。高度感のでるところだ。正面の雪庇を再三試みるが失敗。左側の垂壁を危く突破する。乗越せば一峰の頂上は目前であつた。七時十分。天気ははやくも雪模様となり二峰、三峰を越えて唐松岳に着くころから風雪になつた。

四月十五日　晴　南股発電所――四谷

新人歓迎山行（乾徳山）

参加者、岡垣治雄、中村幸正、茂木俊明、市畑進、渡辺嘉佑、安田惟行、中西厳、石井
新人＝小林進二、大賀二郎、石弘光、馬場、池田、山崎、仲田

四月二十一日　快晴

塩山より徳和までバスに乗り、早朝徳和部落に到着。昨日の雨も晴上り、秀麗な富士の姿を迎ぎつつ、錦晶水にて朝食。なごやかな山行であつた。

（岡　垣）

北八ケ岳及び八ケ岳

渡辺嘉佑、安田惟行、小峰隆

四月二十八日　最終で新宿発

四月二十九日　快晴　茅野　親湯―蓼科山　大河原峠

親湯までバス。蓼科山頂上からの眺望はあますところない。

北アルプスの山々がかすんで真白にみえる。大河原峠への下りは雪が意外に多く消耗する。

四月三十日　快晴　大河原峠――双子池――大岳　双子池

大岳への登りで道を失い、猛烈なヤブコギを強いられ、予想以上に時間を食い、双子池へ引きかえす。夕方大岳への登り道はずつと左を巻いているのを知つて、がつくりくる。ズボンの破れなどつくろつて早目に寝る。

五月一日　曇後みぞれ　双子池　大岳――横岳――三ツ岳――双子池

ガスの中を横岳を越えたがみぞれが降りだし、ラッセルがひどく、所によつては腰まであるところがある。夏沢峠への縦走はあきらめて三度双子池へ出る。

五月二日　曇後雨　双子池――佐久穂積　松原湖

後発隊に合流するために松原湖へまわる。

五月三日　晴　松原湖――夏沢峠

稲子小屋で後発隊と合流。後発隊は、岡垣治雄、江面誠二、宮城賢三、峰高教通、中西厳、山本尚禎、大賀二郎、仲田修、馬場佳一、夏沢峠まで登つてテントを張る。

五月四日　晴後曇　夏沢峠――硫黄岳――横岳――赤岳――権現岳――青年小屋

朝のうちは天気がよかつたが午後からガスがかかつて来た。ゴールデン・ウイークのこととて人間がいつぱいいる。岡垣のみ、そのまま小淵沢へおりる。

五月五日　曇時々雨　青年少屋――編笠山――小淵沢

青年小屋附近は雪を溶かしての炊事だつた。期待の南アルプスの雄姿は見えず、もくもくと小淵沢へ下つた。

（渡　辺）

早月尾根から八ツ峰登攀（春山偵察）

中村幸正、中村保、茂木敏明、景山豪治、松木

四月二十八日　曇　魚津――上市――馬場島

四月二十九日　晴　馬場島――早月尾根一〇〇〇米CI

四月三十日　晴後曇　CI――二六〇〇米CII

五月一日　雨　停滞

五月二日　曇後雪　CII（五・三〇）――頂上（六・三〇）――北西バットレス――CII（一四・〇〇）

Y中の故障で残り四人で頂上へ向う。適当にクラストしていて、一時間で頂上に着いた。ここでT中、景山の二人で長次郎のコルから池の谷バットレス沢を下つて北西バットレスを登る。期待はしていなかつたが、全く面白くないところだ。一番手強そうなリツジを登つてみたが、バットレスと呼ぶにはおこ

がましいくらいだ。

五月三日　晴　CII（五・〇〇）――頂上（六・〇〇）――八ツ峰五六のコル（八・三〇～九・〇〇）――八ツ峰の頭（一二・〇〇）――CII（一五・〇〇）

Y中、T中八ツ峰に向うて前日とはうつて変つた快晴にピッチを上げて八時三十分五六のコルに着いた。さすがは剣岳の東面だけあつて雪は豊富であつた。六峰を越えて七峰にさしかかるあたりの眺望は月並ではあるがアルプスの粋を集めたような素晴しさであつた。切りたった雪稜が続いて、一つ一つを越えてしまうのが惜しいほどの楽しい登攀であつた。

五月四日　晴　CII――馬場島

五月五日　雨　馬場島――上市　東京

（T　中）

白馬岳

宮川守久、上原利夫

五月二日　曇　細野――猿倉山荘

五月三日　快晴　猿倉山荘――大雪渓――白馬頂上――猿倉山荘

白馬主稜に出かけるために前日食事の用意をしておき、今朝二時に起きるべく寝て、起きてみたら四時半、五時四十分に出発して白馬尻に向つたが、すつかりバテた。そこでこの分なら主稜線は無理だと思つたので大雪渓から行くことにした。登頂して引返す。

快晴であつたが、剣の方がよく見えなかつたのは惜しかつた。

（上　原）

八ケ岳

中川滋夫、他四名

五月二日　晴　茅野――渋ノ湯――夏沢峠

久々の山行。天狗から夏沢峠までは、まだかなりの残雪があつた。

五月三日　晴　赤岳往復――八ケ岳鉱泉まで降りたが、鉱泉が休みなので、止なく暗い夜道を八ケ岳鉱泉まで行つた。空身で赤岳に行く。帰つて来て、夏沢峠まで行くことにした。

五月四日　曇　帰京。

剣岳早月尾根（春山偵察）

沢木一夫、城戸剛、市川陽一

五月十六日　急行「北陸」にて出発。

五月十七日　快晴　上市――釈泉寺――伊折――馬場島

バスの都合で釈泉寺から歩く羽目となつた。折柄の好天気に

全く消耗、暗くなる寸前、バンバ島に辿りついた。

五月十八日　晴後曇　馬場島――早月尾根一九〇〇米地点
　市川は不調の為下山、残り二名となる。重荷と急登に悩まされ、一九〇〇米で一日の行動を終りとした。眼前に小窓尾根を望む良いテント場である。

五月十九日　雨後曇　一九〇〇米地点――二五〇〇米地点
　雨の為出発が遅れた。二〇〇に十二時に着いたが、二六〇〇の斜面に大分クレバスがあり、下りのことを考え、ここに設営、ここから八ツ峰アタックとプランを変更する。

五月二十日　雨後曇後雨　出発（八・四〇）――剣岳頂上（一三・三〇）――馬場島（一六・一五）
　一・〇〇―一一・三〇　二五〇〇米（一二・三五―一三時に起きてみたものの激しい雨で八ツ峰は中止、夜が明けてから小止みを見計つて頂上を往復、そのままテントを撤収して馬場島に下りる。雨の為に休むことも出来ず、馳け下り、崩壊したバンバ島小屋に飛び込んで暖をとる。

五月二十一日　高曇　馬場島――蓬沢

（沢木）

鳳凰三山

宇田川徳治、大橋喜治

五月十七日　快晴　穴山――平川峠――御座石鉱泉――燕――鳳凰小屋

五月十八日　晴　鳳凰小屋――南御室小屋――夜叉神峠――甲府

　冬悩まされた北岳が雪をまだかなりまとつているのが見える。鳳凰のザラザラした所はサツと通り過ぎ、あとは馬鹿みたいに森林中を降つた。

××××××
谷川岳合宿
××××××

参加者　リーダー　岡垣治雄、市畑進、小林博、山田邦行、江面誠二、小峰隆、峰高教通、安田惟行、中西厳、渡辺嘉佑、山元淑弘、小林進二、中島寛、中川滋夫、大賀二郎、永井新也、山本尚禎、馬場佳一、仲田修、山崎

五月二十三日　十一時五十分の最終で上野発。

五月二十四日　快晴

　市畑、小峰、安田、中西、渡辺の五人は一ノ倉一ノ沢をつめ東尾根を登る。他はマチガ沢でストップ、グリセードの練習。

五月二十五日　曇時々雨

　一ノ倉二ノ沢でもつぱらグリセードの練習。夜はたき火をかこんで歌などを歌う。雨時々激しくなる。

五月二十六日　雨
雨が激しいために撤収。湯檜曽でおりてコンパをやる。一部を残して帰京。

（渡　辺）

穂　高、槍

丸子博之

六月八日　松本―横尾
六月九日　快晴　横尾―涸沢　ザイテン―奥穂　前穂―三・四コル―涸沢―横尾

六月の穂高は静かである。雪のつき具合も申し分なし、それに快晴とあつては何も云うことはない、奥穂の頭で昼寝、氷アイゼン。時計はこわれ、コース・タイムをとれずに全身あますことなく濡れ、その上、馬鹿尾根降りで泥んこ。
まつたくツイテいない山行だつた。

××××××
夏　山　合　宿
××××××

「夏山合宿の目的は？」と問えば、「二、新人練成」「三、体力強化」と答えるのが常道だ。だが、三十二年度のわれわれは、この簡単明瞭な答にこそ、部の将来をかけていたと云つて云い過ぎであろうか。われわれの前には、二十九年度以降の再建期があり、その上昇気運を維持し、上昇させるべき使命を托されたわれわれにとつては。われわれが、新人、たのもしき「野郎会」の面々に寄せていた期待はなみなみならぬものだつた。だから、中堅部員の岩登り技術向上のために、三窓へ前進キャンプを出すことと並行して、合

宿後半の縦走の問題が真剣に討議されたのであつた。従来、剣沢合宿といえば、槍岳までの縦走が精一杯の計画だつた。ところが、われわれは三俣において隊を二分し、一隊は穂高岳へ、他の一隊は烏帽子岳までに延長する計画をもつて合宿に臨んだ。ところが、天候は四年前の荒天以上で七月十八日剣沢三田平に定着以来七月二十八日撤収まで晴天一日という有様だつた。三十八名参加という記録的数字のためか、食糧の余裕に誤算を生じ、縦走規模を縮少せざるをえなくなつた。その上、定着合宿で目的とした岩登りと新人の基本技術修得は不完全のまま縦走に移つらざるを得なかつた。しかしながら、われわれは最後まで頑張つた。雨と暴風の中で炊事し、びしよびしよの寝具の中で眠つた。全員一致協力、命令は最後まで守られ、明日の米が心配になるまで粘つた。特に、われわれの最も期待し、かつ心配した新人「野郎会」の十人は一言の不平も出さなかつた。雨のため予想以上の食糧がだめになつた上に、行動食に予定していた乾パンを殆んど消費したので、縦走計画は大巾に縮少され、五色ケ原より平の渡を経て烏帽子岳までに決定した。二十数名の団体を三隊に分け、毎日、設営隊、ボツカ隊、本隊の順に出発することにし、七月二十九日午前十時半剣沢を後にした。

剣沢合宿

（岡垣）

参加者、先発隊　市畑進、景山豪治、中西厳、石弘光、小林進二、本隊　チーフ・リーダー　岡垣治雄、中村保、中村幸正、茂木俊明、朝木慶司、西海隼雄、鈴木博武、丸山、沢木一夫、城戸剛、山田邦行、宇田川徳治、渡辺嘉佑、峰高教通、小峰隆、丸子博之、宮城賢三、安田惟行、江面誠二、山元淑弘、中川滋夫、山本尚禎、中島寛、大賀二郎、永井新也、馬場佳一、今村、後発隊　加地幸雄、市川陽一、大橋喜治、仲田修、菅村、枚田美智子、O・B＝山本健一郎、篠原敏弘、瀬田宏

各係、食糧、城戸、小峰、
器具、大橋、安田、
医療、渡辺、

七月十四日　先発隊離京。

七月十五日　本隊離京、先発隊は豪雨のため房治小屋に泊る。

七月十六日　曇後雨
本隊は雨のため天狗平に設営。先発隊は市畑と石が三ノ窓に入り、他三名は真砂沢に入る。

七月十七日　雨、時々曇
　本隊は二隊に分れ、縦走用の食糧を一の越に、定着用の食糧、器具等を別山乗越にボツカした後、雷鳥荘対岸に設営。先発隊の市畑、中西、景山が出迎えにやつてきた。
七月十八日　曇後雨
　真砂沢に予定していた合宿地を剣沢に変更。Y中は別山乗越でスリツプ、額に烈傷を負い三ノ窓入りを中止。市畑、城戸、中西が三ノ窓に入つた。小林と景山は真砂沢から剣沢に移る。
七月十九日　風雨　停滞
七月二十日　風雨　停滞
七月二十一日　雨後晴
　二日間の風雨のため全員ずぶ濡となる。今後のことを考え、宇田川以下三年二名、一年六名を雷鳥荘に下し、干しものをさせる。Y中他二名が別山の岩場に行く。篠原先輩テント訪問。
七月二十二日　晴後雨
〈剣沢隊〉
平蔵側二峰A・Bフエース――Y中、渡辺
前剣西尾根　T中、沢木、山田、登攀後T中、沢木は三ノ窓に入る。
本峰南壁A2――景山、安田
八ツ峰下半――茂木、西海、峰高、小林
源次郎尾根――朝木、鈴木、大橋、小峰、ま
ま三ノ窓に入る。
別山岩場――岡垣、丸山、宮城、山本、中
グリセード――宇田川以下十名
〈三ノ窓隊〉
チンネ中央チムニー・aバンド・bクラツ
チンネ左方ルンゼ・aバンド・bクラツク
ジヤンダルムcクラツク――市畑、城戸
瀬田先輩入山。篠原先輩下山。
七月二十三日　風雨　停滞
中西、石三ノ窓より剣沢に下る。枚田入山。瀬田先輩下山。
七月二十四日　晴
〈剣沢隊〉
ハツ峰上半――朝木、鈴木、市川、江面、
村、大賀
八ツ峰下半――岡垣、大橋、宮城、永井、
六峰Cフエース――山田、安田　安田は三
本峰南壁A1――Y中、渡辺、小峰、セカ

かる大石をかかえて大奮闘、ラストの渡辺に睨まれてそのまま落すわけにもいかず、全力をふりしぼつて雪渓めがけて放り投げ、事なきをえた。Y中、渡辺は三ノ窓に入る。

本峰南壁A2――茂木、宇田川、峰高、意気揚々と登つて喜こんでいたら、あとから娘さんが登つてきてがつかり。

源次郎尾根――西海、景山、馬場、中島、小林

一般コース――丸山、今村

〈三ノ窓隊〉

チンネ日嶺ルート――T中、沢木、丸子

チンネ左下カンテ――市畑、城戸、市畑は沢木、丸子とaバンド・bクラックを、城戸はT中とgチムニー・c・dクラックを登る。

山本先輩剣沢に入る。

七月二十五日　晴後雨

〈剣沢隊〉

八ツ峰上半――茂木、宇田川、小峰、江面、山元、中川、大田、山本

八ツ峰下半――鈴木、西海、宮城、馬場、中島、今村、仲賀

六峰Cフェース――山本（健）、景山、山本先輩は三ノ窓に入る。

本峰南壁A1――岡垣、中西、登攀後A2を登るために下つたが、東北大パーテイがA1で遭難、救助作業を行つた。

本峰南壁A2――山田、大橋、小林、登攀中遭難を目撃、下降して救助作業にあたる。

源次郎尾根――朝木、丸山、市川、峰高、管村、石

〈三ノ窓隊〉

チンネ左稜線――市畑、城戸、沢木

チンネ中央チムニー・aバンド・bクラック――Y中、渡辺、安田

チンネ神戸第一ルート・aバンド・bクラック――T中、丸子

市畑、沢木、城戸剣沢へ下る。

七月二十六日　風雨

三ノ窓隊剣沢に撤収。T中、中西、山元、山本先輩は下山。加地は室堂に入る。他は停滞、激しい降雨のため炊事は不可能なので小屋でたいてもらつた。三ノ窓隊はずぶ濡となり徹夜で衣類を乾わかした。夜半、風は激しくなり、流水はテントに浸入し始め、ぬれねずみとなつて全員不眠のままポールを交代で支えながら不安な一夜を過した。

七月二十七日　風雨

朝木、大橋は仙人峠を経て下山。城戸、丸子、江面は弥陀ケ原を経て下山。加地、丸山、沢木、景山、山田、宇田川、市川、渡辺、峰高、小峰、安田、宮城、中川、石、小林、山本、中島、大賀、永井、馬場、仲田、管村、枚田は室堂から一乗越に入り、縦走に合流の予定。他は停滞。米は小屋でたいてもらつた。副食は生味噌と少量のつくだにが配給された。ご飯は十人に飯ごう一杯の割合であつた。それも一回だけで、あとはかんぱんで我慢しなければならなかつた。どのテントもポールがへし曲り、フライは用をなさず、満足な恰好をしたテントはなかつた。使用不能のテントも生じ、七人用のテントに十人が寝る具合だつた。

七月二十八日　風雨後晴

午後四時頃雨は止み、久しぶりに太陽を見てほつとした。「太陽の前にひざまづけ！」と平伏している奴もいた。日が照るやたちまちにテントの周囲はほし物の山。人間もそのほし物の一つだ。再三リーダー会議を開き、縦走コースの検討をする。食糧の不足をきたしたからだ。激論の末、隊を三隊に分ち、設営隊、ボツカ隊、本隊とし、この順に毎日出発することとし、コースは五色ケ原―平―南沢出合―鳥帽子岳四十八池とされた。

（峰　高）

夏山縦走　〈剣沢―五色ケ原―平―南沢出合―鳥帽子岳―葛温泉〉

参加者、チーフ・リーダー　岡垣、Y中、西海、市畑、茂木、加地、丸山、沢木、景山、山田、宇田川、市川、渡辺、峰高、小峰、安田、宮城、中川、石、小林、山本、中島、大賀、永井、馬場、仲田、管村、枚田

七月二十九日　原色晴後ケガス　剣沢―五

入山以来初めての晴天らしい晴天。今日も小屋で米を炊いてもらい、ゆつくりと足を伸ばして、太陽の下で食事をとる。九時三十分にY中以下七名の設営隊、十分後に市畑以下十名のボツカ隊、十時三十分には岡垣以下十二名の本隊が剣沢をあとにした。九時間後には全員五色ケ原に集合した。

七月三十日　晴時々ガス　五色ケ原―平―南沢出合

八時五十分に岡垣以下十一名の本隊、九時十分にY中以下七名の設営隊、五分遅れて市畑以下十一名のボツカ隊が出発、五時間後には南沢出合の砂地にテントが張られ、溪流で身体を洗つたり、衣類を洗濯する姿が見られた。

七月三十一日　晴　南沢出合―鳥帽子岳四十八池

全員九時に出発したが、設営隊はすごいピッチでとばして行

く。ボツカ隊は溜息をつき、本隊はにぎやかにさえずりながら足を運ぶ。南沢岳頂上の白砂に咲くこまくさを見て疲れを忘れ、アルプスのオアシス四十八池でねそべりながら合宿中の苦労を語り合い、夜はキャンプファイヤーを囲んで合唱。

八月一日　晴　烏帽子岳四十八池――葛温泉

Y中以下四人が、設営隊ならぬ宿交渉隊となつて先発、岡垣以下全員が烏帽子を下る。

七時間後の、例のばあさんのところでのにぎやかさといつたら。わざわざこのために例の如く二人が大町に買出に出かけたのだから大体の察しはつくというもの。

八月二日　晴、帰京

朝、ばあさんが室の戸を開けて開口一番「昨夜はご苦労様でした！」――みんなキスリングにキウリやキヤベツやジヤガイモの代りに、思い出をつめて東京へ。

（峰　高）

葛温泉より笠ケ岳へ

中村幸正

八月三日　晴　葛温泉――千丈沢――西鎌尾根縦走――笠ケ岳（二一・〇〇）――双六池（七沢岳手前のコル（二〇・〇〇）――昨日温泉でみんなと別れ、今日は唯一夏山合宿の延長戦。全く気ままな山旅。今夜はビバーク。

八月四日　晴後曇　ビバーク地点（六・五〇）――笠ケ岳（一五・五〇）――槍見温泉（二一・〇〇）

八月五日雨、槍見温泉――中尾峠――上高地（Y　中）

飯豊山

渡辺嘉佑、他一名

八月九日　曇後雨　郡山――山都――一ノ木――川入

一ノ木からは歩き。途中ひどい夕立にあつて炭焼小屋で休む。二人でテントやら何やらで重くて往生、川入の農家にとめてもらう。

八月十日　曇後夕立　川入――飯豊頂上――川入

計画をかえてサブザツクで頂上に往復することにした。頂上で長煙遠くたなびきて……とやつていたら、あなたがた商大ですか、僕もそうですと云う人に出会つた。丁度旧盆のこととてドブロクをごちそうになる。

八月十一日　曇　川入一ノ木――喜多方――猪苗代――裏磐梯

テントを張つて昼寝といく。

八月十二日　曇

五色沼あたりをぶらついて翌日郡山へ。

剣岳・三ノ窓

沢木一夫、他一名

今年の夏合宿が雨に崇られて予定していた半分も登れなかつたので帰京後再び出直した。食糧の関係から長くいることは出来なかつたが、それでも剣岳はいつ行つても良い所である。

八月十日　上野発

八月十一日　曇時々晴　美女平――雷鳥沢――剣御前――剣沢

八月十二日　晴後雨　六峰Cフェース登攀

調子悪く、RCCルートを見送つてから小屋で食糧を調達するが、殆んど這松が附着して岩の出ている処も針山と化していないので上の岩小屋を使用するた。

八月十三日　雨　停滞

八月十四日　晴　剣沢――剣頂上――三ノ窓

仲間が槍まで行くのでそれないので上の岩小屋を使用するして三ノ窓に入る。テントがな処である。

が、正面にチンネを望む快適T5から左稜線に抜けて見る。

八月十五日　晴　チンネ中央チムニー

足馴らしの為に一般ルートに行つてみたが十二時に帰つたので午後から左方ルンゼに入りラックに行く。

八月十六日　晴　チンネ中央チムニー左フェイス

「ザイル横断」を要するルートといわれているがその必要もない。高度感のある快適なルートだつた。gチムニーからcクラックに行く。

八月十七日　晴後夕立　チンネ日嶺ルート

合宿の時に較べて何と心易かつたことか。

八月十八日　晴後曇　三ノ窓――剣頂上――早月尾根――バンバ島――上市

食糧が無くなつたのでやむなく帰ることになる。最短距離と思つたコースが猛烈な藪で大いにしごかれた。ゾロメキで上手く車に拾われ、上市に出る。翌日帰京。

（沢木）

赤石、荒川、悪沢岳縦走

石弘光他十三名

五月に遭難死した友人三名の追悼登山をかねて、花束持つて入山。小生のみ蓼科より直行。

八月十三日　曇時々晴　釜沢（六・三〇）――広河原小屋（一四・三〇）

小渋川の渡渉実に二十八回。ヘソまであり、ステテコ一枚で震えあがる。

八月十四日　曇時々晴　広河原小屋（六・三五）――大聖寺平（一一・五〇―一三・〇五）――小赤石岳（一四・〇八）

——赤石岳（一四・三八—一五・〇七）——大聖寺平（一五・五〇—一六・一〇）——荒川小屋（一七・〇〇）

大聖寺平に荷を置き、赤石岳を往復、夕刻友の墓前で黙禱。

八月十五日　曇時々晴　荒川小屋（八・三〇）——中岳（一〇・〇〇）悪沢岳（一一・五—一二・五〇）——千枚岳（一三・五〇）——マンボー沢頭（一五・〇五）——二軒小屋（一七・一五）

南アの奥深く入つた感がし、山も荒らされておらず、お花畑が見事。猛烈な下痢を起し、一ピツチ毎にキジ打ち。沈痛この上なし。

八月十六日　晴　二軒小屋（八・二〇）——転付峠（一一・一〇）——新倉（一五・一五）

（石）

滝谷

篠原敏弘

中村幸正、中村保、篠原　上高地——涸沢

八月二十五日　曇　T

八月二十六日　曇後ガス　第一尾根取付（一一・〇〇）——C・〇〇）——北穂頂上（一四・〇一〇）

フエースト（一二

—テント

深いガスの中を第一尾根を登る。芳野氏のテントに世話になる。

八月二十七日　晴　ドーム中央稜

登攀後篠原下山。Y中槍方面より来る。

八月二十八日　雨　停滞

八月二十九日　雨　停滞

八月三十日　晴

グレポン初登攀

南稜テント（一〇・〇〇）—

取付（一二・〇〇）——トサカ岩（一八・〇〇）——ロー

ソク岩ビバーク。ビバーク地点（六・〇〇）——登攀終了（七・〇〇）——テント（八・〇〇）

芳野氏と共にY中、T中三名でグレポンに向う。第三尾根を偵察かたがた下る。取付着一・三〇。第三尾根側の白茶けたぼろぼろのスラブの右上に登つてリッジ上に出る。ここでアンザイレン、Y中トップで三ピッチ登つてトサカの下に着く。殆んどテラスらしいところはなく急峻な尾根で、とくに最初の一ピッチは悪かつた。落石はなはだしく、たえまなく落石がルンゼにこだましてラストにとつては恐怖の報酬であつた。

トサカはダイレクトはちよつと無理に見えたので、右側の

浅いクラックの入つている壁を尾根から一段さがつて取つく。芳野氏トップに代つてハーケンを連打して登り切る。一ピツチ半でローソ岩とのコルにつく。

月も落ちて底なしの井戸のような静かな夜が訪れて来た。わずかのビバークサイトを得て一夜を明す。八月三十日夜明けと共に残る二ピツチを片づけて登攀を終つた。グレポンと云うと何か重箱のすみをつつくような登攀のように考えられがちであるが、この尾根自体派生的なルートではなく、第三、第四両尾根の中間に位する独立したリツジで、クライミング・ゲレンデとしても変化に富み、すぐれている。今まで取残されていたのが不思議と云うべきだろう。

八月三十一日、そのまま下山。

尚、グレポン登攀の詳細な記録は「岩と雪」二号に掲載してある。

（T　中）

穂高岳

中川滋夫他三名

八月二十八日　曇後雨

横尾の本谷橋を過ぎる頃からパラツキ始め三十分も行かない内に本降りになり、横尾の岩小舎まで引返して、テントを張つた。

八月二十九日　晴

北尾根に行く。吊尾根では甲羅干をやり、のんびりとした一日だつた。

八月二十九日　薄曇

北穂東稜に行く積りだつたが、北穂沢をつめ、帰りは南稜を下つた。

八月三十日　晴

友と別れて一人で徳本を越える。まだ人が通つていなかつたのか、朝露のキラキラ光るくもの巣を払いながらとぼとぼと登り、下りは何かに追われるかの如くすたすた下つた。

松本でのビール、こたえようもなかつた。

槍ケ岳（冬山荷上げ）

加地幸雄、沢木一夫、山田邦行、市川陽一、大橋喜治、峰高教通、渡辺嘉佑、江面誠二、安田惟行、小林進二、石弘光、大賀二郎、山本尚禎、永井新也、中島寛、馬場佳一、仲田修井、馬場、仲田の九人が新宿を発つ。この山行は来る十二月の槍穂間の厳冬期の合宿のための食料、燃量を肩の小屋に上げる

のと、偵察のため改めて槍穂間を縦走することを目的とした。

十月九日　来年度のチーフ・リーダーにごく最近指名された沢木御大、大変な緊張ぶりで、徳沢手前の河原で昼食をとるまで水を全然飲ませてもらえない。横尾山荘の横手にテントを張る。十四時四十分。

後発の八人離京。

十月十日　晴

先発隊横尾を元気よく飛び出したものの、日頃のトレーニング不足か次々にバテ始める。石油カンを一年生に持たせたが、休憩時にドシンと威勢よくおろすためひびが生じ、みんな石油が洩れ始める始末。こんなわけで肩の小屋往復に十三時間もかかつた。暗がりの道を帰つたが、すでに後発隊は設営していて、我々を迎えてくれた。

後発隊細野に寄り、米を購入して入山。

十月十一日　晴後曇

先発隊、昨日の疲れを休めるためボツカはやめた。この停滞を利用して渡辺、江面、永井、中島、仲田、馬場は蝶を往復、すばらしい眺めを満喫して帰つてきた、四時間。沢木と峰高は昼寝後本谷橋を往復。安田は後発隊に加つて、昨日デポした石油を途中からかついで肩の小屋まで。

後発隊平均四、五貫の荷を背負つて出発。昨日の先発隊と同じように一年生消耗、一日中口をとがらせて行動、十二時間後やつと横になれた。

どうも天候が崩れそうな様子なので、予定の槍穂間の縦走は中止し、横尾定着合宿とし、穂高往復と決まつた。

十月十二日　曇　横尾―北穂南稜―北穂―穂高小屋―ザイテン・グラード　横尾

沢木、市川、渡辺、峰高、江面、小林、石、大賀、山本、永井、中島、仲田が参加。他は三人が下山、三人が沈澱。

南稜で大賀、小林が不調で沢木リーダーと共に引返す。残りの九人で歩く。北穂、穂高小屋間はもう薄氷が張つており、岩の黒と雪のまだら模様で抽象画の傑作を観賞しながら歩いている感じだつた。滝谷はガスのため何も見えなかつたが、その凄みは見ないでもガスの動きで皮膚に伝わるようだつた。

十月十三日　晴　徳本越えで下山。

沢木リーダーの張り切り方は大変なもので、五日間下級生はキリキリ舞させられた。

徳本越えは一時間ピツチ。砂じんを上げあごを前につき出してかけあるく様は、清水一家ならぬ沢木一家なぐり込みみたいで、みんなを調子ずけたリーダーもバテ気味で、こんな筈じや

なかつたとトップをしきりに制していた。

この山行後、十月二十三～二十七日にわたつて、岡垣治雄、西海隼雄、上原利夫、塩川清彦、中西厳の五名により肩の小屋への器具、食料の荷上げ、北穂を経て穂高小屋そして白出へと縦走して偵察が行われ、続いて十一月七日に小峰隆、宮城賢三の二名により、徳沢まで第三回の器具、食料の荷上げが行われた。

（峰　高）

甲武信岳

大賀二郎、三股宏他一名

十二月十四日　晴後曇　新宿（六・三五）―塩山（九・四〇）―天科（一〇・四〇―一一・〇〇）―広瀬（一二・三〇）　赤志（一三・三五）―雁坂峠（一七・一五）―雁坂小屋（一七・三五）

冬合宿に連れて行つて貰えなかつたので、クラスの連中二人と秩父へ出かけた。前々日先行した馬場が雲取、笠取を越えて来るのと雁坂で会い、一緒に西へ、金峰まで抜けるつもりだつた。同行の二人はマラソンなどでは滅法強い。但し山はズブの素人である。長いゆるやかな山麓のアプローチで、どう僕が抑えても、とばし過ぎてしまう。その上一寸した不注意から古礼へ抜ける沢に入り込んでまる一時間ロスしたこととあいまつて、雁坂の登りで二人ともすつかりバテた。荷物を持つてやるが、それでも動かない。十米も歩くとストンと腰を下してしまう。暗くはなるし、途方にくれた。だましだまし、最後のジグザクにかかる頃、日は富士の右に沈んだ。いつの間にか、踏路は雪に埋れ、寒気がつのる。夕風と共に粉雪が舞い始めた。漸く峠に着く。既に下界は闇に閉され、富士だけが高く、紅にふちどられた姿で立ちはだかつていた。

十二月十五日　快晴　停滞

昨夜遅くまで火にあたり、疲れを休めていたので、馬場も来ていないし、沈澱と決めてゆつくり眠つた。小屋の前で積雪約一尺。十二月五日に降つたきりらしい。前夜も僅かな降雪があつたが、みぞれに変つたようだ。清潔な、気分のいい小屋。誰もいない。午後、古礼まで散歩に行く。楽しかつた。三股が水場を探しに行き「お前みたいにそそつかしい男はねえ」と云い乍ら、キレイな水をバケツに一杯ぶら下げて来た。前夜から、水はないものと決めて、雪をとかしていたというのに。薪も集め、ストーヴで快適な炊事。馬場は来ない。縦走を諦める。

十二月十六日　快晴　小屋（八・二〇）―破風小屋（一〇・五〇―一一・〇〇）―甲武信小屋（一二・四〇―一二・

五五）——甲武信岳（一三・一〇―一三・四五）——雁坂小屋（一六・五〇）

雁坂以西はぐつと雪が深い。ことに木賊山の登りは、甲武信小屋への近道の分岐を過ぎてからは全く踏跡がなく、ラッセルが時として腿の辺りまであり、かなりケツパらされた。快晴、風は冷い。南アが良く見える。甲武信小屋は旧い汚い方しか入れず不愉快、ガタガタ震えながら、飯を喰う。名簿に数日前、ポン女の人が二人だけで来た旨記載があつて感心。十文字峠からのラッセルに悩まされそうな。頂上から西を見ていやになつた。縦走は断念してよかつた。金峰の遠いこと。秩父とは云え冬山を、夏山さえ行つたことのない二人を連れて、あんなに遠くまで行くのは無理だ。浅間がとつても美しかつた。

往きに破風で十一時に会つた単独行氏に、甲武信からこつちでワツパを落したから拾つて来てくれと頼まれた。道は一本道しかも見付からなかつたのはどういうわけか。十六時、雁坂嶺で彼氏を追い抜く。ひどく消耗しているようだ。十八時、まだ小屋に来ない。あと三十分で来なければ迎えに行こう、と前後の情況から判断して決める。二十五分経ち、靴の紐を締め直し、「やだなア、とうとう行き倒れやがつたか」と立ち上つたとき悲鳴に近いヤホーが聞えた。五十米ほど駆けつけると、彼氏雪の上に尻餅をついた儘くたばつている。大きなザツクだ。「持ちましよう」と、うんと力を入れて拍子抜けした。五貫目とはいくまい。……前夜甲武信小屋で「太い薪しかなくて割ろうと思つたらナタで手を切り、持つてた石油を全部ぶつかけたがとうとう朝の二時までかかつても炊事が出来なかつた」とのこと。それではフラフラなのも無理はない。ぼくらのズツペものどを通らない。お茶を飲まし、火に当らせてあげる。元気になるにつれてお談議が始つた。栃本から西へ白泰山に入り十文字峠へ出、甲武信経由でやつて来たというが、少しこの人云うことがフツウでない。〇〇大山岳部創設の功労者だが、リーダーになりそこなつたと云つてむくれてる。「ミリン干がありますよ」十回位云つたから有難くご馳走になる。三枚も焼くと「もうその位でいいでしよう」。発熱したと見えて夜通し震え、唸つていた。

十二月十七日　晴後小雨　小屋（九・三五）——豆焼沢出合（一一・三〇）——ワサビ沢出合（一二・二五―一二・五〇）——川又（一四・三〇―一四・五五）——二瀬（一五・五五）

彼氏のことが心配だつたが、一緒に栃本へ下りるというので先へ行かす。すぐ追い抜く。天気は良し、下り一方だし、まず

心配はあるまいと、不安ではあつたが置いて行く。荷物のパッキングから、シュラフの整理から、何もかもやつてあげたし、もういい加減で別れたかつた。向うは栃本で泊るというが、こちらは東京まで帰らなくちやならない。（何しろゴタな求めざる相棒だつた。後日談がある。五八年五月、白泰山へ向つて帰らなかつた〇〇大山岳部の二人があつた。一人は石田某、我々の相棒と同姓である。コースも、まず普通の人のいかない、しかも彼が得意気に馴染のコースとして語つていた所だ。恐らくは、彼らではないだろうか……）

一時間ほど下つた時、懐しい小屋がはるか頭上に美しく見えた。雪の中に輝いていた。崖につけられた新道の急坂に、二人はシュリンクした。針金にぶら下り。もたもたと降りる。部の連中とは随分違うものだな、と苦笑する。豆焼沢に降り立つと、何もかも真白だつた。北面の、深く刻まれた谷底には、冬の陽の達することもないのだろう。氷の間を切れる様な奔流が走り、木も草も、岩も、すべて雪と霜とに覆われていた。

川又で山中氏は（雁坂小屋の主）二瀬への道をうまいこと教えた。

「道はここから旧道と、トロッコ道と自動車道と、三筋に分れとります。トロッコ道はバンギがあつて歩きづらいし、旧道は尾根坂の登り降りが苦しい。自動車道が結局、一番いいつてことになりますな。」

川又まで一時間ピッチで来たので、連れの二人は豆をこさえてアゴを出していた。ぼくは歩き足らなかつたので、一人で先に、二瀬まで七粁弱を飛ばしてみた。荷は軽い。小雨が降り出し、涼しくなつた。自動車道とは云え、静かな山里。一度は来たいと思つていた栃本の部落を上に見て、いろいろな想いに耽りながら、ぼくは独り急ぎに急いだ。「あと五粁」の導標から四十分で二瀬に入る。所でダム工事で道路が附け替えになつているのを知らなかつた。気がついたら工事現場の中だつた。オツカない工夫たちに取り囲まれ、おそるおそるバス停を訊く。「上だよ、ここから行きな。」六十度以上あろうかと思われる取水管に沿つて小さな階段がついている。手すりはない。途中で下を見ると足がすくむ。登ること実に三百三十九段。右へ鉄バシゴのトラヴアースとなり、バス道路に飛出す。

（大　賀）

ゾロメキ（春山荷上）

山田邦行、市川陽一

十二月十八日　二十二時四十五分新宿発、見送り宇田川、乾パン十一ケ。

十二月十九日　北細野にて米四斗調達、一升百二十円、北細野から大糸線で糸魚川に出、滑川からタクシーで上市へ、タクシー代六百円。中島荘に泊る。上市では石油四斗購入、二千八百円。

十二月二十日　小型トラックを傭つてゾロメキ白萩発電所まで。発電所内取入口番小屋（責任者、中新川郡上市町ゾロメキ山村利一氏）に食料その他を預ける。

荷物を預けて直ちに上市に引返し、高山線で岐阜に出、東海道線に乗かえ帰京。

二人で米四斗と乾パン十カンを積込んだため、二人では多過ぎる異常な荷物に乗かえ駅ではことごとに咎められた。国鉄でこんなにやかましいのだから、私鉄はなおのことと判断し、多少の支出をいとわず滑川からはタクシーで行くことにした。

滑川のタクシーの運チャンが案内してくれた上市駅前の旅館では、ぼくたちの容姿をジロリと見て門前払い。とてもイヤな感じだつた。仕方なしにまた運チャンに中島荘というチヨイと見ばえのしない旅館に連れてつてもらつたが、ここで、ぼくたちは富クジを当てたような幸運に恵まれた。

その旅館の主人は何とかいう東京に本店のある土建会社の富山支店長で、老いの無聊をなぐさめる意味かぼくらを大変好意的にもてなしてくれ、これから述べるように尽力してくれた。

先ず車の交渉。ぼくらが着いたその日の晩から急に冷えて、馬場島附近ではかなりの降雪を見ているらしいとのことで、翌朝車の交渉では相手方は渋つているらしく仲々ウンと云わない。そこを老いの蛮声宣しく電話にしがみついてガミガミ談判して下さつた結果、O・K。なお、米の購入、餅のことも予め知らせてもらえば都合するということだつた。

（市　川）

×××××××
スキー合宿　〈吾妻山〉
×××××××

参加者　リーダー　加地幸雄、南亮進、渡辺嘉佑、江面誠二、中西厳、宮城賢三、中島寛、中川滋夫、大賀二郎、小林進二、菅村、永井新也、仲田修、馬場佳一

一月五日　東北線の最終で上野を発つ

一月六日　晴後曇風強し　上野――福島――高湯――ぬる湯高湯まではバス。すぐにスキーをつけたが初めての者が多く予想外に時間をとり、ぬる湯を吾妻小舎へむけて出たが風が強くなつて来たので途中で引きかえしぬる湯にとまる。

一月七日　風雪　ぬる湯――吾妻小舎

風が強く雪も降つていたが道ははつきりしているので出発す

る。電話線が最高の道しるべになつてくれる。三時頃から小舎を出て、ゲレンデ捜しと足ならしを行う。

一月八日　晴風強し

終日一切経山の下の方、浄土平につながる雪面でスキー。風は強かつたが雪質は良く、快適なところである。

一月九日　風雪

吹雪の中を鎌沼へ出かける。風が物すごく寒さに対する訓練にもなる。下りは風に吹きとばされながら蓬来山の大斜面をたつぷり楽しむ。午後からは昨日の斜面で滑る。

一月十日　雪　吾妻小舎――幕川温泉――野地温泉

雪の中を野地温泉へ下る。幕川温泉の上は急な下り、木にひつかかつたり、雪の中へもぐつこんだり大へんな騒ぎであつた。野地温泉で湯にひたり、解散コンパ。

一月十一日　晴

残つてスキーをやる数人を除いて他は土温温泉へ下つて帰京。

（渡　辺）

春の剣岳（本峰南壁A2）

中村幸正、中村保、丸山則二

三月九日　曇　富山――千寿ケ原――美女平

三月十日　晴　美女平――弘法小屋

三月十一日　晴　弘法小屋――天狗平小屋

三月十二日　晴　天狗小屋――剣御前小屋

三月十三日　晴　御前小屋――平蔵コル手前・雪洞（A・C）

連日の好天で、多少へばり気味であつたが一挙にA・C（雪洞）に入る。十貫近い荷を背負つての稜線。保荷の苦しさを十分味つた。

三月十四日　風雪　停滞

三月十五日　風雪　停滞

三月十六日　晴　A・C――頂上――A・C

三月十七日　曇後風雪　チンネ登攀を狙つてA・Cを建設したのであるがT中故障で断念せざるを得なくなつた。その代りに一歩後退して、Y中、丸山の二人で本峰南壁A2を登つた。

三月十八日――二十日　風雪　停滞

三月二十一日　A・C――別山乗越――雷鳥荘

三月二十二日　曇　雷鳥荘――千寿ケ原

三月二十三日　晴　千寿ケ原――富山――名古屋

（T　中）

志賀高原より龍王越えスキーツアー

石弘光　他三名

三月二十四日　晴　発哺（八・〇〇）——焼額（八・四〇）——竜王（一一・〇〇）——一一・四五）——小丸山（一三・〇〇）——中須川（一四・三〇）

昭和三十三年度（四月～三十四年三月）

谷川岳西黒尾根

石弘光

四月十一日　曇時々雪

沢出合（一二・一五）——土合山ノ家（一一・四五）——マチガ沢出合（一二・三〇）——S字状（一二・三〇—一三・一五）——土合山ノ家（一五・三〇）

早朝上野を発ち、午後より土合山ノ家よりマチガ沢S字状雪渓でスキー。帰途一ノ倉出合まで足を伸し岩壁をのぞく。雪は固く汚れており、快適なスキーは楽しめなかつた。

四月十二日　快晴　山ノ家（六・五〇）——西黒尾根取付（七・一〇）——ザンゲ岩（八・五〇）　頂上（一一・〇〇—一一・四五）——山ノ家（一四・四五）

道はしつかりついており、森林の中で早くもアイゼンをつける。谷はいまにも雪崩れそうで、とても入れる状態ではなかつた。頂上で出合つた連中に一ノ沢下降をさそわれたが、遠慮して一人トボトボ引返す。

丸池より前日発哺に入り、翌日竜王越え、帰途野沢に廻り帰京。

新人歓迎山行（愛鷹山）

参加者　沢木一夫、市川陽一、景山豪治、城戸剛、山田邦行、江面誠二、大賀二郎、石弘光、馬場佳一、永井新也、菅村幸夫、新人有賀盈、倉知敬、大建二郎、宮本英治、内藤、長野、川村

四月二十日　快晴　須津——山神社——位牌岳展望台——往路下山

新宿駅の混雑を避けて東海道沿線に来てみたが、天気が良すぎて暑くて困つた。位牌岳の展望台に陣取り富士山と駿河湾を眺めながら歌を唱つて下山する。かなり人が出ていたが、沢筋はともかく尾根は藪が多くあまり快適ではなかつた。

（沢　木）

前穂高第Ⅳ峰奥又白側明大ルート

城戸剛、大橋喜治

四月二十三日　アルプス号にて新宿発。島々宿（七・二〇）——徳本峠取付——ビヴアーク点（一八・一〇）

四月二十四日　曇後快晴　ビヴアーク点（八・四〇）——徳沢（一五・五〇）——ビヴアーク点（一八・一〇）

土砂崩れのため、バスは稲刻止。そこで徳本峠越と決意。

意外に多い残雪に苦しみながら峠手前にてビヴアーク。

四月二十五日　曇後雨　ビヴアーク点（八・四〇）——徳沢（一四・四〇）——松高ルンゼ出合（一六・〇〇）——徳沢（一七・三〇）

徳沢に着いた頃雨となり、本日は松高ルンゼのナダレ偵察だけやる事にした。

四月二十六日　快晴　徳沢（七・〇〇）——松高ルンゼ出合（一〇・三〇）——奥又白池（一四・三五）

壁一杯に春光を浴びて白く輝やくⅣ峰正面壁とにらめつこしながら池に着く。池畔にテントを張り、雪洞を一つ堀つた。

四月二十七日　曇後小雪　奥又白池（七・〇〇）——C沢——明大ルート取付（八・四五）——登攀終了（一二・〇〇）——奥又白池（一四・〇〇）——徳沢（一五・五〇）

着用せず。快調なピッチで攀じていたが、二ピッチ目ごろより小雪がちらつき出したので多少あせりが出た。登攀を終えた頃より小雪は激しいみぞれに変り、そのままテントへ戻るのは不可能と考えられる程濡れねずみになつていたので、徳沢に逃げこむ事にする。

四月二十八日　快晴　徳沢——奥又白池——撤収——徳沢——上高地

再び壁とにらめつこしながら、池へ上る。昨日の苦闘のあとを心ゆくまで眺めながら何とも云えぬ充実感を味わう。

四月二十九日　上高地——松本

後立山縦走（白馬——唐松）

宇田川徳治、市川陽一

五月一日　快晴　新宿（八・一〇）——松本（一三・四八—一四・一九）——信濃四谷（一六・三〇—一六・四〇）——二股（一七・一五——一七・三〇）——猿倉山荘（一九・五五）

東京あたりは雨だけれど、信州に来ると快晴、南ア、八ツ、中アがよく見えた。山行に昼の中央線を利用するのは快適。バスは二股手前までしか入らず、猿倉まで歩いて山荘で一服。まだかなりの残雪がある。

五月二日　曇　風強し　猿倉山荘（六・五五）――白馬尻（八・二五―三〇）――白馬山荘小屋（一五・一五）

四時五十分に起床。山荘に昨夜同泊したメチ三人を含む五人のパーテイと一緒に出発。曇り勝ちで風強く、雪渓の上を吹きつける風は冷く、凪ぐと途端にナマ暖くなる。猿倉の上方の台地にテント二つ三つ。大雪渓の雪は結構多い。途中でルートを誤り、唐松縦走路に出てしまう。稜線の風はものすごく、足を踏んばつて歩かないと吹き飛ばされそうである。風にとばされてくる雪片が顔面にあたり、その痛さは表現できない。薄暗くなり、沈痛な気持で小屋を求めて稜線をたどる。

猿倉山荘に小屋番がいることは予想していたが、まさか全くの素泊りで三百円とられるとは予想していなかつた。小屋に入ると、今入つたところですと小屋番がニユツと顔を出したのにはガツカリ。お茶の饗応も受けず、蒲団も借りないで三百円とは、山の素晴らしさも吹飛んでしまつた。それもこの連休だけ小屋に入つてくるとは品ない仕草だ。

五月三日　曇後晴　小屋（六・五〇）――白馬鑓（八・五〇）――不帰キレット（一一・四〇―一三・〇〇）――唐松岳（一六・〇〇）――唐松小屋（一六・四〇）

不帰は思つたよりよかつた。天狗の下りは雪が全然附着しておらず夏と同じ。縦走路全般には雪がかなり残つており、立派な雪洞が掘れそうだ。不帰は二峰の下りが一番悪かつた。夏の巻き路には雪が庇状に張り出しており、立派。唐松小屋でも小屋番が出迎えてくれた、二五〇円也。

五月四日　小屋（八・〇〇）――八方尾根――細野（一二・〇〇）

下山。松本で佐薙先輩に邂逅し、サンザンに饗応していただき感激。

（市　川）

白馬岳

江面誠二、馬場佳一、有賀盈、山本尚禎

五月二日　曇午後雨　四ツ谷駅――バス――山ノ神（八・五〇―一五五）――二股（九・二三―四〇―一一・〇〇）――猿倉（一一・三〇―一二・〇〇）――白馬尻（一三・一〇―四五）――猿倉山荘（一四・三〇）

二股は桜が満開。猿倉に着く頃は白馬が真青な空に浮ぶ好天となつたので、この天気ならというので白馬頂上を目指すことになつた。白馬尻で昼食をとる頃、曇りだし、地理不案のこともあり引返すことにした。

五月三日　晴　猿倉山荘（六・一五）――白馬尻（七・一五―

八・二〇）——水場（一〇・〇五—四五）——ホテル（一一・五五）——頂上（一二・一五—一三・一五）——猿倉山荘（一四・四五）

四時に起床。雪がしまつているのでアイゼンをつけて出発。雪渓では杓子岳側のガレ場で間断なく落石。頂上では剣、立山等が疲れをとばすことを期待したが、ガスつていてかすんでいた。雪渓の下りは一ケ所グリセードできただけ。雪が腐つていてそれどころではなかつた。

五月四日　曇時々雨　猿倉（七・〇三）——山ノ神（八・三〇）——小窓尾根取付（一一・四五）——一八〇〇米（一二・三〇）——一八〇〇米（一四・〇〇）

砂防ダムを通つてから高捲き。猛烈なヤブから三番目のガリーを登つて小窓尾根に出る。ここはかなり急なガリーでほとんど休み場もない登り。アイゼンをつけて一気に登つてしまつた。一八〇〇米のテント場まではヤブと雪の上とを交互に登る。台地状の一八〇〇米にテントを張る。小窓尾根は昨日の雪でさらに白さを増してきれいだ。

五月六日　快晴　テント場（六・〇五）——ニードル直下（八・三〇）ドーム（九・三〇）——マツチ箱下（一一・〇〇）——ひるめし同上（一二・〇〇発）——小窓王直下（一三・五〇）——三ノ窓（一四・二五）同上発（一五・一〇）——二股（一五・四〇）——テント着（一六・一五）

寒気が肌をさす。アイゼンが快適にきいて気分がいい。ニードル附近から尾根がやせて来て緊張させられる。急な雪壁が二ケ所程あつたがバケツを堀つて登る。マツチ箱の手前で一度だけアンザイレンしてスタカツトで登るがあとほとんどザイルを出さなかつた。マツチ箱からは白萩川側をトラヴアースする。

小窓尾根（春山偵察）

渡辺嘉佑、中川滋夫、中島寛、山本健一郎（〃先輩）

（山　本）

五月二日

二十一時十五分上野発急行「北陸」で東京を離れる。

五月三日　晴後雨　上市——伊折——馬場島

馬場島へついてすぐ雨が降り出した。気温が下つて夜はあられになつた。

五月四日　雨　停滞

夜になつて星が見える。

三ノ窓でしばらく遊んで池ノ谷左股を下る。グリセードであつと云う間に二股についてしまつた。小窓尾根との高差が一番少ないあたりから尾根に上れればテントはすぐ目の前である。

五月七日　曇後晴　テント場（八・三〇）――テント場（一四・〇〇）

天気が思わしくないので、右股から早月尾根へ出て頂上を通り三ノ窓まで行く計画をとりやめてテントを撤収する。白萩川に下つたころ晴れ上つて来て口惜しがつたがあきらめてのんびりと馬場島へ下つた。

五月八日　曇

八時半に馬場島を出る。伊折からトラックに乗せてもらう。渡辺、中川、山本は十五時四四分富山発で帰京。中島は残つて早月屋根を単独で登るため。

（渡　辺）

剣岳早月尾根

中島寛

五月八日　曇　馬場島荘（三・二五）――尾根取付（三・三五）――松尾平（三・四五）――道を間違える――一七〇〇米コルCI跡（四・四〇―五〇）――一九二〇米ピーク（六・一〇）――アイゼンをつける――二三〇〇米ピーク（七・〇〇）――二八〇〇米ピーク――頂上（一〇・二五―八・〇〇）――二五〇〇米ピーク（一二・〇〇）――足を捻挫、ガスが広がり始める――二三〇〇米ピーク（一二・四〇）――小窓尾根見えず――一七〇〇米コル（一二・五五―一三・二〇）――暗くなる――馬場島荘（一五・一〇）

五月九日　下山。

八ケ岳

石弘光

五月九日　曇時々晴　八ケ岳農場（七・三〇）――行者小屋（一三・四〇）

一人旅の気軽さで、途中河原でのんびり昼寝など楽しみつつ、二倍の時間をかけて小屋に到着。

五月十日　曇時々晴　小屋（四・四〇）――阿弥陀のコル（六・四〇）――阿弥陀頂上（七・〇〇―八・〇〇）――赤岳（九・二五）――行者小屋（一〇・五〇―一二・一〇）―美濃戸（一三・一五）――農場（一四・五〇）

阿弥陀岳南稜の偵察をかね、未明出発。谷間にはグリセード可能の残雪がある。中岳コル直登は登攀不可能で、途中より引返し時間をロス。阿弥陀より赤岳を廻り、すぐに小屋に降る。

帰途蓼科に廻る。

×××××××
谷川岳合宿
×××××××

リーダー沢木一夫、大橋喜治、城戸剛、宇田川徳治、市川陽一、景山豪治、安田惟行、江面誠二、渡辺嘉佑、中川滋夫、小林進二、大賀二郎、石弘光、三股宏、小林正直、有賀盈、川村完爾、倉知敬、大建二郎、内藤、当内、清水

五月二十二日　最終で土合へ向う。

五月二十三日　マチガ沢にてグリセード、ストップの練習。

五月二十四日　曇時々雨と霰

マチガ沢二ノ沢でグリセード。本谷をつめて頂上に立つ。頂上ではあられが降つて来て何も見えなかつた。下りは西黒をちよつとおり途中からマチガ沢に入つてくだる。三人が東南稜へ。四人が東尾根をそれぞれ出かける。

五月二十五日　曇時々雨

一ノ倉沢二ノ沢でグリセード。三時頃土合発の汽車で帰京。

（渡　辺）

穂高岳沢前期部員合宿

大賀二郎、小林進二、小林正直、石弘光、馬場、倉知敬、大建二郎

前期部員のみでパーテイを編成、初めてのことなので若干不安であつたが、岳沢を根拠にしてコブ尾根、前穂、西穂を登攀できた。

十五日、コブ尾根パーテイが帰途白出沢を飛驒側に下降してしまい、一晩帰らず遭難未遂事件を起し、皆にすつかり迷惑をかけてしまつた。

六月十二日

石、馬場、倉知、大の四名新宿を発つ。

六月十三日　晴　上高地（一〇・五〇）――岳沢（一三・〇〇）

雪が思つたより少く、一安心。小屋の下の台地にテンパル。

六月十四日　晴

コブ尾根　石、馬場、テント（六・一〇）――岳沢（一三・〇〇）

（九・二〇―一〇・三五）――コブ頭（一二・一〇）――天狗のコル（一三・三〇）――テント（一四・四〇）

コブの第一峰は正面を登る。二年のみで初めてアンザイレンしたので緊張する。二十米一杯のアプザイレンは快適。

前穂――奥穂――天狗のコル　倉知、大。

六月十五日　晴

この日、大賀と両小林、入山。

コブ尾根に大賀、小林（進）。この日帰らず。

西穂に小林(正)、馬場、倉知が、前穂に石が登る。大は帰京。

六月十六日　晴

前夜、大賀と小林（進）とが日没になつても帰らず、とうとう石が東京に連絡のため上高地に降りる。夜明けを待ち岳沢ヒユッテの上条岳人氏と残りの者とでコブ沢周辺を捜索。

不安の最中、上高地では新聞記者もかけつけたり、捜索隊が編成された午後一時に両人無事に帰る。ガスにまかれルートを見誤まつて飛騨尾根を降りたとのこと。石のみ報告のためとりあえず帰京。

六月十七日　全員帰京。

（石）

××××××
夏山合宿
××××××

涸沢に於ける九日間の合宿、それに引続いて剱までの縦走というのが今年度の夏合宿の予定であつた。例年になく新入部員の数が減少した為彼等を来るべき冬、春の合宿に全員確保すべく、体力強化を計ることを第一の目的とし、更に参加者のうち大きな割合を占める二年部員の登攀技術の向上ということを第二の目的としていた。然しながら昨年と同じく連日降り続く雨に、予定していた計画は殆んど実行出来ず、前半に初歩的ルートをトレースしたに留まり、二回の夏合宿を雨で流した二年部員に大きなマイナスな面を残した。

ここで燃料のことに触れておくと、近年涸沢等に於いて樹木伐採は厳禁され、燃料の確保という事は長期間に互る合宿を行う場合の重要な問題の一つになつている。今合宿に於いては全ての炊事を石油で賄う事は器具の員数、参加者数からみて不可能であり、涸沢小屋管理人の承認の下に流木を採取し、雨天用に持参した石油とを適宜併用した。この方法は概ね良好な結果をもたらしたが、このような変則的な事が許容されるのは今後ごく短期間と推定される。従つて近い将来合宿の燃料対策に就いては根本的な研究がなされねばならないと考える。

雨の為に縦走の出発が遅れ、予定日を消化してしまい、食糧の不足から所定の剱沢まで行くことは出来なかつたが、総じて行動し得る範囲内ではフルに行動した満足の行く合宿であつた。

参加者　チーフ・リーダー沢木一夫、山田邦行、城戸剛、宇田川徳治、市川陽一、大橋喜治、安田惟行、江面誠二、丸子博之、峰高教通、小峰隆、中西厳、大橋一慶、山元淑弘、大

（沢　木）

賀二郎、石弘光、中島寛、小林進二、永井新也、山本尚禎、
馬場佳一、中川滋夫、三股宏、川村莞爾、小林正直、有賀
盈、倉知敬、大建二郎、宮本英治、清水、染谷、高橋
以上三十二名
各係　会計　小峰隆　器具　峰高教通
　　食糧　中西巌　同　中島寛
　　医療　山本尚禎　記録　江面誠二
先発隊
七月十四日
小林（進）、永井、馬場、倉知の四名、食糧調達の為、本隊
に先立ち新宿発。
七月十五日　晴　上高地――横尾
七月十六日　快晴　横尾――涸沢
主として米をかついでいるので重荷に耐えられず、一部をデ
ポ。後で逆ボッカを行つた。
この日、昨夜新宿を出発した本隊、上高地を経て奥又白出合
に幕営。
七月十七日　快晴
先発隊　本隊出迎えの為横尾往復。
本隊　奥又白出合――横尾――涸沢B・C
横尾岩小屋上で先発隊に迎えられ、共に涸沢に入る。北穂沢
上部にテント六張を設営、午後は休養とする。例年に較べてか
なり雪が少ないようだ。
七月十八日　快晴
滝谷第二尾根――安田、小林（進）、馬場。他は五六の雪渓
でグリセード練習。
七月十九日　晴後ガス
滝谷第二尾根――小峰、中島、中川
滝谷第三尾根――山田、中西、大賀
滝谷第四尾根――安田、峰高、石　Dカンテ上で大きな落石
に遭つたが大事に到らなかつたのは全くの幸いであつた。
三峰フエイス――江面、山本、馬場
ジヤンダルム飛騨尾根――城戸、宇田川、川村、小林（進）、
倉知
北尾根――大橋（喜）、市川、山元、小林（正）、染谷、宮本
東稜――沢木、大橋（一）、三股、大、清水
午後丸子入山し、合宿パーテイ全員揃う。
七月二十日　風雨　停滞
初めは休養日位に考えていたこの雨が数日後に合宿を混乱さ
せるようになるとは夢にも思わなかつた。

七月三十一日　雨、午後時々止む
　昨夜来の雨が残つてはつきりしないが、午後になつて止んだので、足馴らしの為に軽く行動する。
　東稜――城戸、市川、安田、丸子、山元、馬場、小林(進)、石、小林正、有賀、山本、川村、中川、倉知、宮本
　グリセード練習――上高地往復　中西、後発隊連絡の為。
　久し振りに雨の音を聞かない朝を迎えたので各パーテイ出発するが十分後には、強雨に遭い、それぞれ引返す。
　二十日から降り始めた雨は依然としてその勢を弱めず、三時間と止んだことがない。かまどにも水が入り、炊事に困難を来す。四台のラジウスを駆使して一日中「飯炊き」に過す。
七月二十四日　雨　時々止む
　多少小止みになつたが、未だすつきりしない。九時頃中西、山元下山、続いて安田、石体育臨時コースの為横尾に下りる。十時頃どうにか動けそうなので体力調整の為に行動を起すが、十二時過ぎに又降り出した雨に各パーテイ共ずぶ濡れになつて帰つてくる。
　北尾根――城戸、宇田川、大橋(一)、有賀、三股、倉知、清水
　東稜――大橋(喜)、山田、大賀、永井、高橋
　涸沢槍東稜――沢木、小峰、中川、中島、小林(進)
　ジャンダルム――市川、江面、馬場、小林(正)、山本、大、宮本
七月二十五日　風雨激し　停滞
　三時頃激しい雨音に起される。風雨一段と強く、表を覗くと北穂沢一帯がすべて水路になつていた。浸水激しくそれからまんじりとも出来なかつた。
　九時過ぎ城戸所用の為単独下山するかどうか気掛りになまでであるが、後発隊との連絡がとれる。丸子、峰高、小峰、清水下山。横尾の丸木橋が流失、チロリアン・ブリッジでどうにか川を越すのである。合宿予定は本日はいたる所破壊し、バス不通。二日がかりで島々に出たいう。涸沢のテントも減る一方ですつかり淋しくなる。
七月二十六日　雨　停滞
　昨日よりは少しましという程の天候である。合宿予定は本日七月二十七日　曇

長かつた雨もどうやら止んだようだ。合宿の予定日は昨日で終了したので、山田、大橋（喜）下山、残りは縦走パーティのみとなる。後発隊を待ちつつ、干物と食糧調査で一日を過す。

七月二十八日　曇時々雨

後発隊が入山しないので縦走に出られず、附近を軽く歩いて体力調査を計る。登攀用具を殆んど下ろしてしまつたことが悔まれる結果となつた。

北尾根――沢木、江面、山本、永井、川村、大

南稜より奥穂――市川、小林(正)、染谷、高橋、宮本、倉知

涸沢槍東稜――宇田川、大橋(一)、馬場、大賀、有賀、三股

奥穂北東稜――中島、中川、小林（進）

七月二十九日　快晴

数日前までは想像も出来なかつたような良い天気になつた。後発隊は昨日になつても入山せず、縦走出発は今日で三日遅れることになるので上高地に連絡パーティを出す。折角上天気になつても器具の不足から行動範囲が限られてしまうことは残念でならない。

上高地連絡――中島、中川

奥穂北東稜――馬場、大賀、山本

奥穂直登ルンゼ――宇田川、小林(進)、有賀

ジャンダルム飛騨尾根――沢木、永井、小林(正)、三股、染谷

涸沢槍東稜――江面、川村、倉知、大

滝谷C沢よりA沢――市川、大橋(一)、高橋、宮本

夕刻上高地パーティ帰着し、先に臨時コースの為に下山した安田、石は、臨時コース中止の為帰京したことの、電話連絡により後発隊の渡辺は道路の破壊、バス不通の為入山しなかつたことが判明、明日より縦走に移ることに決定する。何日ぶりかで仰ぎ見る星空に焚くささやかなファイヤーはこの雨に祟られた合宿にふさわしく、又印象的なものであつた。

（沢　木）

夏山縦走〈涸沢――剣〉

参加者　リーダー沢木一夫、市川陽一、宇田川徳治、大橋一慶、江面誠二、馬場佳一、小林進二、小林正直、有賀盈、山本尚禎、永井新也、三股宏、川村莞爾、中川滋夫、中島寛、倉知敬、大建二郎、宮本英治、高橋、染谷

七月三十日　快晴　涸沢――北穂――キレット――南岳肩

名残尽きない涸沢を後に縦走に出発する。本谷橋が落ちているというニュースもあり、日程の遅れをとり戻す心算で横尾経

由を避け、南稜を登るが第一日目でもあり、予想外に時間を食う。キレットの下り、上りも荷を背負うと仲々バランスを要求される。思わぬ誤算から夜になつてしまい、水を得る為に横尾尾根を下りてみるが、はるか下なので諦めて岩蔭に仮泊する。

七月三十一日　ガス　南岳――中岳水場

昨日の強行軍で疲労甚しき為、中岳の水場まで行つて午後は休養とする。薪がとれないので二台のラジウスで二十人の食事を作ることになるが、午後三時頃から始めても食べるのは八時になつてしまう。

八月一日　雨　停滞

出発の準備をしていると猛烈な雨になつたのでテントを張り直して沈澱と決める。涸沢で打撲した中川の膝を同宿の信州大医学部の方に診て戴く。今日も一日中「飯炊き」に暮れる。

八月二日　ガス後晴　中岳――槍の肩――双六池――五郎平

猛烈なガスであつたが降つていないので出発する。槍の肩で慈恵大の方に手を負傷した有賀、中川手当をして戴く。西鎌を一目散に下りていると雲が切れ始め、見る見るうちに夏の景色になつた。頑張つて双六を通過し、三俣の頂上を通つて五郎平まで行く。テントを張り終る頃には又夜になつていた。

八月三日　快晴　五郎平――太郎兵衛平

天候もやつと夏型に落付いたようだ。のんびりしたコースなのでゆつくり歩く。途中の雪田で作つた即席アイスクリームの味は格別。足を痛めた中川、その後の経過が思わしくないので太郎小屋より単独下山する。薬師峠に設営、薪水豊富で快適なテント場である。

八月四日　晴後曇　薬師峠――薬師岳――スゴ――越中沢岳

スゴに適当な設営地がないため、五色までの予定で早目に出発する。江面、風邪の為ここで別れて有峰に下山する。薬師を快適なペースで越し、スゴ乗越で昼食。スゴの上りにかかる頃より不調の者が続出し、前進が困難になつたので越中沢岳頂上の雪田の脇にテントを張る。

夕方になつてガスが切れると五色、立山が意外に近く、合宿の大詰を思わせた。夜、発電所建設工事の灯が殊の外明るく黒部の谷を照らし出していた。

八月五日　晴　越中沢岳――五色ケ原――一ノ越――ミクリガ池

一気に五色まで行つて友田先輩の碑に参拝、花を添えて「讃山賦」を合唱する。一ノ越で大休止、食糧もなくなつてきたので剱まで行くのは止めて、雄山往復の後これから剱沢に入る中島、宮本、倉知と別れてミクリガ池に下りる。人の動きが激し

く、我々の黒い顔が人目を惹いた。

八月六日　晴　ミクリガ池――称名――千寿ケ原

雨に祟られて予定より長引いた夏合宿もようやく終りになつた。残り物を全部処分して下山となる。下りのケーブルは敬遠して称名に。今更ながら称名滝の大きいのに驚く。満員のバスで千寿ケ原へ、更に上市に行つて、春、御世話になつた中島荘でささやかな解散コンパを開く。

八月七日　富山から思い思いの列車で帰京。

（沢　木）

剣岳岩登り（夏合宿延長戦）

中島寛、宮本英治、倉知敬

八月五日　晴　二時、一ノ越で本隊と別れ剣沢へ向う。五時半、剣沢着。食糧の荷上げをしてくれた友人達と会う。上げてくれた新鮮な野菜に生きかえる心地がした。

八月六日　晴　一般ルートを経て南壁ＡＩ稜へ。取付点がはつきりせず、稜らしき所を適当に物色して登り出す。十時取付。トップ中島、スライディングで倉知、ラスト宮本の順。初めのピッチはややこしくて、トップは三十分も右往左往してようやく一畳ほどのテラスに出る。そこからは平凡。三ピッチ登つてあとはコンテニュアス、十二時半頂上着。頂上でゆつくり平和を楽しんでブラブラ帰幕。

八月七日　晴　八ツ峰六峰Ａ・Ｃフェースへ。一時間半で取付に着く。九時、フェースの一番右側のリッペへ取付く。倉知、宮本、中島の順。登ること数米にしてそこを直登する。適当な左の草付のクラック状の所へにげ、テラスなく、ぐらぐらする這松の上でジッヘル。次のピッチも草と土の出たパッとしない岩登りで四十米いつぱい登つて、あとはコンテで頭へ出る。十一時二十分。傾斜があつて高度感が出るけれど、ぐらつく土の足場と、それに暑いのには閉口した。

昼食後一時半Ｃフェースに取付く。宮本、倉知、中島の順。すごく大まかなスタンスと、がつちりした岩なのはいいけれど、どのスタンスもすりへつて白ちやけているのにはやや滅滅させられる。それでも快適にどんどん登つて、三ピッチで六峰の頭へ出る。三時二十分。帰りの剣沢の登りにあごを出して六時帰幕。

八月八日　晴　連日連動にばてて休養する。中島のみ、スケッチブックを片手に東大谷の見学に出かける。

八月九日　晴　下山。

（倉　知）

北岳バットレス

中川滋夫、馬場佳一

八月二十一日　晴　新宿――甲府――芦安（一三・〇〇）――鷲住山（一八・一五）――野呂川（一九・四五）

「穂高」にて新宿を発つ。芦安までバス、芦安では下からトラックが来ると云うので昼寝をして待つ。三時間位して車に乗せてもらい夜叉神を抜けた。野呂川の河原でシートをかぶつて寝た。

八月二十二日　晴　野呂川（七・〇〇）――池山御池小屋（一一・一五）――稜線（一六・〇〇）

池山小屋を過ぎてから、二人共バテ始め、森林限界を抜けて稜線に出た所に、ちよつとした岩小舎を見つけそこでビバーク。水がないのでキユウリをかじつて寝る。

八月二十三日　曇後小雨　岩小屋（六・四〇）――下降点（八・一〇）――幕営地（一四・三〇）

稜線をかなり行き、始めてバットレスの全容に接する事が出来たが、大樺沢への下降路がわからず、適当な沢を下る。雪渓が見え始めた所で、飯を炊いて食う。この頃からガスがかかり始め、どこが八本歯沢なのか、二股より上に居るのかどうかもわからなかつたが、幕営の跡を見付けたので、そこに大賀から借りたシャツ天を張つた。

八月二十四日　雨　停滞

八月二十五日　雨　停滞

雨が止んだ時、天幕のすぐ上の沢をつめて見たが、相変らずはつきりしない。時折ガスの切れ自から見える黒々とした濡れた岩壁を見上げては不安な気持になつた。

八月二十六日　雨　停滞

八月二十七日　薄曇後晴　第四尾根登攀

不運をかこち合つていた我々も、遂に大樺沢のテントから解放された。見上げるバットレスは今朝こそ朝日に微笑んでいた。

勇躍Cガリー下沢をつめ尾根末端に達しⅣ尾根にトラバース。又ガスがかかり始め岩は濡れて来る。久々の行動で体が思うように動かなかつたが、つるべでどんどん登り第一コルに達した。又晴れて来て釣尾根を行く人達にコールを合わす余裕もでて来た。第三コルへアプザイレンで下り昼食。例の中央稜をのぞく。上は見えなかつたが確かにすごい。コルから二ピツチでザイルを解き、二〇分後憧れの北岳に立つことが出来た。

天幕（六・三五）――取付（七・二〇）――第三コル（一二・〇五―一二・四五）――頂上（一四・〇五）――帰幕

一五・四〇）

八月二十八日　曇後晴　天幕（六・一〇）――稜線（七・二五）――池山小屋（九・四五）――荒川小屋（一二・一〇）――鷲住山（一四・二〇）――芦安（一六・一〇）――新宿。

食糧が切れたので、未練を感じながら下る。トラックを捕えたので芦安に早くつきその日の中に家に帰つた。

（中　川）

笠ケ岳

倉知敬、他一名

八月二十七日　曇時々晴　蒲田温泉を経て蒲田川左股出合で幕営。

八月二十八日　曇後晴　テント（八・一五）――大ノマ乗越（一五・一五）――抜戸平（一七・〇〇）

小池新道を登る。台風の後のため増水していて一回渡渉させられた。抜戸平は快適なキャンプサイトだつた。

八月二十九日　晴後雨　抜戸平（八・〇〇）――笠ケ岳（一〇・一五）――クリヤ谷最後の橋（一七・〇〇）

槍穂連峰のながめはすばらしい。頂上直下で小屋を建設中であつた。

八月三十日　雨後晴　下山

谷川岳一ノ倉沢烏帽子南稜

丸子博之、大賀二郎、他二名

九月十九日　二十三時五十分上野発。

九月二十日　晴　土合山ノ家（五・二〇）――衝立前沢出合（八・四五―九・三五）――登営（六・二〇―七・三五）――南稜テラス（九・〇五―九・五〇）――一ノ倉岳（一六・攀完了（一四・四〇―一五・一〇）――肩の小屋（一七・二〇―一七・三五―一六・三五）――西黒尾根下降・旧道出合（二〇・一〇）――帰幕（二一・一五）

四十米ザイル3本で、四人がアンザイレンした。折からRCCパーテイが衝立岩正面に挑んでいる。南稜テラスの眺望の素晴しさは云いようもない。左手には烏帽子沢奥壁が偉容を誇り、中央稜が80度の角度で空をきつている。右手は本谷バンドから滝沢下部、Aルンゼ、マツターホルン状岩峰、ザツテル等々恐ろしい傾斜で国境稜線へ突き上げている。二ノ沢出合に僅かに雪渓の残ガイがあるのみで、他はすべて岩、黒い岩、堅い岩。天気は良い。フアイトが猛然と湧いてくる。オーダーは丸子、M、N、大賀の順。

テラスから容易なリツジを15米でバンドに達する。二ピツチ目は、右手が大きなスラブとなつて奥壁に接している。バンドを五米ほど右へトラヴアースして、逆く「く」の字のクラックを登る。傾斜約七十度、二十米で熊笹のルンゼに達する。ここをコンテイニユアスで10米進むと、大まかな岩稜につきあたる。右のゆるい巨岩と草で平凡、トツプ大賀となり左へ上り、右へ折は傾斜り返す。最後が一寸悪いが、15米で六ルンゼの二股へ達する。左股上部のハングした洞穴がよく見える。一般ルートは更に右へまわつて南稜そのものを直上するようであるが、六ルンゼ右股のチムニーが面白そうなので、パーテイを分けMトツプでもぐり込む。左へ20度傾き、上昇角一〇〇度程のハングした15米のチムニーである。古いハーケン三本を使い、最後のチヨツクストンに苦しめられながら左へ抜ける。右へ草付のバンドを七米上り、三十米で右手一般ルートから来た丸子パーテイと合する。正面に二十五米の逆層のスラブがそびえる。左へ戻つて容易なチムニーを登ることも出来るが、再び四人アンザイレンして直登をはかる。Mがトツプ、大賀のジツヘルでハーケン三本を使つて連続吊上げで乗越す。八十度程度の傾斜だが、ホールド、スタンス共に流れていて、最悪のピツチであつた。大賀がカラビナだけをホールド用に残して、引上げやすいようにザイルはカラビナから外しながら登る。最後の二米、完全にザイルにすがつて腕力で突破するしかなかつた。後続二人を目茶苦茶に引つぱり上げ、登攀終了を確認する。右上に烏帽子岩が見える。草付のルンゼを三十分ほどつめて一ノ倉尾根に達し、無雪期の悲しさ、おそろしい遠まわりをして、西黒尾根を下る。鎖場で日が暮れた。鉄塔まで下ると、足もとの土合の駅に汽車が入つた。真暗な山間にそこだけ光の海だつた。帰り着いた一ノ倉のテントから、正面岸壁にビヴアーグする三人の灯が印象的だつた。

九月二十一日　曇

マチガのシンセン沢左股に向つたが、天気悪化し中止、二ノ沢出合で岩遊び。

九月二十二日　雨

正面岸壁の連中はついに降りてきた。我々も雨中撤収して帰京。

穂高

丸子博之、他一名

十月六日　離京

十月七日　小雨

（大賀）

上高地（一五・一〇）——徳沢（一六・〇五）
途中道路崩壊のため乗継ぎ、二時間程待たされる。
十月八日　快晴
徳沢（七・四〇）——一八・五〇）——横尾（九・一五）——
涸沢（一三・一〇）
徳沢あたりでは落葉松がようやく黄ばみかけてきた程度だが
涸沢の秋はたけなわ。澄み切つた空、ナナカマドの真紅の実、
稜線は新雪をまとつてうつすらと白い。
十月九日　快晴　クラック尾根
天幕（七・一五—一八・四五）——北穂（九・一五—九・
四〇）——クラック尾根末端——メガネ（一〇・四〇）—
—凹角（一一・三〇）——岩小屋（一二・一五）——北穂
（一三・三〇）——天幕（一四・三五）
総じて岩はもろく、余り快適なルートとはいえない。夕刻、
上高地へ遊びに来ていた高校時代の友人が涸沢へきた。
十月十日　快晴　第四尾根
天幕（五・四〇）——北穂（七・二〇）——スノーコル
（八・四〇）——Aカンテ下（一二・五〇）——Bカンテ
（一三・二〇）——Cカンテ（一四・三〇）——Dカンテ
（一六・四五）——縦走路（一七・〇三）北穂——（一
七・四五）——天幕（一九・二〇）
一度岩登りというものをやつてみたいとSが云うので連れて
行くことにする。スノーコルより左手にトラバースを始めた
が、うつかり廻りこみすぎて、カンテの側壁を登る破目にな
り、上部で遂に行きづまつて退却。アップザイレンで降り、ガ
レ場をトラバースして正常ルートへ出る。
Dカンテを登り終えた頃、丁度笠ケ岳の肩に夕日が沈んだ。
めつたにめぐり会えないような素晴しい夕焼けだつた。小屋の
ソバで腹ごしらえをし、南稜を下つた。
十月十一日　晴　沈澱
シュラーフ、衣類などを干し、枯草の上に寝ころんでおだや
かな秋の一日を楽しむ。
十月十二日　ガス　中央稜
天幕（一〇・三〇）——北穂（一二・五〇）——中央稜取
付点（一四・〇〇）——縦走路（一六・〇〇）——北穂
（一六・三〇）——天幕（一七・三〇）
昨夜から雨が降り続いていたので今日は沈澱するつもりで遅
く起きたが、雨は朝のうちに止んだ、取り敢えず北穂へ行つて
みることにきめ、ついでに小屋へ石油カンをかつぎ上げる。昼
食後中央稜へ向う。短いがスッキリしたルートである。時々ガ

スが切れて豪快な眺めが展開した。

十月十三日　ガス後雨　　北条新村ルート

天幕（六・一〇）――（五・六のコル（六・五〇）――（八・二〇）――TA（八・三〇）――（九・三〇）――這松テラス（九・五〇）――小Ü上（一〇・一〇）――大Ü上（一〇・四〇）――終了点（一一・五五）――五・六のコル（一二・五〇）――天幕（一三・三〇）

TAより約三ピッチで這松テラス。小ハングはカラビナ三個を使つて吊上げで越す。その上の大ハングはアブミ二個使用。右へトラバースして尖岩でビレイ。さらに六・七米行つてカンテを直上し終了。濃い霧につつまれた幻想的なクライム。北尾根へ出るとほとんど同時に雨が降り出す。

十月十四日　雨　撤収

強い風と雨。一晩中ポールにしがみついてまんじりともせずに夜を明かした。明け方ついに天幕が裂けてきたので撤収。全身ずぶぬれになつて上高地に辿りつく。

十月十五日　早朝帰京

南アルプス（冬山荷上げと偵察）

渡辺嘉佑、峰高教通、江面誠二、大橋一慶、小峰隆、中川滋夫、山本尚禎、小林進二、小林正直、大賀二郎、永井新也、川村莞爾、三股宏、有賀盈、倉知敬、大建二郎、朝木大統

冬山合宿の荷上げを兼ねて南アルプスに入る。

十月十二日「アルプス」で新宿発

十月十三日　曇後晴　辰野――伊那大島――鹿塩――キャンプ指定地

バスの便が悪くずいぶん待たされて鹿塩についたのが昼になつてしまつた。

十月十四日　曇後雨　キャンプ地（七・一〇）――大河原分岐点（一三・二〇）――三伏小屋（一五・〇〇）

荷が多く三伏峠への登りは仲々きつい。

十月十五日　雨　停滞

十月十六日　雨後曇　停滞

十月十七日　晴後曇　三伏小屋出発（五・三〇）――塩見岳（一〇・三五）――北荒川岳（一三・三〇）――井川越（一六・五五）

荷は軽くなつた筈なのにバテる者が出て、一向に速度が早くならない。井川越の近くでは猛烈なヤブこぎがあつた。小峰は往路下山

十月十八日　雪後雨　停滞

朝起きてみたら、べたべたの雪が五センチも積つていた。午後から雨に変つて雪はとけたがテント内の侵水少々あつた。

十月十九日　快晴　井川越（八・四〇）――三峰岳（一〇・〇〇）

三峰岳で三つに分れる。渡辺、川村、倉知、大は馬鹿尾根へ、峰高、中川、小林(進)、大賀、三股は北岳バットレスへ、他は池山小屋へ下る。

（渡　辺）

仙丈から鳳凰へ

渡辺、川村、倉知、大

十月十九日　快晴　三峰岳（一〇・五〇）――野呂川越（一二・三五）――高望池（一四・四〇）

三峰岳で別れて馬鹿尾根を高望池へむかう。高望池には水が満々とあり少し早かつたがテントを張る。馬鹿尾根は思つた程歩きにくいことはなかつた。誠に静かで誰にも会わない。秋の山を充分に楽しむ。晩めしには分厚いビフテキを食う。

十月二十日　晴後曇　高望池（六・二五）――仙丈岳（九・二五）――栗沢山（一四・四〇）――浅夜峰（一五・五五）――早川小屋（一七・一五）

アサヨ峰の登りは寒さと空腹のために消耗した。岩かげに風をよけてクラッカーをつめ込んでがんばる。

十月二十一日　曇風強し　早川小屋（一〇・〇〇）――地蔵岳（一三・二〇）――薬師岳（一四・四〇）――南小室（一五・二五）

雨が十時頃やつとやんだので出かける。早川尾根には雪はないが白根三山は雪が降つたらしい。黒い雲の中に頂上をつつこんで仲々姿を現わさない。南小室小屋は快適なところだ。同宿客が一人居たが、その人のラジオで西鉄が巨人をひつくり返したことを知る。

十月二十二日　雨　小屋（七・〇〇）――夜叉神峠（九・〇〇）――トンネル入口（九・三〇）――芦安――甲府

雨の中を夜叉神峠へ。茶屋でつけものなどに舌づつみをうつ。トラックに乗せてもらつて芦安へ。新宿着は十八時十分だつた。

（渡　辺）

北岳バットレス

峰高教通、小林進二、中川滋夫、大賀二郎、三股宏

十月十九日　晴　三峰岳――バットレス沢

三峰で渡辺ら四人の馬鹿尾根パーティと北岳手前で江面たち下山する連中と別れたぼくたち五人は、バットレスで二三日の

岩登を楽しもうと、初めてみる壁をあおぎながら何かなつかしさを感じながら、八本歯沢をにぎやかに下つた。夜、牛肉のテリヤキ、ギユーちやんのうまそうにぱくつく顔は忘れられない。筋のある肉なのでなかなかかみきれない。肉をかみきろうと苦闘する顔が、ロウソクの光であやしく変化し、それがまたおもしろい。ギユーは本当にうまそうに食つた。大賀が、肉をかみきろうとした拍子に足をふんばり、そのはづみにラジウスの上のメシをひつくりかえしてしまつた。渡辺たちはどうしているだろうか。連中も牛肉はたんまり持つていつた。友と山で別れるのは何となく寂しいものだ。

十月二十日　曇

第一尾根――峰高、中川、三股

どこから取りついていいのか判然としない。いつのまにか側壁を登つて登攀は終了していた。もろくて落石には悩んだ。

第四尾根――大賀、小林

取付前にギユーちやんが足を滑べらせてひつくりかえり、一回転して？　うまいぐあいに石に腰かけた。ギユーちやんのアクロバットだけらしい。

十月二十一日　雪

昨夕、冬を思わせる雲だなんていつていたら、案の定真夜中から雪。テントをつぶされないうちにと撤収。十センチ程の雪をふみしめ、冬山の雰囲気を周囲に感じながら稜線に出る。雪は白根三山の稜線のみ。下は紅葉の世界。雪を味わいながらゆつくり歩こうぜと眼を忙がしく動かせる。芦安まで十時間。トラツクがこなくてよかつた。これ程に見事な紅葉が延々と楽しめたんだから。（負け惜しみ）

最上級生として山行は初めて。四年生がいないとこんなにたわつてもらえるのかと、荷上げ後の山行中ずつと身に感じた。

（峰　高）

上高地、岳沢谷

中川滋夫、小林進二、大賀二郎、春日井実（先輩）

十一月一日　アルプスで離京

十一月二日　小雨後曇　上高地（一一・四五）――横尾（一五・四〇―一六・二〇）――上高地（一八・三〇）

OBの冬山合宿の食糧、スキーの荷上げを頼まれて出かけた。春日井OBとは横尾で別れ、帝国ホテルに戻つて泊る。

十一月三日　曇時々小雨　岳沢入り　ホテル（一二・一〇）―岳沢ヒユツテ下（一四・一〇）

十一月四日　快晴　南股・トリコニー　テント（六・三五）

——大滝下取付（七・一〇）——トリコニー左峰（九・二五—一〇・二五）——吊尾根（一一・二五—一二・〇〇）——重太郎新道——テント（一四・二五）

大滝の左側のルンゼをつめて、いつの間にかトリコニーに出た。ここからは一応岩のリッジであるが、どうということもなく、雪田に出て、奥穂頂上の右下五十米位の地点で吊尾根に出る。ついにアンザイレンしなかつた。まれにみる好天で、新雪が実に美しかつた。深い所で積雪約三十センチ。

十一月五日　快晴　コブ沢よりI峰バットレス　テント（八・〇〇）——コブ沢出合（八・二五—八・三〇）——バットレス基部（一〇・五〇—一一・三〇）——I峰（一二・五〇—一三・〇〇）——コブの頭（一四・四五—一五・二〇）——天狗のコル（一六・一五）——テント（一七・〇〇）

小林は下山。無雪期のコブ沢は、落石がかなりあるが、面白かつた。適度のトレニングーとなる。I峰正面は、取付が早すぎ、容易な登攀三ピツチで頂上に出てしまつた。もつと左へまいて、殆んどアツプザイレンのすぐ右側ぐらいを登ると一番面白いようだ。頂上からアツプザイレン地点まで、雪がついているので一寸悪かつた。捨ナワは既に掘り出してあつた。天狗のコルまでの稜線は、アイゼンをぬいだりはいたり忙しかつた。冬の悪さが偲ばれた。

十一月六日　快晴　下山、松本まで。

ステーションビヴアーク、同夜東京を発つた筈の山本らを待つ。

鹿島槍ケ岳

中川滋夫、山本尚禎、永井新也、大賀二郎、倉知敬

十一月七日　雨　小雪　大冷沢出合（八・五〇）——赤岩尾根引返し（一〇・〇五—一〇・一五）——大冷沢出合（一四・三〇—一四・五〇）——西股出合（九・二〇—九・二〇）——高千穂平（一二・〇〇）——冷乗越（一三・四五—一四・〇〇）——冷池（一四・一〇）

打つて変つた快晴無風。爺のバットレスが豪快である。高千穂平から上は六十センチ程の積雪。しかしラッセルがしてあつて、楽であつた。冷乗越からの剱、立山は紫がかつた雪をまとつて、信じ難いほどの偉容だつた。

十一月九日　曇後雪　冷池（八・一五）――南峰（九・三〇―九・四五）――冷池（一二・二〇）――高千穂平（一三・一〇―一三・二五）――西股出合（一四・一〇―一四・二〇）――大冷沢出合（一五・〇〇）――鹿島（一五・三〇）

吹雪の頂上から雨の鹿島へおそろしい速さだつた。撤収を決めてから三時間で最終バスに乗つてしまつた。

（大　賀）

××××××
富士山合宿
××××××

参加者　リーダー渡辺嘉佑、大橋喜治、市川陽一、大橋一慶、中西巌、中川滋夫、大賀二郎、小林進二、小林正直、山本尚禎、三股宏、川村堯爾、高橋文夫、倉知敬、大建二郎、宮本英治、朝木大統、有賀盈

十一月二十一日　雪　新宿（六・三〇）――富士吉田――五合目

富士吉田について歩き出すころから小雪がちらついて来た。馬返しから雪が十五～二十センチ位ある。五合目の森林帯に雪をどかしてテントを張る。夏テントは我々のほか数える程で他は冬用テントだ。

十一月二十二日　晴　テント（七・二五）――八合目（一一・三〇）――頂上（一二・四〇）――テント（一五・三〇）

六合目あたりでアイゼン歩行の練習をやり、昼食後頂上を目指す。九合目まではもぐつてしまつて仕方がないがそれから上は快適にアイゼンがきく。しかし寒さは痛烈で水筒の中のジュースがかさこそとわびしい音をたてて凍つてしまい、思いがけず、シャーベットが出来上る。

十一月二十三日　快晴

六合目あたりで、ストップとアイゼン歩行の練習をやる。陽だまりで、河口湖を見下しながら昼食をとり、三時頃テントをたたんで富士吉田へむかう。三時間で富士吉田へ。一年三人は三ツ峠へ行つたが他は全員帰京。

（渡　辺）

三　ツ　峠

宮本英治、大建二郎、倉知敬

一一月二十四日　晴

富士山合宿の帰途たちよる。

NO・4ルートを登り、後NO・4、NO・5を第一テラスまで数回のぼりアプザイレンで下降して練習。初めて一年だけで登るので、少々不安であつたが、スムースに登れた。

（倉　知）

穂　高

丸子博之　他六名

十二月一日

友人に頼まれてボツカにかり出された。

十二月二日　晴　上高地―横尾

島々から学習院大山岳部の方々と共同でトラックを傭い、車にゆられて上高地入り。

十二月三日　快晴　横尾―徳沢―横尾

出発が遅くなつてしまつたので一まず涸沢小屋迄荷を上げる。北穂沢は意外に雪が深い、ゴルジュの上辺りまでラッセルして戻る。

十二月四日　快晴　横尾―涸沢―北穂―涸沢―横尾

北穂沢の上部は胸までのラッセル。帰りは日のかげるのを待つて北穂沢を一気に駆け下りる。

十二月五日　快晴　帰京

ニセコアンヌプリ

大建二郎　他一名。

十二月二十五日―二十九日

帰省したついでにスキーに行く。道営のチセハウスに泊り、イワオヌプリの中腹あたりで滑る。

鳳凰三山

中川滋夫　他九名

十二月三十一日　晴後曇　新宿―甲府―芦安（一二・三〇―一二・五〇）―夜叉神峠（一五・三〇）

冬合宿の最後の日に芦安に着いてからまだ五日しか経つていないのにまたここ芦安に来た。今年はこれで三度目である。トラックを拾い楽に峠まで行けた。

一月一日　雪　夜叉神（八・五五）―大崖（一一・三〇）―辻山下（一三・三〇）

峠の景観得られず。小雪なので行動。正月の休の為め五六パーテイに出合い、ラッセルは全然ない。

一月二日　晴　天幕（八・三〇）―辻山（九・二五）―南御室（一〇・一〇）―薬師下（一三・三〇）

稜線に出るとさすがに風が強い。顔がヒリヒリする程小石が吹上げられる。よく晴れて北アもはつきり見えた。

一月三日　曇　天幕（九・四五）――薬師（一〇・〇五）――鳳凰小屋（一三・二〇）――燕頭山（一五・三〇）――御座石（一八・〇五）

鳳凰小屋についたのが早かつたので、御座石まで下つた。

一月四日　晴　御座石（一〇・四五）――平川峠（一二・三〇）――穴山（一三・五〇）

穴山で上り列車超満員で乗れず、バスで韮崎に行つたがここでも乗れず、甲府へ行き、甲府仕立でやつと帰京出来た。

××××××
スキー合宿　**（吾妻山）**
××××××

リーダー渡辺嘉佑、南亮進（O・B）峰高教通、大橋一慶、江面誠二、石弘光、小林正直、有賀盈、倉知敬、大建二郎、三井博、朝木大統

一月五日　上野発。

一月六日　曇　福島――バス――土船――微温湯温泉

ぬる湯で近くのゲレンデで足ならしする。

一月七日　雪　微温――湯吾妻小舎

昨年と同じ斜面へ二時頃から出かける。雪が昨年より多く誠に快適である。

一月八日　風雪

午前中ゲレンデでスキー。午後から鎌沼へ足をのばす。全くすばらしい寒さであつた。下りは雪煙をあげて豪快な滑走。スキーを折るものが二人あつた。

一月九日　晴

午前中東吾妻山へ出かける。樹氷の間をぬつての登り降りは気持がいい。この降りで三十数回ころぶという御人がいた。頂上からの眺めも仲々に良く東北の山々がかなり良く見える。午後は例の斜面で自由練習とする。

一月十日　雪　吾妻小舎――野地温泉

幕温泉を通らずに土湯峠へ出て野地温泉へ下る。解散コンパ。

一月十一日　晴

それぞれ土湯へ下つて帰京。数人は残つてスキーを楽しむ。途中土湯スキー場で楽しんだものもある。

（渡辺）

赤岳西壁北稜

中川滋夫、他一名

二月二十六日　晴　茅野（六・四〇）――八ケ岳農場（八・五～九・〇〇）――赤岳鉱泉（一五・〇〇）――行者（一六・二〇）

南沢は雪が深くその日の内に行者まで行けないとのことで鉱泉側から廻つて入り、小屋の近くに雪洞を掘る。横岳の西壁のアーベントロートはすばらしかつた。

二月二十七日　快晴　雪洞（七・四五）――取付（九・〇〇）――頂上（一三・五五）――帰着（一六・三〇）

運よく快晴に恵まれ、予定の北稜を登つた。赤岳西面の中では一番面白いと聞いていたが、果して岩あり、雪壁あり、青氷ありで、終始緊張した登攀を味わさしてくれた。四〇米でコンティニュアスを入れて六ピッチ。

二月二十八日　晴　行者（一〇・一〇）――農場（一四・〇〇）――茅野（一六・〇五）帰京

八ガ岳

宮本英治、倉知敬

三月二十七日　二三・五五　新宿発

三月二十八日　晴　八ケ岳農場（七・五〇）――行者小屋（一四・〇〇）

小屋裏のテント場にウインパーを張る。雪はヒザ位まであつた。

三月二十九日　晴風強し　テント（八・〇五）――阿弥陀岳（一一・〇〇）――テント（一二・〇〇）

りつぱなトレースがついていて簡単に登れた。風が強く赤岳頂上でメガネを吹き飛ばされた。そのため午前中で引き上げてしまつた。

三月三〇日　ガス後雨

沈澱。宮本のみ様子を見にアミダのコルまで出かける。午後から雨のため侵水はなはだしく、往生した。

三月三十一日　晴後曇　テント（七・〇五）――赤岳石室（八・〇〇）――横岳（九・二〇）――硫黄岳（一〇・四〇）――夏沢峠（一一・一〇）――天狗岳（一三・〇〇）――テント（一六・二〇）

ボカボカして気持のいい日。快適な稜線歩きであつた。

四月一日　晴

下山。九・〇〇出発。→一三・〇〇上規木。

（倉　知）

昭和三十四年度（四月―十二月）

安達太良山

渡辺嘉佑、他二名

四月五日　風雨　郡山――岳温泉――くろがね小屋

雨が横なぐりに降つて消耗である。烏川は増水のため渡れず、上流の湯ドイにまたがつて渡る。早くも雪どけが始つて沢はものすごい水である。

四月六日　風雪

昨夜から雨が雪に変つて猛吹雪となつた。終日沈澱。温泉つきの山小屋のこととて春山の疲れを湯治としやれて、湯に三度も入る。

四月七日　晴

午前中は安達太良、鉄山、船明神とピークをかせぐ。飯豊山はまだ真白で登高意欲をそそる。午後は烏谷の上部でスキーをやる。

四月八日　曇後雨

午前中スキー。午後からは雨が降りだしたので沈澱とする。

四月九日　晴　夕方から雨

午前中は快晴、スキーを充分楽しむ。棒をたてて盛んに回るが仲々うまくゆかない。午後はガスの中をスキー。音だけが聞えるのもまたいいものだ。

四月十日　雨後晴風強し

十一時頃小屋を出て下山。二本松は桜は満開だつた。析から皇太子のパレードとかでテレビの前は黒山の人だかりだつた。一ぺんで下界におりたと云う感じに引き込まれてしまつた。

奥秩父縦走

大建二郎

四月六日　晴　上野――熊谷――三峰――雲取山

四月七日　晴後曇　雲取小屋――将監峠――笠取小屋

四月八日　曇後雨　笠取小屋――雁峠――雁坂小屋

四月九日　晴のち雨　雁坂小屋――破不山――甲武信小屋

四月十日　晴　甲武信小屋――国師岳――大弛小屋

下界では皇太子の結婚式。山では人に会わず。

四月十一日　晴　大弛小屋――金山――韮崎

朝、国師岳で二人凍死したとの事で捜索隊が二十人程、小屋に

来る。少なからずあわてて、超スピードで金峰へ向う。下る途中、先輩の望月氏にお会いする。単独行。

新人歓迎山行　（入笠山）

参加者　渡辺嘉佑、峰高教通、江面誠二、大橋一慶、小林進二、石弘光、小林正直、永井新也、有賀盈、倉知敬、大建二郎、三井博、朝木大統、遠藤晶士、黒川信幸、臼井弘、高橋信成、多田伸治、酒井、鈴木、大矢、永福、南亮進（先輩）

四月十八日　最終で新宿発

四月十九日　快晴

ハイキングコースをのんびりと歩く。快晴で頂上からの眺めは三百六十度素晴らしい。途中の水場でカレーライスでコンパ。青柳でおりたが帰りは富士見へ出る。

（渡　辺）

剣岳早月尾根（春山偵察）

中川滋夫、山本尚禎、小林進二、倉知敬、三井博、大橋喜治（先輩）

五月一日　雨　馬場島（七・一〇）――二三〇〇地点（一六・二〇）――二三〇〇地点（一一・三〇）――丸木橋（一三・〇〇―一四〇）――馬場島（一五・〇〇）

上市から自動車で馬場島へ。荷物整理後全員で小窓尾根に向つたが、雨がひどくなり渡渉出来ず引返す。

五月二日　快晴　馬場島（七・一〇）――二三〇〇地点（一六・二〇）――二三〇〇地点（一一・三〇）――丸木橋（一三・〇〇―一四〇）――馬場島（一五・〇〇）

山本、大橋ＯＢは小窓尾根を横断して北西バットレスに向い、他は早月より二三〇〇地点まで行き幕営。五月の剣は雪がまだまだ残つていて楽しい。

池の谷右俣から北西バットレス　大橋、山本、馬場島

（四・四五）――堰堤下（五・二五）――池の谷出合（六・二〇―六・四〇）――小窓尾根取付（七・〇二）――小窓尾根（七・三五―七・五五）――二八〇〇米地点（八・三〇―八・三七）――池の谷（八・五五―一〇・一〇―一二・五〇）――中央ルンゼ出合（一二・一〇―一二三）――長次郎のコルからのルンゼとの出合（一三・四〇）――北西バットレス末端（一四・二五）――頂上（一七・〇八―一七・三〇）――二三〇〇米のテント（一九・一〇）

三月馬場島小屋を包んでいた雪に代つた、生き生きと明るい草木の中を出発したのは四時四十五分だ。昨夜の雨で水量の増した白萩川の河原を遡行し、堰堤を越え小窓尾根にとりつく。所々にある冬山、春山の名残りの標識が先へ先へと導いてくれた。小窓尾根一八〇〇米のどこかのパーテイのＡＣの附近から

池の谷へ下つた。傾斜のゆるいかなり広い谷は、人の通つた跡が固まつて歩き良い。二股までこの状態が続いた。踏み跡は左股へ登つている。小窓尾根の側壁と右股方面からのデブリをながめながら昼食をとり、アイゼンをつけて右股へ入る準備をする。しかし右股は雪が腐つており、一歩毎に膝までもぐる。太陽はすでに真上からポカポカてらす。猛烈な反響を呼ぶ落石が十分置き位に耳をつんざく。小さな石でも大きく反響する谷だ。表面の雪がサラサラとひつきりなしに大蛇のように帯をなしてくねくねと流れ落ち中る。央ルンゼの出合の露出した岩の上で大休止をとり、しばらく雪崩の危険性を考える。結局は表面の雪の状態程に底雪崩の危険性はない、そしてなるべく早く右股から風当りの強い場所に出ればクラストした雪が期待できる、ということに意見の一致をみた。再び交代でラッセルを始めた。長次郎のコルから発するルンゼと合流するあたりで右股は細く消えていくようになつた地点で右へ曲つた。ここからは細かい雪崩と落石に断え間なくおびやかされているルンゼをさけ、そのルンゼの右側の雪のややしまつた壁を直登。一歩一歩確実にステップをふみ込んで、シシ頭附近以上の早月尾根をはじめ、展望の良くきく北西バットレス末端に出た。ここからは右股の頭を押しつけられたような圧迫感と雪崩と落石の恐怖から解放された。まつすぐに頂上めざして登る。岩は雪に全く封じ込められている。五センチ程雪があつて、その下はカチカチに氷つている。今度は前にも増して慎重に、一歩一歩ふみ込んで足場を作る。頂上は近くにみえてもなかなか到着しない。二人共右股のラッセルに続くこのアルバイトに疲れた。陽は沈みかける。風は出てきた。氷はますます固くなつた。ピツケルをさしても、十センチも入らない。アンザイレンして、スタカツトで行きたいと思つた。しかし確保も一面の氷面で、ピツケルが思うようにならない。これから頂上まで百米程一歩一歩カツテイングで進むことにして、今迄どおりアンザイレンしないことにした。アイゼンが良くきいた。腕がつかれたころ頂上についた。五時八分。熱い握手をした。西空が赤く焼け、槍が良くみえる。小休の後早月尾根を下る。二五〇〇米あたりで、中川と小林が出迎えてくれた。彼らの持つてきてくれた熱い紅茶のうまさに疲れも忘れるようだつた。

五月三日　晴　二三〇〇地点（八・三〇）——頂上（一三・二〇）

大橋氏下山。頂上へ幕営すべく、張切つて登る。途中大阪の上原先輩に声をかけられびつくりする。頂上には早大が二張り

（山　本）

張ってあった。

五月四日　晴後曇　　山本、小林　テント（六・四七）――長次郎のコル（七・〇〇）――五・六のコル取付（七・一五）

八ツ峰上半

――五・六のコル（八・一三―八・二三）――六・七のコル（一二・四八―一三・〇五）――八ツ峰の頭（一四・五四―一五・二〇）――テント（一六・四五）

いやな空模様である。しかし予定の日数もあと一日、急にはくづれそうになかつたので山本と出かけることにする。

十時間あれば充分と考えていたが、誤算であつた。五六のコルから直登してリッジに出た所で、アンザイレン。ここのワンピッチはかなりのスノー・リッジで、馬乗りの姿勢で乗越す。六峰の登りは広い雪の斜面を簡単にすませたが、下りに消耗。雪はくさつているし、露岩から雪へと足をのせるのが何とも不安定で、ハーケンを打つてジッヘルするなど、下りだけで一時間かかつた。六峰の下りから八峰の下りまで、全くのスノー・リッジで、片足がやつと乗る程度で体の入れ変えができず、緊張の連続だつた。八ツ峰の頭に出た頃から猛烈なガスと風にまかれ始めた。

行動中は殆ど休みを取らず、昼食も半分食べたのみ。第一、食べる場所がなかつた。五、六のコルから八ツ峰の頭までビバークできそうな所は見あたらなかつた。八ツ峰と頭とのコルがわずかな可能性を残す所かも知れない。

小窓尾根マッチ箱往復　　中川、倉知　三井、テント（七・二〇）――マッチ箱（九・三〇―一一・〇五）――テント（一三・五〇）

（小　林）

早大の連中は撤収を始めていたが、今日一日はもつだろうと判断し出発した。

雪がくさつており神経を使つて消耗した。

五月五日　風雨　停滞

昨夜半より風雨が次第に激しくなり、午前一時頃から浸水のため夜通し起きていた。

五月六日　曇後晴　撤収　頂上（八・〇〇）――馬場島（一二・〇〇）――伊折（一五・〇〇）――上市

（中　川）

八ケ岳縦走

永井新也、有賀盈、朝木大統、遠藤晶士、大建二郎

五月二日　快晴　茅野――渋の湯（八・一〇）――中山峠（一一・〇〇）――東天狗岳（一二・〇〇）――夏沢峠――硫

黄岳と横岳の鞍部（一五・四〇）

五月三日　晴　テント場（六・三〇）――横岳（七・二〇）―赤岳（九・〇〇）――青年小屋（一五・〇〇）

五月四日　晴　テント場（六・四五）――編笠山――小淵沢（一〇・〇〇）

連日の好天で申し分のない山行を楽しめた。八ケ岳は小淵沢から登ると相当しごかれる。雪は林の中等に多くあつたが、ピツケルはほとんど使わなかつた。

（大）

谷川岳スキー

峰高教通、大橋一慶、他一名

五月十九日　雨

谷川だけが雨なんだからいやになる。汽車の中にいる時は晴れていたのに。例の場所に例の如く張つて、ラーメン食つて寝てしまつた。今日は峰高と大橋だけ。

五月二十日　雨後晴

スキー部の他一名様が御入来。マチが沢に行く。スキー部殿はうまい。おかしなフオームで、ほんとにおかしなフオームでくるくるまわる。S字状の雪渓は五百米程利用できた。谷川合宿では上級部員は、グリセードをやつたり、尾根歩きをやるより、スキーをやらせた方がいいと思う。新入生のグリセード並の実力程度だから（おこるな！）競争で上達をきそわせればいい。新人のグリセードを見て、そばでわめいたり、笑つたり、フオームがきれいだとか、スピードがなんとかと云つているよりは（そんなことは、スキーでいおうじやないですか）積雪期のみんなの姿を思いうかべれば、身のためだ。

五月二十一日　晴

芝倉沢に行こうと思つたが、道を間違えて二時間近くスキーをかついで、やぶこぎをやり、重労働にたえかねて引返してマチガ沢に行つた。スキーヤー約十人。

五月二十二日　曇

今日から合宿。朝めしをたくのがめんどうなので、二十人のお客さんを眼を光らせて一廻わりした。

（峰　高）

××××××
谷川合宿
××××××

参加者　チーフ・リーダー渡辺嘉佑、峰高教通、江面誠二、大橋一慶、中川滋夫、石弘光、永井新也、小林正直、三股宏、有賀盈、倉知敬、大建二郎、三井博、朝木大統、遠藤晶士、黒川信幸、臼井弘、高橋信成、多田伸治、酒井、鈴木、

大矢、新井、八木

五月二十一日　最終で上野発。

五月二十二日　晴

早朝土合に降り、すでに入山してスキーをやつていた、峰高、大橋と合流。旧道の河原にテントを張る。

江面、中川、有賀、三股、大、倉知が東尾根から頂上へ。他は全員、マチガ沢二ノ沢附近で、ストップ、グリセード、雪上歩行訓練を行う。マチガ沢本谷を下つて来た前記六名と一しよにテントに帰る。

五月二十三日　霧雨

芝倉沢に入り、ストップ、グリセードの練習に終始するも、昼ごろから雨が激しくなり、午後はテントに帰る。

五月二十四日　霧雨

一ノ倉二ノ沢でグリセード。雪が少なくて長いコースをとつて練習することが出来ずに困る。午後からテントを撤収して土合へ。全員、帰京する。

（渡　辺）

ツヅラ岩、逆川

大建二郎、臼井弘、遠藤晶土、倉知敬

六月十四日　晴

ツヅラ岩。先に三パーテイほどとりついていて待たされた。右のルートを登つたのみで終つてしまつた。

六月十五日　晴

遠藤倉知のみ前夜氷川山荘に泊つて逆川へ。明かるい沢で難場もなく快適に登つた。川苔山頂上へは道がわからずブツシュこぎ。鳩ノ巣駅へ下つた。七・〇〇出合——一二・〇〇頂上——一一・四〇〇鳩ノ巣

（倉　知）

梅雨の奥又白池畔生活

峰高教通、小峰隆

六月二十七日　快晴　上高地（九・〇〇）——徳沢（一二・一五）——奥又白池出合（一四・〇〇）

島々からのバスはスキーヤーを混えて約三十人で上高地は静かである。

二人で四峰正面をやろうと野望をいだいて出てきたが、荷物が肩にこたえること。腰の痛み、腕のシビレ処置なしで、下級生をつれてこなかつたのが悔まれたというのが偽らぬ二人の心境だつた。

こんなにひどくバテながら、いざ設営し、人の話声みたいに響く梓川の流れを聞きながら裸足で砂地に寝そべつていると苦

しさを忘れてしまうのが山のよさだ。

六月二十八日、快晴　出合（六・四五）――池（一五・〇〇）

小峰が時計を見まちがえて早起き。池まで簡単に行けらあとのんびりしていたら、松高尾根の傾斜のきつさと、ギラギラと背後から照りつける太陽と、下の方で流れる水音を聞きながらいやせない喉の渇などから尾根の中途で足が上らなくなつた。小峰は精力の塊みたいな奴だから別に何てことないらしい。

なんとか池についたが、池の汚いこと。奥又白池といつたらみんなの憧憬の的だが、池自体はゴミ捨場だ。雪の中に池がある程雪が多かつたが、そのまわりはゴミ捨場、キジ場だ。

さすがに眺めはすばらしい。池の水を飲んで岩登り。何ともいえんな。

六月二十九日、雨　停滞

短時間の間に朝飯、昼飯、晩飯で一日が暮れた。

六月三十日　風雨強し　停滞

七月一日　風雨強し　停滞

雪上に設営したのだが、雨のため雪が融けて埋めたペグがすぐに駄目になる。それに波のように襲う風のためテントはだらりとなる。テントの囲りの雪はどんどん触けていくから、テントは狭くなり、二人が身体をゆつくり伸せるだけの余裕が失われていく。外の様子は不気味という他ない。晴れた日にはあんなに人を引きつける前穂の壁も、こんな時は異様で眼をそむけさせる。

七月二日　風雨強し、撤収

午前三時頃、テントが二人をぴつたりと包んでいるのに気づいた。しかもずぶ濡れだ。テントの具合がおかしいと調べてみたら、フライが無い。二人共飛び出して、こういうピンチにつかない約束になつている懐電を頼りに捜し出す。一応テントを張り置したが床が五〇センチもせり上つていてもう処置なしだ。

梅雨の中休みを狙つて出かけ、バスの中で隣りに座つた土地の爺さんに今年の梅雨は雨が降らねえ、ええ天気続きだと云われ気を好くし、事実、入山の日の快晴は狙いが的中したとほくそえんでいたのだが、みじめな結果になつたものだ。

七時に撤収を決意。道は水の流れ路だ。膝のお皿の笑が今日は冷い。道をまちがえたり、道を洗い流れる激流におどかされながら奥又白出合で猿又の水をしぼつた時には、まつたく救われた感じだつた。

登山には「山に登らせてもらう」という心がけが必要だと誰

かの本で読んだが、「山から下山させてもらう」という心がけも必要だなと痛感させられた。

池を出て六時間後には、バスのすみつこで湿つぽい臭気を煙草の煙でごまかしながら空を見上げている二人の姿は、両親に絶体に見せられないものだつた。

（峰　高）

鋸岳、甲斐駒ケ岳

三井博、倉知敬

六月二六日　晴　富士見駅発（五・五〇）——釜無川（六・三〇）——岩小屋（一二・〇〇）

岩小屋はポタポタ水がたれて居心地悪い所。翌日やや上流にもつと快適なのが二つもあるのを見つけた。

六月二七日　晴後曇　岩小屋（五・三〇）——横岳峠（七・三〇）——鋸岳（一〇・一五）——第三高点（一一・三五）——第二高点（一三・二〇）——中ノ川乗越（一六・一五）——六合目石室（一七・四五）

しばらく釜無川にそつてから右へ谷をはなれる。あとは三角点ピークまでぐんぐん登り、そこより稜線づたいとなる。第三高点の下りは切れていて降りられず右へまく。道はその下についていた。第二高点の下りも切れていて降りずらそうだつたが強引に下る。段々右へそれて行つて、乗越のすこし手前で右をまいている道に出た。そこからはりつぱな道がついていた。

六月二八日　晴　石室（五・五〇）——甲斐駒ケ岳（七・〇〇）——五合目小屋（九・〇〇）——駒ケ岳神社（一二・三〇）——白須（一三・五〇）

きれいな雲海が出来、左に八ケ岳、後に鋸岳が浮かんでいて、すばらしい景観であつた。頂上では風が強く、すぐ下つたが、しばらく降りてからもつと、よく景色をながめてくればよかつたと悔み合つた。五合目からは尾根道をとつたが、暑さとダラダラとつづく道には参つた。白須でのんだジユースはうまかつた。

（倉　知）

××××××
夏　山　合　宿
××××××

まえがき

昨年一昨年と雨にたたられて計画を充分に遂行できなかつたため、我々は岩登りに対して自分なりの考えを持つことができなかつた。つまり自分はどの程度のところへ行けるんだろうかということの目算も立たなかつた状態だつた。もちろん、いく

ら岩登りをやつても、自分はここなら絶対だと云うことはできないにしても、何らかのメドはつけることが可能になつてくるに違いない。そういうものを少しでもつかむことができたらというのが、まず合宿前半の狙いがあつたわけで、二、三年の中堅部員を中心に三ノ窓へ一つテントを出した。

もう一つは新入部員の初歩的な岩登りと、雪上技術の向上ということながら山岳部というものに初めてという点にあつた。例年のことであつてみれば、徐々に山登りを覚え籍を置くものが多い新人であつてみれば、徐々に山登りを覚えていくということは大切なことであろうと思われる。

合宿後半は縦走に移る。今年度は二パーテイに分れてそれぞれ剱より、槍へと、白馬へと行つたのだが、槍へは四年と新入部員、白馬へは二、三年部員という具合に分かれた。これは二、三年部員は来年は上級部員になるということの自覚をうながし、新入部員に対しては、これから先四年部員との合宿がいくつもないということから、一緒に生活するという意図があつたのである。

とにかく、昨年一昨年の夏山の一応のブランクを埋めようというのが、今年の夏山合宿の最大の目標であつたと云つてよかろうと思う。

（渡　辺）

剱沢定着合宿参加者、チーフ・リーダー渡辺嘉佑、峰高教通、小峰隆、江面誠二、丸子博之、大橋一慶、中西厳、山元、中川滋夫、中島寛、山本尚禎、小林進二、石弘光、大賀二郎、永井新也、三股宏、小林正直、有賀盈、倉知敬、大建二郎、朝木大統、三井博、遠藤晶土、黒川信幸、臼井弘、高橋信成、多田伸治

各係、食糧、小林(進)、朝木、三井

器具、小林(正)、倉知

記録、中川

医療、有賀

七月十一日

本隊出発。渡辺以下二十一名。

先発隊は剱沢に十三時に着く。

七月十三日

先発隊、峰高、石、倉知、黒川、北陸で上野を発つ。

七月十四日　曇後風雨　富山――美女平――天狗小屋

バスから降りて歩き始める頃から降り始め、天狗平に着く頃は全員ずぶ濡れ、小屋に逃げ込む。

剱沢では停滞。

七月十五日　曇つたり晴れたり、一時にわか雨　天狗小屋――

雷鳥荘――剱沢

雷鳥荘で荷物の一部を置き、全員剱沢に入る。十四時。

七月十六日　雨後快晴

三ノ窓に五人入る予定であつたが雨のため延期し、全員剱沢小屋上の雪渓でグリセード練習。午後はカンカン照り夏山気分満点。

七月十七日　曇後晴

峰高、中川、小林（進）、山本、石、倉知

三ノ窓入り。池ノ谷の雪渓は上部約百米のみに残つておりクラストしていたのでザイルで荷を降す。三ノ窓には岩屋に一パーテイいたのみで、左股側に設営。飯料水は、すぐ下の雪渓の下に流れる水を使用、豊富。午後三時過ぎにチンネを三パーテイに分れて登攀。

剱沢（六・三〇）――池ノ谷のコル（一〇・四五―一一・三〇）――三ノ窓（一三・〇〇）

剱沢では三ノ窓パーテイを送つた後、雷鳥荘まで逆ボツカ。

〈定着合宿――その一――剱沢〉

七月十八日　雨時々晴

八ツ峰上半――小峰、中島、三股、三井、黒川

八ツ峰下半――中西、江面、山元、小林（正）、大、朝木、多田、高橋

源治郎尾根――渡辺、大橋、大賀、有賀、永井、遠藤、臼井

七月十九日　曇後晴

別山岩場――小峰、中西、山元、大賀、有賀、三井

一般ルートより本峰――他全員

七月二十日　晴

八ツ峰上半――渡辺、大橋、小林（正）、大、臼井、登攀後三ノ窓に足を伸ばす。

八ツ峰下半――三股、永井、有賀、遠藤。下記三名は上半を続けて登る。

源治郎――中西、江面、山元、朝木、黒川、多田

本峰南壁ＡⅠ、ＡⅡ、ＡⅢ連続登攀――中島、大賀

六峰Ａ・Ｃフェースより八ツ峰上半――丸子、三井、小峰

七月二十一日　晴

八ツ峰上半――江面、中西、山元、多田、朝木

八ツ峰下半――渡辺、黒川、臼井

源治郎――小峰、三股、小林（正）、大、高橋

丸子、中島、大賀、三井三ノ窓入り。到着後早々にチンネ登攀。

七月二十二日　雨　停滞
七月二十三日　雨　停滞
七月二十四日　雨　停滞
　三ノ窓より撤収。
七月二十五日　晴
　槍縦走隊出発。他は最後の岩登りを楽しむ。
六峰Aフエイス――大賀、有賀
六峰Cフエイス――石、大倉知
マイナー・ピーク――山本、倉知
　テント（七・二三）――滝の下（八・〇〇―八・一五）―滝の上（九・二〇）――ルンゼ終了点（一〇・一五）―マイナーピーク直下（一二・〇五―一二・四五）――ピーク（一三・一五―一三・二五）――I峰（一五・四〇）――II・IIIのコル（一六・五〇）――長次郎谷（一八・一八）――テント（二〇・〇〇）

　真砂沢のキャンプ地を通過して十分も行かないうちに、左側から青黒い夏の木を分けて、初めての雪渓が現われた。すぐに逆層の滝が雪渓を大きく切つて、行手をはばんでいる。滝の附近は、ラントクルフトが大きく、滝に容易に取付けない。十米程下つて、進行方向左側の尾根にとりついた。浮石の多い草つきをかなり上まで登つて藪が多くなる所で降り、滝の上部入へつた。浮石と藪こぎは、前途を案じさせて、いささか不愉快になる。滝の上部では本沢は上に向つて、右へ大きく曲り、すぐに左へ曲つて視界から消えている。我々は滝の上部から、左へ、本沢にそそぐ涸れた沢をつめることにした。つめきると、濶葉樹の多い尾根が山腹にすいこまれる地点に出た。かすかに踏み跡がついている。尾根通しにそれをたどつていくと、岩が行手をはばむ。右へ廻りこみ、トラバース気味に陽当りの良い這松まじりの堅い岩を過ぎて再び尾根に出る。今迄と同じくこれも又、藪こぎの連続が待つているだけだつた。しばらく行くと、マイナーピークへ直接つき上げている岩壁が胸を張つている。尾根通しに行くと、クラック状の草つきが五米程ありその上は這松がピークへ続いている。この草つきへの取付きの二米程そのクラック状の下が切れていて、不安な草登りなのでアンザイレンした。倉知トツプ。釣瓶式に次のピツチを山本トツプで登りきると、ピーク上に立つた。このピツチはアンザイレンの必要はない。ザイルを解いて八ツ峰I峰へ向う。かすかな踏み跡をたどつて右へ廻りこむようにして下り、大きく成長した這松をかき分け、木登りの連続だ。左側は急斜面、右側は比較的ゆるい。稜線通しを主に、藪の多い所は右側をまきながらI

峰へ出た。体全体の動作の連続もⅠ峰へ出てからはやつと足だけで歩けるようになつた。Ⅱ、Ⅲのコルから長次郎谷へ下る。雪渓が切れ、雪が窩つているので、沢通しをさけ、Ⅰ・Ⅱのコルへまわりこみながら這松の少ないところを選びながら、長次郎谷へ立つた。十八時十八分。ここでゆつくり休む。藪こぎの疲れが一度に出た。剣沢に帰る足をゆつくり運ぶ。間もなく中島と大賀が、おそくなつた我々を気遣つて迎へにきてくれた。帰幕二十時。

源治郎二峰A・Bフェイス——中川、永井
本峰南壁A_2・A_3——江面、
本峰南壁A_2——大賀、大
東大谷GⅠ——中島、三股、小林（進）、三井

（山本記）

＜定着合宿—その二—三ノ窓＞

（渡辺）

七月十七日　晴

左方ルンゼ——石、倉知
中央チムニー——小林（進）、中川
日嶺ルート——峰高、山本、石
三パーテイ共上半はaバンドbクラックを登る。

七月十八日、雨、停滞

七月十九日、晴

中央チムニー・gチムニー・cクラック——山本、倉知
左下カンテ——峰高、石
左稜線小林——（進）、中川
左下カンテと左稜線パーテイは登攀後合流、左方ルンゼ約五十米をアプザイレンで下降。
朝は霧雨模様で、岩が濡れていたので取付が遅れた。左下カンテは取付点までのトラバースが微妙。二人共ハングの登攀は初めてなので（日嶺ルートのはハングと云えない）時間を食つた。
ハングには約三米のリスが向つて右上に約七十五度の傾斜で走つており、赤錆びたハーケンが六本打つてある。出口には四、五本並んでいた。左稜線は下部は草付の登八で、指先を泥と草の中につつこみながらの登攀、ここからの左方カンテ、ニードル、八ツ峰の眺望は日本ばなれしている。

七月二十日、晴、

剣尾根上半（R2より）——峰高、山本、石
日嶺ルート・Gチムニー・Cクラック——中川、小林(進)、
倉知

剣尾根上半は記録を読んでも、グレイドがわからない。池の谷奥壁の様子を見るのを兼ねて出かけた。R5より登るつもりだつたが、ガラガラで登攀意欲が湧かないのでR2に変更。二十分でコルBに出る。八ツ峰上半程度。剣尾根の頭はすごくもろく、落石のためMは足首を負傷。せつかくの好天をこんな場所で無駄にするんじやなかつたと悔まれた。

日嶺ルートパーテイは、上半が他の数パーテイで占められていたので、中央バンドでえらく待たされた。剣尾根パーテイが帰幕する頃、まだ上半に取付いたばかりだつた。

三ノ窓は賑やかになつた。場所がないので雪渓の上にまで張つてある。七張●飲料水が不足なので、最初に入つたパーテイに他のパーテイが頭を下げて水をもらつている。池ノ谷を下る登山者が落す石音、チンネにへばりついているクライマーの叫びが絶えない。

池ノ谷の雪渓を降る時、おそろいのユニホームにキスリング、頭には白いヘルメットのパーテイに会つた。三ノ窓入りするのだが、格好に似合わずグリセードができない。トップがでかいバケツを掘つている。あとで聞いたら、積雪期の初登を次ぎ次ぎにやらかしている山岳会ということだつた。この有様を見て信じられなかつた。

日嶺パーテイがお客さんをつれてきた。顔は血で真赤。コルの雪渓でスリツプし、ガラ場にとび込んだのだそうだ。早速手当し、意外の重傷だつたので、山本と小林が伴なつて剣沢に降すことにした。単独で早月を登り、池ノ平に行く予定だつたそうだ。装備、食糧は特に食糧はこつちよりいい。シヨーテイとギユーが一緒に降ると自発的に名乗り出たのもそのためだといえないこともない。ただ彼にはよくあるように単独行に必要な技術が欠けていた。

七月二十一日　晴

石、倉知は剣沢に降ることになり二人残つたが、足の負傷で動けないので、沈澱。剣沢から四人上つてきた。早速チンネに取付いた。

中央チムニー・gチムニー、二人残つたが、cクラツク——丸子、三井

日嶺ルート——中島、大賀

沈澱した二人は小窓王から声援。

夕食後、まだ日没に時間があるので若手の連中はジヤンに取付く。

ジャンダルムPII——中島、中川、大賀、三井
バラ色に染まる岩肌の登攀。暗くなつてから帰つてきた。一時間。

三ノ窓の夕焼。小窓尾根と剣尾根とが富山平野をさえぎつてつくるV字状の谷間のずつとその奥に、強烈な印象を脳裏に刻みつける色彩を映じてくれる。口づさんでいた山の歌もしばしやめてみとれ、暗闇になるとまた歌を始める。

七月二十二日　雨　停滞
七月二十三日　雨　停滞
七月二十四日　雨　撤収

（峰　高）

夏山縦走〈その一　剣—槍〉

参加者　リーダー渡辺、峰高、小峰、丸子、中西、山元、朝木、遠藤、黒川、臼井、多田、高橋

七月二十五日　晴　剣沢（六・五五）——立山——五色ケ原（一五・〇〇）

いよいよ縦走に移る。天気はよく二三日は続きそうだ。五色ケ原では、夕食後陽が沈むまで散策。広い這松に被われた高原のかなたにぐいと拡がるアルプス連峰と夕陽のつくりだす色彩を一層美しくする雲海にみとれる。

七月二十六日　晴　五色ケ原（六・一五）——スゴ小屋上（一四・三〇）

テント場は雪渓の水が豊富でいいところだが、十パーテイぐらいいて混雑して消耗である。

七月二十七日　快晴　スゴ（五・四〇）——太郎ベエ平（九・五五—一〇・三五）—一・八・二〇）——薬師岳（八・〇〇—黒部五郎（一五・五〇）——カール（一六・二〇）

朝のうちに早いとこ薬師を越えてしまつて、快適な歩みを続ける。どこまでも気持のいい縦走路である。上ノ岳泊りと思えたが、まだ早いのでバテた身体にカンパンで元気づけ黒部五郎のカールまで行くことにする。カールはもう飲料水の都だ。キャンプサイトとしては最上級。剣沢以来初めて顔を洗う。近くにキャンプしていた人々が西瓜を二切れわけてくれた。十二人でわけて食べるのだからいこいの箱大のやつが慎重に切断されて配られる。それでも冷めたくてうまかつたので、みんなで声をそろえて、ごちそうさんとお礼を云つた。

七月二十八日　晴　カール（八・〇〇）——三俣連華（一一・一五）

三俣連華のすぐ下に設営。午後から有志は雲ノ平に出かけ

る。雲ノ平も大分人が入つているが、やつぱり山奥だ。五色と共に楽しい遊び場であつた。

七月二十九日　快晴　三俣連華（七・〇〇）――槍ケ岳（一三・二〇―一四・〇〇）――二ノ俣（一七・〇〇）

双六の小屋で残つた米を約二斗買つてもらう。一斗一一〇円也。予想より三〇円高い。ところで双六近くの渓流では岩魚が水に対して七、三の割合でいるそうだ。小屋の若者がザルいつぱいの岩魚に庖丁をあてながら誇らしげに話してくれた。

西鎌尾根を一ピッチ一時間で登つて肩につく。新人には大変なアルバイトであつた。槍の賑やかさ。二ノ俣で設営、ウイスキー入りの紅茶で夕食後をすごす。

七月三十日　快晴　舟窪分岐点（六・〇〇）――大天井――燕――中房温泉（一七、〇〇）

渡辺、小峰、丸子は燕岳に向い、他は下山。

二ノ俣（六、三〇）――立山――五色ケ原（一五・〇五）

ハイキングスタイルの登山者の中を、ヒゲ面の陽やけした山男が臭気を発散させながらスッとばして歩く。（渡　辺）

夏山縦走　〈その二　剣――白馬〉

参加者　江面、リーダー中川、中島、山本、小林(進)、石、永井、三股、小林（正直）倉知、三井、

七月二十六日　晴　剣沢（七・一五）――槍ケ岳（一三・四五）

槍パーティに一日遅れて出発。天気も上々、五色まで快調にとばす。夕食前、全員友田先輩の碑を訪れる。這松、草原、霧、夕やみに包まれたこの静寂の地は、まさにパラダイスだ。

七月二十七日　快晴　五色（七・〇〇）――立山――五色ケ原（一五・〇〇）――平――南沢出合――舟窪分岐点（一五・〇〇）

まもなくダムの底になつてしまうであろう平で大休止をとる。ここから幾時間もの汗まみれの苦闘。テント場では重荷から解放され、河原であやしげなビーチスタイルを競う。

七月二十八日　快晴　舟窪分岐点（六・〇〇）――針ノ木岳――種池（一七・五〇）

涼しいうちに峠に着いたが、それからの稜線は風もなく、ジリジリ照りつける暑さに、皆消耗して種池に着く。炎天下十二時間のアルバイト。

七月二十九日　晴　種池（七・三〇）――鹿島槍――釣尾根（一三・四五）

昼すぎ釣尾根に着き、ゆつくり休養しながら製水業に励む。ここから見る剣は堂々として実に立派だ。夕方、オカンをして

いる仲間の歌声が、ガスと共に稜線に吹上げられ、紫煙がそれに溶ける。大町の灯がきれいだ。

七月三十日　快晴　釣尾根（五・一〇）——五竜岳——唐松岳（一五・〇〇）

雲海を下に見ながらキレットに降る。朝の稜線歩きは、すがすがしくて気分がいい。唐松のテント場は水も豊富で快適。

七月三十一日　快晴　唐松岳（七、一〇）——不帰——白馬岳（一四、三〇）

不帰を越え、天狗を登れば後は涼しいプロムナード。人影が多くなる。一時間ピッチといこう。

夕食後、縦走の終止符を打つべく、全員で白馬頂上に向う。今では遥か南方にいつてしまつた剣の黒いシルエットが印象的だ。夜、ささやかなコンパ。

八月一日　晴　白馬（一〇・三〇）——猿倉（一〇・三〇）

大雪渓を下るにつれて次第に暑さを感じる。久振りにバスに乗り、合宿が終つたという気持で一杯になる。全員無事帰京。

（中　川）

あとがき

まずは一応の成功をおさめることが出来たと思う。つくづく山はお天気次第であるという感を深めたわけだが、それは一面、天気が悪くても計画をうまくどうにか押進めることが出来るようにならなければいけないということになる様に思える。

三ノ窓へは十人上ることが出来たし、新人は一応歩いて、更にもう一歩前進したいという意欲に燃えていた。剣沢において、ザイル、三ツ道具の不足から、こういう希望をかなえられなかつたことは残念であり、予算の関係上と云つてしまえばそれまでだが、三ツ道具の不足は失敗だつた。

今合宿は夏時間を採用し、時計を一時間進めたが、この時間のズレに早くなれて行動すれば効果的だと思う。

器具、食糧については、多くの反省があるだろうが、定着合宿で主に使用した家庭用石油コンロは、なかなかいい様だ。これからは涸沢、剣沢等は薪の使用は禁じられるだろうから、コンロの使用は絶対必要である。

ただ残念であつたことは、一、二年合わせて九名という下級部員の数で、この状態が続けば、三年先は極めて少規模の小さい合宿しか持つことができなくなるのではないかと思われる点である。

しかし、ともかくも一応所期の目的を達した合宿であつたと

云い得ると思う。

安達太良、吾妻山

渡辺、他二名

八月十六日　曇　郡山―二木松―湯川―鉄山―箕輪山―鬼面山―野地

湯川は水量が多くて、そこここにある滝がみな立派であつた。

八月十七日　曇時々晴　野地―幕―一切経山―五色沼

有料道路が出来かかつていて工事の音がうるさい。一切経に登つて、五色沼のほとりでのんびりとすごす。

八月十八日　曇　家形ヒユツテ―五色温泉―板谷―福島

高温におりずに五色温泉へ下る。この道はあまり人が通らなくなつたらしく、道が悪い。五色温泉で湯につかり福島へ出る。

大雪山縦走

倉知敬、大建二郎

八月十六日　晴、函館―旭川―天人峡

温泉下の河原にD天を張る。独りで名古屋から来たという高校生を泊めてやる。彼氏、翌日恩を感じてか、荷物を持ちますと言い出し、持つてもらつたら重くて恐れをなしたのか、途中で山に登らずに帰りますと言う。全く気の毒な事をした。

八月十七日　曇　天人峡（六・一五）―二木松（一一・五二）

―姿見の池（一一・五二）

天候悪化の為、姿見の池泊りとする。尚、旭川から湧駒別行きのバスがあり、旭岳への登山道も立派なものがあつて、爺さん連中や子供がガヤガヤ言いながら追い抜いて行くので、気勢をそがれる事おびただしい。

八月十八日　にわか雨　姿見の池（七・二〇）―旭岳頂上（九・〇〇）―北海岳（一〇・四〇）―白雲岳石室（一二・〇五着一四・〇〇発）―忠別沼（一六・四〇）

途中、雷雨におそわれ、広い高原状の上なので逃げ場が無く、あわてる。

八月十九日　雨

一日忠別沼畔に沈澱。世の中の人間が、我々二人きりのように思われる。夕方、雨の中を一人行く人があるのに驚く。

八月二十日　曇後雨　忠別沼（一〇・三〇）―忠別岳―沼の原大沼（一四・二〇）

忠別岳で北大山岳部の人に会う。この辺で人に会うと、とてもうれしい。石狩岳は雨の後はむずかしいと驚かされる。夜、

八時頃、熊が出た。

八月二十一日　曇後晴　沼の原（七・二〇）――クチャウシペツ川（八・二五）――代採所（九・三〇）――層雲峡（一一・三〇）――旭川――帯広

食糧不足と悪天候の為下山する。予定では石狩岳から十勝三股にぬけるつもりであつた。この辺の道は案外立派な踏み跡がついている。林道が相当奥まで入つていた。

ニペソツ山

八月二十二日　曇　帯広――幌加――二股

八月二十三日　にわか雨　二股（六・五〇）――大平（一〇・三〇）――ニペソツ山頂（一一・一〇）――テント（一四・〇五）

道が中途で消えて、身の丈ほどの笹をかきわける。帰途雨に会う。テントに帰ると、全日本レガッタの決勝。優勝の報に小さなラジオにかじりつきながら祝杯をあげる。

尚、北海道の山の文献は、部に北大山岳部々報四～七や「山とスキー」があり、最近「北海道の山」という雑誌も出されました。

（大）

穂高の岩場

丸子博之、中川滋夫、大賀二郎、他一名

「岩」と聞くと胸がおどる。唇をなめ、息をはずませ、岩肌を撫でまわすあの気分。嬉しくつて、前の晩は眠れないほどだ。ところが、今度ばかりは、恐怖の言葉を日記に書きつらねて、家を後にした。

八月二十七日　涸沢入り。

八月二十八日　快晴

四峰正面新村ルート

中川、大賀、他一名

涸沢（八・〇〇）――五、六のコル（九・一〇）――C沢より第一テラス（一〇・五〇―一一・二〇）――這松テラス（一三・三五―一四・〇五）――ピナクル（一七・〇〇）――登攀完了（一八・〇五）――五、六のコル（一八・五〇―一九、〇〇）――帰幕（二〇・〇〇）

オーダーはO・N・Fの順で這松テラスまでの二ピッチと最後の一ピッチ。ハングの乗越のみNがトップ。

装備は四十米二本、アブミ三。

第一テラスは広すぎて、初めてのぼくらには新村のはじまりがどこか分らなかつた。とりあえず右へバンドを伝わつていく

と、五十米ほどで、このままでは甲南ルートへ行きそうなことに気付く。そこでアーンザイレンし、頭上はるかに見えるオーヴアーハングをめざして直上を開始する。十五米ほどスラブを登つてバンドに出る。バンドを右上に辿り、カンテをまわり込むと、目の前に青白ハングがかぶさつて来た。あたりは捨て縄の墓場、ざつと七ツほど、撃退された人々の無念さを語つている。これはしまつたと死に死にのクライムダウン。さきのバンドを今度は左の端まで行つてみて、赤錆びのがつちりしたハーケンを見付け、ここでビレーする。この右往左往で一時間喰つてしまつた。

正規の新村ルートは、すぐ左を走つているわけだが、何としても戻れないことが分つた。右はさつきの行き止まりだし、下りるのもシヤクだ。意を決して正面のスラブにしがみつく。ガチガチの岩で、てんでハーケンを受け付けないし、のつぺりして指もひつかからない。傾斜は七十度ぐらい。丸いでつぱりをてのひらで押え込むようにし、静かに、静かに体を持ち上げる。三米上のバンドにどうやら達し、右へ十米、どうして落つこちなかつたかいまだに分らないトラヴアースに成功、怪し気なハーケンが有つたのでカラビナをパチン。ふうつと息を吐き出す。（このハーケンは、下のバンドから思いきつてシヨルダーをやつて、打つたものかもしれない。とにかく大したものだ）

くたくたになつたOは、ここでトツプをNに交替、いよいよハングにとりつく。第一のハングをアブミ二ケで軽く越し、Oも続く。テラスがせまいのでFは下に残る。続いて上のハングは、セカンドの位置から七、八十センチせり出している、高さ四、五米のもの。岩を脊にジツヘルするOより前で、Nがぶらぶらアブミに乗つている。傾斜の観念が解らなくなつて来た。数多くカラビナを通つているので、ドツペルなのにザイルが動きにくい。吊り上がる方はラクでも、吊り上げる方は渾身の力でひつぱらなくてはならない。その上アブミが一つしか残つていないので非常に苦しい。かくて一時間四十分、Nはピナクルに達した。続いても苦斗三十分、最後にFが汗みどろになつて上つて来るまでに、実に三人で三時間。（後に十人ほどで話し合つたが、小ハングはアブミを一つしか使わずに越して、一旦三人が集結し、大ハングにアブミ二つを使い、越えたらすぐその場でハーケンビレイして後続者を引き上げるのが最良、ということになつた。大ハングを越したあとトツプがピナクルまで

トラヴアースしてしまうと、セカンド以下を引き上げる際に力が入らなくて弱るのである。それに、ハングの出口に、実にいいビレイピンが利いている。

再度トップをOに代り、右へ五米のトラバース。このあたり垂直に近く、高度感もあつて緊張させられる。カンテを一段下りるようにまわり込み、十米ほど真上へ、気持のよいクライミング。大きな這松にザイルシュリンゲをかけて「完了！」と叫ぶ。既に暮色が濃くあたりを包んでいた。

（大賀）

第一尾根　丸子、他一名

天幕（八・三〇）——（一〇・〇〇）北穂（一〇・四〇）——凹角下（一一・一〇）——（一三・〇〇）T3（一三・一五）——（一四・〇〇）T2（一四・一五）——（一四・三〇）T1（一五・三〇）——天幕（一六・〇〇）

天気はうららか、滝谷の風は心地よい、写真を撮りながらのんびり登る。

（丸子）

八月二十九日　晴

滝谷ドーム中央稜　中川、大賀　他一名

涸沢（八・三〇）——第三尾根P_2——取付（一二・三〇）——終了（一五・二〇）

休養をかねてのんびりドームに遊びに行く。最初のチムニーはノー・ザイルで取り付いたが、やや無謀だつた。すつきりしたいい岩だ。最後の凹角を忠実に直上したら、ハーケン・スタンスで自己吊上げを強いられた。ルートが難易さまざまにとれて、面白い。

明大ルート　丸子　他一名

天幕（七・四〇）——五・六のコル（八・一五）——（九・二〇）TA（一〇・一〇）——新村ルート一ピツチ半のテラス（一〇・三〇）——一〇・五〇）——松高ルート第一テラス（一一・〇五）——登攀終了点（一二・〇〇）——五・六のコル（一二・五五）——天幕（一三・二〇）

松高ルートは取付がややわかりにくいので勝手の知つた新村ルートに入り、約一ピツチ半登つたところから左斜め下へトラバース、松高ルートの第一テラスに着く。ここから草付の斜面を真上へ約十米上つて右へ折れ、第一のハングにぶつかるのだが、左をみると明瞭な踏跡がついている。ハングをまくルート

でも出来るのかと思つてトラバースをしていくと明大ルートと思われるところへ出てしまつた。引返すのが面倒なのでそのまま登つたおかげで四峰正面の模様がよくわかつたが、ルートを間違えるとはお粗末な話である、聞くところによれば、時々このルートを松高ルートと勘違いしているクライマーがいるという。

（丸　子）

八月三十日　快晴

四峰正面松高ルート　丸子、大賀

涸沢（七・〇五）——五・六のコル（七・三五）——第一テラス（八・三〇—八・四〇）——アン・ザイレン（九・一〇）——第二テラス（九・二〇）——ハング下テラス（九・三五—九・四五）——松高テラス（一〇・〇〇—一〇・一五）——カンテ右のテラス（一〇・二〇—一〇・三〇）——終了点（一〇・四五）

第二テラスまでノーザイルで行けば行けたろう。途中の妙なルダーでスラブに出るとあとは簡単。最後のスムーススラブもどうということなくすぎて、一時間半で終了。しかし、全体として新村ルートより傾斜もきつく、悪いようだ。涸沢に帰つたら、まだ昼前だつた。

（丸　子）

八月三十一日　快晴

第四尾根　中川、F

丸子、中川

甲南ルート

天幕（八・〇五）——五・六のコル（八・四〇）——T3（アンザイレン）（一〇・二〇）——這松の大テラス（一一・二〇）——小テラス（一一・五七）——登攀終了点（一二・〇五）

八月も末の今日、最盛期の賑やかさはどこへやら、奥又白は深閉と静まりかえつている。面白いのは初めの一ピッチのみ、ザイルがカラビナを八つも通ると身体を持ち上げるだけでも苦しい。ザイルの残りを告げる中川の声が三峰にはね返つて思わぬ方向から聞こえてくる、ようやくやわらかになつた日ざしを全身に浴びて、岩の感触をかみしめながら黙々

（大　賀）

と登つた。

（丸　子）

九月一日　曇

滝谷第二尾根P_2フランケ芝工大ルート　丸子、大賀

第一尾根T_4（九・一〇）——アンザイレン（九・三〇）——Cバンド（九・四〇）——中間テラス（一〇・〇〇）——早大ルートとの合流点（一〇・一五）——完了（一〇・三〇）

第一尾根のT_4から、二尾根側へトラヴアースする。砕石と浮き石。神経をすりへらす思いで、フランケの真下に下る。一旦左上へ、フランケとの間の大チムニーの基部にある露岩へ向つて登り、露岩から右上へ折り返して三十米ほど行き、最初のテラスに出る。古いハーケンがしつかりと打ち込まれている。ここでアンザイレンする。すでにT_4よりはずつと高い。大まかな、急な壁の間を縫う凹角の、草付まじりを二十米、打たれたハーケン四本を利用して吊り上げ気味に登つてバンドに出る。少し右へトラヴアースし、ハーケンでジツヘル。右側は巨大な屋根になつている。二ピツチ目は凹角とカンテを出たり入つたり、極端に脆いこと以外は、別に難しくはないが、その、脆さが大変なものだつた。方もある岩が、ぐうつと腰を浮かした。ひやつとして全身で押え付け、短慮を思い止まつてもらつた。Aバンドに出る所で、トツプのMのスタンスが突然崩落、折よく両手ともホールドがしつかりしていたので、事なきを得た。傾斜が急なおかげで、落ちた岩は、セカンドをはるかに飛び越え、Dフエースの方へダイレクトに消えて行つた。Aバンドも右へ伝わつて、広い中間テラスに落ちつく。いよいよ傾斜が加わり、見上げると全体がハングしている感じだ。フアイトを燃やして外開きチムニーにもぐり込む。ハーケンがベタ打ちされているが、利いているのは余りない。トツプはせつかく持つて来たアブミを使うチヤンスを探していたが、いつの間にやら上へ出てしまつた。ハングに頭をおさえられる所で、バツクアンドフツトで軽く左の壁へ移り、ハングに利いているハーケンにぶら下り、右のフエースに渡り返す。数米浮石に気を付け乍らまわり込むと、最後のテラスに出る。せまいが、外傾したテラスだが、最高に高度感と傾斜感がたのしめる。とに切れ落ち、一本のハーケンがガツチリと打ち込まれている。「ワセダルートはここへ出るんだな。」Mが云う。すでに一尾根のより高い、と眺めていると。中川がヒヨツコリ顔を出した。我々と同時に一尾根に取付いたパーティである。

最後のピッチは十五米ほど。凹角とカンテの気持よいクライムで、まつすぐP_2にとび出す。

全体を通じて傾斜はきわめてきついが、思つたより簡単で、四ピッチ、一時間で抜けられた。すつきりした岩登りと云えるのは後半だけ。前半は脆くて恐しかつた。初登者のものと思われる、鮮かなハーケンの打ち方が印象深かつた。それらを使つていくと必要かつ十分だつたので、ビレー用以外には我々は打たなかつた。使用した数は、各ピッチに、四、一、四、二、の順であつた。アブミは不要である。

第一尾根　大賀、丸子　取付クラック下端（一二・五〇）——T_2（一三・三五）——T_3（一三・一五）——北穂頂上（一三・四五）

フランケに続いて取り付いた。スタカツトで登つたのは、Cフェースのクラックと凹角、フェースのトラヴアースをまで、の計四ピッチ。他はノーザイルかコンテだつたため、すごく早かつた。

第一尾根　中川、他一名

九月二日　雨　帰京

呆気なかつた。たしかに、今までになく難しかつた。ハーケンスタンスに乗らない日はなかつたのだから。だが、取り付く前の緊迫感ほどのことはなかつた。「飛躍」ができた、その喜びを噛みしめながら、雨の上高地を下つて行つた。

燕——**蝶、槍**（**冬山荷上げと偵察**）　（大　賀）

参加者、リーダー中川滋夫、小林滋二、石弘光、永井新也、小林正直、有賀盈、倉知敬、大建二郎、黒川信幸、臼井弘、高橋信成、多田伸治、渡辺嘉佑、峰高教通、江面誠二、加地幸雄（先輩）

十月十一日　晴

先日の十五号台風のためバスは宮城までしかいかず、宮城から歩く。平均十二、三貫の荷で平坦な道を歩くことは全くつらかつた。

十月十二日　晴

中房温泉（七・二〇）——合戦小屋（一一・三〇）——燕山荘（一二・四〇—一三・二〇）——大天井岳（一五・五五）

燕山荘までボツカする予定だつたが、燕山荘は盗難のおそれがあるとかで、中房に荷を降し大天井まで行く。大天井の最後の登りでは、皆相当にしごかれた。

十月十三日　晴

槍へのパーティと常念、蝶パーティと二つに分け、横尾で落合うことにして早朝に発つ。槍沢はナナカマドが真赤ですばらしかつた。蝶隊は、思いの外のアルバイトであつたらしく、暗くなつてから横尾についた。

大天井岳（九・五〇）――常念小屋（九・四五―一〇・〇〇）――常念岳（一一・四五）――蝶ケ岳（一五・二五）――横尾（一七・五五）

十月十四日　雨後雪　停滞

渡辺、石、加地、永井帰京。大賀、三股横尾入り。

十月十五日　晴　横尾――北穂――穂高小屋――横尾

新雪の涸沢へ向う。空は真青に澄み、穂高の岩がいつもより黒々と感じる。新雪を踏んで南稜から北穂へ。昼食後涸沢槍から穂高小舎を経てザイテンを下る。横尾本谷で、小峰、山本に合い共に横尾へ。

十月十六日　曇

中川他三年三名、一年全員北尾根へ。

他は涸沢入り。

十月十七日　曇時々晴

中川、有賀、臼井、黒川、高橋、徳本峠を越え島々へ下る。

クラック尾根――峰高、小林（進）

第二尾根――小峰、倉知、大

第三尾根――大賀、小林（正）

山本、三股涸沢入り。

十月十八日　小雪　停滞

十月十九日～十月二十二日

東大山岳部遭難に接し、ボツカ、遺体捜索等にあたり、二十三日までに全員帰京す。

涸沢（岩登りと滝谷遭難東大山岳部員捜索と遺体収容作業報告）

（中　川）

峰高教通、小峰隆、小林進二、小林正直、大賀二郎、大建二郎、倉知敬、山本尚禎、三股宏

十月十六日　晴後曇

峰高以下六人が、横尾パーティと分れて涸沢入りし、秋の岩登りを楽しむことになり、北尾根に向うパーティに遅れて出発。昨日、西穂高を廻つて帰京するといつて別れた江面に丸木橋で会う。稜線は雪とガスのため楽しめないし、危険でもあるから引返すという、台風のでかいのが接近しているらしい。午後四時頃、北尾根を登り、奥穂を廻つてきた連中が、ぼく達の

テントに寄つた。テントが、あまりにキチンと張られているので、わからなかつたという。だいたいうちの部はなつていない。立派なテントを先輩に買つてもらいながら、寝乱れ姿型にしか張つたことがない。と張つていて、思わずぼくらのテントを振返り見ることがある。上級生がそばについてうるさく云わなければ実行されないんだからおもしろくない。

それにしても今日のテントは気持がいい。

十月十七日　晴

クラック尾根　峰高、小林（進）　涸沢（六・四五）——北穂小屋（八・二〇）——メガネ跡（一一・一五）——北穂小屋（一三・五五）

PIIフランケを登るつもりでかけた。B沢は初めて、しかも雪がかなり積つているのでクラック尾根のトラバースがわからない。ここだろうと決めてトラバースしたが、雪のため消耗したあげく、ぐるりと廻りこんで見た壁は、ビブラムで登れたものではない。なんて見事な白壁だ。あきらめてクラック尾根に取りついた。あとで思い出しても笑いだす。クラックを登るつもりではなかつたからルートを研究してなかつた。あわててと騒ぎながら登つた。期待はずれの、平凡な尾根だと思つた。岩はもろく、ハーケンは打つても効かない。もろさの点で日本の典型的な岩場。第四尾根の方がずつと面白い。

第三尾根——大賀、小林（正）　取付（一〇・〇〇）——縦走路（一三・〇〇）

第二尾根——小峰、倉知、大

涸沢に下つた。テントが一つふえていた。帰京するといつていた山本と三股が、天気がいいので上つてきたという。

十月十八日　曇後雪　（東大生滝谷で遭難）

今にも雪の降りそうな、重たるい空模様であり、稜線はガスつているので一応準備だけして様子をみることにした。ぼくたちは、PIIフランケ、第二、三、四尾根を登る計画をたてていた。

隣りにテントを張つた東大は、傘をさしながら南稜を登つていく。東大が行くのだし、積雪期の登攀んな日にひつこんでいるんでは駄目だ。ですかという強力な発言もあつたけれどうし（湿雪）岩登りを楽しめるような状た。東大パーティが出かけてから約三十テントをたたくのを聞いて、滝谷にでかけたかつただけに、何

かほつとした気持だつた。

十月十九日　曇

昨日の積雪からみて、登攀には冬山装備が必要であると考え、そういうものの準備をしてきていないこと、天候も思わしくない、食糧も充分でないことから撤収することにした。小峰と峰高は、山岳部生活最後の秋の岩場を楽しもうと、大いにフアイトをもやしてやつてきたのに、天は歓迎してくれなかつた。シユラーフザツクにもぐつて、ぶつぶつ文句を云つていたら、七時頃、東大のA君が、昨日滝谷に行つた連中十一人が帰つてこない。一たら様子を知りたいということだつた。出していないという間一名と第四尾根をザイテン経由で登るつもりだつたが、降雪のため引返したということだ。ぼくたちは撤収の時間を延ばし、東大の報告を待つことにした。十時五〇分頃、東大のリーダー沼田君から東大生と都立西高OB十一名が消息不明で、東大生一名、クラック尾根で死亡確認したということだ。沼田君は、昨日クラック尾根を一人ぬけ出し、北穂小屋に避難したという。

A君の話では、全員北穂小屋に泊つたのかもしれないと至極安心しきつた話振りであつたが、大変なことになつてしまつた。沼田君には、遠慮なく仕事を申しつけて下さいと援助を約した。午後は、東大の積雪期用の食糧、燃料で、横尾の番人小屋にデポしてあるものを、涸沢までボツカすることになり七人で出かけた。その前に、小林（正）を帰京させ、事情を伝えさせると共に、沢木さんに電話した。横尾では丸子と彼の山仲間（皆沼田君とは高校時代の友人であり知人である）に会い事情を話し、涸沢にあがつてもらつた。二十時頃、東大生は一尾根パーテイ三人、四尾根パーテイ一名がのため死亡、三尾根パーテイは消息不バーク中死亡したと聞いた。

十月二十日　晴

皮肉にも空は晴れあがり、新聞社の飛行機が、早くも活躍している。ぼくたちは、アイゼンピツケル各々三つしか用意していなかつたので、峰高、小峰、大賀が遺体捜索に加わることになつた。丸子と彼の友人二名とぼくたちは、第三尾根パーテイの捜索を始めることになりドームを下降、十一時頃、凍死体となつて三人ともほとんど登攀終了点で発見された。人数と装備の不足のため北穂小屋に引返し、明日引上げ作業を行うことになり、二十日は小屋に泊つた。涸沢に残つた連中は、仕事とて

なく、カンパンで将棋の駒を使つて、暇をつぶしていた。

十月二十一日　曇

早朝より約二十人かつて三遺体を引上げた。約四時間。法大山岳部の人たちの手さばきは、呆れる程、堂に入つたもので あつた。これだけはあんなふうに上手になりたくないと思つた。涸沢に直ちにおろす予定だつたが、ガスとルートの問題から明日に延ばされ、ぼくたちの手を必要とする程でもなかつたので、涸沢に下つた。

十月二十二日　晴

昨日、三股、倉知、大は下山、あとの五人でまばゆいばかりに輝く山をあとに下山。こうも美しい姿を見せつけられては身の毒とばかりに足を速めた。

（峰　高）

穂　高

丸子博之他四名

十月十七日　（屏風をめざして東京を出る）

十月十八日　曇　（横尾へ入る。小屋のやや下手に幕営）。

十月十九日　雨後曇

友人二名遅れて入山。二時過ぎ涸沢から下りてきた峰高等に会い、東大の遭難を知る。直ちに涸沢へ向う。涸沢は一面雪におおわれ、とても秋の半ばとは思えない。東大リーダーの沼田から詳細を聞く。

十月二十日　快晴

北穂へ登り、二手に別れて捜索を開始。我々は第三尾根。十一時頃中央稜基部から約五十米下方に三遺体を発見。人手が足りないのでザイルをフイツクスしたのみで戻る、夜遅く東京から東大の方々が到着。明日の打合せをする。

十月二十一日　晴

午前中第三尾根の遺体引上げに従事。昼前に完了、午後C沢左俣をを下り、第四尾根遭難者の引上げを手伝う。日没寸前よううやく沢のコル迄あげる。

十月二十二日　晴

高校時代の後輩Kの遺体について北穂沢を涸沢へ下る。我々三人はそのまま横尾へ。

十月二十三日　晴

終日、目前の壁を眺めてぼんやりとすごす。夜フアイアをかこんでKの冥福を祈つた。

十月二十四日　晴

撤収、未練を残しながら横尾を後にした。徳本を越えて帰る友人達を峠まで見送り、別れをつげて一人又明神へ下つた。上

高地泊。

十月二十五日　晴

夕刻母来たる。

十月二十六日　快晴

母と共に田代池周辺を散策。

十月二十七日

白骨温泉を経て、帰京。

××××××
富士合宿
××××××

参加者　リーダー中川滋夫、中島寛、山本尚禎、石弘光、永井新也、小林正直、有賀盈、倉知敬、大建二郎、三井博、宮本英治、臼井弘、多田伸治、大橋一慶

十一月二〇日　晴　新宿（六、三〇）発。例によつて吉田口から歩く。今年も雪が少い。

十一月二十一日　曇　大沢六合目半あたりで雪上訓練。

十一月二十二日　晴

全員で頂上へ向う。夏道を通らず、大沢を忠実につめて肩へ出て、昼食。風強し。帰路、上級部員はアンザイレンし、コンテジツヘルの訓錬をしながら降りた。

十一月二十四日　晴　帰京

××××××
スキー合宿　**（吾妻山）**
××××××

参加者　リーダー小林進二、倉知敬、大建二郎、朝木大統、遠藤昌士、三井博、臼井弘、黒川信幸、多田伸治、特別参加、南亮進、渡辺嘉佑、大橋一慶

一月五日　東北線最終で上野発。

一月六日　風雪

郡山で渡辺が合流、全員早朝福島におりたつ。バスで高湯へ。高湯スキー場の休憩所で朝食。猛烈な風雪で出発をしばらく考えたが結局出かけることにする。有料道路が高湯から吾妻小屋附近を通つて土湯峠まで開通していて冬は車が通らないが、少し位の吹雪でもこの道路を通ればかなり安全な様だ。途中、風雪はますますはげしくなつたが十時半高湯を出て十五時半頃小屋につくことが出来た。

一月七日　風雪

午前中、小屋のすぐ前ですべり、午後から浄土平を越えて一切経のふもとですべる。

一月八日　風雪　小屋（八・〇〇）――一切経頂上（九・四五）――小屋（一一・一五）

（中　川）

相変らず風が強いなかを一切経に登る。頂上は風が強い上に雪で何も見えなかつた。蓬来山の斜面は全くのところ楽しめる。午後から自由練習として一切経のふもとまで出かける。

一月九日　晴後雪

小屋を出て野地温泉にむかう。午前中は天気が良かつたが午後からまた雪が降り出す。十三時頃野地温泉に着き、午後からゲレンデですべる。

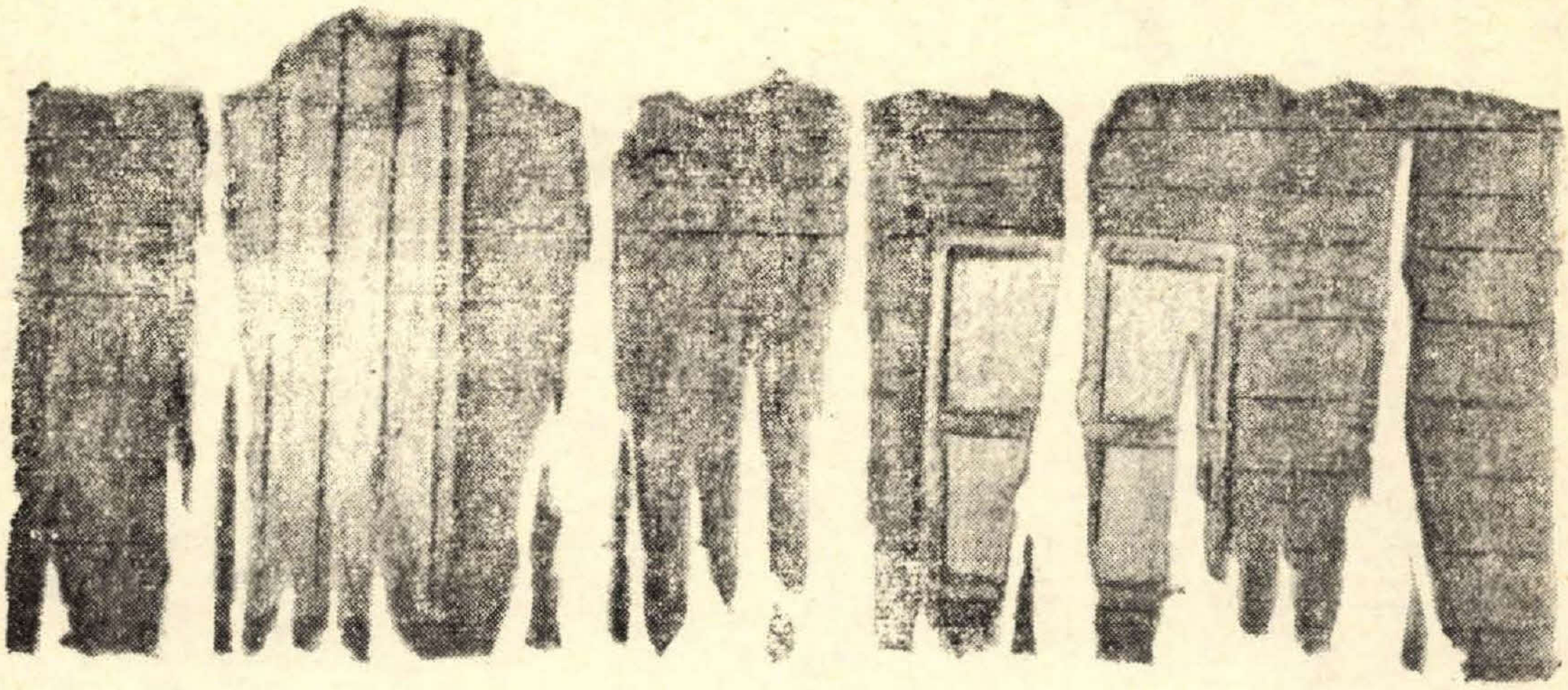
一月十日　雪

朝のうちちよつと天気が良かつたがすぐ雪が降り出す。鬼面山へ登ろうと出かけるが、ヤブが多く、天気も崩れて来たので途中から引返す。午後からはゲレンデですべる。夜は解散コンパを行う。

一月十一日　雪

渡辺、小林、倉知、遠藤の四人は土湯峠を越えて横向温泉へ下り、沼尻で二時間程すべつた。他は土湯へ下り、福島へ出て帰京。

（渡　辺）



山　小　屋

熊に会わざるの記

「ギヨツ」「シーツ」……（ガサガサ）……「ヤレヤレ」。これで全部である。約十分の、本人達にとつては悲劇のつもりだが、どうも喜劇と受けとられ勝ちなこの話は、さる八月二十日の北海道漫遊中の、人跡まれなる大雪山の奥のその又奥の沼の原での出来事である。めしは食つたし、居心地は良いし、紅茶でもわかしてとラジユースに火をつけていると、音一つしないテントの裏から、ガサガサという、こちらへ出てくる笹の音がするではないか。大雪山の熊か、熊の大雪山かと言われるほどのこの地方で、いまどき（夜の8時頃である）こんな音をたてるのはオヤジしかいない。熊と思つた瞬間、ゾーツとしてからだが硬直した。小生、不覚にもナイフを自然と握つていた。相棒のKがどんな顔をしていたか、まるで記憶にない。音の主は、テントから一米ほどの所に居るらしく、鼻のヒクヒクという音（と思われる音）が手に取るように聞える。

早く行け行けと神に念じていたら行つてしまつた。サルトルだつてこの時ばかりは「神さま」と言つただろう。だが熊という証拠がないので東京サ帰つてから語るのに弱つた。「オマエその正体見なかつたべてンダ」「それは熊じやなくてムジナかリスだぞ、きつと。」どうして人間とは、こう他人の自尊心を傷つける事ばかり言うのだろう。しかたがないからテントからそつとのぞいて熊である事を確かめた事にした。そうしたら、今度は皆さん同情し、感心してくれる。「こわかつたでしようでもよく助かつたわね」。話というのは尾ヒレがつきやすいもので、いつのまにか一匹が二匹になり、二匹が三匹……いやこの辺でやめにしよう。とにかく、あの音の主がクマであつた事は、小生も、Kも信じて疑わない。クマの話はいつでもしてあげます。

（大女子）

ヤロー会列伝

「これでヤロー会と別れられるかと思うと、うれしくてたまりません。」追出しコンパで追い出されがわのOさんが挨拶した。

それほどかさの高いヤロー会とは、五十七年入学の十人のゴタな連中のことである。

有賀盈君。通称アリちやん。唯一のゲンエキ入学だけに、滅法あたまが強い。ヨーデルとドイツ語が得意だが、フランス語はベーゼも知らない（したことはあるかもしれない）。ちよつとフラ痴である。

石弘光君。名のごとくシツカリしたマネジヤー。よくよく「落石」に縁のある男で、チンネで「おカアちやん！」と叫ん

だ話は有名。うるさいことナンバーワン、声量あたりを圧する。女痴だと思われていたが最近風むきが変つたようだ。

小林進二君。見慣れぬ名前だが忘れちやいけない。ギユーちやんの本名である。意外に器用で、ワツパをはいたまま木登りなぞする。麻雀もうまいが、よく多牌するのが惜しい。ヨー痴とみえ、どうしてもヨーデルができない。

小林正直君。こちらはオネスト・コバヤシ。名前で得をしている。ふだんはおとなしすぎて損をしている。ギヤンブルにひどく弱い。博痴（バク）と云おうか。

永井新也君。涸沢村の村長さん。ヤロー会最少長の貫録で、スキー水泳術を鮮かにやつてのける。バランスの悪いことで名高く、運痴として知られる。

中川滋夫君。むかしはロカビリー的な顔をしていたので、アンリーと仇名がついた。ずい一のハンサムボーイで、ノンちやんの別名もある。二年の秋、井川越のテントで、ノンチヤステイイテイは彼だけだつたからである。今では名実共に、我々の尊敬するリーダーである。法痴でなければもつといい。

中島寛君。その名も海賊パイレート、一番よく喰い一番よく動く。マルキシストと山男とが弁証法的に統一された存在。惜しむらくな方痴で、毛勝アタツクに暗い内から出かけたはいいが、テントのまわりを二時間もまわつてたという前科がある。

三股宏君。麻雀の国から麻雀をひろめに来た男。いいアダ名があるが本人の名誉の為にカツト。

山本尚禎君。ショートでワイだからショーテイと云う。名門府立第一高女の出身。腸内異常発酵で悪名高い。パン痴だそうだ（アンパンがどうしても喰えない、という意味である。為念）。最後に筆者大賀二郎君。本人はオネスト・コバヤシ。名前で得をしているために来たつもりでいるが、ハタの人は必ずしもそうは思わないようだ。音痴だという点では、自他ともに意見が一致する。

（一〇）

赤松岳北稜下部完登

各方面から狙われ、幾多の精鋭クライマーを長年しりぞけてきたこの北稜も、遂に完登しました。使用ハーケン九本。昭和三十年六月二十四日

× × ×

ここ半世紀にわたつてその完登を夢見られてきた赤松岳北稜は、慧星の如く現われた新鋭クライマーT・N君によつて遂に登られました。ボロボロとはげ落ちて頼りになる突起はわづかなく、またホールド、スタンスとしまつたくつかみどころか一カ所のみの北稜、上部は完全にハングし、到底登攀者を寄

せつけないであろうと思われたこの北稜の初登攀は、我が部登攀史上稀にみる偉業であつた。この偉大なるクライマーT・N君に対し、ここに謹んで"SIR"の称号を贈ろうではないか。

（注、赤松岳とは部室のそばの二抱えもある松の大木です。ハーケンがよく抜け、遂落した経験をもつ部員は多数。）

（一同）

急報

可さん宅にうまい栗がある。茨城産、色つやよく、身も肥えて、虫がついていない。早いもの勝ち！

（YOS）

部屋にて

太田部長来室。

「Aという学生は居るのかね。」

「前期の学生です。」

「答案にね、我々部生活をしている者は云々と書いてあつた。そして名前の後に山岳部と書いてあつた。」

「見せて下さい。」

「よしよし。」

「Aは春山に行くかね。」

「さあ。」

「我々部生活をなんて書いて春山に行かなかつたら、落つこ としてやるからと云つておけ。」

「はあ。」

「よく山に行くんだろうね。」

「はあ。」

「先生の試験はいつでしたか。」

「今日だよ。これから読むのが楽しみだよ。」

（Y）

下界のテント生活

今朝夏山合宿より帰京、強烈な部室の匂に迎えられた。可さん宅からフライパンを借りて来て、これからものすごいご馳走を作つて、今晩はここに泊るのだ。今ヨダレが出てたまらないので、部誌に経過報告を書くのはのちほどにする。

ああうまかつた。

〈今夕の献立〉

焼飯

玉葱とジヤガイモのいためたもの

ビフテキ一人三十匁

玉子の落し焼

ああうまかつた。

ゲルがないので、Yさんが納豆ババのところでお借りになつたので、こんなご馳走が食べられたのです。これから庭にテントを張つてぐつすり眠ります。

最後のテント生活をするべく、昨夜テントに寝たのはよかつたが、涼しい野外は朝になるとヤブ蚊でいつぱい。テントの中にも猛烈に入つてきて、六時には目を覚まさざるを得なくなつた。寝不足でぼんやりした頭をもちあげて外に出ると又蚊がいる。やりきれなくなつて部室に逃げこんだ。御大は顔をぶちぶち苦闘しながら未だ寝ていなさる。（Ue）

わがほほえましき山男たち

剣からの縦走も終り、槍で一行と別れ、北穂南稜にテントを張つていた我々に、南稜を登つてきた人が話しかけていました。

「一橋の方ですか。白馬で一橋の方に会いました。皆さんズボンのすそはボロボロでしたよ。」

これで、ケツパリストIさんの率いるケツパリマン達が、白馬までの宿願を、身につけたボロにもかまわず、果したことが分り、本当にほほえましく思つた。可さん宅の話によると、とにかく汚なかつたようですね。（注当時から四年たつた今日、当時活躍された方々は、パリツとした背広姿で可さん宅に訪問されます。可さんはじめご家族の方々は、思わず驚きの眼をみはり、そのステキなやさ男振りにびつくりされるそうです。

槍パーテイはみんなスマートでしたが、唯一人Sだけは、あれのズボンときたら剣沢出発の時の穴がだんだん大きくなり、太郎ベエでは両ひざがあらわにのぞき、それにあのトンガリ帽子と地下足袋ときたら、およそ乞食のようでした。（Ue）（注、ソンブレロまがいの麦わら帽、サングラス、赤のポロシヤツ、ショートパンツそしてすんなりした白い足、休むとピースをふかす、とまではいかなくても乞食姿なんて縁遠いのが現役の姿です）

合宿と歌

歌は世につれ、世は歌につれ、と俗によく申します。とすれば我々の合宿、いやたつたの三日の山行にもそれぞれはやり歌があつても不思議ではありません。それを少し紹介致しましょう。

Wが山岳部に入つたのは三十一年の四月でした。五月にさつそく谷川合宿に行き、たき火をかこんで一人一人お話し、ないしは歌をやらされました。この時よく歌われた歌と云つて特にありませんでしたがO氏が思い出と共に歌つた月の砂漠はしん

みりとして私達の耳を傾けさせました。

夏。はからずも同じテントに入つた、二年のY氏とWは知つている流行歌を歌いまくり、時のリーダー氏をして艶歌師の誕生となげかしめました。

十月。後立山を縦走しながら、口づさんだメロデイは「ケ・セラ・セラ」。もうレコードもすり切れた頃だから代えようぜ、と云つたすぐあとから風び出してくるのは「ケ・セラ・セラ」のことなど……」と云うしだいでした。

一月。スキー合宿。ひまにあかせて民謡日本めぐりをやり、種が切れて今度は知つている限りの童謡をがなりたてました。Wも二年部員になりました。

五月。八ケ岳で前日に降つた新雪を踏みながら歌つたのは「ジヤスト・ウオーキング・イン・ザ・レイン」と云うポピユラー・ソングでした。口笛でかけ合いをやりながら夏沢峠への道をたどつたのです。

夏の剣沢は雨の合宿と云つても良かつたでしよう。雨にちなんだ歌がヤケツパチな気持で歌われました。いわく、「雨、雨降れ降れ母さんと……」から「雨よ降れ降れ、悩みを流すまで……」まで雨の出てくる日本の歌は何でも。

冬。ポピユラーソング全盛です。五月の延長で「雨に歩けば」「ホワイト・スポーツ・コート」それに「アイ・ウイル・ビー・ホーム」等もつぱら英語の歌が歌われました。

春。特にはやつた歌はありませんでしたが、おそまきながら我部にもコーラスブームの到来で、早月尾根千七百米のCIで、W、Y、N　N_1の四人からなるCIカルテツトが生れて、「赤トンボ」「早春賦」「ジーグリ」等、数曲がレパートリー。さしづめ、ダーク・フエイセスと云うところでしようか。

Wもはや三年です。

五月の小窓尾根。Y先輩の指導でWは懸命にドイツ語の歌を二曲覚えました。

秋十月。南アルプスの縦走で歌われたのは「はるかなる友へ」でした。「静かな夜更に、いつもいつも、思い出すのは、お前のこと、おやすみ安らかに、たどれ夢路、おやすみ楽しく、今宵もまた」と云うしんみりとしたスローテンポの歌で。シユラーフに入つてローソクを消してから皆で歌いながら俺もまた夢路を、と云うわけです。

冬。少し古いながら、そのシヤンソン調を買われて、フランク永井歌つたところの「公園の手品師」が盛んに歌われました。四年のO氏のまじめくさつた顔が思いだされます。もう一つ。Wが仕入れて来た「初恋」も歌われました。「北上川の初

恋よ」と云うもので、出だしのメロデイを覚えるのに苦労なさつた方もおいででした。

春。売り出し、マヒナスターズ歌うところの「泣かないで」がもつぱら歌われました。二番の歌詞がわからず、一番をくり返し、くり返し歌わねばなりませんでしたが、それでも盛んに歌われました。

Wもいよいよ四年です。

夏。いろいろの歌が歌われましたが、イタリヤ語らしい「人民よ進め」「アヴアンチ、ポポロアラリコツサ……」と云う歌が行進曲の快適なテンポが喜ばれて歌われました。最後の節がむづかしくて、この歌のオーソリテイたるE君の指導で縦走に出るころは、うまく歌える様になつたらしいです。

さてこれからはどんな歌がはやるでしようか。楽しみです。

(Nabe)

シーワン建設運輸会社

創立

昭和三十四年三月上旬

会社内容

人も知る赤谷尾根の一五六〇米の白亜の高台にデンと立つカマボコ型のビルがその本社。最近地盤沈下のため、社屋が傾きかけているが、まだまだ健在。しかし居住性はあまりよくない。一風変つたこのビルに最近怪談めいた噂が絶えない。というのは、夜ともなると、一角から獣の吠声のような音が聞え、時には爆発音がまじるということであり、近所の人々は睡眠を妨げられることがしばしばであり、更に奇怪なことは暁方近くなると、必ずビル内に六つもの巨大なテントが張られるというのである。

事業内容

資本金の額はあまり大きくないし、資本の蓄積も微々たるものである。事業の建設業は、もつぱら下請け的なもので、荷物の運送業も兼ねる人夫的仕事が多い。創立早々、岳界の大立物春山氏の邸宅の建設にあたり、その成果を期待されている。

社員構成

役員は六名で、小じんまりとまとまつているが、親会社たるマエダレ会社に入社する前に、一年ないし三年追放された経験があり、いづれも老令者で、若さに欠けるのが、玉に傷である。

取締役社長、ナベさん、今までは、他の会社にあつて第一線で活躍、そのウデを買われてこの会社に迎えられた。建設業連盟の会長も兼ねている。煙草が大好きで、社員の迷惑をかえり

みず、ビル内を煙と化すという横暴さをもつが、その好々爺たる風格に全員信頼しているらしい。社員のツマミ食いには敏感で、いつも眼を光らせているらしい。春山氏宅の建設に当つて責任者としての精神的、肉体的苦労を痛感しているらしい。

常務取締役ソンチョウさん、この業についてから長いのに、なかなかウダツがあがらない。オデン屋で一杯やるのが楽しみ。退職後は、故郷のマエダレ山岳村から政界にうつて出るのが念願らしい。

常務取締役、ストーン、自分の実力を信じて疑わないので、何かとシーツー建設運輸合名会社に移つて腕をみせたいのだが社長の訓もあつてこの小会社に留まつている。

取締役、イツキヨウさん、積雪期の建設運輸業にたづさわるのは初めて。汚職の相あり。社長の眼が光つているので手が出ないらしい。

取締役、オネステイ、当会社より大きなシーツー建設運輸会社への横スベリの機会を自ら拒み、この会社に留る。

苦情処理機関主任ハジキ（パチンコの）社内の雑多な仕事はすべて彼にまわつてくる。因みに、彼は一橋大学山岳部一年生である）

解散

昭和三十四年三月下旬

「我々は、所期の目的を、風雪をもせず、汗と涙でもつて、一致協力して達成した。眼をつむつたまま歩ける程に通い慣れた赤谷頂上と馬場島の工事現場から去ることは大変うれしい。一応解散することになつたが、我々は近いうちに社長はじめ新しいメンバーでもつて、当事業に当る筈である。御期待を乞う次第であります。」（C連絡ノートより）

落日

おりしも池の谷のV状の谷にまつかな太陽が沈もうとしていた。バラ色に染められた雲海が地平線一杯に拡がり燃えるような太陽がしずむ絶好な場所を提供しているようであつた。あたりにも次第に闇が迫り、又岩角に立つ仲間の影が長く尾をひいているこ ともなしに落日の一瞬を眺めていた。今日一日の行動がふと頭に浮んできた。両手数十ケ所に仰々しく赤チンでぬりたくられている傷にふと目をやつた。まさに今日の涙と汗を流したあの一時間半にも及ぶオーバハング乗越しのみやげ物であつた〃アア〃と思い出したように溜息がもれ胸がしめつけられるような圧迫感を覚えた。今日初めて本場の岩場でアブミにのり、数米のハングをこえ、まがりなりにも一本の岩場を征服した、という喜びはなんら湧い

てこなかつた。ただあるのは寒々とした空虚感のみ、私を放心状態に追いやつていた。

身をなげ出してアブミを次々にセツトー空間にいるトツプの姿、下からはどの位の位置にいるのか知るよしもないが、数米離れているのに翼のそばで聞いているような荒い息づかい。私は馴れぬ手つきながら少しでもトツプの登攀を助けんものと懸命にザイルを操作していた。ハングのひさしを廻り込み最後の乗越しに長身のトツプの足が最大限に拡げられさかんに足場をもとめている。息づまるような瞬間が過ぎハングの上に姿を消した。ふとおもわずもれる安堵感のためかこれからトツプと同じ行動をしなくてはならぬ我が身を想像してか、溜息をもらさざるを得なかつた。「こい」くる前に写真をとつてこいよと待つこと数十分してやつと待望の声がかかつた。カメラを向けて上をむく。曇つていた空はいつの間にか真青な夏空になり、丁度太陽がかさをかぶり輝いていた。その空間に無気味にもアブミが二つ、何事もなかつたように取り残されていた。「よし、いくぞ」心なしか声がふるえたようだ。目の前にあつたビレー用のハーケンを抜き、意を決して、第一歩を踏み出す。最初のアブミ迄トツプの釣り上げに使用したハーケン二本を抜かなくてはならぬ。「カンカン」上下に激しくたたくが微妙なバランスを強いられるこの場では余り有効的に打てず、なかなかハーケンは抜けてくれない。二本目のハーケンは、ついに打ち残したままこれをスタンスに求め、どうやら第一のアブミに片足のせることができた。グラリと岩壁にアブミがよつていく。外傾した体を手で押し戻しながら次のアブミに手をかけるべく全身に力を入れた。一瞬何んともいえぬショツク、思わずでた声と共に体はアブミもろ共、岩から放り出された。胴がしめつけられ、激しく、一米位ふられたが、又岩壁の方へ体は戻つてきた。アブミをかけた古いハーケンが体重を支え切れずぬけたものらしい。落ちたのだと意識するまでしばらくの時間を要した。ともかくザイルにすがりつつもスタンスを足で探つたがわずか数糎の岩角もなく、文字通り空中ブランコの型になつてしまつた。トツプに手短かに報告すると共に、必死のまなざしでルートを追つたが、第一のアブミの個所よりかなり下に落ちてしまい、残つたアブミまでは垂直以上の壁をへだてて数米はなれている。まさに絶対絶命に追い込まれたような我が身を悟り、どうしようもない絶望感におそわれた。

× × ×

思い出すともなしに追想にふけつていた私はここまで考えるとふと我にかえつた。もう日はすつかり落ち夜の帳が三ノ窓に

も迫つてきていた。下からガスがふき上げられ夜のきびしい寒さがまもなくやつてくる。剣尾根の上に輝いた星一つ奇妙に又印象的に私の心をとらえた。

その後あのハングの下で味わつた絶望感が頭から離れず、山をこわいこわいものにしてしまい、すつかりフアイトレスな男にしてしまつた。

臆　病　(Stone)

ぼくは生来の臆病である。小さい頃どんなに臆病であつたかは、恥かしくてとても云えない。事実をありのまま話したら、毎日部室で顔を会わせ、山でぼくと行動を共にしているみんなが信じないと思われるくらいだ。だから話さないし、ここにも書かない。

その臆病が発生し、空想力たくましいぼくの頭を恐怖で悩ませたのが、場所もあろうに、岩登りの最中であつた。約束していた相棒が来ないので一人でツヅラ岩を登つた時である。突然手足が震え始め、おりることはできず、トラバースもできない。夢中になつて登つて、下つて帰つてしまつた。この時以来しばらく岩登りのことを考えると恐ろしかつた。がその恐怖心もいつしか収まつて夏合宿を迎えた。滝谷第四尾根を三人でやることになり、スノーコルに立ち、C沢左俣をふりかえつて眺めた時、左俣が壁に見え急にまた臆病になり、登攀前の腹ごしらえもろくろくできない。岩をつかんだ手が、確かに、間違なく震えている。下級生がトツプをやることになり、実にほつとした。が、Bカンテ手前で、トツプやらないかと進められ、とうとう観念してトツプになつた。

×　×　×

まつたく不思議だ。好調だ。少しも怖いことなんかない。Dカンテでトツプを交代した。が、縦走路手前をコンテイニユアスでいつていて、かかえた石が抜け、がらがらスリツプ。ザイルのおかげで十米で止つた。みじめな格好で涸沢に帰つた。翌日から一週間降り続いて行動出来なかつたけれど、あれが天気だつたらどうなつたことやらと考えると、怖ろしい。岩登りはもうこりごりだと思つたけれど、今更止めるのは情けない。男の意地もある。それに、ぼくは山が好きだ。山を楽しもうと思つたら、精神的余裕がなければならない、いものだつた。

その時の気持といつたら、大変淋しい、下つて帰つてしまつた。この時以来秋の南アへ荷上げと偵察に行くことになつた時、このチヤンスを利用して、北岳バツトレスで岩登りをやり、臆病を治療してやろうと決意した。大げさな書きぶりだと云われるかもしれないが、ぼくとしてはとても直剣であつた。大樺沢での前夜

は、人数が三分の一に減り、しかもリーダーときており、真上から黒々とした壁がせまつているので怖く、淋しくてたまらなかつた。もうこの原稿が活字になる頃は卒業して、あの時一緒だつた連中とは殆んど顔を合わさなくてもいいから、こんなことを堂々と書く気になつたのであるが、結果はトツプに（比較的やさしい所で、とお断りしておきます。難場にきたら、健気にもトツプをやる積りでしたが）石をおとされてシユリンク、その直後トツプで登つたけれど、収穫はなかつた。

さて、とうとう最上級生となつて困つてしまつた。はつきり云つてしまえば、最上級生は下級生の命をあづかるという地位にある。ぼくには下級生を導くだけの実力はなし、それにこの臆病さとは大の仲好しである。岩登りにつれていくなんてなつたら一体どうなるやらと気が気でない。赤松バツトレスを一人で登つて気をまぎらせていたが、ふとしたはづみで奥又白に入ることになつた。四日間雨に降られて登攀はやれなかつたが、毎日、不気味な環境で暮したせいか腹がすわり何となく落つきが感じられるようになつた。夏合宿は三の窓に入り、チンネの登攀を本当の意味で、楽しめた。臆病をどうやら退治できたらしい。

先日の部誌に、ギユーちやんが、東大の滝谷遭難以来山がこわくなつた。しかし、山とは離れられない。自分の臆病を退治するため、小窓尾根に行つてきたと書いたが、そうこなくちや面白くない、とぼくは思つた。

臆病者だつて山を好きになれる。が臆病な山男には夢がない。彼には山の困難を克服しようという気力情熱がない。彼が口にする情熱とは観念的で空虚な情熱で、自身、絶えず前進しようとして努力している仲間を見て淋しく思うものだ。

山を知つて恐ろしいというならわかるが、知りもしないで恐ろしいというのはそれは臆病というもので、やろうという気力さえあれば退治できるものだ。

（mimi）

断片

――春山であつたこと――（昭和三十五年三月）

「とにかく、だ。」とアンリが云つた。みんなはシンとした。BH第一夜、山のように積まれた全製備と食糧とを前にしてである。

「めいめいが、かつぐよりないんだ。俺たちがかついで、俺たちが登らなけりや、テントはのびない。そこが、ボツカ人夫とちがう所だ。」

念を入れて雪洞を仕上げる。有ちやんと二人でしけこむこと

になる。目の前に画伯傑作の〃接吻〃の雪像が、そして〃ヴイナス〃が、我々のボンサンスを試すかのように、異様な輝きを放つている。（十日。C_1日誌。N）

アーウマイ、モモかんをあけて六人でくう。アツ、大鵬が勝つた！（十日。C_1日誌K）

てつきりBHに居ると思つて来たら、あにはからんや、もぬけのからでいささかショック。夕メシをたく気もせず、カンパンですませる。対面の部屋には教育大の連中が入り、女性がメシを作つている風景にはカツカツとくるものがある。されど、明日はC_1に入れると思い我慢する。（十二日。BH日誌。一人遅れて入山のM）

飯をますと、皆一斉に頭がクラクラすると云う。Mはきじを打つていて落つこちそうになつたと云い、Tはモチを全部吐いてしまつた。ひどい酸素欠乏症患者の集団になつてしまつた。（十二日。C_1日誌。N）

ミツイが紅茶のナベに靴下を落した！（十二日。C_1日誌。O）

こんなテントでこの風に耐えられるのかと思つたが、一たびシユラフを出して着いてしまうと、気が楽になつた。風がうすいテントがワタワタ云おうが、気にならない。テリ焼をほおばつて、ラジオを聞いて紅茶を飲んでなれ。（十一日。C_2日誌。K）

今、中島がモモかんのフタをあけ終つたところ。牛ちやんによれば、モモは四つ入つているとのこと。ああツバが出て来た。ラジオのコーラスを聞きながら喰わしてもらおう。やはりモモは四ケ入つていた！

ああ、旨かつた!!（十三日。C_2。A）

IとMは遅れて入山、十七日千七百にC_1へ向つた。ガスがひどくC_1の二人は沈澱していたが、C_2からUたち二人が逆ボツカに下りて来たので、一緒にひつそりと昼飯を喰つていた。丁度このときIとMはC_1の前に来た。某大のパーテイが休んでいたので訊くと、

「サアー、ここは千五百ですから、千七百はこの上でしよ

う。ぼくらは千九百まで行くつもりです。」

IとMはまた登り出した。目の前のテントは某大のものと思つたからだ。登ること一時間、「この上」の「千七百」に来たがテントはない。二人は更に登つた。一方、昼飯をすませたUたちはC_2へ帰るためピッチをあげて千九百までの急な登りを抜け、前を行く二人パーティに追い着いた。しばし黙々と四人一列で進む。前の二人はヨレているとみえて歩みがのろい。前の二人は道をゆずつた。後ろの二人は追い抜きながら声をかけた。

「お先きへ」顔を見合せて

「何だUじやないか！」

「あ、Iさんですか！」

（十七日。実話。）

C_2ではリレー小説を書いている。題して『飢えと寒さと欲望と』。

（十三日。C_2日誌。）

アタックは決行された。

ガスと小雪で何も見えない。祈る気持で帰幕を待つ。

（十八日。山日記より。O）

本日のアタックは無事完了した。この目的は一応達成されたわけであるが、チャンスがあればチンネに取り付く。この辺で気持を一層引きしめ、各自慎重に行動すること。

（二十日。C_3日誌。N）

午後九時半、テントまでアンザイレンしたままで、彼らは帰つて来た。

おめでとう。部の合宿で初登とは!!本当のおめでとうはそれからだ。しつかりと、事故なく撤収しよう。

（二十二日。C日誌。O）

今度の雪山は、俺たちの入部以来最高に充実したものであつたと思う。と同時に、その内容を綿密に反省してみるならば、必ずしも結果だけから想像できるほどに満足すべきものであつたか、疑問に思われる点が沢山あるのではないか。成功という美辞におおわれて、この点が見逃されやすいと思うので、この辺でフンドシをしめなおして、皆無事に、剣の雪と岩と氷とに敬意を表しつつ、下山しようではないか。

（二十四日。C_3日誌。K）

しんがりの四人、吹雪のC_2を撤収して下り始めたものの、烈

風に吹きまくられて下山を断念、C_2跡に舞い戻る。と、早くも人影二つそのあたりに現われて「おい、モチもあるぞ！」などとやつてる。現行犯である。撤収延期となるとこちらも、一度捨てた食糧が必要になる。フアイテイングに負けた黒川、奴らのテントへ行つて、「あのー、モチを返して下さい。」

翌日も沈澱。米と石油ばかりやたらとあつて、おかずは塩と醤油だけしかない。奴らのせいのような気がしてくる。そこへその奴ら、自分らの埋まつたスコツプを掘り出すためにこちらのスコツプを借りに来る。「何てゴミな奴らだ。」つぶやき合う。ほどなく奴ら、即席シルコにピーナツを持つて登場。そこで当方合唱

「いや、いいんですよ、そんなことしてくれなくても。いいんですよ、そうですか？すいませんね、じや頂いときます。」

（二十七日。C_2。O）

某月某日東京駅で白いピツケルに出会つた。

ピツケルにまかれた
衣の白さ。
母なる人に
しつかりにぎりしめられた
白い悲しみ。
指の隙間から
するりと抜けて
プラツトホームの人々を
覆つた白。

白は雪の白さか。
——谷川岳一ノ倉沢といいしところで一人の若き岳人が凍死せり——
それも
白い雪の上だつた。

（胡椒坊主）

A山スキー行

発　端

「ゲレンデじやつまらねえ」とゲレンデでも満足に滑れないくせに、WはYとY_1をさそつてA山に、よせばいいのにキスリングを背負つてツアーに出かけることにした。三月の初めのことである。

スキー場で早くもアゴを出すこと

D温泉スキー場は百五十米のリフトが動いている。その下をシールをつけた我々が、それこそ、リフトに乗つたやつらを、

世の中で一番憎むべき人間だとにらみつけながら、そして我々自身を世の中で一番馬鹿な人間だと思いながら、あえぎあえぎ登る。スキー場の一番上に来たときは完全にアゴを出してしまつていて、口もききたくなくなつた。

ストツクにひびが入ること

しかし、登るにしたがつて調子が出てくる。何ピッチ目かで、ザツクに腰をかけて、カン入りジユースを飲む。舌にとけ込む甘さが何とも云えぬ。立ち上つて空になつたカンをストツクでカチンと打つたら、カンは空に舞い上がり、杉の梢にぶつかつて粉雪をはらはらと落し、雪につきささつた。「いけねえ」。ストツクに見事なヒビが入つてしまつた。テープでまいてどうにか助かつたが、馬鹿なことをしたもんだ。

雲間に乳首を見ること

S平に出ると風は烈しさを増して我々を押し戻す。チラリと見える白きオツパイ。オオー、おわんを伏せその上に岩の突起を持つたA山頂上。土地つ子はA山をいみじくも乳首山と呼ぶ。彼らもまたそこに母ちやんを思い出すらしい。

ウイスキー・アンドソーダを楽しむこと。

K小屋は温泉つきである。半坪の板の湯ブネにとうとうと硫黄泉が流れこむ。そこで充分に暖まつて、氷の代りに雪を入れたハイボールを飲む気分は、薄暗いバーの片隅で、S先生とY先生はしよつぱい、などと思いながら飲む気分とはまるつきり違う。薄暗さは同じでもランプと小屋番のヒゲ面が違う。

タバコ一本にマツチ一箱を使うこと

次の日は素晴らしい快晴になつた。夏はジグザグの登りをシールをきかせて真すぐに登る気分は、「ザマー見やがれ」と云つてやりたい気分だ。稜線は痛烈な風だ。B山、E山、I湖、A湖、と眺めはつきない。エビのシツポ、シユカブラの発達は見事の一語につきる。スキーをかついで、エビのシツポをストツクでいたずらしながら稜線を行く。乳首山のテツペンに立つて、タバコをつけんとしたが三人がかりで、マツチ一箱を使つてやつと火がついた。本物のライターがどんなに欲しくなつたことか。

ボーゲンがうまくなつたのかと錯覚を起すこと

下りは谷間をすべつて小屋の中まで滑り込むことが出来る。谷の一方に乗り上げて、足を開くと自然と谷のもう一方の方へうまくまわる。にやにやしながら楽しんで谷を出たら、とたんにまわらなくなつて大いにくさつた。

サングラスにだまされること

小屋に帰つて昼めしを食つたら、女性を一人入れた五人

のパーテイが小屋に入つて来た。大したことないなと気にもせずにいたが、サングラスをかけたら、オヤと思う程輝いて見えた。めしを食いながらもWもYもY₁もちらりちらりと眺め、そしてサングラスのなせるいたずらを不思議に思つた。

雪中で格闘すること

二晩の間、我々三人だけが宿り客だつた小屋に別れを告げて、再びD温泉へと向う。木の間をするりと抜けんとしたが、目測が誤り、キスリングの両タツシエが見事にひつかかり、スキーだけが前に行つてザックは残り、お尻は見事な尻もちをつく。そして格闘が始まる。起き上るのに一ピツチ以上のエネルギーをついやしてしまつた。うまくコースを曲がつて直滑降にうつつたとたん、穴ボコに足をとられて豪快なる転回。雪面から顔をあげたら目の前に登る時に飲んだジユースの空カンが無情にも突立つていた。バカヤロー！

ゲレンデを斜滑降、キツクターンでおりること

ゲレンデを、キスリングを背負つた我々が斜滑降、キツクターンを繰返し、斜面がゆるくなつてからは、まずいボーゲンですべる。だが背中のキスリングが何と云つても物を云う。「わあ、あんな荷物を背負つて！」と云うお嬢さんの声を聞きながら、いい気になつてすべつていたら見事にひつくり返つた。

バスを借切ること

温泉にゆつくりつかつた次の日、ボタン雪がぼそりぼそりと降つて木々を真白にする中をバスでN駅に向う。乗客は我々三人だけ。バスを借切るなんて何と豪勢なことだ。運ちやんとバスガールのサーヴイスでラジオ弁入りの「お花ちやん」なるメロデイが流れる。この場の状況にぴつたりと来て何となくしんみりとしてしまう。こんなバスが三十分で着いてしまうとはもつたいない。もつともつと乗つていたい気がした。

(Nabe)

お山下ればいばらがとめる
いばら放しやれあら日が暮れる

山から下りる時、ほかのどんな時よりも一番人間らしい感情がわいてくるような気がする。人間らしいといつてもあいまいだが、何か自分が眠つたり食つたりする単なる生き物以上のものである状態なのをしみじみ感じるような、うまくいえないが、そんなような一寸不思議な気持である。いわゆる情緒というのはこういう感じをいうのだろう。

山へ出かける時はいつも用意にゴタゴタするのと、長い汽車の待時間と満員の夜行に、いいかげんいやになり、入山の重い荷物に景色なんぞは夢の内で、情緒どころでないが、下りるの

は、その山行をし終えたという解放感や久しぶりの下界へのほのかな憧れ、逆に山と別れるさびしさやゴミゴミした町のわづらわしさ、そのほか山でのいろいろなことの思い出が交錯して、複雑な心持にさそわれそれが一束になつて奇妙にわびしく、空虚感におそわれる。

山について想う時、まづ思い出すのは山での苦難や失敗などのエピソードと下山の時のようすである。エピソードの方は友達と語る時いつもいい話題となるが、山を下りた時のことは、一人で居る時何かの折にフツと思い出され、何となく胸が一つぱいになつてしばらくぼんやりしてしまつて、それからハツと気をとりなおす。

冬の山の帰りは特にわびしい。下るにつれて雪が少なくなつていくのは歩くのが楽になるのはいいがなんとなくさびしいものだし、土が出てくるようになつては、何とも汚なくつてやり切れない。そこここの枯木には気が滅入るばかりで、重くるしくくもつた空と、土の黒と雪の白だけの空間の中に、一かたまりに寄りそつた小さな部落をポツンと見る時なんぞはやるせなくなつて泣きたくなるような気がした。町に入つてもはなやかな気がせず、こういつた心に強く残つていつまでも忘れないでいる風景というものがいくつかあるものだ。しかしこの場合のようなつまらない場面がいつまでも心に残つているというのは、それにくらべて、春はうらうらかだ的で救われるが、心の空虚感はまぬれて白く光る広い道に、うつそうと影をおとしているという図はまつたさせてしまう。「もの想う」ころのるを得ないようだ。それに雨でも降つていたらいや気がさして死んでしまいたいくらいといつたらとても印象的だつたのは、十一月末、富士山の帰り三ツ峠によつての下山であるが、短い山行で終えて、つかれた足をひきづつてす暗くなるころだつた。歩くにつれみえてわかつた。石ころのデコボコつた冷たそうな水が流れ、まつ白な土蔵の壁と、刈りとつた稲の列とが並んでいる。この白い土蔵はいまでもはつきり憶えている。このシーンにぶつつかつて何か胸をギユツとおしつけられるような気持がして、なぜかいろんなことが次々と思い出されて泣きたくなるような気がした。平凡なシーンだが、山に限らず、こういつた心に強く残つていつまでも忘れないでいるのだ。しかしこの場合のようなつまらない場面がいつまでも心に残つているというのは、

それが山の帰りだつたからであろう。

目をつぶつて静かに思いめぐらせばいろいろな山の帰りのようすが、次々とうかんでくる。ガスの中の撤収、暑さと足のマメにうなつて足の先ばかり見てたこと、登つてくる人の奇妙な顔、道をまちがえてサやぶをこいだこと、汽車の中での討論、等々。

山の帰りはたしかに人生の中の貴重なる一瞬の一つである。

（一橋亭痴楽）

山から下る日

山に登りそして下ることを「山登り」或は「登山」と日本では呼んでいるが、山に登つたら下らねばならないのだから、この名称は神風的ではあるまいか。

言葉の問題はさておき、事実登りさえすればいいんだと云つた調子で山に出掛けて行く事は非常に危険である。一つ一つの山行に於いては、家を出る時がスタートであり、家に帰つた時がゴールであるから、下山の日は丁度ホーム・ストレッチに掛る頃であると考えられる。今まで幾多の事故、遭難が下山の際起つている事か、心したいものである。

さて、山から下る日と云うものは、妙に人の心を動かすものである。連日雨に降り込められたり、思うように行かないで仕方なく山を下る時は全く情けない気持になる。巻土重来を心に秘め黙々と下る時、背中のザツクも、登山靴も重たく感じられる。

一方、充分目的を達成した時は、意気揚々として、山を振返つて眺めたりする。そこには名残り惜しさと充足感が満ちている。

又時には、「この道を、この景色を、自分が再び歩み、眺める日がやつてくるであろうか。」などと、ひどくセンチメンタルな気持を抱きつつ山を下ることもある。

このような経験を重ねて行くにつれ、いよいよ山に憑かれ、山男として成長していくのであろうか。

一昨年の十月北岳から下る日である。バットレスの登攀も前日終え、いよいよ下山の日起きて見ると馬鹿に寒い。寝呆け眼をこすりながらテントの隙間から外を見て驚いた。昨日まで紅葉の真盛かりであつたのが、一夜明ければ白銀の世界。本当にこの時は、お伽の国にいるような錯覚に陥つた。そしてフワフワした新雪を踏んで山を下るにつれ、あたりは再び前日の紅葉

の世界に戻り、トンネルを抜け芦安近くなると山は青々としていた。全くこの日は色彩に富んだ趣きのある秋の一日で忘れることが出来ない。

昨年の五月剣からの下山の日はまだ記憶に新しい。予定を終え明日は降りようという日の夜から山は猛威を振い始めた。キャンプ地が三千米頂上直下の雪の上であつたから、横なぐりの風雨が猛烈に吹きつけ一時はテントごと吹飛ばされるかも知れないと思い、靴をはき、ナイフを握つて顔を見合せていたという笑えぬ一幕もあつた。その恐怖の一夜が明けたがその日は天候思わしくなく沈澱。食糧が心細かつたので、次の日もたたかれたらどうしようかと、その夜は祈る気持で寝た。翌朝、どうやら動けそうな天気。ああやつと下れるぞと山を下れる喜びでお互にニヤニヤと笑を交したあの気持をまだ覚えている。

雨のため大きな亀裂の生じている早月尾根を自分等が今生きていること、そしてこの身体をこのまま無事に家のタタミの上まで持つて行かねばならないことを考えながら慎重すぎる程用心して山を下つた。

そして伊折村からバスに乗りの剣峰々を遠く眺めた時、云いようのない満足感と解放感を味わつたのだつた。

縦走

(Henri)

灯ともし稜線下る這松に夜露のおりて喉乾きゆく

(Honesty)

部　誌

昭和三十年度

部長　太田可夫先生

部員　四年　チーフ・リーダー　吉田義則
　　リーダー　甘利仁朗
　　〃　佐薙恭
　　〃　宮川次夫
　　〃　松尾寛二
　　マネージャー　高崎治郎
　　石和田四郎
　　鈴木克夫
　　瀬田宏
　　春日井実
　　吉沢貞一郎

三年　サブ・リーダー　山本健一郎
　　具係　柴崎新
　　マネージャー　中村保
　　図書係　南亮進
　　篠原敏弘

二年　記録係　各務謙蔵
　　中村幸正
　　岡悦郎
　　清水啓
　　岡垣治雄
　　上原利夫
　　市畑進
　　加地幸雄
　　西海隼雄
　　宮川守久
　　茂木俊明
　　朝木慶司
　　小林博
　　大庭将六
　　沢木一夫
　　山田邦行
　　城戸剛
　　景山豪治
　　市川陽一
　　宇田川徳治

一年

部員募集（国立校庭）

四月十五日

入学式は九時より挙行される。八時三十分、ビラを持つて部員集合す。新入生は八時五十分、講堂に入り着席後直ちにビラ配布す。入部者六名。

山田成人
松木実

新学年初顔合せの会

四月十八日

出席者十四名。

新入部員の募集（前期のオリエンテーション）歓迎会、歓迎登山について。

部員募集（小平分校々庭）

四月二十日

オリエンテーションには高崎が立つ。入部希望者二十一名（計二十七名）。歓迎コンパ、歓迎登山のパンフレットを渡す。

新入部員歓迎会

四月二十一日　国立部室

参加者三十七名、内、新入部員十二名。

場所　日原川乗山古里

新入部員歓迎登山

四月二十三、四日

参加者二十七名、内、新入部員十二名。

場所　日原川乗山古里

定期部員募集会

四月二十五日　国立部室

出席者二十一名。

連休山行の件。上高地九名、鹿島五名。

定期部員集会

五月九日　国立部室

出席者二十四名。

谷川合宿打合せ、連休山行報告。部会が一応終つてから春山反省会が行わる。食糧のバラエテイーと、器具（アイゼン、スコップ）の不足も問題となつた。

谷川合宿

五月二十七、八、九日

吉田以下三十一名。二十九日は雨に濡れながらも雪上訓練をする。帰途、全員湯檜曽に寄りコンパ。

小泉先輩訪問さる

六月十二日　国立部室

器具の整頓がなつてない、部室、部誌の乱雑なことなどか

ら、大分激しいお叱りを受ける。

「……『絶学無憂、吾人理窟を知らず、幸いにして元気なり』のモットー。之も勿論大切である。しかし町のアンチャンに落ちてはならない。その中に一橋らしい品位と真面目さが欲しいものだ……。」（抜スイ）

針葉樹会

六月十六日　如水会館

出席者増山清太郎、松木謙三、日江井正己、久保孝一郎、大島理則、樋口洪、佐野茂雄、小林宏、横山晥一、中村正司、高橋尚好、五十嵐弘の諸先輩。学生からは吉田、佐薙、高崎、山本、柴崎らが出席。

昨年度決算報告と本年度予算報告。山行報告。夏山の計画。「針葉樹」十一号発刊の件など。

日江井先輩より図書贈呈さる

七月八日

「はい松帯」（織内信彦）「山岳省察」（今西綿司）、「山の魂」（スマイス）、「山」（ハンス・モルゲンターレル）、「ヒマラヤ探査行」（パウル、バウテル）、「未知のカラコルム」（ジョン・バール）等、十八冊を載く。

バッヂでき上る

七月十四日

「バッヂ作りの件は、ベテランの諸先輩の努力にも拘らず所謂未登攀という形で今迄残されていたが完成してそれが明日のよいやり方で、昔のとほとんど同一の所、一ケ月前にこのバッヂをつけて剣の岩場をよずるなんて事は果して考えた事があつたろうか。吾々はこのバッヂを胸につけて相当の誇をもつて更に高く高く登つていきたい。」

（S・S）

夏山合宿出発

先発隊は高崎以下八名、本隊は吉田以下十六名で七月十五日に、後発隊七名は七月十六日に出発。剣沢合宿は総勢三十三名という大部隊になつた。

中村（正）先輩訪問さる

八月七日

「久しぶりにやつて来た。きたないい。

おかげさんで負傷の方も恢復、もう部室だがやはりなつかしい。

会社にでも遊びに来てほしい」。

（東京海上　中村）

定期部員集会

九月十九日　国立部室

出席者二十一名

夏期休暇中の山行報告の後、冬山、スキー、春山合宿の一般的意義、日時、場所の説明。

佐藤、望月(敏)、高橋、鹿俣先輩、来部室

九月二十四日

「二十三日深夜、眠りにつかんとしていると、何者か数人戸をたたく。部員ではないらしい。何者ならん若し強盗だつたら、Udと二人でピツケルでも振りまわせば良かろう。窓を開ける。人相の悪い奴が二人、三人、四人まで顔をならべている。見たことない顔だ。いよいよピツケルのお世話になるかな、と思つていると帽子につけた一橋の山岳部のバツヂが眼に入る。なんだ先輩か、という訳で四人を中へ招じ入れる……。」

(Kage)

出席者十二名。

部の機構の明確化と新役員の決定、新旧役員の職務移動は漸時行う。

新役員

チーフリーダー	山本健一郎	
リーダー	中村保	
〃	甘利仁朗	
〃	南亮進	
〃	篠原敏弘	
マネージャー	柴崎新	

定期部員集会

十月十日　国立部室

出席者二十五名。

十月六日の特別集会の決定事項の発表、春山用荷上げの計画など。

一橋祭山岳部写真展

十一月三日―六日　三十四番教室

創立八十周年記念の一環として、山岳写真展を催すことに決定。四ツ切三十枚、カラーキヤビネ四枚、同手札四枚、パノラマ九組を展示。

特別集会

十月六日　国立部室

「連休を久しぶりに山で過そうと新宿駅でおちあつたが出る汽車、出る汽車鈴なりの超満員。致し方なく朝の一番で行く。」

(高橋)

月見の宴

十一月三日　国立部室

来訪者中川孫一、五十嵐数馬、矢作太郎、金田一郎、鈴木英雄、佐々木誠、佐藤政雄、松下順吉、石井左右平、関恒義、山崎拡、中村讃治、笠原広信、佐藤勇、横山晥一、中村正司、渋谷一郎、石原脩、白川隆夫の諸先輩。

先輩、学生とも多数のため一堂に会し切れない程の盛況であつた。

一橋祭後片附け

十一月七日

出席者十八名。

後片附けと、終了後ソフトボール試合、二千六百米リレー競争が後期ハンサムズ対前期バリアンズの間に行われた。後期の巧者ぶりと前期の若さが目立つた。

定期部員集会

十一月十四日

出席者二十四名。

富士山三ツ峠合宿の詳細発表、冬山合宿参加者調査、冬山、スキー合宿の各係の決定など。

富士、三峠合宿最終打合せ会

十一月二十一日　国立部室

出席者十九名

個人装備についての注意、雪崩についての研究発表（茂木）など。

定期部員集会

十一月二十八日　国立部室

出席者二十二名。

試験後の秋の山行報告、春山合宿、明神東稜、長七沢について報告（上原）など。

定期部員集会

十二月五日　国立部室

出席者二十四名。

針葉樹会忘年会の通知、スキー合宿の詳細発表など。

針葉樹会忘年会

十二月九日　如水会館

部長太田先生、先輩三十八名、学生十八名出席という大盛況であつた。

冬山合宿出発

先発隊（甘利、岡垣）は十二月十二日に、本隊（吉田以下四名）は十三日に、共に二十二時十五分新宿発。

スキー合宿出発

十二月十四日

佐薙以下九名、白馬栂池附近で雪崩に会い遭難す、のニュースに向う。

臨時召集

一月十三日

一月十二日甘利奥又白の柴崎宅に置く。部室でも部長太田先生と学校関係などの応対をする。

一月十四日

太田先生、上原と甘利宅へ出掛る（十時）。佐薙、中村(保)、十二時十五分の汽車で現地に向う。諸先輩及び関係方面からの問合せ頻々たり。

一月十五日

今までの情報を総合すると、甘利らのテントのあつた所にデブリがあり、雪崩があつたことは明らか。然るに、関西登高会の人々が相当近く（ほぼ同高度、水平距離約五百米）から呼ぶも応答なし。よつて遭難の可能性大なり。

十一時三十分、「甘利無事下山。」の報各方面に連絡。部員一同心からその無事を嬉ぶ。

の連絡本部を太田先生宅に置く。本部も本日で開散。明日から後仕末

定期部員集会

一月二十三日　国立部室

出席者十九名。

甘利事件経過報告、冬山報告及び反省、スキー合宿報告及び反省、春山合宿計画発表など。

前期臨時集会

一月二十五日　小平部室

出席者十七名。

春山合宿についての一般的注意、卒業生送別コンパについてなど。

白川先輩訪問さる

二月八日　国立部室

「月見の宴以来何ケ月振りかで訪問、を思い出す。

柴崎氏何やらセクセクして立ち去つたかと思つたら悪童山本が来て散々ワメク。一年前の毒舌の連続を聞かされて閉口。もう今はバリツとした紳士なのに——。〔書〕」

「仕事でこの附近まで来たついでなのでいつでもそうなんだがゲルが全然ない。早々と引き返さないと裸にされるかも知れ

ぬ。部室とはコワイものだ」。

春山合宿準備会

二月二十九日　国立部室

出席者十七名。

春山計画の詳細なる説明、参加人数の確定、個人山行記録の受取りなど。

卒業生送別コンパ

三月一日

「卒業コンパ、皆さんどうも有難うございました。九十パーセントぐらい卒業になる予定。だからずつとみんなの今日までの友情を信じて生きてゆくよ。山岳部はいつまでもぼくらの心のふるさとだ。どうもどうも。終電も近い。……」

（ＹＯＳ）

春山合宿最終打合せ会

三月十二日　国立部室

出席者十五名。

器具の割当など春山合宿も本当にすぐだ。卒業生からジュースの贈りもの来る。

春山合宿出発

三月十五日　山本以下七名が先発。四名が一日遅れて出発。

（白川）

昭和三十一年度

部　長　太田可夫先生

部　員　四年　チーフ・リーダー　山本健一郎

〃　リーダー　甘利仁朗

〃　〃　中村保

〃　〃　南亮進

〃　〃　篠原敏弘

マネージャー　中村幸正

〃　柴崎新

〃　春日井実

〃　吉沢貞一郎

三年　清水啓

記録係　岡悦郎

器具係　各務謙蔵

書具係　岡垣治雄

図　上原利夫

市畑進

加地幸雄

西海隼雄

一年	二年
丸子博之	宮川守久
菅井弘之	小林博
渡辺嘉佑	朝木慶司
岩見美法	茂木俊明
中野勝弘	大庭将六
川崎喬	塩川清彦
松木実	鈴木博武
宇田川徳治	沢木一夫
市川陽一	山田邦行
城戸剛	景山豪治

聴講生

四月十日（入学式当日）

早くも七名の新入部員獲得。

部員集会

四月十六日　於小平

出席者十三名、席層室でスライド、観衆約五〇名。

春山合宿反省会　於小平部室。

新入部員歓迎コンパ

四月十八日　部員十九名、新入部員十三名。

吉田先輩訪問さる

四月二十日　二十四日振りでやつて来た。部室のまわりが、

高峰教通
中西厳
小峰隆
大須賀広次
石井輝雄
安田惟行
江面誠二
鈴木健之
高山浩
牧田美智子

きれいな緑に変つている。気分のいい時だ。新入部員も多勢集つた由、山岳部のもついいところを早く見つけ出して、楽しいつき合いが出来る様、上級のものは、せいぜい気を使つてやられたし。

まだ昼休みの時間と思うが、部室には誰も見えない。コンパの残りものはいいが壁に張つてある汚い紙―行動計画表、部員集会表etc・―こんなものは早く貼り代えて気分を一新したらよかろう。これならやや新しい連中に気の毒だから。景気のよいポスターでも貼れ。

春山のスリップ事故はまことに不幸なことでした。問題は今後のことにある故、これについてはウヤムヤにしないで、何か結論を出して行くべきだ。春山反省会の予定はあるが反省会の経過は何も見当らないが……。

来る春山の計画はこの反省会から、出て来るのが本当であつて、それを切り離して考えるところからは又同じ失敗をくりかえす危険をはらんでいる。その点、来る春山については、その計画に当つて、現四年生は三年生に対して大きな責任をもつているものと考える。責任のがれだけはするな。

尚、この程度の事故については「外部に余りもらすな」はちよつと気の使いすぎなり。山の事故には時と場合により、そういう気を使わねばならんこともあるが、今度の場合なんかそんなことまで言う必要もないと思う。

反省をするだけしたらこれしきのことにへこたれるなというのが我々の気もち。実際、合宿の失敗は精神的にも決していいものぢやない。だからそれで精神的に参つちやうのは山男にしては弱すぎるというもの。

部生活、山登り、すべてあと味のよいものとなる様に、その時その時の暮しをやつて行くことが大切だ。一人一人がそういう心がけを常に持つていたい。中村（T）の杓子行きなど、その点で大いに讃辞を呈す。

明日は歓迎登山だそうだが、当日丁度こちらが大阪行きとは皮肉なことになりました。

五月連休の山にはせいぜい大いにけつぱつて楽しんで呉れ。そして金に困つた時はいつでも相談に来い。但し「相談」だけなり。

本日もう一度来る。十三時。

しばらく部室に御無沙汰するに当つて、太田先生にビフテキ、及びまぐろのさしみ、まことに御馳走様でした。（吉田）

新入部員歓迎登山

四月二十一日～二十二日。山本以下三十二名、うち新入部員

十五名。奥多摩カロー川遡行。

定期部員集会

五月七日　於部室　出席者二十二名。

谷川合宿計画。食糧係城戸、山田、器具係市畑、景山、沢木

本年度の役員発表。

五月の連休前後の個人山行報告

五月十四日　於部室　出席者　三十二名。

谷川合宿の件。参加人員内定　器具調査。

谷川合宿

五月二十四日～二十七日山本以下十九名。

部員集会

六月十一日　於部室　出席者二十八名。

夏山合宿概略説明と各係発表。七月十三日先発、十五日本隊出発～二十七日涸沢定着合宿その後(1)縦走(2)北岳へ。

針葉樹会の件。六月十五日五時半於如水会館日本間、出席予定者山本、各務、岡垣、上原、篠原。

針葉樹会

六月十五日　於如水会館日本間　出席者

中川孫一、五十嵐数馬、高見要、増山清太郎、小林重吉、望月達夫、岩崎利一、大塚武、山田亮三、根本大、松下順吉、関恒義、中村讃治、田中一雄、小川宜美、佐藤勇、横山晥一、中村正司、南昌宏、海老沢斉、高橋尚好、石原脩、白川隆夫、高崎治郎、松尾寛二、宮川次夫、鈴木克夫の諸先輩。

夏山合宿

七月十二日　T中以下五名先発。

七月十三日　山本以下二十七名出発。

吉田先輩訪問さる　七月二十七日みんなが合宿へ出たあとの部室は御多聞にもれず、めちやくちやに物が散らばつて、ちよつと足を踏み入れるのも相当の勇気がいる。涸沢にはとうとう四泊五日も居てしまつた。平地へかえつては又忙がしい。涸沢生活は既に学校を卒業してしまつた身には過分な程十分に楽しませて貰いました。山登りは四年間だけの道楽で終らせるには余りにももつたいない。上高地近辺を着流しで散歩している様な連中を見るにつけても同じ山をエンジョイするにも、その仕方によつて、その深みがどんなにちがうものであるかということをつくづく考えさせられた。我々は物見遊山ということとは全然ちがつた世界――どこまでも「攀じ登るものの仲間」でありたい。「夏の上高地はいやあね――山男が一つぱい居て……」なんていう女性があるという。人間の多情さと、山の非情さとをごつちやにすると山には攀じ登れない人間になつてしまうだ

ろう。山が賑やかになること、山岳部の活動とは殆んど、何の関係もない。時代の風潮に甘やかされないで我々が我々の道を行つているということを自覚できることは最大の喜びである筈だ。

「明日泣く」「わが心に君深く」……とか何とか相変らず呑ん兵衛がいろいろと悪さをしている様だ。△△君が千鳥足でこれをかついでやつて来る恰好は容易に想像できる。映画の看板はいくつ担いで来てもいいが、可さんの表札など失敬しない様気をつけろ。

山からかえつたら、部室の中と本棚でも整理して十一月までには青だたみでも入れて、心おきなくねそべれる様心がけておかれたいものです。

変装に大分手間取りそうなので、早々に部室を出る。五時半をちよつとまわつた。可さん宅の門もあかないので、このまま失礼するからよろしく伝えて下され度。この部室、鍵がないのでピツケルで窓をあけて入つた。

（吉田）

石原先輩訪問さる

八月五日　O・Bの山登りの一例

大分世話をかけました。有難う。山田さんも自分に残されている可能性を再認識したと見えて、来夏も又滝谷へ行つて、復讐戦をやると張り切つている。

只でさえ忙しいのに、四日間の閑を作るのは容易ではなかつた。出発の前日、前々日は夜九時過ぎまで残業を続け、フラフラの状態で涸沢に着いた。帰つた翌日からは貯つた仕事の整理で又々いとも沈痛な思いを味わう事となつた。

山は全くと云つて良い程変つていなかつた。それだけに登つている人間の変つている事が何故か印象に深く残つた。

天幕の中に入つたとたんに、少々のブランク等はすぐ消えて、その天幕の常住者であつた頃の自分に戻つている事を発見した時は、誠に嬉しかつた、そして常住者並みに振舞えなくなつている環境がうらめしくも感ぜられた。

矢張りO・Bは高見さんの様に小屋に泊るべきだろう。さもなくば、メンバーの一員として合宿日程の行動の中にそつくり入り込むべきだろう。

便宜上合宿を利用する事はO・Bとして遅けるべきであろう。又一～二年後に涸沢に帰つて来た時には、O・Bも更に数多く出かける様になつていると思われる。今度の体得から考えておかねばならない。

もう八時は過ぎたと思われる。蛾と金ブンに先刻より責められ続けで、書くのに支障を来して来た。

来週奥多摩へでも天幕をかついでブラッと行つてみようかと思つて来たのだが、小生の天幕がないので、A天幕を借りていく。大きすぎるので、行く人間をふやさねばならぬ。

須山先輩訪問さる

八月六日一年半振りに国立の森をポクポク歩いて部室へやつて来た。相変らず汚なくてカビ臭い。この匂を岳臭と云うには余りにも素気ない。とに角、変つていない部室を眺めて、またここに来たくなつた。多少変つたのは妙なポスターだ。北岳の面々と会えないのは残念。合宿の成功、部員諸氏の技術の向上、実に嬉しい。

ここ一年半、慣れない仕事に追いまくられてのんびりと山へも行けないでいるうち体力の消耗ひいてはファイトの減少、我ながら恥かしい次第。

合宿記録読んで気になること。下痢が多過ぎる様だ。食糧係は献立再検討の必要があると思うが。それとも調理法に関係があるのか（途中での大腸菌始めその他諸々の菌の混入か）兎にかくこの点とくに御検討あれ。

部誌を眺めているうち遅くなつたから帰ることにする。

(Suyama)

部員集会

九月十七日　於部室　出席者三十六名。

夏山合宿反省　合宿は団体の行動故、自分だけ別の行動をとることは謹むべし、二年、三年は出来るだけ岩場へ行けた。岩登りの登山の中に於ける位置付けについて、等。

夏休暇中個人山行報告　八ケ岳、白馬岳、キユウハ沢遡行、月山、伊吹山、吾妻、常念岳、北岳バットレス、蓮峠、六甲山、谷川岳、己ノ戸谷遡行、上高地、等仲々賑かなもの。

夏山定着合宿後行動報告　縦走班、北岳班

部員集会

九月二十四日　於部室　出席者三十名他、瀬田先輩。

十月以降の公式山行計画　十月中旬—三ツ峠、十一月—北岳荷上げと偵察、十一月—富士山、十二月—冬合宿（北岳バットレス）、一月五日—スキー合宿、三月—春合宿（猿倉合宿）。

月見の宴の件　十一月三日に決定。

部員証（バッヂ）交付の件。

月見の宴

十一月三日　於職員集会所　出席者　先輩十五名　部員多数

老若男女（？）が一堂に会し、楽しいひとときを過す。学生の知らぬ先輩諸氏のエピソードは大いに楽しませる。太田可夫先生先輩、中川孫一、矢作太郎、五十嵐数馬、村尾金二、森脇

芳之、岩崎利一、清水一郎、石井左右平、関恒義、伊藤恙生、中村讃治、小川宣美、横山晥一、荒砥通虎、吉田義則の諸先輩。

冬山合宿計画会

十一月六日　於部室　出席者十三名。

行動計画の具体的検討、食糧、器具荷上げ品確定、荷上げ十一月九日に決定、参加人員十名。

部員集会

十一月十九日　於部室　出席者三十名。

スキー合宿の件、スキー、靴の調査。

富士、三ツ峠合宿の件。

参加者二十名、期日二十二日～二十五日。

針葉樹会忘年会

十二月六日　出席者先輩二十二名　部員六名。

出席者（先輩）中川孫一、吉沢一郎、村尾金二、磯野計蔵、増山清太郎、高見要、鈴木英雄、堀岡清、小林重吉、森脇芳之、岩崎利一、大塚武、宮城恭一、佐野茂雄、山田亮三、松下順吉、石井左右平、関恒義、伊藤恙生、望月敏治、高橋尚好、石原脩の諸先輩。（学生）勝田一郎、甘利仁朗、春日井実、山本健一郎、岡垣治雄、中村幸正。

スキー合宿打合せ会

十二月十日　於部室。

食糧係―渡辺、器具係―山田（邦）。

服装などの点についての諸注意。連絡方法等。

横山先輩訪問さる

二月十三日　可さんを訪問するが不在。久しぶりに部室の戸を開ける。案外にきれいだ。名簿を一冊貰つて置く。ドアーを修理するとよいね。

（横山）

部員集会

二月二十二日　於部室　出席者二十八名。

本年度最後の総会である。

卒業生歓送コンパの件　三日四日午後四時　於若竹。

オリエンテーションの件　四月十二日　在京部員参集のこと。

春山合宿打合せの件　二月二十七日　出発は三月十二、三日

装備について若干の注意を与える。参加人員確定せず。

部費及び針葉樹会々費徴収を徹底させること

春山合宿出発

三月十三日、参加人員十八名のうち三名四年生。

昭和三十二年度

部　長

太田可夫先生

部員

四年　チーフ・リーダー　岡垣治雄
マネージャー　市畑進
マネージャー　上原利夫

三年　器具　係　沢木一夫　中村幸正　中村保　小林博
図書　係　山田邦行　西海隼雄　鈴木博武　塩川清彦　茂木俊明　宮川守久　加地幸雄
食料　係　宇田川徳治　城戸剛　市川陽一　景山豪治　大橋喜治　松木実

二年　渡辺嘉佑　小峰隆　江面誠二　峰高教通　丸子博之　安田惟行　中西厳　山元淑弘　中川滋夫　石弘光　大賀二郎　小林進二　中島寛　永井新也　山本尚禎　馬場佳一　仲田修　牧田美智子

一年　聴講生

部員集会

四月二十二日　各係決定。器具―沢木、図書―山田、食糧―

宇田川、マネージャー―景山、会計―市川。連休の山行計画発表、剣岳、八ケ岳など。

春山反省会

四月二十六日　出席十三名、設営技術ならびに幕営地選定についての反省あり。春山の失敗はこれにある様だ。松木氏の御父君なくなられる。

松木氏が剣に行っているうちにこの悲報が入つた。

部員集会

五月六日　出席二十四名、連休の山行報告、剣岳、白馬、北八ケ岳、南八ケ岳、谷川岳、蓼科。

五月十日

昨夜十三日目に大阪から帰京。剣からの帰り、大阪、名古屋を経由して来た。あのきたない姿で先輩を訪ねるのは少し気がひけたが、かえつて山のにおいのする方がいいと思つて強引に出かけた。案の状彼らは、このみじめな乞食に同情して、一宿一飯ならぬ、多くの恩義を受け、無事東京さ帰つて来ることが出来た。特に名古屋では帰りの急行券とわらじ銭までいただきありがたい次第だつた。

（Y中）

谷川岳合宿

五月二十三日　岡垣以下十八名出発。二十六日まで。

針葉樹会

五月二十九日　如水会館

出席者　中川孫一、吉沢一郎、村太郎、森健二、望月達夫、森脇芳之孝一郎、松下順吉、伊藤恙崎利一、佐野茂雄、清水一郎、久保小林重吉、佐々木誠、岩生、島影礼吉、田中一雄、望月敏治、小泉三好、石原脩、白川隆夫、高崎治郎、松尾寛二、山本健金二、近藤恒雄、増山清学生四名、各務謙蔵の諸先輩。

部員集会

六月十七日

出席二十八名　夏山合宿計画発表。食糧係城戸、器具市川、会計大橋。針葉樹会費徴収の件。

夏山合宿先発出発

七月十四日に市畑以下四名、翌日岡垣以下二十六名出発。後発六名。

山本先輩来部室

九月一日　八月も終つた。久しぶりに国立まで。門を入つたら何となく眺めが変つているので驚く。部室に足をはこぶ。案外きれいだつた。入社試験なんて忘れて一つ登りませんか。

（元師）

部員集会　九月十六日、出席二十九名。夏山合宿反省会。夏休み中の個人山行報告。T中氏らのグレポン初登攀の報告あり。

部員集会

十一月十一日　出席二十五名、一年の集合悪し。冬山合宿参加者決定。富士山合宿計画発表。スキー合宿計画発表。今年度は東北吾妻山附近で行うことに決定。山行報告。

部員集会

出席二十三名、スキー合宿及び冬山合宿の出発日を確定。前者は一月五日後者は十二月六日。

十二月十一日

冬山の連中が部室を去つてはや五日。全く早いもんだ。積雪に悩まされて苦労していることだろう。でも都会の雑音に煩わされ、俗事に狂奔しているよりはずつと幸福な筈だ。彼等は雪上にしばし憩いの時をもつて下界の我々の噂を口さがなく喋々しているだろう。

（市川）

小泉三好先輩訪門さる

十二月二十九日　冬山合宿ご苦労さん。U君から話は聞いた。素晴らしかつたろうな。羨しき次第なり。俺ももう一度くらい、せめて冬山を味わいたいと思つていたが、当分日本の山ともおさらばだ。

一月七日にSASにてカイロに行く。三年くらいは帰れない。せめてピラミツドでも登つて砂漠でも眺め、うさばらしをして来る。

SUMITOMO SHOJI KAISHA LTD
IMMOBILIA BLDG. FLAT NO. 662 6THFLOOR 26
SHERIF PASHA STREET. CAIRO. EGYPT

に居るから、精々山の話など知らせてくれ。寄附金は俺のWife の居る所〇〇〇〇〇に請求してくれ。Wife も一年たつたら俺のソバにやつてくるので、それ以後の寄附は帰つてから払うよ。

久し振りに来た部室のにおいがなつかしい。冬山合宿の有様が想像される。

可さん所で一杯やつていたら、はからずも鹿俣に会つた。山の話などひとしきり。これも最後かと思うと感無量。この年をしてえらいオセンチになつたのも、部室のにおいをかいだからこそか。

とにかく元気にやつてくれ給え。カイロから諸君の健康を遠く祈つている。

（小泉）

スキー合宿出発

一月五日　加地以下十五名、吾妻山に向つて出発。

部員集会

一月二十日　スキー合宿報告と反省会。個人山行報告。

定期部員集会

一月二十七日　出席者十二名。春山合宿について具体的計画の発表と説明。出発は三月十三日の予定。

二月二十一日

甘利仁朗七年生北岳バットレス中央稜積雪期初登に成功、快適なクライミングだつたとのこと。

卒業生追出コンパ

二月二十八日　若竹にて。

春山合宿出発

三月十二日　沢木以下十二名出発。

三月二十六日

バツタリAmaさんに出会う。山岳部諸兄、一人残らず学士試験なるものに合格していた。これで二十八日にはごつそりと部室から姿を消してしまうことになる。私もその一人。皆さん元気に力一杯山に登つて下さい。私などいい加減に登つていたようなので、今になつて少し残念がつています。しかしこれからは心を入れかえて積極的に登る積りです。（Ue）

昭和三十三年度

部長		
部員	四年	チーフ・リーダー　太田可夫先生
		マネージャー　沢木一夫
		山田邦行
		城戸剛
		景山豪治
		宇田川徳治
		市川陽一
		大橋喜治
		渡辺嘉佑
		峰高教通
		小峰隆
	三年	器具係　江面誠二
		図書係　中西厳
		マネージャー　丸子博之
		記録係　安田惟行
		大橋一慶
		山元淑弘
		中川滋夫
	二年	

一年

中島寛
石弘光
山本尚禎
永井新也
小林進二
大賀二郎
小林正直
三股宏
有賀盈
倉知敬
大建二郎
三井博
朝木大統
宮本英治

新入部員歓迎コンパ

四月十七日　総数二十六名。部室で大いに騒ぐ。

新人歓迎山行

四月二十日　愛鷹山行計画について。小窓尾根、奥又白、白馬、北岳行のプラン。参加者二十名。うち新人七人。

定期集会

四月二十一日　国立部室にて。出席者二十三名。五月連休の山行報告、谷川岳合宿の計画の説明。

佐々木誠先輩よりストーブ寄贈さる

四月二十三日可さん所に送ってこられた。先輩のストーブならぬ暖い心差に感謝。

定期集会

五月十二日　国立部室にて　奥又白、後立山、谷川、白馬、八ケ岳、小窓尾根、丹沢、笠ケ岳など連休の山行報告、谷川岳合宿の計画の説明。

国立部室大掃除

五月十三、十四日　沢木リーダー指揮のもとに二日がかりでやる。

部室の掃除といえば、よくその直後に先輩が来られて、きれいだとおほめの言葉を頂戴することがある、がこの時ばかりは先日の石原先輩のお叱りで全員奪起したもの。

谷川岳合宿

五月二十二～二十五日　沢木以下二十名参加。

定期集会

六月二日　国立部室にて　出席者二十名

夏山（涸沢）合宿について説明谷川岳合宿反省会丹沢、三ツ

峠、剣の山行報告その後、グランドに飛び出してソフトボールに興ずる。

前期バーバリアンズ　0　1　0　1　3=5
後期ハンサムズ　7　5　2　3　0=17

佐薙先輩来室

六月七日　久しぶりに部室のタタミの上に横になろうと思つてやつて来た。国立に来たのは一昨年の月見の宴の時だから一年半ぶりだ。部室がでかくなつたのと、タタミが新しくなつたのと、よく整頓されているのには驚いた。それにあのカビ臭さいにおいもなくなつてしまつたな。

この部誌に出てくる名前も、もう大半知らない奴ばかりだが、とにかく元気で、無事故でやつている様子、大したもんだ。

俺も社会人三年生。だんだん使いもんにならなくなつていくが、それでも張切つているつもり。このところ毎週日曜日、鈴鹿の御在所の岩場にとつついている。来週の日曜には名古屋からオレと岡垣、大阪から吉田、Yと上原を呼び寄せて、ザイル祭りとしやれこむ予定。今度の出張旅費を何とか浮かせて、四十米ザイルを買うつもり。

求ボツカ高給！

何しろ我々サラリーマンは日数の制約があるので、入山、下山はできるだけ簡単にやりたい。たとえば「×月×日までに奥又白の池にテントを張り、米×升、味噌、etc×貫を荷上げする」というようなアルバイトをやつてくれる現役さんはいませんか？

（佐薙）

野郎会コンパ

六月八日　国立部室にて　前期祭の成果を祝して気勢をあげる。全く愉快な今後に意義ある一夜を過す。

針葉樹会

六月二十二日　如水会館にて　出席者　中川孫一、村尾金二、近藤恒雄、手塚晴雄、増山清太郎、高見要、小林重吉、望月達夫、佐々木誠、大塚武、清水一郎、山田亮三、高野秀男、石井左右平、伊藤恙生、小川宜美、横山晥一、海老沢斉、高橋尚好、宮川立三、石原脩、甘利仁朗、春日井実、山本健一郎、中村保、篠原敏弘、各務謙蔵、西海隼雄、宮川守久、茂木俊明、塩川清彦、鈴木博武の諸先輩。

夏山合宿

七月十二日　沢木以下二十八名が昨晩の先発四名を追つて離京。

吉田義則先輩来室

八月二十日　久しぶりで部室に泊つた。「部臭」もいつに変らず、自分の気持も昔に帰る。自分の住居以外でこんなat homeな気分になれるところは他にあるだろうか。

昨晩は石原、白川両御大初め十数人、何しろ大変なハシゴだつた。

部室に来て最近の部誌をすみからすみまで読んで、寝たのは何時頃だつたろうか。

今晩南竹と谷川に出かけることになつている。

今の山岳部員は、その辺に穴を掘つて焼イモなどをしなくなつたそうな。大いにトグロを巻いて、ここでの生活を楽しむことだな。部室は決して事務所というだけではないからね。

きちんと片づいた部室はとも気持がいい。が年がら年中片づいてばかりいても困る。

六月の中頃、大阪、名古屋のO・B合同で、鈴鹿で落合つて一日御在所岩場でトレーニングをやつた。これからも二月に一ぺんぐらいづつやつて行こうと思う。

（吉田）

定期集会

九月十五日　夏山合宿反省会、詳細にわたつて反省の意見がでた。冬、春山の荷上げ計画発表。夏休暇中の山行報告。

十月六日冬、春山荷上げ山行計画。新入部員紹介、朝木大統（一年）。本年卒業された朝木慶司先輩の弟さん。言葉づかい、身のこなしがそつくりなのに驚く。マイナー・ムッシュ。

十月二十八日

佐々木誠先輩寄贈のストーブをとりつけ、早速たきつける。すごく燃えがいい。一同大喜び。これで二月の試験は大丈夫。それにしてもこう林に囲まれた部室も薪不足を今更に感ずる。

涸沢や剣沢並だ。

月見の宴

十一月三日　雨のためか出席された先輩は少なく、村尾金二、渡辺九郎、石原脩、甘利仁朗、高崎治郎、の諸先輩のみ。

太田可夫先生部長辞任

十一月四日零時二十分　いろいろありがとうございました。部長を辞任します。くだらぬことをときどきしやべつてすみませんでした。みんなの若さに期待しています。

富士山合宿

十一月二十一～二十三日　渡辺以下十七名が参加。ここ三年間の合宿を通じて一番寒かつた。

三伏小屋の件

十一月某日　十月中旬冬山合宿荷上げのために三伏小屋を使

用したことから、その直後起つた三伏小屋の閉じられた物置小屋破壊と備品の盗失についてぼくたちは疑をかけられた。小屋所有者から非難の言葉と合宿時の小屋使用を禁じる旨の手紙を受取つた。勿論ぼくたちではない。はつきりと小屋所有者平瀬氏には潔白を表明しておいた。

定期集会

十二月八日冬合宿の最終打合せとスキー合宿の具体的計画。

冬山合宿出発

十二月十日沢木以下十一名が参加。

石原脩先輩来室

十二月二十八日　穂高岳でO・B合宿十三名参加。

スキー合宿出発

一月五日渡辺以下十一名が参加。吾妻山の合宿も二回目を迎える。

岡垣治雄先輩来室

二月十四日　名古屋からの出張、わづかの暇を、ぎつちりつまつた日程からみつけて国立へやつてきたとのこと。土曜日のことて誰も会えなかつた。

「決して「山屋」にならないでほしい。山男である前に学生であることを忘れないでほしい」。

（岡垣）―抜萃―

卒業生追出コンパ

三月四日　若竹にて　卒業予定者は沢木、山田、宇田川、大橋の四人が出席。

春山合宿出発

三月八日渡辺以下十四名が参加、上野発「北陸」で雪の世界へ発つ。

昭和三十四年度

部　長	（十一月三日就）	関　恒義先生
部　員	四年　チーフ・リーダー	渡辺嘉佑
	図書係（九月まで）	峰高教通
	マネージャー（九月まで）	小峰　隆
	記録係（九月まで）	江面誠二
		丸子博之
		大橋一慶
		中西　厳
		安田惟行
		山元淑弘
		中川滋夫
	三年　器具係	中島　寛

図書係（九月より）　小林進二

記録係（九月より）　大賀二郎

マネージャー（九月より）　石弘光

二年　永井新也　小林正直　三股宏　有賀盈　倉知敬　大建二郎　三井博　朝木大統　遠藤晶土　宮本英治　黒川信幸　臼井弘　多田伸治　高橋信成

一年　小林尚禎

新入部員歓迎コンパ

四月十六日　国立部室にて新人も現部員も集りが悪かつた。

新人歓迎登山

四月十九日入笠山。渡辺以下二十二名参加、内新人九人。O・Bの南（亮）さんも参加。快晴に恵まれて幸先きよいスタート。

定期集会

四月二十日　国立部室にて出席者二十四名。春山合宿の反省会と針葉樹編集委員決定、峰高、江面、大賀、山本、倉知の五人。

石原先輩来室

四月二十六日　奥野綱重先輩が御逝去された由。勤務先の山の会で新人歓迎登山をやるとのこと。

最近O・B仲間でよく山に行くようになつた。今冬、名古屋の佐薙がO・B合宿でいつていたが、「誰と登つても、どうも精神的歯車がかみ合わない。O・B合宿はよい。何故かというに、俺が冗談を云えばすぐ笑つてくれる。」というように、やはり本命はO・Bとの山行であつた。（石原）

定期集会

四月二十七日　国立部室にて出席者二十一名。連休の山行計画発表、剣岳偵察（来年の春山合宿のため）、前期を主体とした一、二年の親睦登山八ケ岳縦走。今年度の各係決定。過去

四年間集めてきた山行記録が昨年末紛失、依然行方がわからないので新たに集めること。

定期集会

五月十一日国立部室にて出席者二十一名。連休の山行報告と谷川岳合宿計画の説明と係の決定。

針葉樹会

五月十三日　如水会館にて　出席者　五十嵐数馬、吉沢一郎、松木謙三、金田一郎、手塚晴雄、鈴木英雄、増山清太郎、中島孚・望月達夫、大塚武、日江井正己、島影礼吉、森安久、望月敏治、横山晄一、中村正司、南昌宏、海老沢斉、石原脩、高崎治郎、宮川次夫、春日井実、篠原敏弘、各務謙蔵、山本健一郎宮川守久、塩川清彦、朝木慶司、中村保、宇田川徳治、沢木一夫、城戸剛、景山豪治の諸先輩。学生　渡辺嘉佑、峰高教通、小峰隆、江面誠二、中川滋夫

奥野綱重氏逝去の件、故山中氏遭難碑の件。

谷川岳合宿

五月二十二～二十四日　渡辺以下二十三名参加。

前期祭

六月五日　山岳部も参加、写真展、カラースライド、山の器具展示。ヨーデルのレコードをかけながら行う。写真は好評。

泥棒、国立部室訪問

六月二十四日　白昼の出来事。夜の訪問はひんぱんに試みられるようだが、真昼間の訪問ははじめて。大切な器具は盗まれることはないが、何を持出すかわからないので対策をこうじることにした。一人づつ夜番することになつた。

夏山合宿

七月十三日　昨日の先発四人に続いて、渡辺以下二十二名剣に向う。

吉田義則先輩来室

八月十八日　まる一年ぶりに部室を訪れた。国立の森だけは、いつに変らぬ同じ匂がただよつていて懐かしい。可さんにも久しぶりでお会いしたが、奥さん共々いつも暖かく迎えて下さるのは何よりも有がたいことだ。

穂高に行く積りだつたが、先日の台風で鉄道が寸断、計画を放棄し名古屋で佐薙、鈴木、西村、岡垣の諸兄と一晩飲んで、その足で東京にやつて来た。

大阪では、先日M中さんが来られたので、歓迎パーテイをやりました。大阪もO・Bの連中で賑やかになつたから、みんなも機会のある時はぜひ寄つて行つて欲しいものです。（吉田）

定期集会

九月十四日　国立部室にて　出席者十七名。冬山合宿計画の説明と食料係決定。次期リーダーに中川滋夫を指名。

故山中先輩遭難碑建立（谷川岳マチガ沢）

九月十二～十四日　マチガ沢と畝剛新道との出合に指導標の形で建てる。高さ百六十センチ。十日に銅板をはめ込む予定。

参加者　O・B＝望月敏治、石原脩、高崎治郎、山本健一郎、篠原敏弘の諸先輩。現役＝小林進二、永井新也、有賀盈

次期役員決定

九月二十一日リーダー中川滋夫（前出）サブ・リーダー中島寛　マネージャー石弘光　食料係有賀盈　器具係山本尚禎　記録係大賀二郎　図書係小林進二　出席者十七名（四年部員は出席せず）

国立部室では二十二日より前日の十七時から翌日の七時まで宿直を実行することになり、その順番が決められた。

四年生全員就職先決定

十月十日　四年生九人、すらすらと採用決定。安心して岳道にはげむことができる。

早速冬山の荷上げ山行に参加。

滝谷遭難東大山岳部員捜索と遺体収容作業参加

十月十九～二十一日　冬山荷上げ後、涸沢で岩登りを楽しんでいる時、このアクシデントに出くわし、全員協力して参加。

参加者　峰高教通、小峰隆、大賀二郎、山本尚禎、小林進二、三股宏、小林正直、倉知敬、大建二郎、丸子博之

故山中健雄先輩遭難碑除幕式（谷川岳マチガ沢）

十月二十五日　家族の方、望月敏治先輩や多数の先輩と学生が参加して行われる。学生は渡辺嘉佑、永井新也。

定期集会

十月二十六日　国立部室にて　出席者二十二名。東大山岳部員遭難救助と遺体収容作業報告とわが部におけるありかたについての話合、冬山荷上げ山行の反省、谷川岳除幕式参列報告、春山合宿（剣岳）荷上げ計画の説明。

月見の宴

十一月三日　国立部室にて　出席者　中川孫一、関恒義、横山晥一、高崎治郎、山本健一郎、山田邦行、景山豪治の諸先輩。学生多数。部室と太田先生宅を往復して賑やかに時間を過す。

関恒義先生部長に就任さる

十一月三日　月見の宴にて御承諾していただいた。

富士山合宿

十一月二十――二十二日　中川以下十三名が参加。年毎に人

が増え服装がハデになつていく。

十一月二十六日

この日如水会館で三十一年卒高崎治郎先輩が華燭の宴をあげられ、全国各地から同期の人たちがかけつけて前途祝福された。

松尾先輩来室

山に登らないでも部生活は続いている（松尾寛二）

高崎先輩御夫妻来室

十一月二十九日

仲人さん（太田先生）にご挨拶の帰りに寄りました。祝電を戴きありがとうございました。オーシヨン会会員が、大阪からY中、吉田、名古屋から佐薙、鈴木がわざわざ臨席、全く感激でした。部誌が大いに繁昌して喜ばしいことです。今夜は遅いので読めないのが残念です。先ずは御礼まで。（南竹）

新婚旅行のお土産を頂戴した。奥さんに何か書いていただこうと思つたが失敗しました。

定期集会

十一月三十日　国立部室にて　出席者二十名。冬山合宿打合せ。スキー合宿計画立案。

冬山合宿出発

十二月六日　渡辺以下十二名燕に向う。

故奥野綱重先輩遺品の図書寄贈さる

十二月二十七日　奥野厳根先輩が送つて下さつたもの。針葉樹二～十一号、会報、その他簡単に手に入らない貴重な本です。約三十冊。

須山先輩来室

十二月二十七日　正月に塩見岳でO・B合宿を行う、総勢七名。名古屋の奥野から小包が届いている。彼の親爺さんの貴品の図書だと思うが、保管には充分注意して欲しい。

スキー合宿

一月五日吾妻山での三回目のスキー合宿。小林（進）以下十二名が参加。

卒業生追出コンパ

二月二十九日　若竹にて　卒業生は渡辺、小峰、江面、峰高、丸子、中西、大橋の七人が参加。

春山合宿出発

三月六日　中川以下十二名が参加。剣岳早月尾根に向う。

讃山賦

松崎武雄氏作詞

一、紫の雲揺らめけば　白銀を射るや金箭
おごそかに山鳴り渡り
霊香の四方に薫じて
山々は今明けんとす　君見ずや東の空を

二、大聖の世を呼ぶ如　山神は炬火をかざして
物皆の生命の上に
悠久の光と熱を
教ゆなりいざ市去りて　荘厳の山におろがめ

三、岩桔梗黒百合咲ける　花園を包む山霧
這松の陰より陰を
おおらかに遊ぶ雷鳥
若人は六根精浄　唱えつつ双手振るなり

四、鳴呼山は我が行く殿堂　鳴呼山は我が住む宮廷
煩悩も邪悪も忘れ
法悦と歓喜に満ちて
山籟を遠く聞くとき　現なくゑまいするかな

一橋山男の歌

氷雨さらさら降ろうとままよ
私や一橋のあら山男

恋もしように燕岳よ
胸の柔毛のあら乙女雪

梓川なら流しもしよが
主へたよりのあらはずかしや

流れ日ざしの大喰越えて
よよい夜道をあら尾根伝い

ここは徳本穂高よさらば
泣いておりましよあら島々へ

お山下ればいばらがとめる
いばら放しやれあら日が暮れる

編輯後記

先ず最初に一言おわびしておきたい。

十二号の編輯は十一号の発行と共に始められ原稿が集められていたのだが、昭和三十三年十二月の合宿の間に、部室に保管されていたそれらの原稿が紛失してしまつた。従つてはじめから出直すことになり、原稿を残して卒業された先輩諸兄に大変ご迷惑をおかけした。二年がかりで原稿をどうにか集めたものの、記録、記憶の喪失で、三十年度三十二年度の合宿記録は不完全なものになつた。また、個人山行記録にしても、本号に掲載してあるものがすべてではなく、原稿をもらえなかつたのでお伴もしたことがないが他の山の本を読んでいて経験しえないものがある。

一橋山岳部の伝統というのか、先輩の血が現役部員の体内を流れているとでもいえようか。

もし何年か後に、現役が本号を読んでこういうことを感じてくれたら幸せである。

おわりに、本号のためにお世話になつた先輩特に編輯印刷の方で指示をいただいた望月・高崎両先輩に深く感謝し、わが山岳部の発展を祈つてやまない。

（峰高）

編輯委員　峰高教通　大賀二郎　山本尚禎　倉知敬

山脈の研究報告等も掲載できる程、落ちついた内容を盛ることができた。

山小屋の項は、記録に表われない私たちの生活の一面を伝えるものである。部誌の項では、部室に訪問された先輩のことを出来るだけ掲載し、卒業後も部生活が続いていることを伝えたかつた。

過去の針葉樹を読んでいると、ふと自然に何か想い出すかのように感激したり、吹き出したりすることがたびたびある。その記録を書かれた先輩とは一度もお話したこともなく、山行のお伴もしたことがないが他の山の本を読んでいて経験しえないものがある。

一橋山岳部の伝統というのか、先輩の血が現役部員の体内を流れているとでもいえようか。

もし何年か後に、現役が本号を読んでこういうことを感じてくれたら幸せである。

おわりに、本号のためにお世話になつた先輩特に編輯印刷の方で指示をいただいた望月・高崎両先輩に深く感謝し、わが山岳部の発展を祈つてやまない。

（峰高）

編輯委員　峰高教通　大賀二郎　山本尚禎　倉知敬

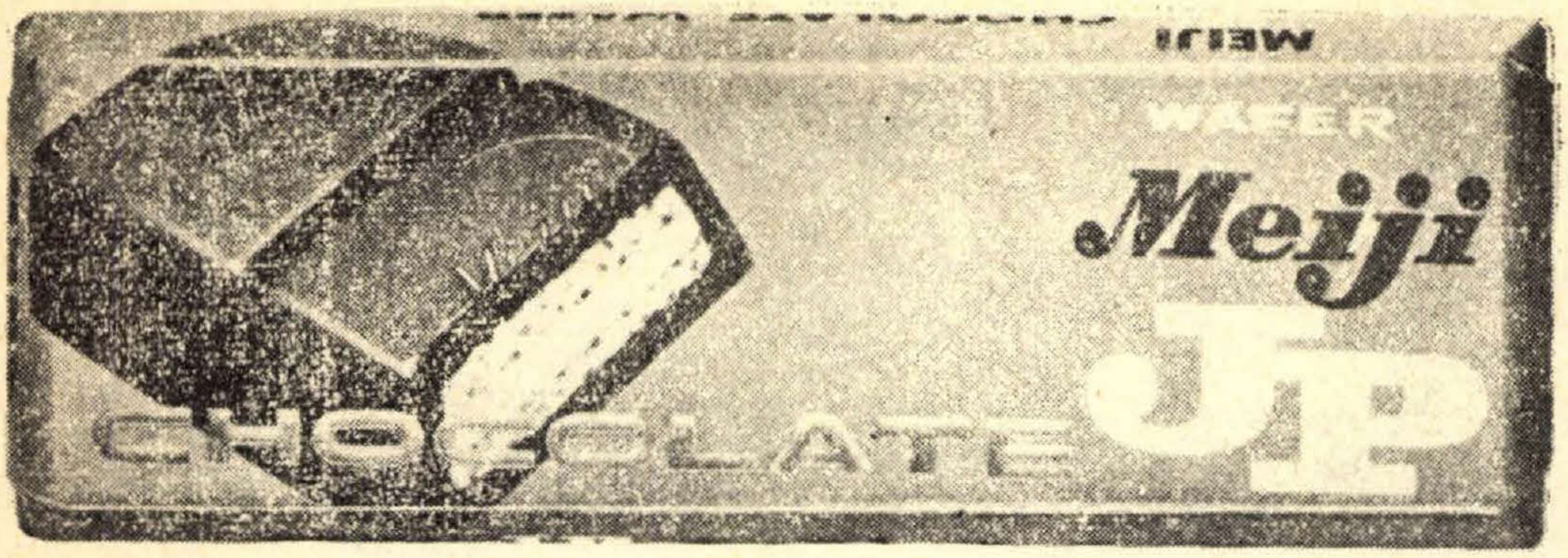
昭和三十五年七月二十日印刷
昭和三十五年七月二十五日発行

No.

発行者　東京都北多摩郡国立町一橋山岳部内
中川滋夫

印刷所　東京都新宿区荒木町四
三盛印刷株式会社

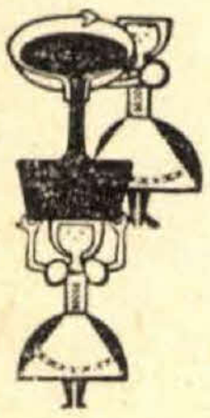
発行所　東京都北多摩郡国立町一橋大学内
一橋山岳部
電話　国立五七番(呼出)



明治 JP チョコレート

ジェーピー

30円・50円



もうひとつ おいしさが つまってる！

あつい板チョコの中に いろいろな味が つまってる
日本ではじめての チョコレートです

●オレンジ ●パイナップル ●ウェハー ●ビスケット ●アーモンド ●ヘーゼルナッツ



MyLac

いつでも
いちばん
いいものを

明治屋濃縮マイジュース又はマイコーラ
マイラック一本ごとに豪華賞品が当たる
抽せん券が入っています。くわしくは明
治屋の他有名食品店・デパートで

500ml ¥330.

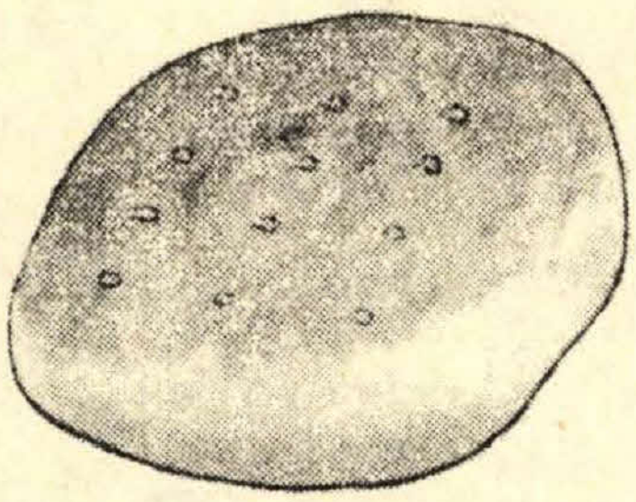
▲明治屋 濃縮 フルーツミルク

マイラック

オレンジ

栄養豊富

ミルクパン



豊富な蛋白質とカルシウム入

劃期的な携帯食糧
登山に最適!!

風月堂食品工業株式会社

味噌醤油醸造元
株式会社 清水井商店

東京都江東区深川石島町三番地
電話深川局（641）八二七六—八番

東京製綱の

赤線入 ザイル

マニラ・ナイロン・テトロン

東京製綱株式会社

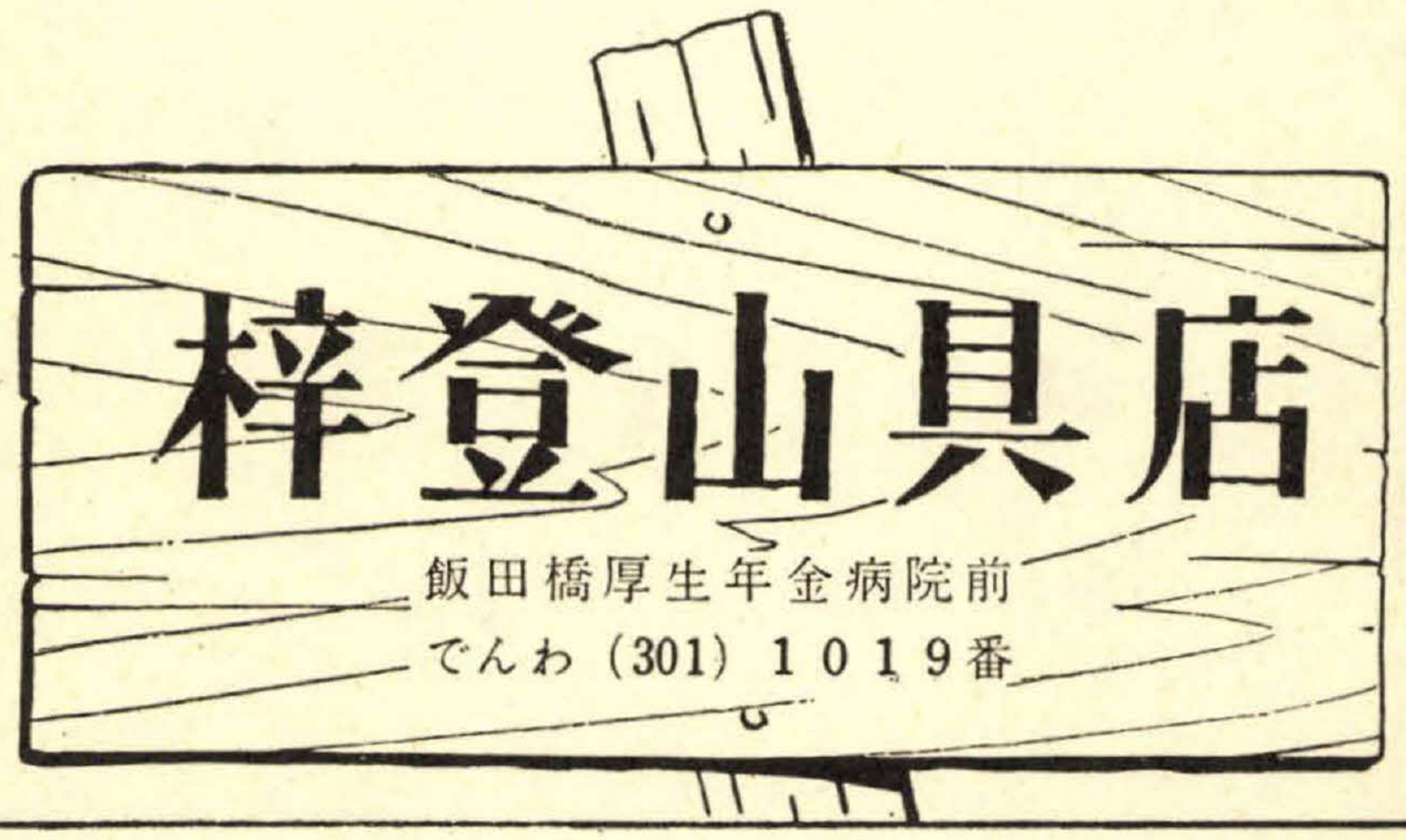
東京都中央区日本橋室町2丁目8番地
電話 211局 2851番（代表）

モデルR.C.C.ピッケル・アイゼン

カネカロン・シュラフ

カネカロン・登山用ソックス

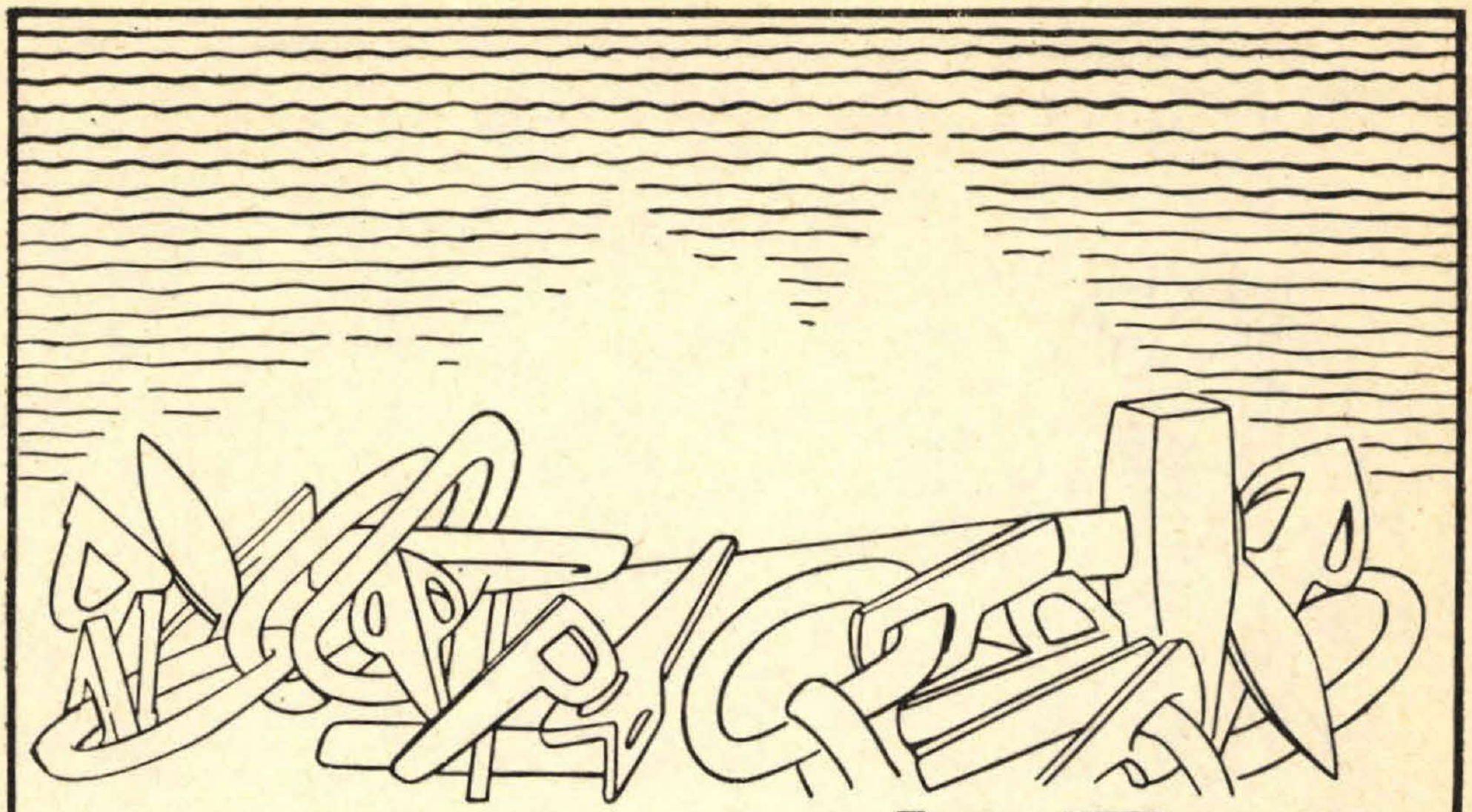
クレッターシューズ



梓登山具店

飯田橋厚生年金病院前

でんわ（301）1019番



専門店
上野広小路

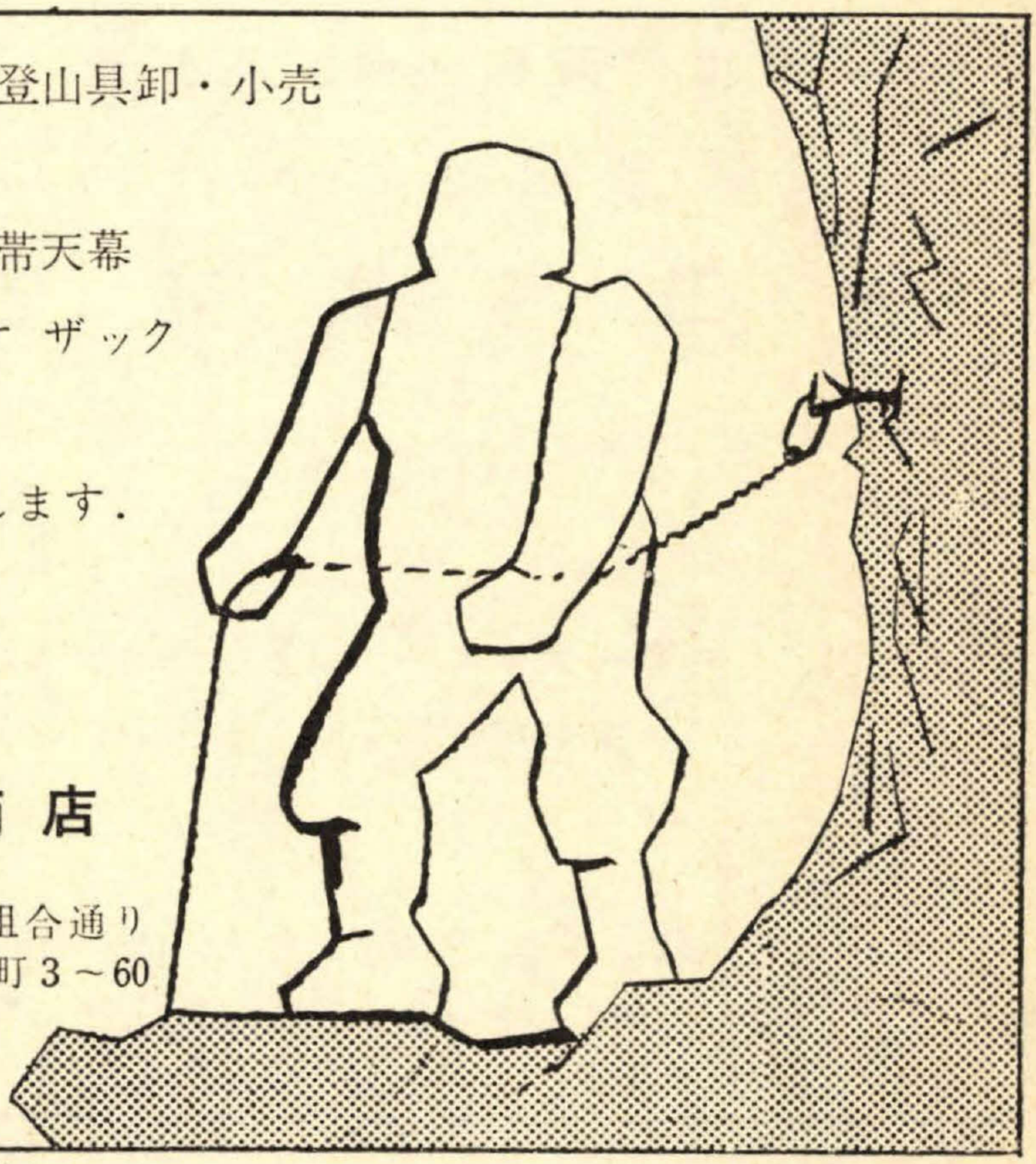
ホープ

サービスステーション

HOPE

台東区西黒門町５６　ＴＥＬ（831）４３６２

米軍放出衣料・登山具卸・小売
皮製品一式
登山具寝袋・携帯天幕
ポンチョ ヤッケ ザック
登山靴
学生優待致します.



㊗ 丸宮商店

上野第一商業協同組合通り
東京都台東区仲御徒町３～60
ＴＥＬ 831－2443

ぎんざへおこしのせつはぜひおたちよりください



Mountaineering

and

Skiing Goods

東京都中央区銀座1－6

でんわ（561）0375

K2

登山用天幕・縫製品製造

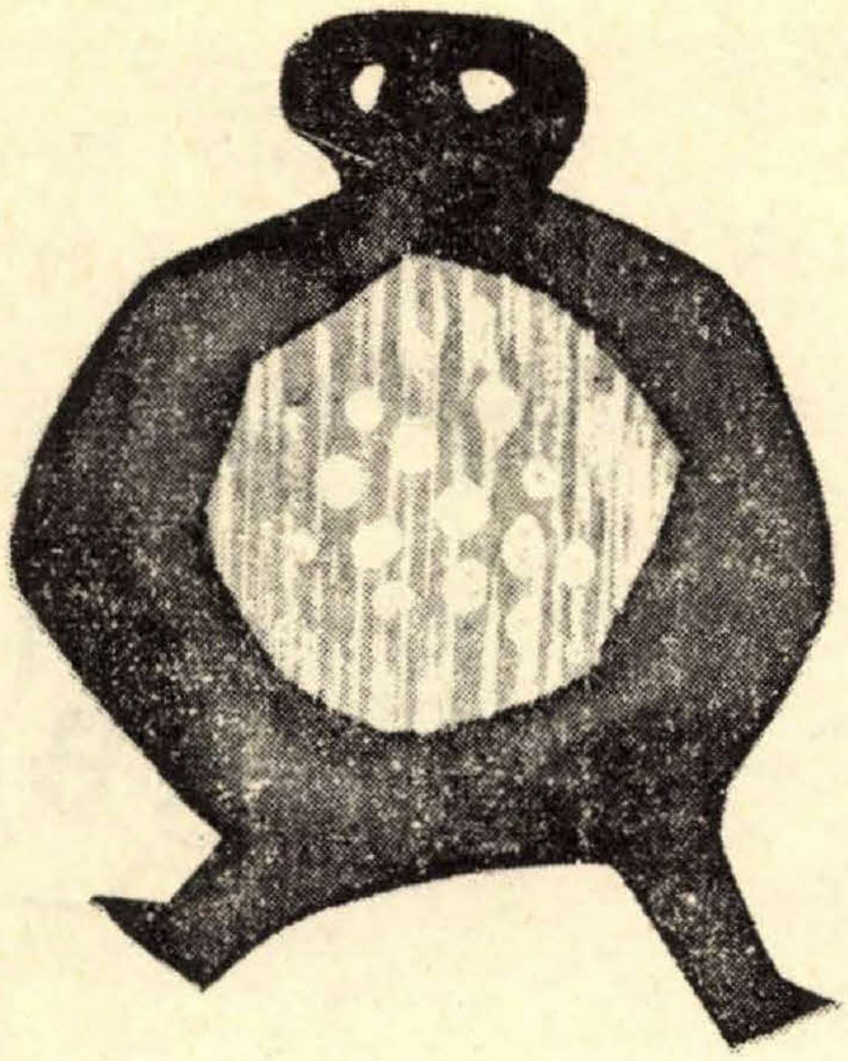
吉田テント

吉田喜義商店

東京都杉並区中通り町1番地　TEL（398）2548番

第一次マナルス以来海外遠征隊に
いつもお供している吉田のテント

尚、当店の営業所及作業所は上記以外
の所にはありませんから御注意下さい。

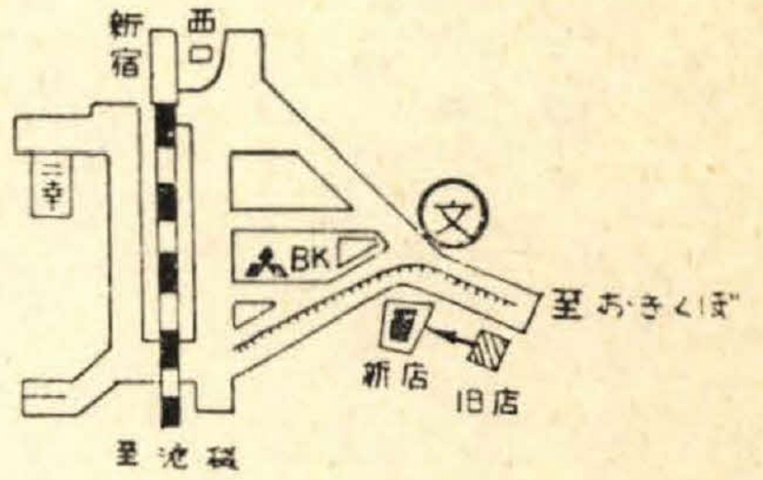


スキーと山の専門店

山幸

東京しんじゅく柏木一の九大

電（361）6269





登山とスキーの

日本最古の

専門店

好日山荘

東京店 海野治良
東京都中央区銀座西2~5
電話（561）3600
振替東京113657

大阪店 西岡一雄
大阪市北区老松町3の12
日新ビル1階
電話（34）7745
振替大阪68763

神戸店 島田直之助
神戸市生田区三宮町1の31の1
電話（3）7745
振替 21352

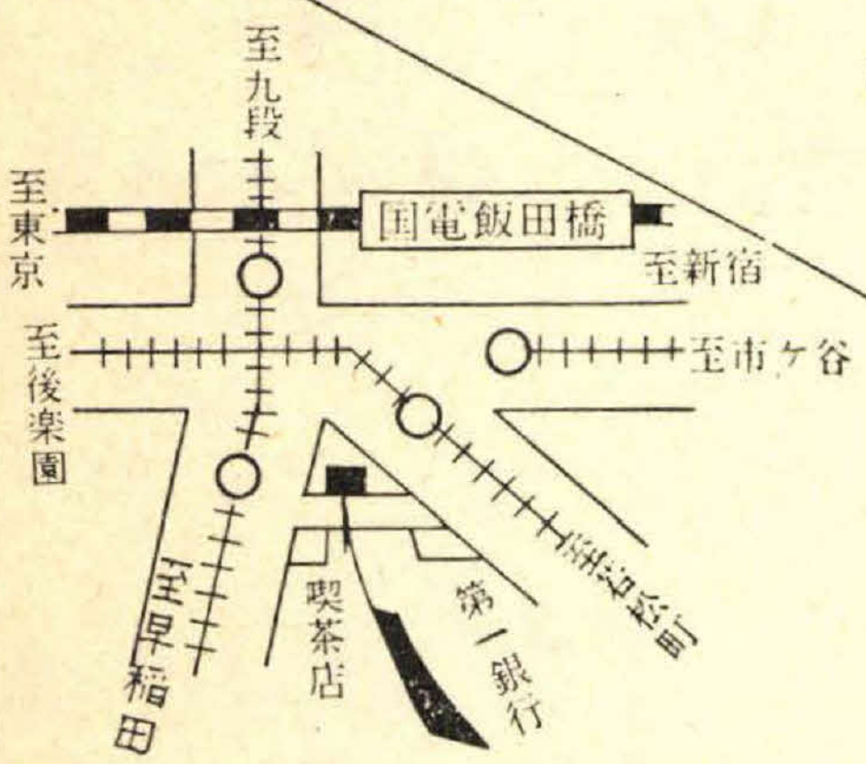
福岡店
福岡市大名町
電話（5）2990

一度お寄りになってごらん下さい

自家製、登山靴、春山用品全般、外国製ピッケル、アイゼン各種、舶来石油、ガソリンコンロ特別販売、ビバークシュラフ、越中輪カンヂキカネカロンシュラフ、薄刃ハーケン埋込ボルト

フカザワ

B.B.B

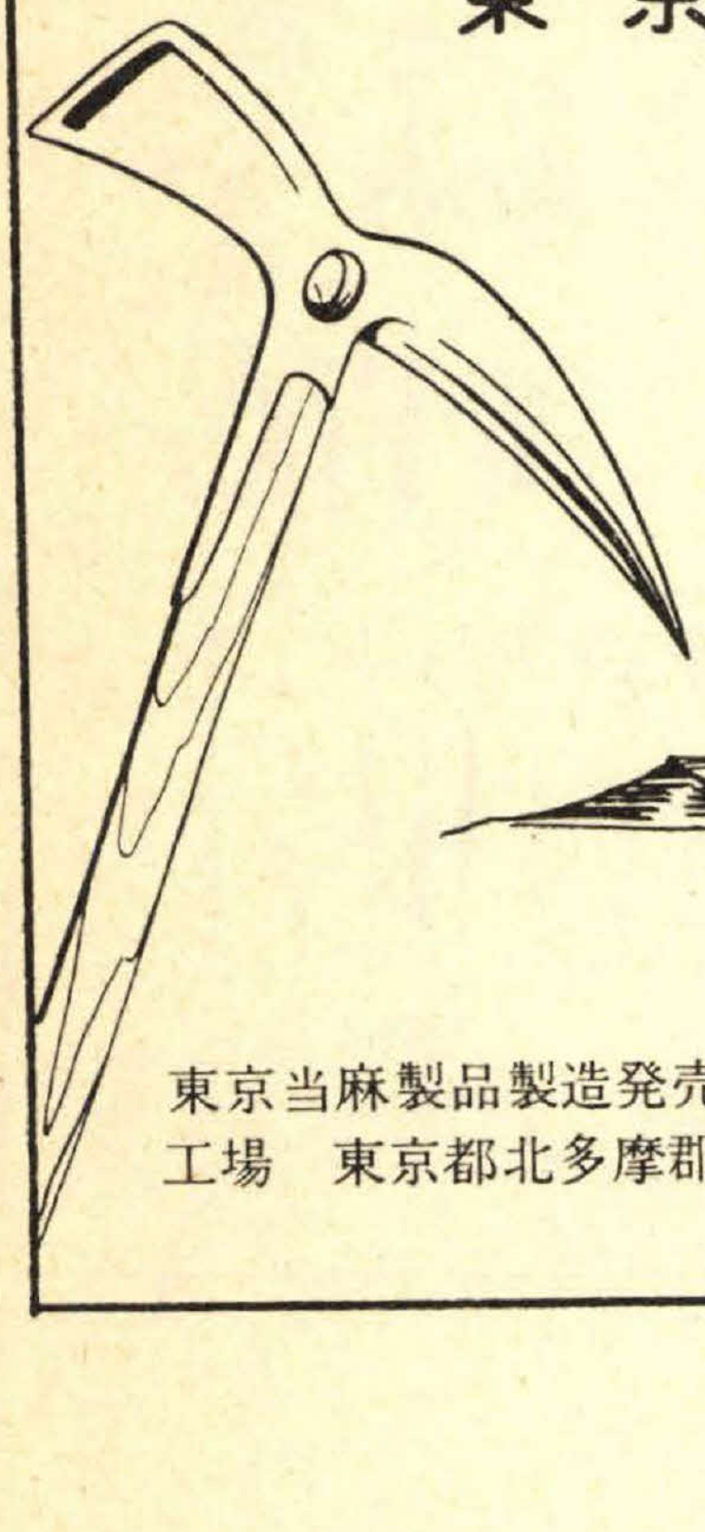


東京都新宿区下宮比町1番地　TEL (331) 0751
国電・飯田橋駅前五俣交叉点際
都電・飯田橋停留所前

東京 TŌMAの

ピッケル・アイゼン

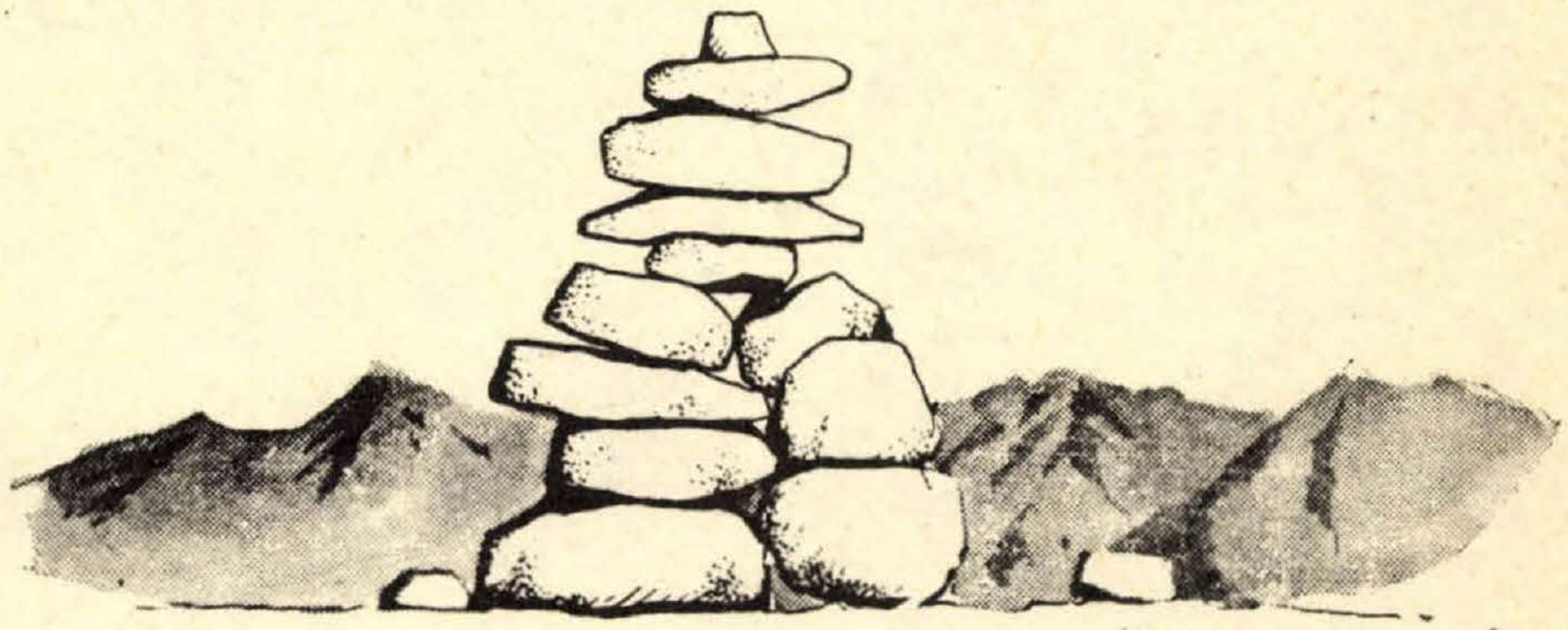
マナルス
京大パミール
遠征隊使用





東京当麻製品製造発売元　有限会社　森田運動具店　登山用具一式
工場　東京都北多摩郡東村山町久米川1.51　TEL東村山202

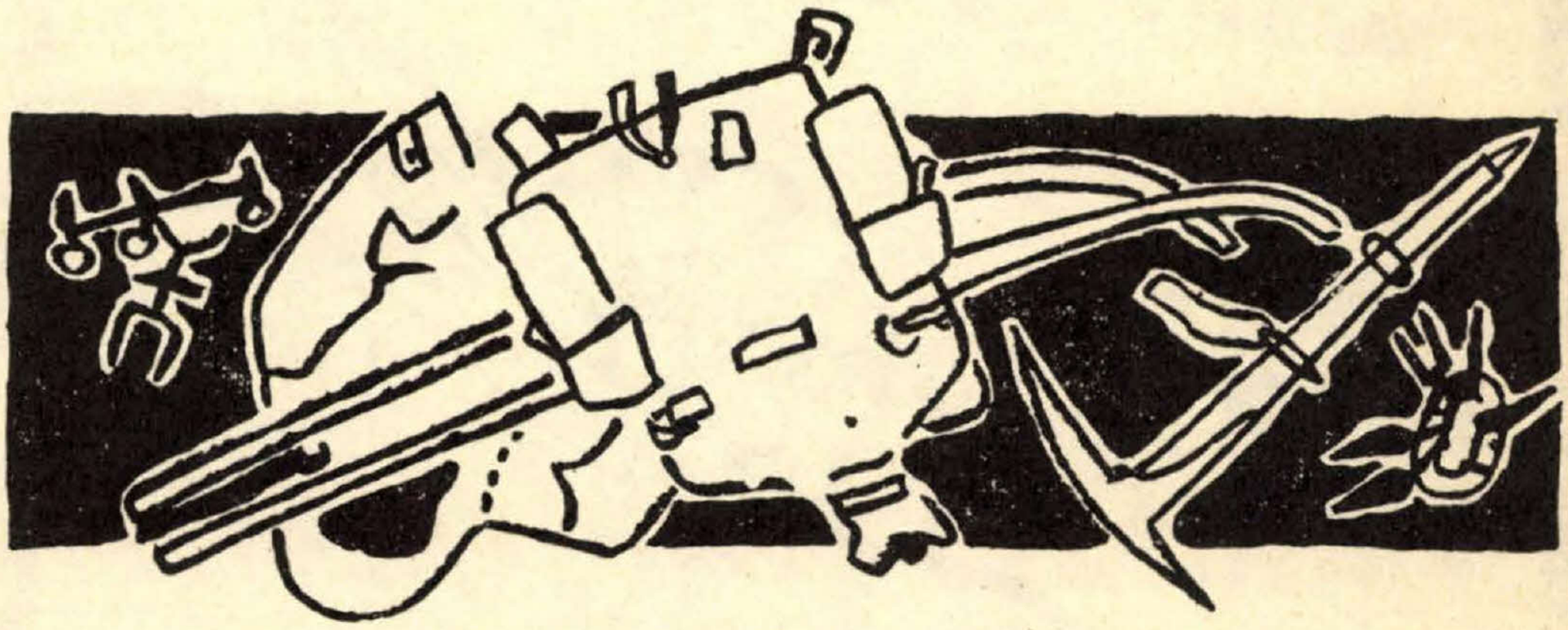
岳人喫茶 新宿・ケルン



新宿駅前柳通り　　TEL (361) 4285

片桐のキスリング型ルックサック

夏冬テント・門田ピッケル

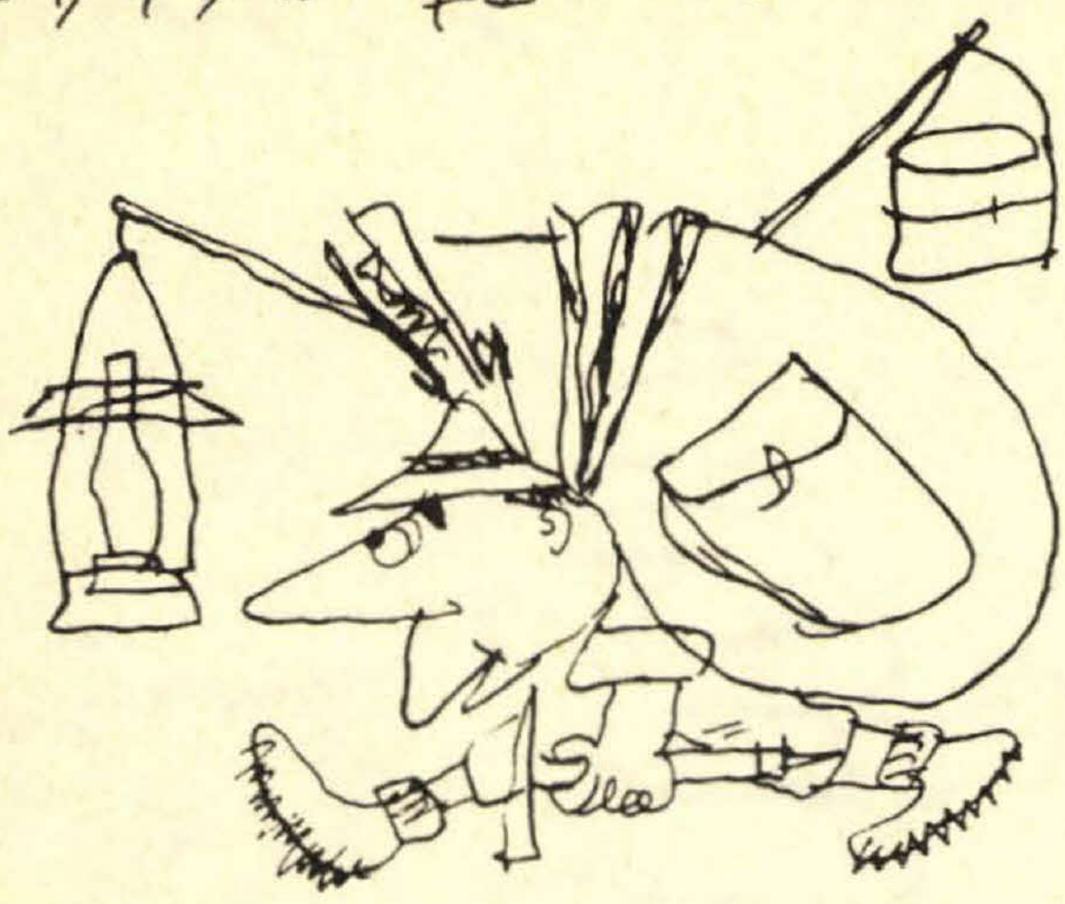


東京都文京区湯島天神町3の19

株式会社 片桐

TEL 下谷 (831) 1794

肱Pに豆なく、肩に荷なし、心はウキウキとし
背中とサイフが軽くなる……当店の客

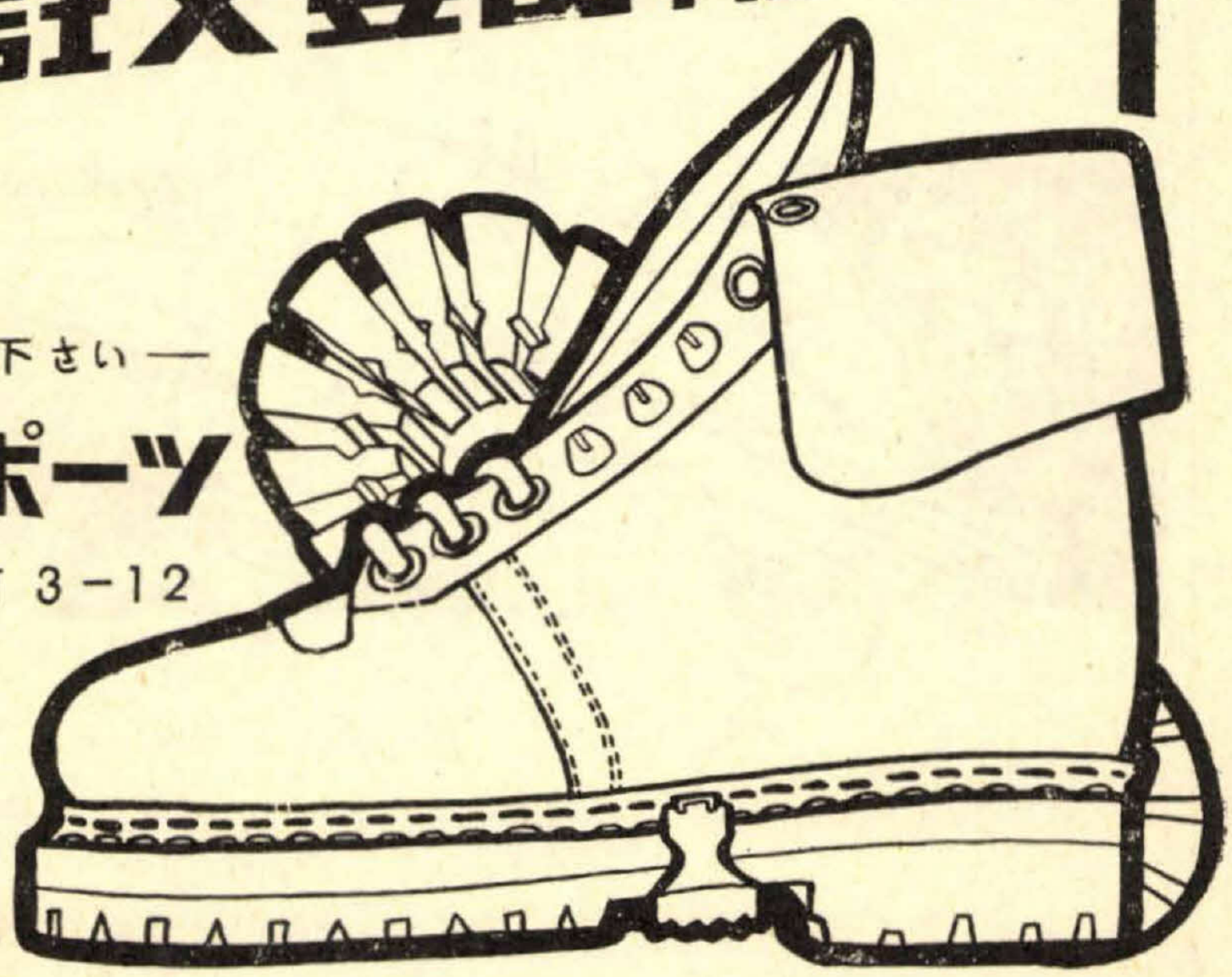


鬼ホカアルがラクタを売る

東京、中央区八重洲4の1
tel 281-8456

鷲山荘

註文登山靴



——一度御来店下さい——

東洋スポーツ

浦和市高砂町 3-12
TEL. 2828



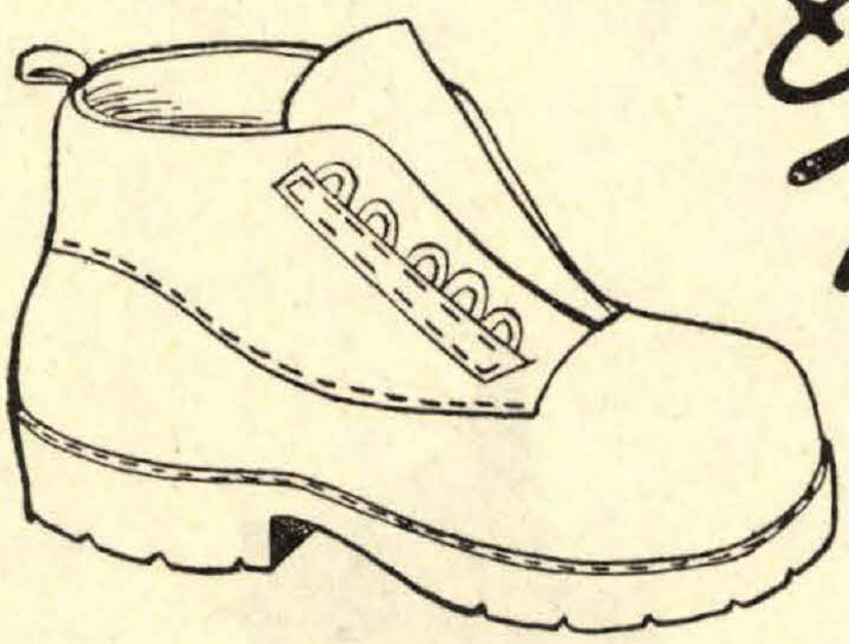
TAKAHASHI

山スキー靴
専門店

御註文は早目に

山友社 たかはし

二葉



スキーと

はこのマーク

天野

東京都千代田区飯田町1の14
TEL (301) 2439

スイート ホーム は招く

新妻に加えて室内装飾

……何時も貴方を幸福の平原に置く事でしょう

室内装飾なら小川商店へ

室内装飾、カーテン、ジウタン、壁、襖 材

港区芝田村町３～10　(591)１３８６～９

株式会社　小　　川　　商　　店

代表取締役　小　川　成　信（昭27卒）

化粧品雑貨問屋

大加十全堂株式会社

槍、穂、剣の次は北海道

日高、知 床、大雪山へ



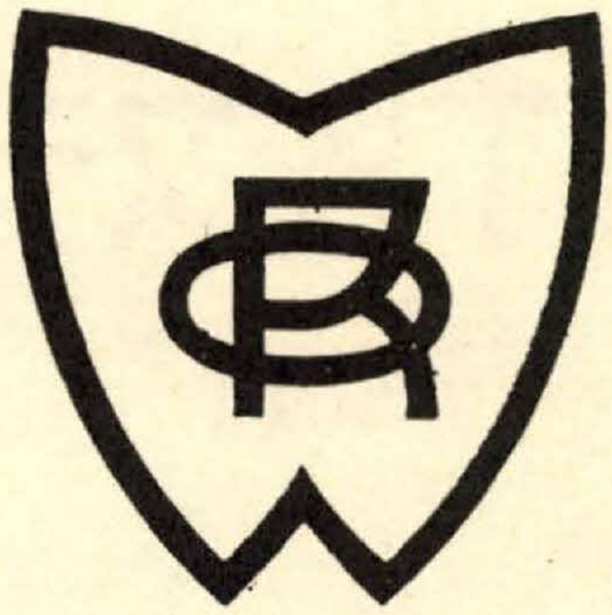
本社　函館市地蔵町大通り

TEL（3）1161

営業所　札幌・帯広・旭川

三井化学工業株式会社

東京都中央区日本橋室町2の1－1



蝶理株式会社

富士電機製造株式会社

富士電機

フラッシュライト

乾電池

ステンレス界の王座!!

NTKステンレス

鈑・棒・鋳物・線・管・継目無鋼管・電熱線帯

日本金属工業

取締役社長 宮代 彰

本社・東京都千代田区有楽町ニュートーキョービル

1．本書は，東京商科大学・一橋大学一橋山岳部々報『針葉樹』第１号～第13号の復刻版（限定100部発行）である。

2．本書の第１号～第６号は近藤恒雄氏所蔵本に，第７号～第13号は一橋山岳部所蔵本にそれぞれ原本を求めた。

3．復刻版発行の経緯は第13号の巻末に附したのでこれを参照されたい。

『針　葉　樹』第12号　復刻

昭和60年７月25日発行

復刻版発行者　針　葉　樹　会

編纂担当責任者　佐　藤　久　尚
世田谷区船橋５-30-10

印刷所　㈱　平　文　社
豊島区南大塚２-35-７